73によって掘り込まれている。

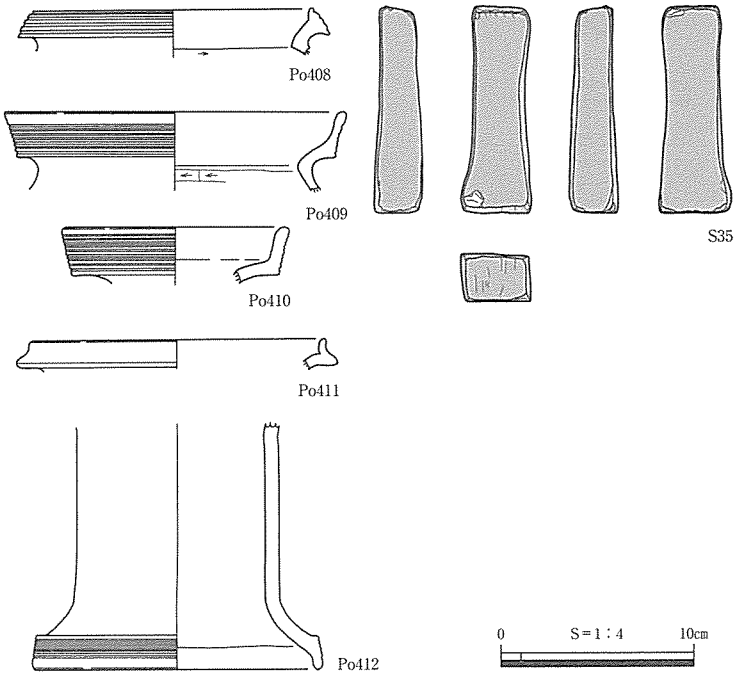
平面は円形を呈す。規模は南北5.0m、東西4.0m以上、床面積25.1㎡以上を測る。残存壁高は、南側で最大52cmを測る。壁溝は北側が途切れるもののほぼ全周するものと考えられ、幅10～20cm、深さ３～７cmを測る。断面はＵ字状を呈する。内側にも幅13cm、深さ６cm程度の壁溝があり、建て替えがあったものと考えられる。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に3.4m、3.4m、3.2m、3.3mである。このうち、P1・３・４では柱痕が認められ、推定される柱径は17～20cmである。

床面やや南寄りに中央ピットP5がある。埋土は、建物埋土下層とは異なることから、廃絶時にはすでに埋まっていた可能性がある。P5埋土下層には炭化物を含んでいる。P5西側・南側には幅５～10cm、深さ４cm程度の溝が接続している。南側の溝はP6とも接続している。用途は不明である。その他ピットを検出しているが、用途はそれぞれ不明である。

表45　笠見第３遺跡SI77ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	47×45－22	主柱穴	P７	42×41－31	
P２	66×52－55	主柱穴	P８	31×29－43	入口ピットか
P３	63×60－61	主柱穴	P９	32×29－43	
P４	59×52－46	主柱穴	P10	19×17－10	入口ピットか
P５	102×97－37	主柱穴	P11	18×18－13	
P６	62×58－５	中央ピット			



第170図　笠見第３遺跡SI77出土遺物実測図

床面には不整形に広がる焼土面を５箇所検出した。

埋土は、上層は削平されているがほぼ２層単層で、自然堆積したものではないと考えられ、人為的な埋め戻しとも考えられる。

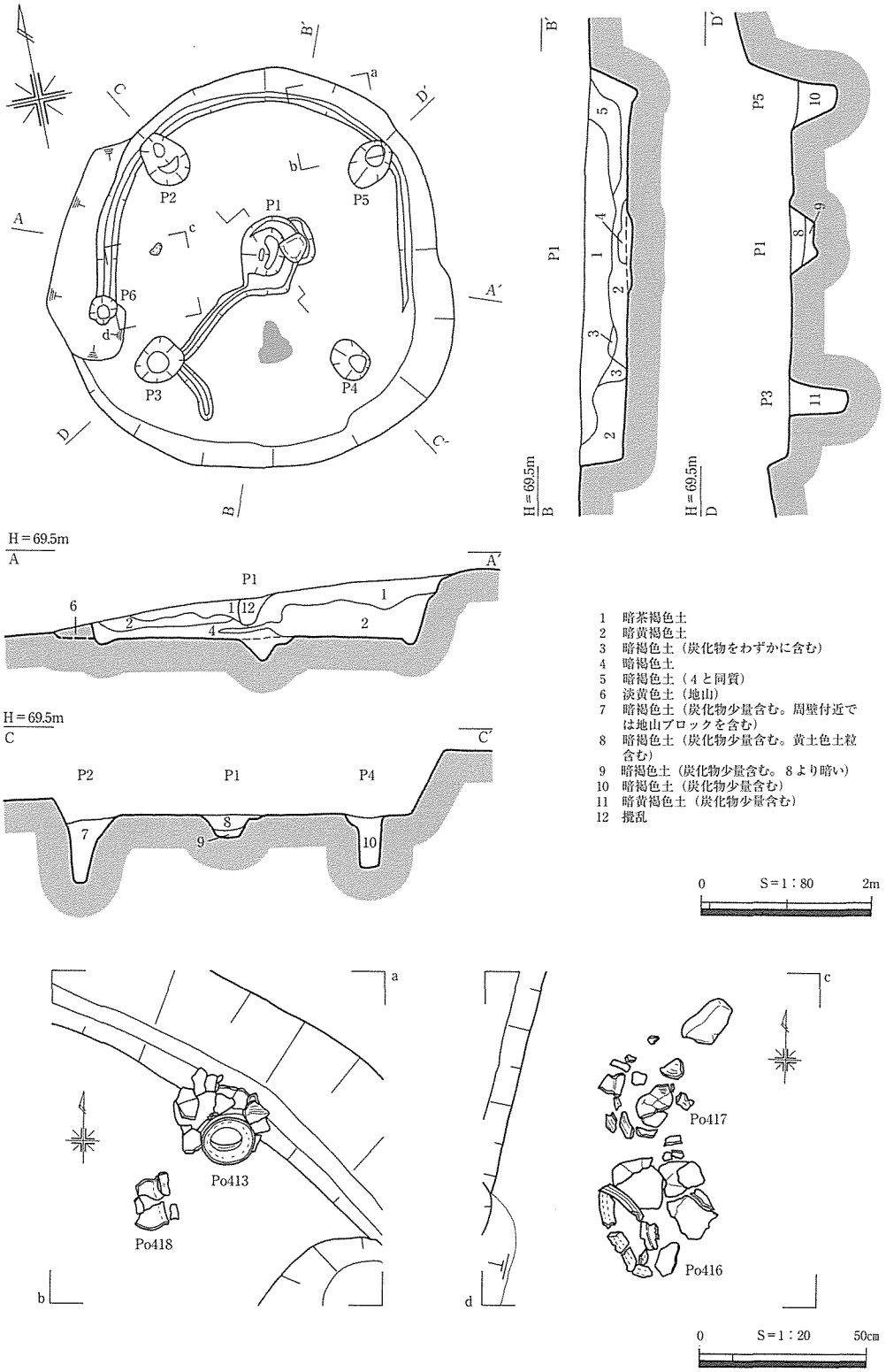
出土遺物は、図化できたものが弥生土器甕Po408～411、器台Po412、砥石S35がある。このうち、Po410はP11内から出土した他は、埋土中からのものである。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI79（第171・172図、PL. 30・103・125）

調査区北西部、C17グリッドの標高68.5～69.3m付近の緩やかに西側に傾斜する斜面部に立地する。南側約９mにはSI753がある。

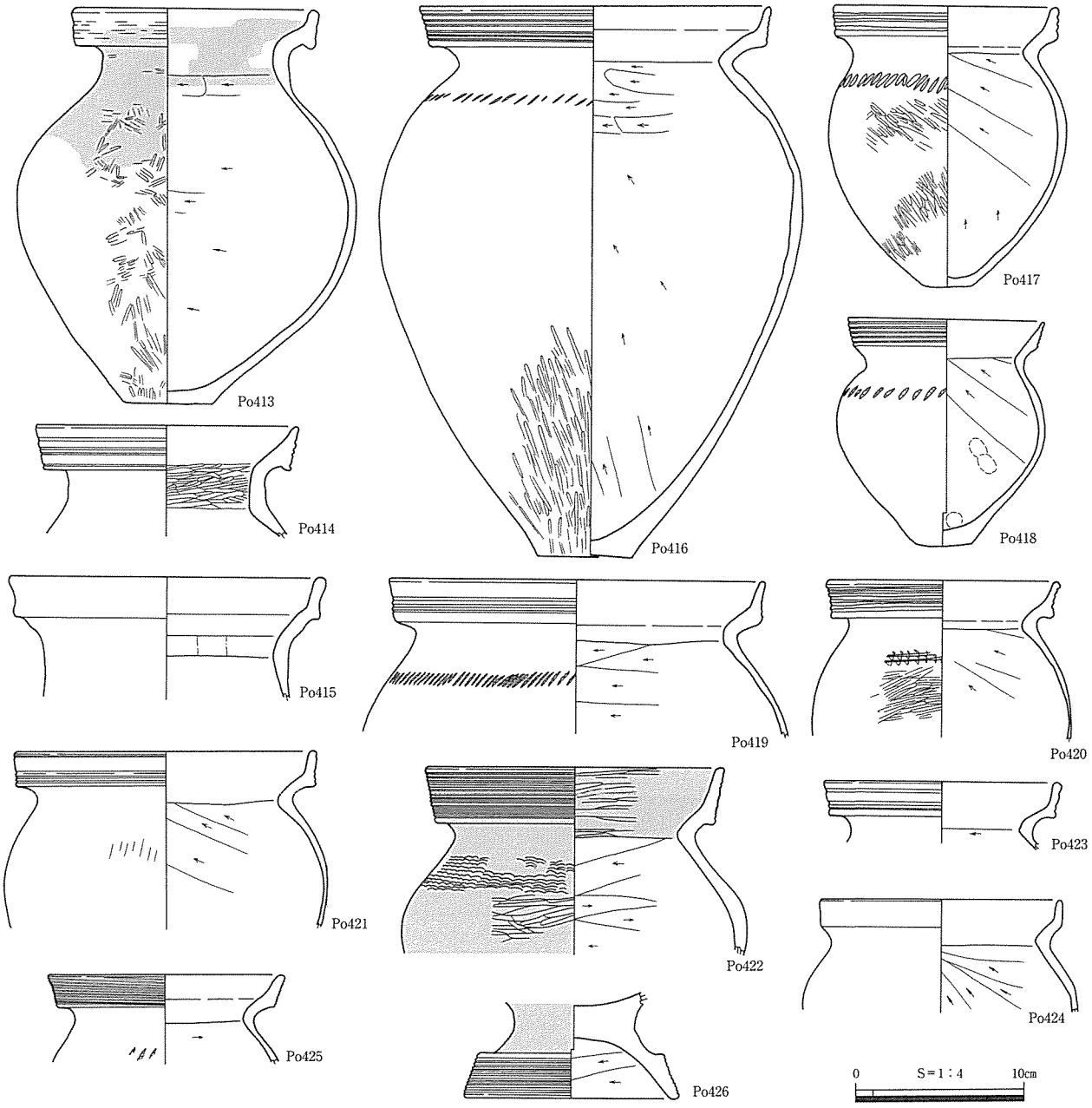
平面は円形を呈す。規模は南北4.1m、東西3.46m、床面積12.1㎡を測る。残存壁高は、南東側で最大80cmを測る。壁溝は、幅10～17cm、深さ５cm前後を測り、南側が途切れる。断面はＵ字状を呈する。



第171図　笠見第３遺跡SI79遺構図

表46　笠見第３遺跡SI79ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	47×35－38	中央ピット	P４	25×20－64	主柱穴
P２	33×26－78	主柱穴	P５	31×22－55	主柱穴
P３	29×23－71	主柱穴	P６	17×16－54	



第172図　笠見第３遺跡SI79出土遺物実測図

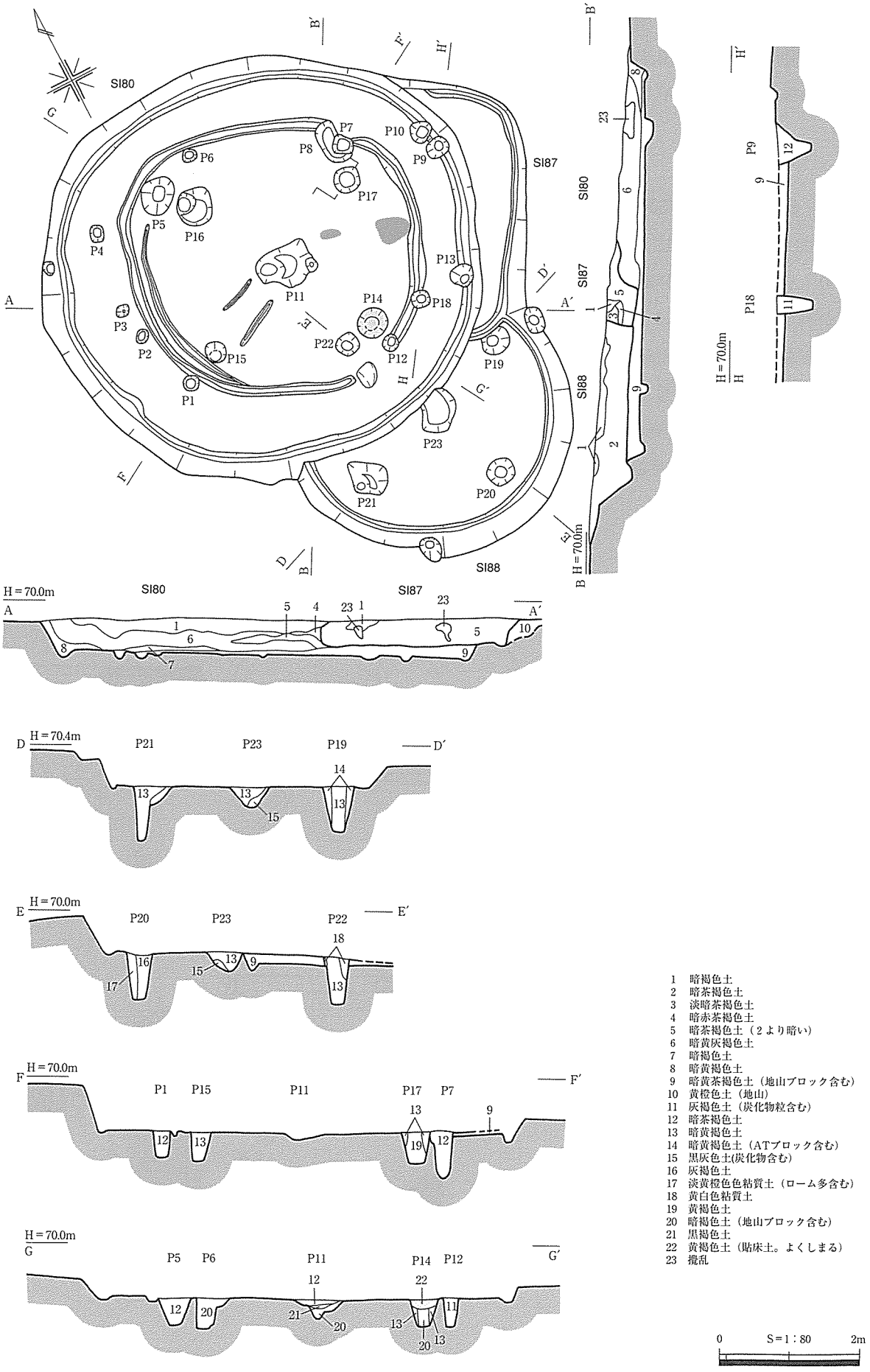
主柱穴はP2～６で、主柱間距離はP2-P3間から順に2.5m、2.4m、2.4m、2.6mである。柱穴埋土は、建物埋土下層と類似し、いずれも単層であることから、廃絶時には柱が抜き取られていた可能性がある。

床面中央部に、二段掘りの中央ピットP1がある。埋土は炭化物を含み、建物埋土下層と類似することから、廃絶時には開口していた可能性がある。P1・３を結ぶように幅15cm、深さ３cm程度の溝が接続し、さらにP3から南東方向に約70cm延びている。

床面P1の南側、P3-P4間に不整形に広がる焼土面を１箇所検出した。

埋土は、５層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、図化できたものが弥生土器壺Po413、甕Po414～425、脚付甕脚部Po426がある。このう



第173図　笠見第３遺跡SI80・87・88遺構図

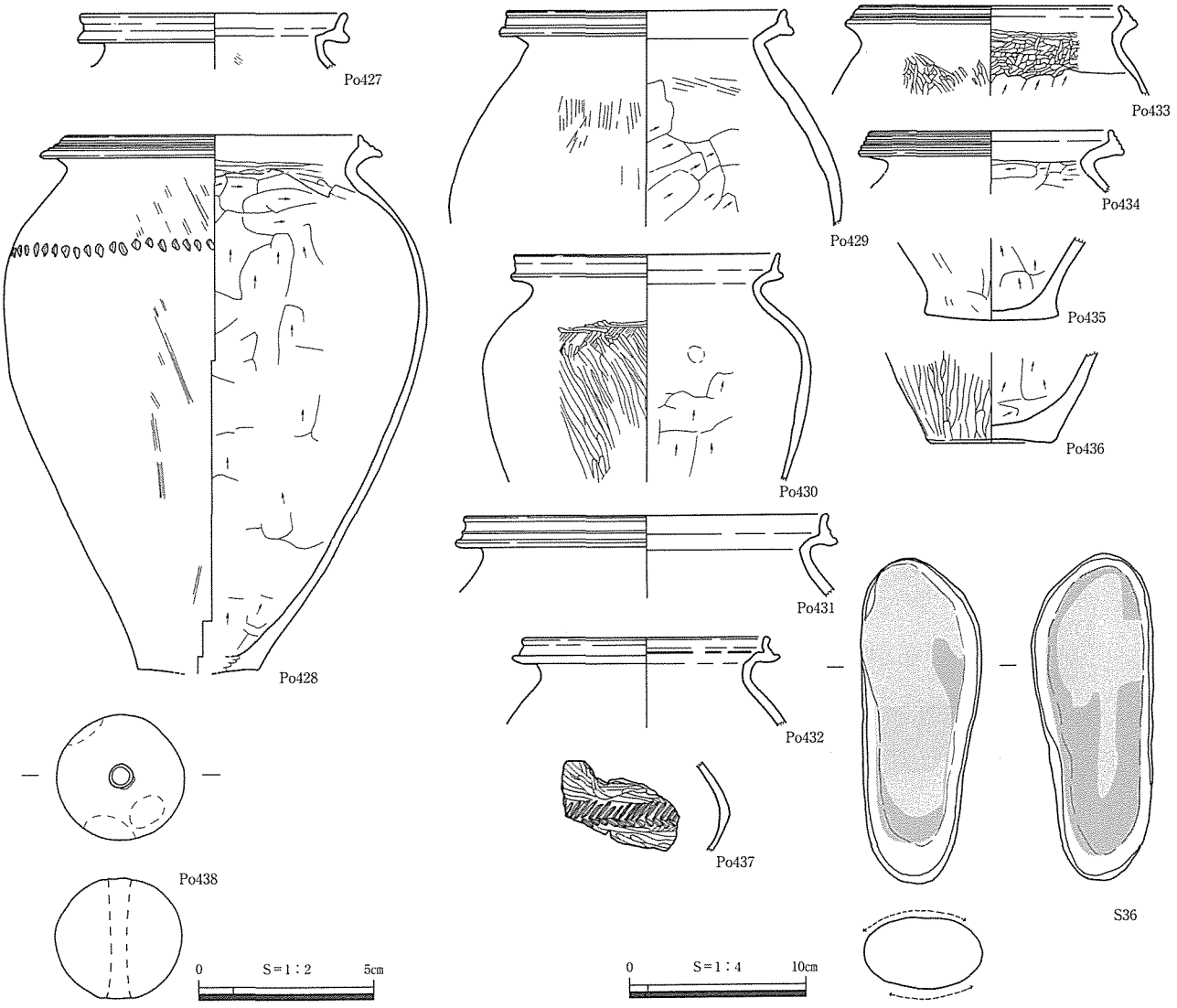
ち、Po413、Po418はP5付近床面上で、Po416、Po417はP6付近床面上で、またPo421も床面で出土している。その他は、埋土中出土である。

出土遺物等から、清水Ｖ－２～３様式、弥生時代後期中～後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI80・87・88（第173～176図、PL. 31・104・126・177・178）

調査区北西部、D14・15グリッドの標高69.5～70m付近の緩やかに北側に傾斜する斜面に立地する。SI80・87・88の３基が重複して検出された。切り合い関係から、SI80→88→87の順に作られていることが判明した。東側にはSI81が接するようにある。なお、SI80は、建て替えが行われており、建て替え後拡張したものをSI80－１、建て替え前のものを－２として報告する。

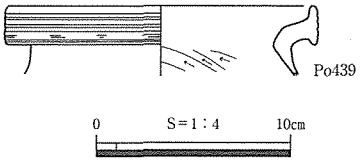
SI180－１は、楕円形を呈し、南北5.2m、東西5.6m、床面積24.1㎡を測る。残存壁高は、南側で最大59㎝である。壁溝は全周し、幅10～23㎝、深さ４～10㎝を測り、断面はＵ字状を呈す。主柱穴はP1・５・７・12で、主柱間距離はP1-P5間から順に2.7m、2.7m、2.9m、2.9mである。中央ピットは



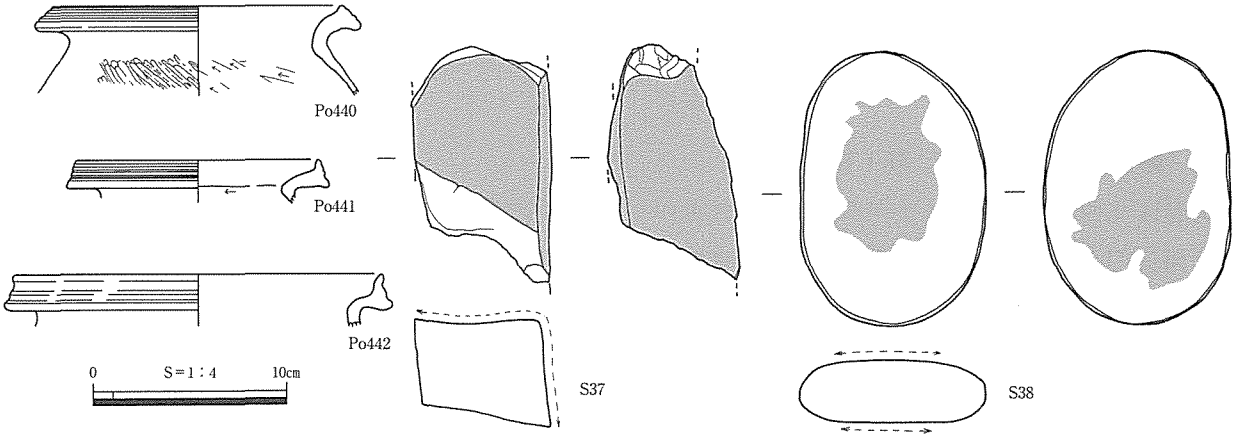
第174図　笠見第３遺跡SI80出土遺物実測図

表47　笠見第３遺跡SI80・87・88ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	23×22－49	SI80－１主柱穴	P13	36×33－40	
P２	22×17－12		P14	45×41－38	SI80－２主柱穴
P３	23×17－11		P15	32×32－45	SI80－２主柱穴
P４	23×20－10		P16	54×53－45	SI80－２主柱穴
P５	54×48－40	SI80－１主柱穴	P17	37×37－43	SI80－２主柱穴
P６	22×18－10		P18	27×25－42	SI87主柱穴
P７	27×25－64	SI80－１主柱穴	P19	42×40－66	SI88主柱穴
P８	63×31－10		P20	41×40－66	SI88主柱穴
P９	34×27－39	SI87主柱穴	P21	51×42－76	SI88主柱穴
P10	36×28－27		P22	32×31－57	SI88主柱穴
P11	84×59－23	SI80中央ピット	P23	64×50－32	SI88中央ピット
P12	23×22－40	SI80－１主柱穴			



第175図　笠見第３遺跡SI87出土遺物実測図



第176図　笠見第３遺跡SI88出土遺物実測図

P11で、埋土は炭化物を含み、建物埋土下層と異なることから、廃絶時には埋まっていた可能性がある。－２と共有すると考えられる。

－２は、一回り小さい楕円形を呈し、南北3.2m、東西3.6m、床面積11.8㎡を測る。壁溝は、幅15cm前後、深さ10cm前後を測り、全周する。断面Ｕ字状を呈す。内側にも壁溝があることから、さらにもう１回の建て替えがあったものと考えられる。主柱穴は、P14～P17で、主柱穴間距離はP14-P15から順に2.3m、2.2m、2.3m、2.1mである。P11の南西側付近に、幅５～10cm、深さ２～４cmの溝がP15に向かって延びる。P11の東側床面で２箇所の焼土面を検出した。

埋土は７層に分層できた。おそらく自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、いずれも埋土中から出土した弥生土器甕Po427～434、底部Po435・436、胴部Po437、土玉Po438、赤色塗彩痕のある磨石S36がある。また、床面南側には台石が据えられたままである。

SI87は、SI80・88の埋土を掘り込んで作られている。調査時にSI80を先行して掘り下げてしまい、床面を削平してしまった。平面は長方形を呈すと考えられ、南北3.2m、東西2.4m、床面積1.7㎡以上を測る。残存壁高は、東側で最大31cmである。壁溝は全周していた可能性がある。幅10cm前後、深さ３cm程度を測る。主柱穴は、P9・P18の２基で、主柱穴間距離は2.2mである。

埋土は５層に分層できたが、ほとんど第２層であることから、短期間に堆積したものと考えられる。

埋土中から出土した弥生土器甕Po439を図化した。

SI88は、SI80の南東部埋土を掘り込んで作られている。平面円形を呈し、南北3.0m以上、東西3.3m、床面積5.3㎡以上を測る。残存壁高は、南側で最大43㎝である。壁溝は、全周していたものと推定され、幅12㎝前後、深さ６㎝前後を測る。断面Ｕ字状を呈す。主柱穴は、P22・19・20・21で、主柱穴間距離はP22-19間から順に2.1m、1.9m、2.0m、2.0mである。中央ピットはP23で、埋土下層には炭化物を含む。上層は建物埋土と類似しており、廃絶時にはある程度埋まっていたものと考えられる。

埋土は２層に分層できたが、ほとんど第２層が堆積しており、短期間に堆積したものと考えられ、自然堆積したものではないと考えられる。

出土遺物には、埋土中からの弥生土器甕Po440～442、砥石Ｓ37、赤色塗彩石Ｓ38がある。

出土遺物等から、SI80・88は清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろ、SI87は清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考えられる。SI80・88は竪穴住居跡と考えられるが、SI87は小規模であることから、通常の住居跡ではない可能性がある。（牧本）

SI82（第177・178図、PL. 31・126）

調査区北西部、E14グリッドの標高70m付近の平坦面に立地する。東側約４mにはSI83がある。

平面は円形を呈す。規模は南北3.7m、東西3.64m、床面積10.3㎡を測る。残存壁高は、南東側で最大61㎝を測る。壁溝は、南西側で途切れるがほぼ全周していたものと考えられ、幅10～15㎝、深さ３～９㎝前後を測る。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.1m、2.0m、2.1m、2.0mである。P1・3・4では柱痕が検出され、推定される柱径は16～21㎝である。

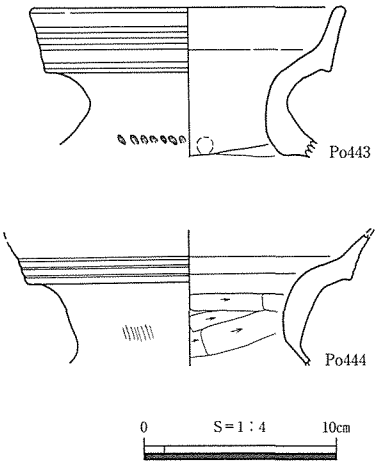
床面中央部に中央ピットP5がある。西側には、高さ約７㎝、幅約10㎝の土手がある。埋土下層は炭化物を含む。上層は建物埋土下層と類似することから、廃絶時には開口していた可能性がある。土手に接して北西方向のP1に接するように延びる幅10㎝前後、深さ４㎝程度の溝を検出した。また、南側でも断続的にではあるが溝を確認した。用途は不明である。

床面北西側P1-P5間に溝を挟んで不整形に広がる焼土面を２箇所検出した。

埋土は、６層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は、埋土中で出土した弥生土器壺Po443・444を図化した。また、床面中央ピット脇と南側溝脇に台石が据えられている。

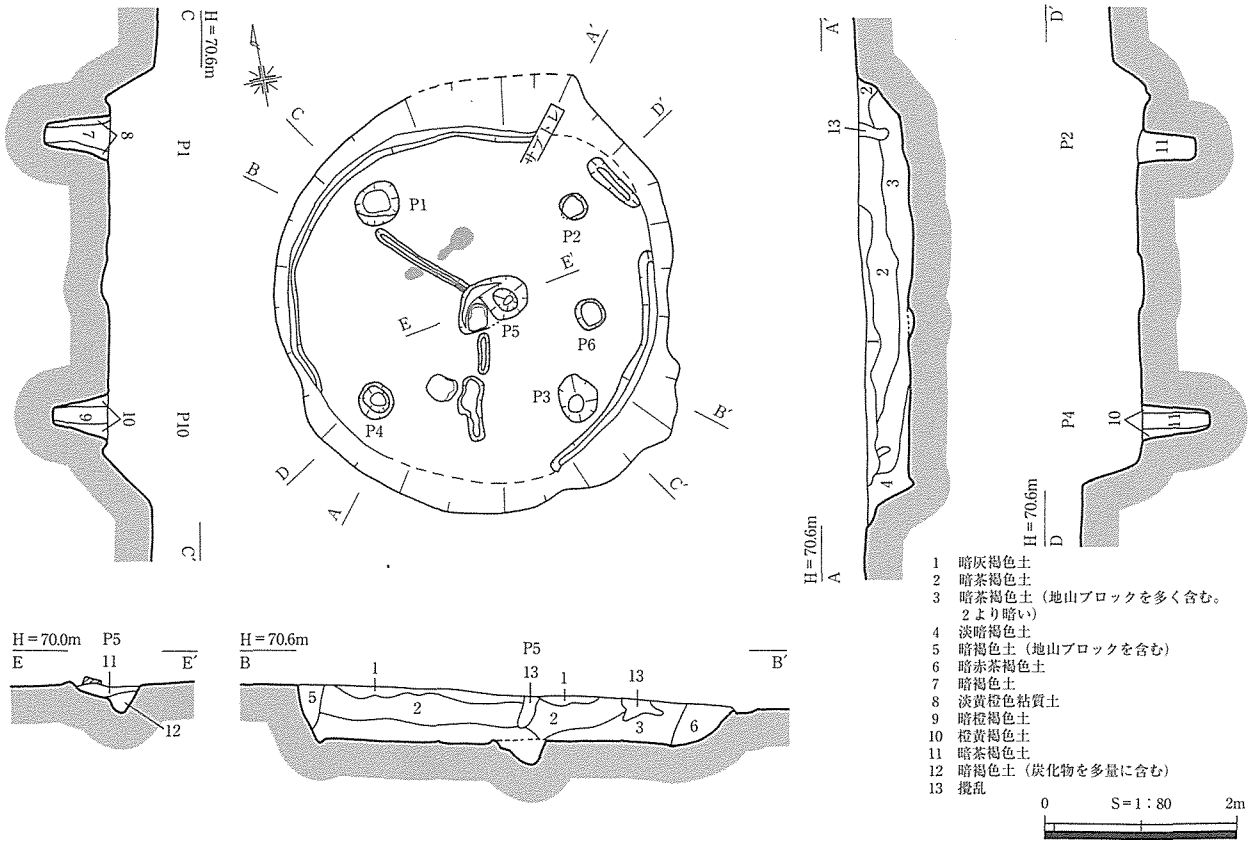
出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）



第177図　笠見第３遺跡SI82出土遺物実測図

表48　笠見第３遺跡SI82ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考
P１	48×43－59	主柱穴	P４	38×37－69	主柱穴
P２	27×25－55	主柱穴	P５	48×40－30	中央ピット
P３	46×44－42	主柱穴	P６	33×30－17	



第178図　笠見第３遺跡SI82遺構図

SI83・SK44（第179・180図、PL. 32・126・174）

調査区北西部、E13・14グリッドの標高69.3～70.2m付近の、北側に緩やかに傾斜する斜面部に立地する。西側約４mにはSI82がある。

周囲は梨肥料穴によって攪乱を受けているが、平面は隅丸方形を呈す。規模は南北5.4m、東西5.68m、床面積25.7m²以上を測る。残存壁高は、南側で最大51cmを測る。壁溝は、幅12～25cm、深さ３～12cmを測り、南側で途切れる。断面はU字状を呈する。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に3.6m、3.4m、3.7m、3.6mである。P1-P2間中央には、P6があり補助柱穴と考えられる。

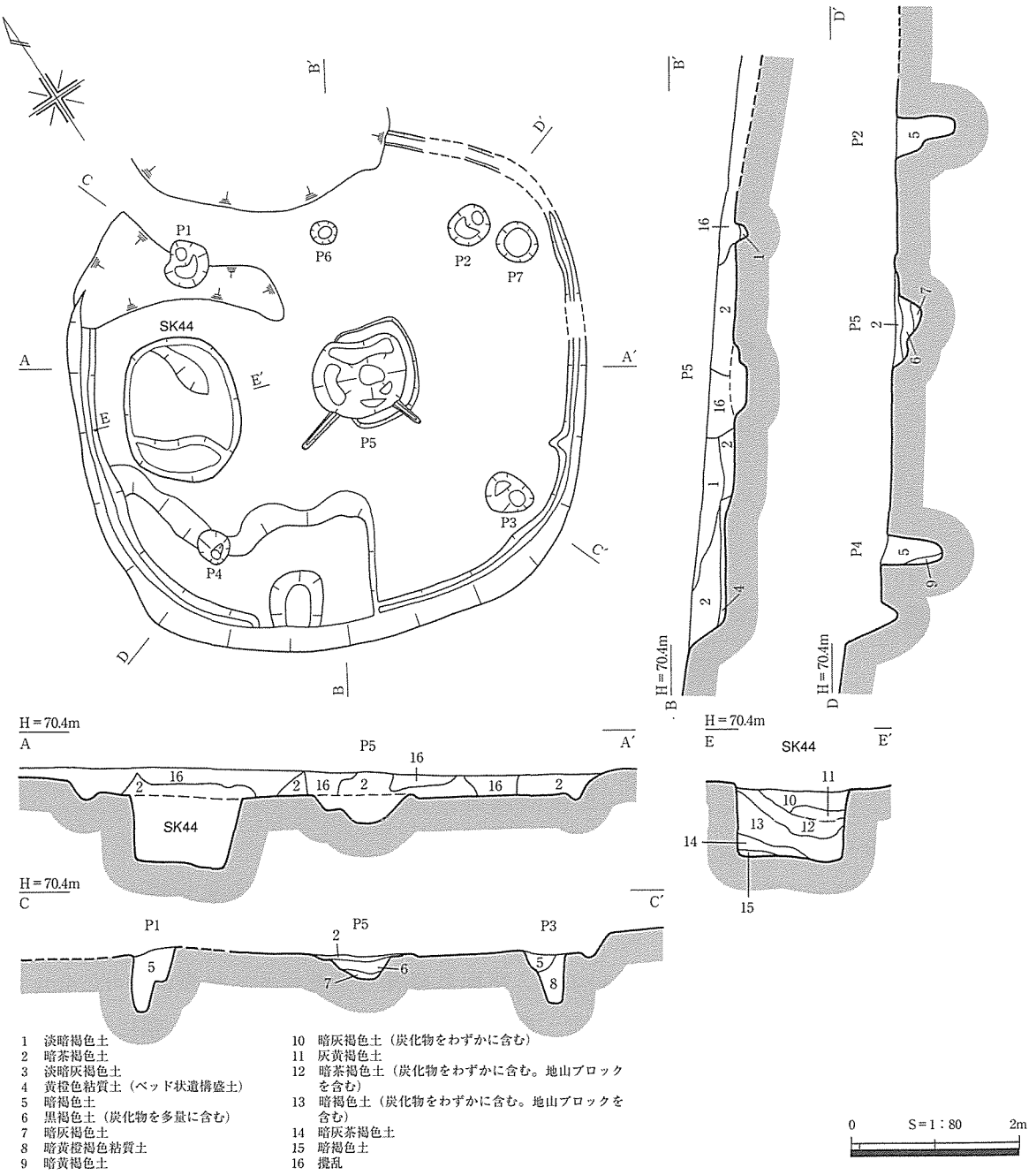
床面中央部に中央ピットP5がある。周囲にはコ字状に高さ約４cm、幅約15cmの土手がある。埋土中層は炭化物を多量に含む。埋土が建物下層の埋土と異なることから、廃絶時には埋まっていた可能性がある。土手を掘り込むように短い溝が２本接している。用途は不明である。

床面南西隅には、盛土による高さ約10cmのベッド状遺構がある。一部掘り過ぎてしまった部分があり平面が不整形になってしまった。P4は、ベッド状遺構上面から掘り込む。

西側壁際に、**SK44**が掘り込まれる。平面小判形を呈し、長軸1.75m、短軸1.39m、深さ92cmを測る。底面は平坦ではなく、壁際が少し低くなる。埋土は６層に分層でき、自然堆積したと考えられる。建物下層の埋土とは異なることから、廃絶時にはすでに埋まっていた可能性がある。

埋土は、攪乱土を除くと２層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は、SI83では埋土中で出土した弥生土器甕Po445～449、底部Po450、環状鉄器F17、SK44では埋土中で出土した装飾壺Po451を図化した。

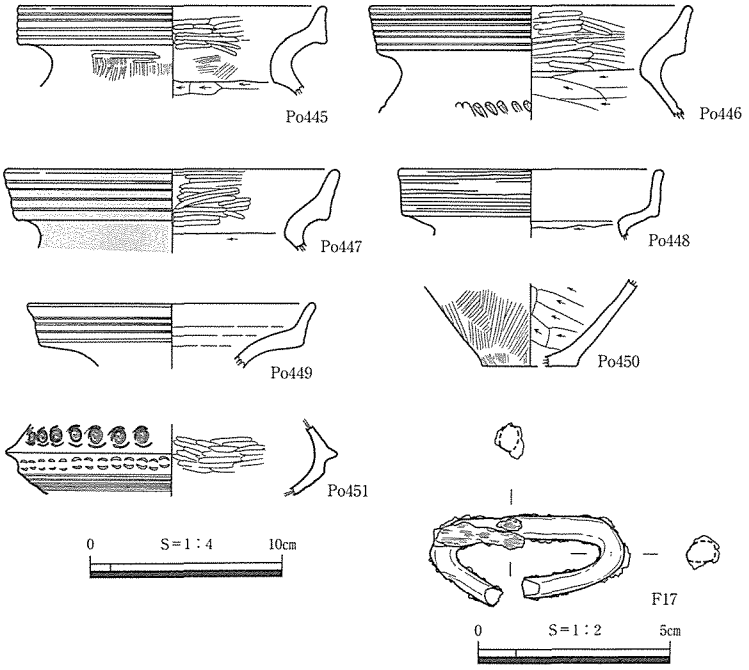


第179図　笠見第３遺跡SI83・SK44遺構図

表49　笠見第３遺跡SI83ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	51×47－66	主柱穴	Ｐ５	115×90－34	中央ピット
Ｐ２	50×43－67	主柱穴	Ｐ６	29×24－12	
Ｐ３	56×43－62	主柱穴	Ｐ７	47×45－39	
Ｐ４	38×36－75	主柱穴			

出土遺物等から、SI83は清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡、SK44は同時期の屋内貯蔵穴と考えられる。（牧本）



第180図　笠見第３遺跡SI83・SK44出土遺物実測図

SI86（第181・182図、PL. 32・127・178）

調査区北西部、F12グリッドの標高69.1～69.8m付近の、北側に緩やかに傾斜する斜面部に立地する。北西側をSI85によって掘り込まれている。

平面は円形を呈す。規模は南北4.2m以上、東西4.78m、床面積12.5㎡以上を測る。残存壁高は、南側で最大78cmを測る。壁溝は全周すると考えられ、幅15cm前後、深さ５cm前後を測る。断面はＵ字状を呈する。内側にも幅10～20cmの壁溝が廻っており、建て替えがあったものと考えられる。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.8m、2.8m、2.6m、2.8mである。P3・４では柱痕を検出し、推定される柱径は18cm前後である。

床面中央部に、一部二段掘りの中央ピットP5がある。周囲には溝が２本あり、北東側のものはP5に沿うように、南側のものは接続するように掘り込まれている。ピット埋土は炭化物を含むもので、建物下層埋土とは異なることから、廃絶時にはすでに埋まっていた可能性がある。

中央ピット周辺床面で、不整形にやや大きく広がる焼土面を検出した。

また、南側壁・壁溝内に、幅10cm前後の溝及びピットが５箇所掘り込まれていた。ほぼ等間隔に並び、構造柱としては規模が小さいため、堰板を留める親杭痕跡の可能性がある。

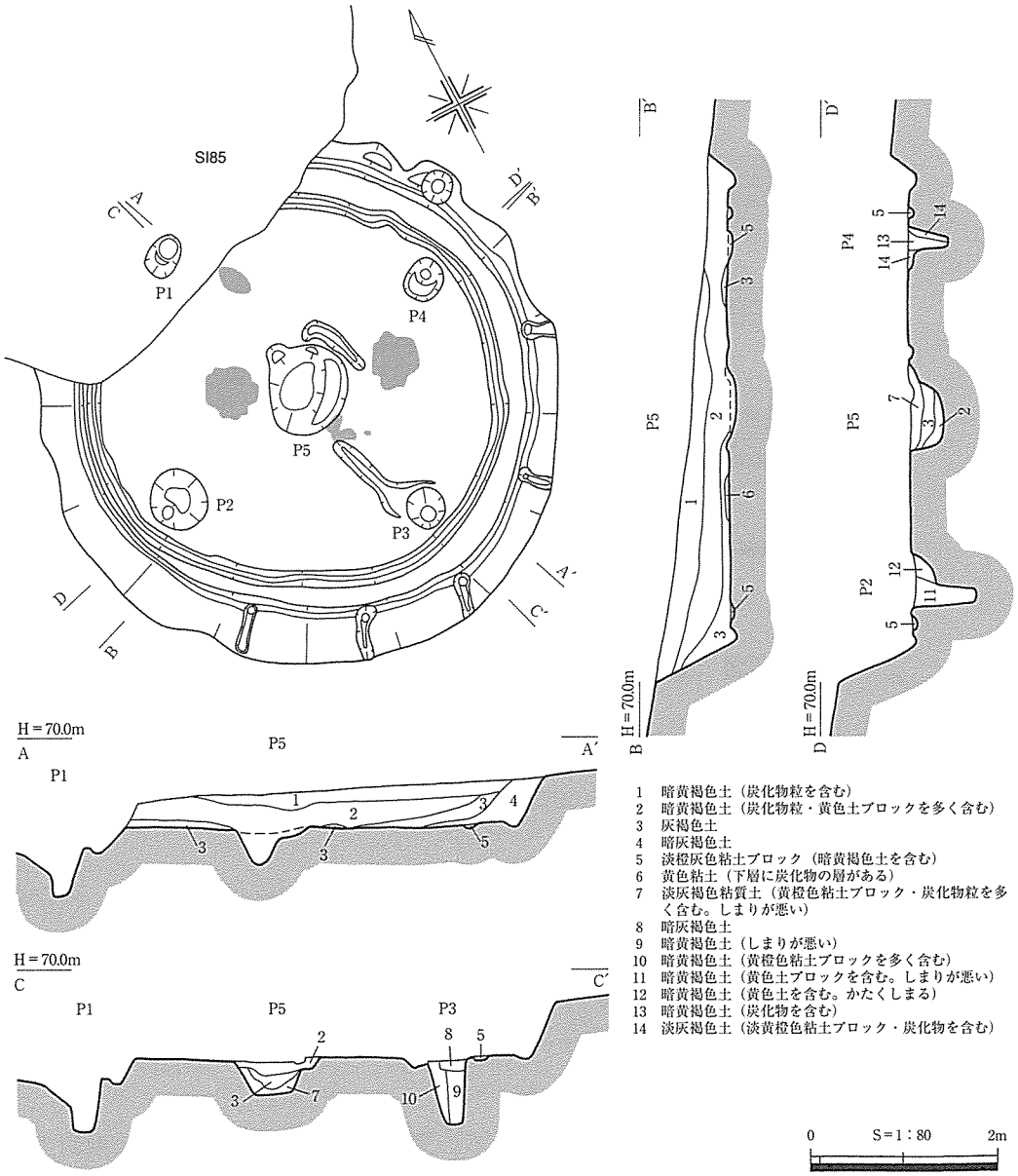
埋土は４層に分層でき、皿状の堆積であることから自然堆積したものと考えられる。

遺物は、埋土中で出土した弥生土器甕Po452・453、底部Po454、小型甕Po455、床面付近で出土したガラス小玉J59～63を図化した。

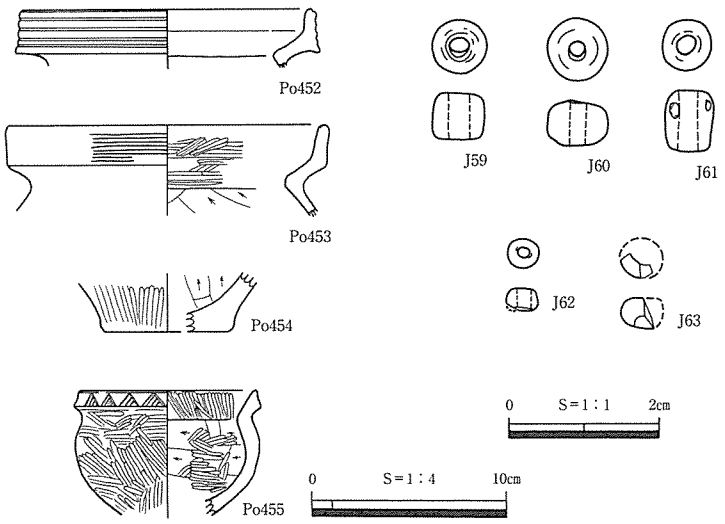
出土遺物等から、清水Ｖ-３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

表50　笠見第３遺跡SI86ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	43×35－53	主柱穴	P４	45×40－44	主柱穴
P２	67×62－68	主柱穴	P５	96×87－37	中央ピット
P３	44×39－71	主柱穴	P６	35×33－28	



第181図　笠見第３遺跡SI86遺構図



第182図　笠見第３遺跡SI86出土遺物実測図

SI89・99（第183～185図、PL. 33・127・128・178）

調査区中央やや北側、G12グリッドの標高70.0～70.5mの、北側に緩やかに傾斜する斜面部にSI89・99が接するように立地する。平成13年度東伯町試掘T9で確認されたものである。後述するように同時期のものではなく、SI99が先行するものと考えられる。

SI89は、平面五角形を呈す。規模は南北5.12m、東西4.98m、床面積19.1㎡を測る。残存壁高は、西側で最大70㎝を測る。壁溝は部分的に途切れるものの全周すると考えられ、幅11～23㎝、深さ３～９㎝を測る。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP2～６で、主柱間距離はP2-P3間から順に2.6m、2.8m、2.8m、2.3m、3.1mである。いずれのピットも単色の土層であることから、廃絶時には抜き取られていた可能性がある。

床面中央部に中央ピットP1がある。周囲には高さ３㎝、幅30㎝前後の土手がめぐる。埋土は、建物埋土下層と同質で炭化物を含むものであり、廃絶時には開いていた可能性がある。

中央ピット東脇床面で、不整形にやや大きく広がる焼土面を１箇所検出した。

埋土は２層に分層でき、皿状の堆積であることから自然堆積したものと考えられる。

遺物は、埋土中で出土した弥生土器甕Po456～458、器台筒部Po459、赤色塗彩石S39～41を図化した。

SI99は、平面小判形を呈し、南北2.4m、東西1.88m、床面積3.6㎡と非常に小型な建物跡である。残存壁高は、南側で最大0.96mである。柱穴はP1・２が検出された。主軸に対してずれるが、構造柱であると考える。いずれも柱痕を検出し、推定される柱径は約15㎝である。柱穴間距離は1.35mである。壁溝、中央ピット、焼土面はない。

埋土は２層に分層でき、皿状堆積であることから自然堆積と考えられる。

遺物は、埋土中から出土した弥生土器壺Po460～462、甕Po463を図化した。

出土遺物等から、SI89は清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。SI99は、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられ、小規模なことから通常の竪穴住居跡とは異なる用途の建物であった可能性がある。（牧本）

SI90（第186・187図、PL. 33・34・104・127）

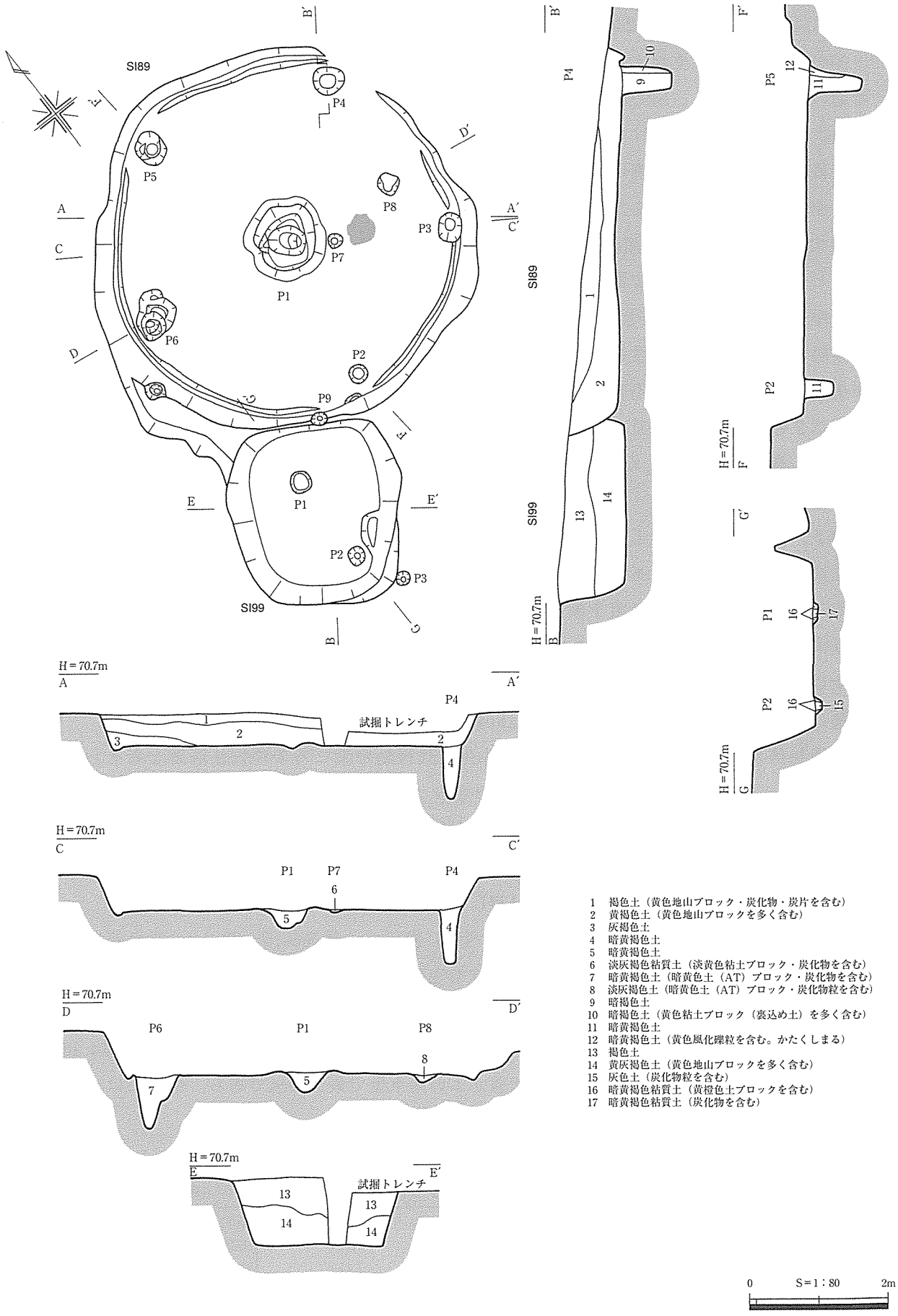
調査区北側のD6グリッドにあり、緩やかに西側に傾斜する標高66.5～67.2mの斜面部に立地する竪穴住居跡である。弥生時代後期以降の遺物を含む包含層を除去後に検出し、平成13年度東伯町試掘調査T11で検出されたものである。

遺存状態は芳しくないが、平面は不整な隅丸方形を呈す。規模は、長軸4.46m、短軸4.16m、床面積16.2㎡を測る。残存壁高は、最も遺存状態がよい南東壁で最大29㎝である。壁際には、南東部分で幅10～22㎝、深さ５㎝前後の壁溝が検出された。

主柱穴はP1～P3・P12の４基で、主柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.5m、2.8m、2.5m、2.6mである。後述するようにこの建物は焼失住居で、P1では炭化した柱材、P3では

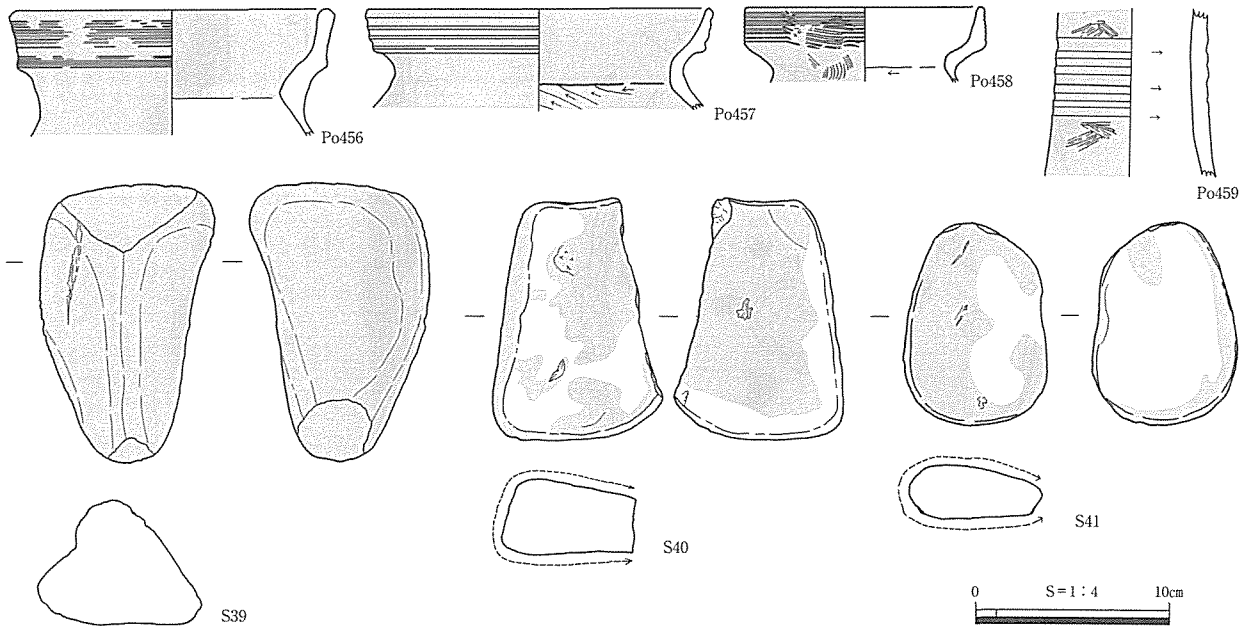
表51　笠見第３遺跡SI89・99ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考
SI89P1	71×69－31	中央ピット	SI89P7	22×20－７	
SI89P2	28×28－44	主柱穴	SI89P8	34×30－15	
SI89P3	40×34－87	主柱穴	SI89P9	24×19－35	
SI89P4	45×41－76	主柱穴	SI99P1	33×32－７	柱痕有
SI89P5	55×43－81	主柱穴	SI99P2	27×23－11	柱痕有
SI89P6	75×60－80	主柱穴	SI99P3	21×19－23	

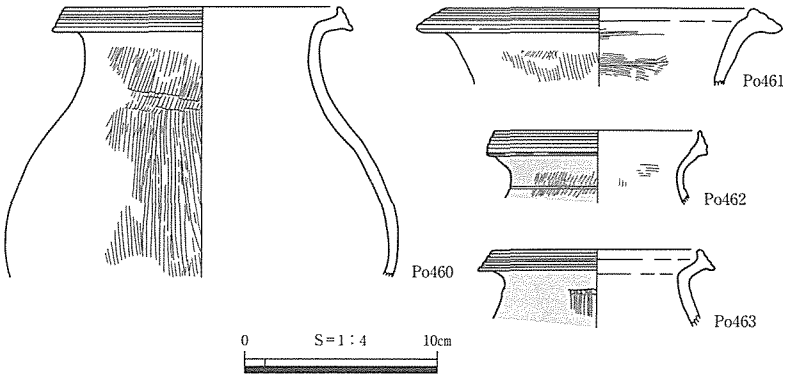


1　褐色土（黄色地山ブロック・炭化物・炭片を含む）
2　黄褐色土（黄色地山ブロックを多く含む）
3　灰褐色土
4　暗黄褐色土
5　暗黄褐色土
6　淡灰褐色粘質土（淡黄色粘土ブロック・炭化物を含む）
7　暗黄褐色土（暗黄色土（AT）ブロック・炭化物を含む）
8　淡灰褐色土（暗黄色土（AT）ブロック・炭化物粒を含む）
9　暗褐色土
10　暗褐色土（黄色粘土ブロック（裏込め土）を多く含む）
11　暗黄褐色土
12　暗黄褐色土（黄色風化礫粒を含む。かたくしまる）
13　褐色土
14　黄灰褐色土（黄色地山ブロックを多く含む）
15　灰色土（炭化物粒を含む）
16　暗黄褐色粘質土（黄橙色土ブロックを含む）
17　暗黄褐色粘質土（炭化物を含む）

第183図　笠見第３遺跡SI89・99遺構図



第184図　笠見第３遺跡SI89出土遺物実測図



第185図　笠見第３遺跡SI99出土遺物実測図

土層で柱痕が認められた。推定される柱径は約15cmである。

住居中央には、二段掘りの中央ピットP5が掘り込まれている。主柱穴に比べて浅く、埋土は炭化物を含む暗黄褐色土で、住居下層埋土とは異なることから、焼失時には既に埋まっていた可能性がある。その他に、ピットが検出されているが、用途は不明である。

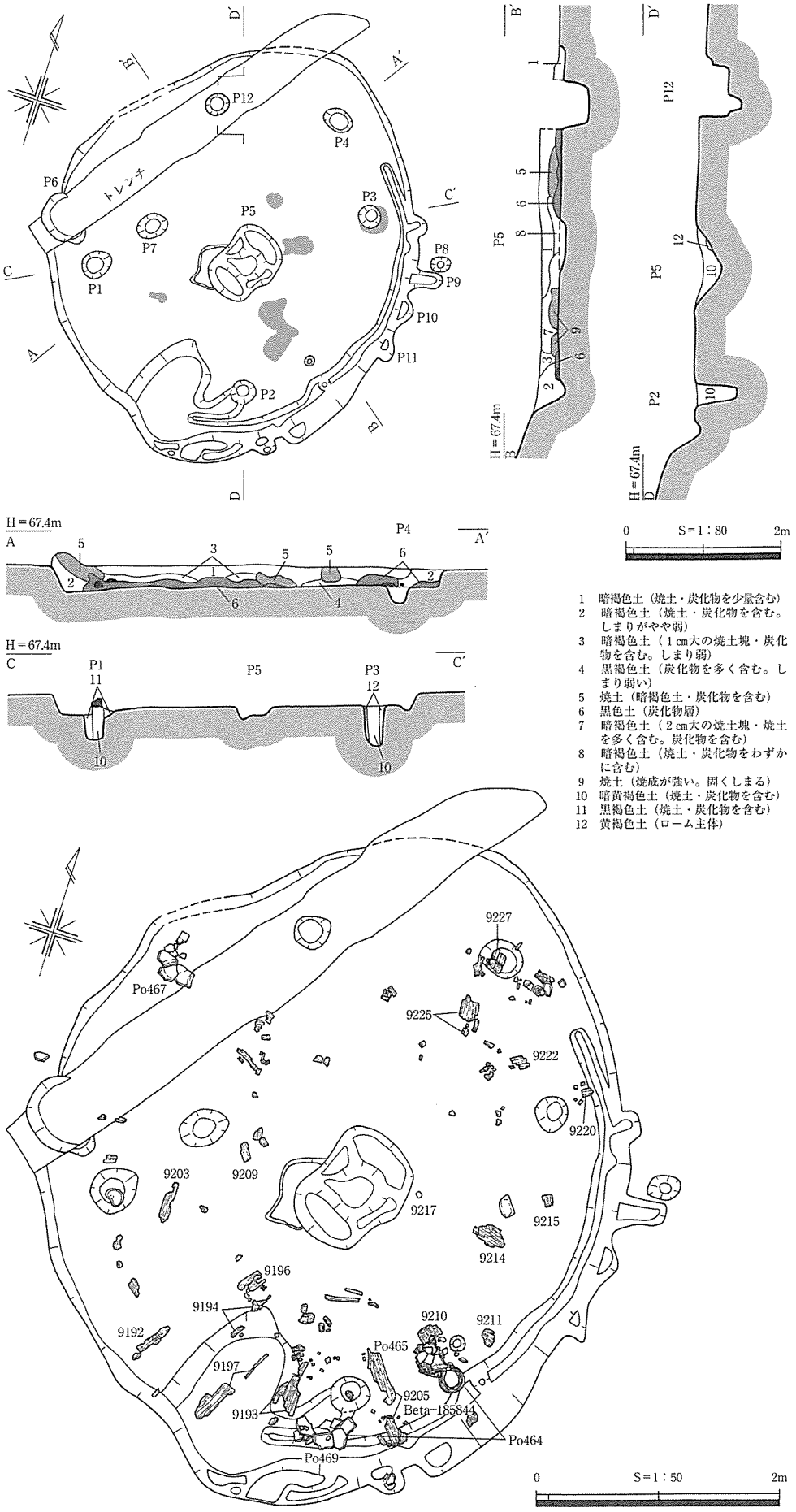
東周壁上部には、外側に飛び出すようなP9～11及び段があり、垂木尻を据えるものと考えられる。

床面には、東半分で焼土面が５箇所検出された。このうち、P3周辺で検出されたものは、焼失の際に形成されたものと考える。その他のものは、焼失の際かそれ以前に形成されたものかどうかは不明である。

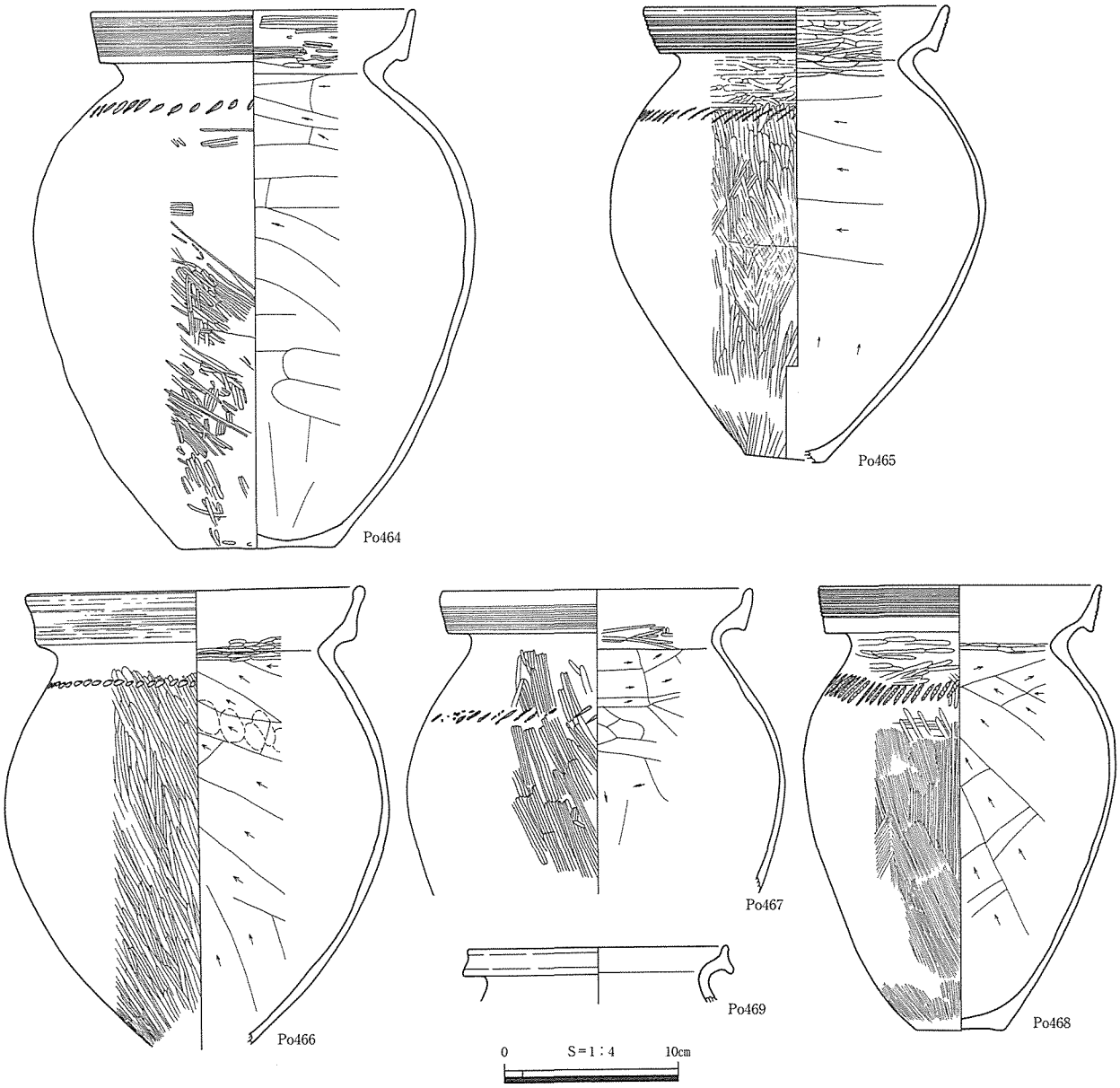
床面では、炭化材がほぼ全面にわたって遺存する。前述したようにP1には柱が遺存する。№9192、9193、9196、9197、9203、9205、9210、9214、9225、9227など放射状に出土したものは垂木と考えられる。このうち、№9210は板状を呈すと考えられる。浮いた状態で焼土があり、一部炭化材上にあることから、土屋根であった可能性がある。

埋土は、９層に分層でき、いずれも炭化物、焼土粒を含む層で不規則に堆積しており、炭化材の出土と併せ、この建物は焼失したものといえる。

遺物は、床面上南東隅で出土した弥生土器甕Po464・465、P2付近で出土した甕Po469、西壁際で出土した甕Po467、その他甕Po466・468・469を図化した。



第186図　笠見第３遺跡SI90遺構図・炭化材出土状況図



第187図　笠見第3遺跡SI90出土遺物実測図

表52　笠見第3遺跡SI90ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P1	40×36－31	主柱穴	P7	41×30－25	
P2	32×30－53	主柱穴	P8	25×19－9	
P3	28×27－54	主柱穴	P9	37×20－12	垂木尻穴
P4	35×29－16		P10	37×15－12	垂木尻穴
P5	100×73－38	中央ピット	P11	25×20－24	垂木尻穴
P6	不明		P12	31×28－18	主柱穴

出土遺物から、清水V－3様式、弥生時代後期後半ごろと考えられる。なお、炭化材の樹種同定の結果ほとんどすべてがクリであることが判明した。また、^{14}C年代測定では、1960±60B.P.、AD.50年ごろの測定値が出たが、土器形式よりやや古い結果となった。(坂本)

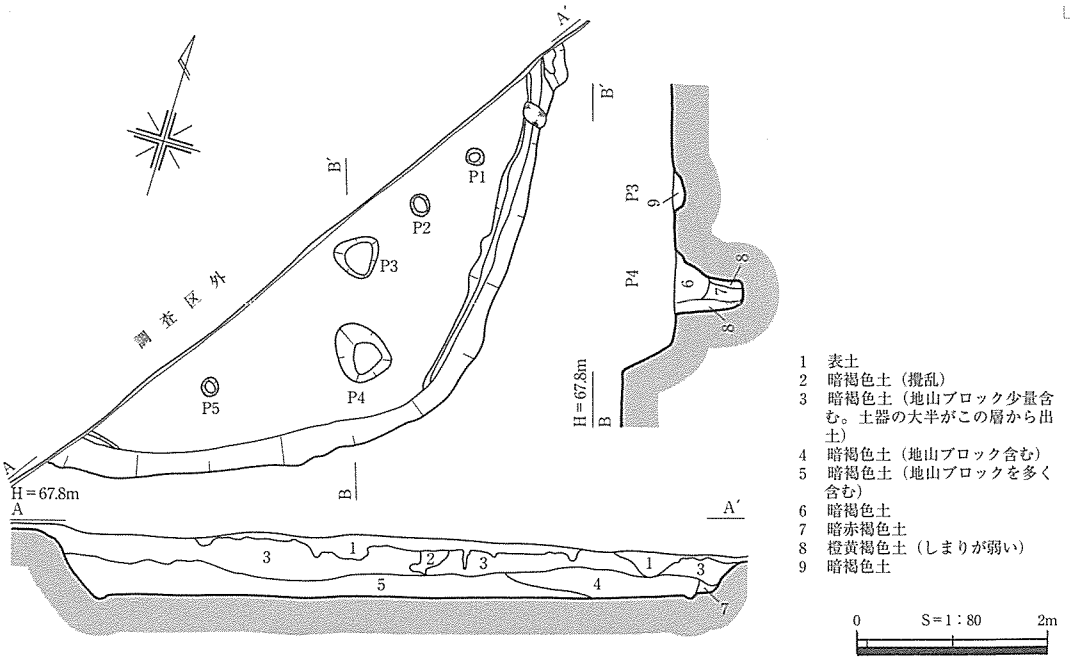
SI91（第188・189図、PL. 34・127）

調査区北側、E・F5グリッドの標高67.3～67.7mの緩斜面に立地する。調査区の制約により遺構の東南側半分しか検出できなかった。

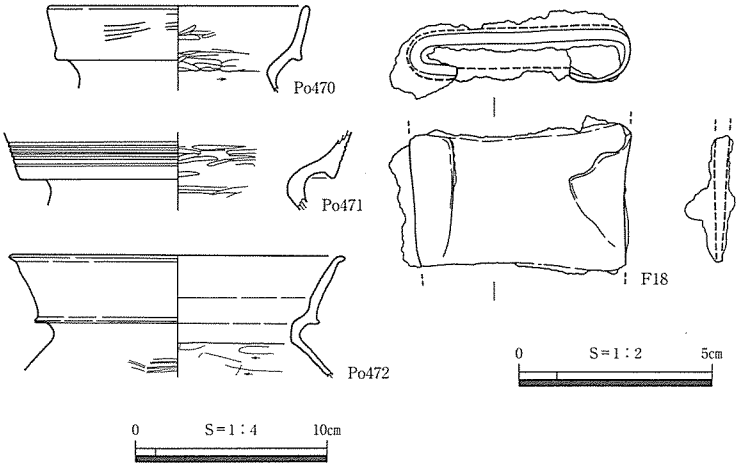
一辺が５～６m前後の隅丸方形プランの竪穴建物跡とみられる。遺存状況は良好で、壁高は最も残りが良い南西側で68cmである。壁溝は南側の壁際には認められないが、東壁際には幅８～20cm、深さ２～８cmの壁溝がめぐる。

床面で５基のピットを検出した。このうち主柱穴のうちのひとつとみられるP4は、断面観察により直径16cmの柱痕跡が認められた。P2も深さが42cmと比較的深いことから支柱穴の可能性がある。他のピットは浅く用途不明である。

埋土は表土と攪乱土を除き、比較的均質な暗褐色の埋土であるが、下に行くほど地山ブロックが多くなりかつ大きくなる。最下層は高所側にあたる南西に厚く、北東に行くにつれて薄く堆積することから、自然堆積したものとみられる。



第188図　笠見第３遺跡SI91遺構図



第189図　笠見第３遺跡SI91出土遺物実測図

表53　笠見第３遺跡SI91ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	18×18－７	
P２	22×21－49	補助柱穴か
P３	45×46－12	
P４	64×53－72	主柱穴
P５	20×18－６	

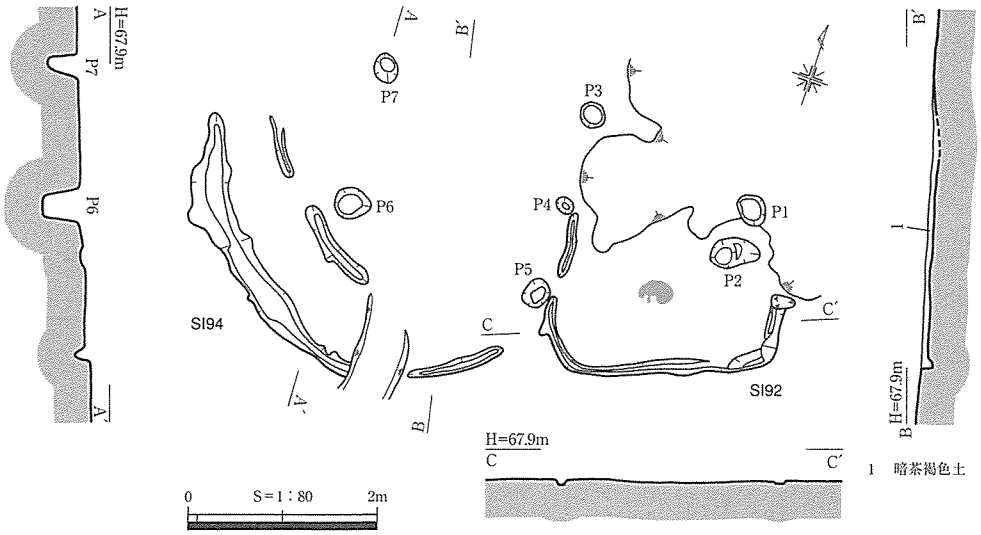
出土遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po470～472、鉄製鋤先F18がある。いずれも検出面に近い暗褐色土から出土した。

確実な時期は不明であるが、出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と見られる。（小山）

SI92・94（第190・191図、PL. 35・127）

調査区北際、F3・４グリッド、標高67.6～67.8mの緩斜面に位置する小型の竪穴建物跡である。SI92と94が重複するが、埋土が遺存しないことから両者の新旧関係を層位的には確認できなかった。後述するように、出土遺物に時期差がありSI94が先行すると考えられる。

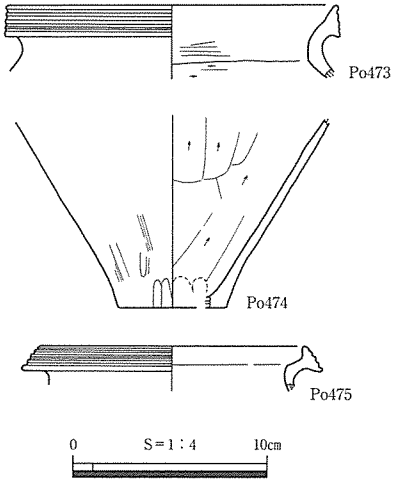
SI92は、遺存状況は極めて悪く、壁面はすべて削平され、南半の壁溝のみ検出された。復元される規模は一辺がおよそ2.2m、床面積3.1㎡以上と小型で、方形を呈すとみられる。壁溝は幅７～17㎝で深さ3.7㎝～8.2㎝を測り、全周していたとみられる。



第190図　笠見第３遺跡SI92・94遺構図

床面で検出したピットは２基であるが、SI92に伴うものか否か不明であり、位置関係からみても通常の主柱穴とは考えにくい。床面中央部で焼土面を検出した。

出土遺物は、図化できたものに遺構検出中に出土した弥生土器甕Po423、胴部Po424がある。



第191図　笠見第３遺跡SI92・94出土遺物実測図

出土遺物等から、清水Ｖ－２期、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。

SI94も遺存状況は極めて悪く、壁面はすべて削平され、南半の壁溝がかろうじて遺存するに過ぎない。復元される平面は円形とみられ、直径4.6m、床面積６㎡以上を測る。壁溝は幅７～49

表54　笠見第３遺跡SI92・94ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考
P１	35×30－21	SI92	P５	30×29－26	SI94主柱穴
P２	51×32－47	SI92	P６	40×35－20	SI94主柱穴
P３	27×23－24	SI94主柱穴	P７	30×26－22	SI94主柱穴
P４	19×16－10	SI94			

cm、深さ2.2cm～4.9cmである。その70cmほど内側に、幅８～20cm、深さ2.2～4.9cmを測る同心円状にめぐる溝が部分的に検出されたことから、建て替えがあったものと考えられる。

床面で検出した主柱穴は、掘立柱建物に伴うものを除きP3・P5～P7の４基で、やや浅くいびつな形であるが、柱間はP3～P5から以下順に1.95m、2.25m、1.55m、2.25mである。

埋土は部分的に残っていたが、最厚部で６cmほどである。

遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po475を図化した。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

SI93（第192図、PL. 35）

調査区南東O13グリッドの標高74.2m付近のほぼ平坦面に立地する。周囲及び検出面は攪乱が著しく、壁溝とピットを確認したに過ぎない。

平面は隅丸方形を呈すと考えられ、一辺３m以上、床面積２㎡以上を測る。壁高は最も残りが良い北西側で７cmである。壁溝は幅10～20cm、深さ７cm程度を測る。

主柱穴はP1～P3の３基を検出した。攪乱で失われているが、本来は４基であると思われる。P2-P1間から順に1.9m、2.1mである。P1では柱痕を確認し、推定される柱径は約20cmである。

出土遺物は無く、確実な時期は不明であるが、周辺の状況から、弥生時代後期ごろの竪穴住居跡と思われる。（牧本）

SI95（第193図・194、PL. 36・104・128・176）

調査区北側、D7グリッドの緩やかに南側に傾斜する標高66.6～67.6mの斜面部に立地する竪穴建物跡である。南側は流失し、北側及び東側は調査区外にある。

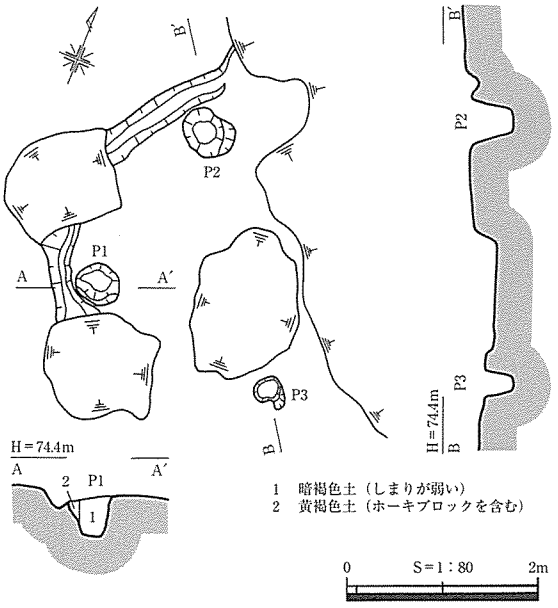
比較的遺存状態はよく、平面は円形を呈す。規模は、南北4.8m以上、東西5.1m、床面積22.4㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態がよい西壁で最大0.7mを測る。壁際には部分的に幅７～15cm、深さ３cm前後の壁溝が廻る。約50cm内側にも壁溝が検出され、建て替えがあったものといえる。

建て替え後の主柱穴は、P2・６・８の３基を確認したが、本来は６本柱で、その他は調査区外にあると思われる。主柱穴間距離は、P2-P6間から順に、2.4m、2.3mである。P2・P6では柱痕が認められ、推定される柱径は約18cmで、柱据付後黄褐色系の土で埋め戻されている。

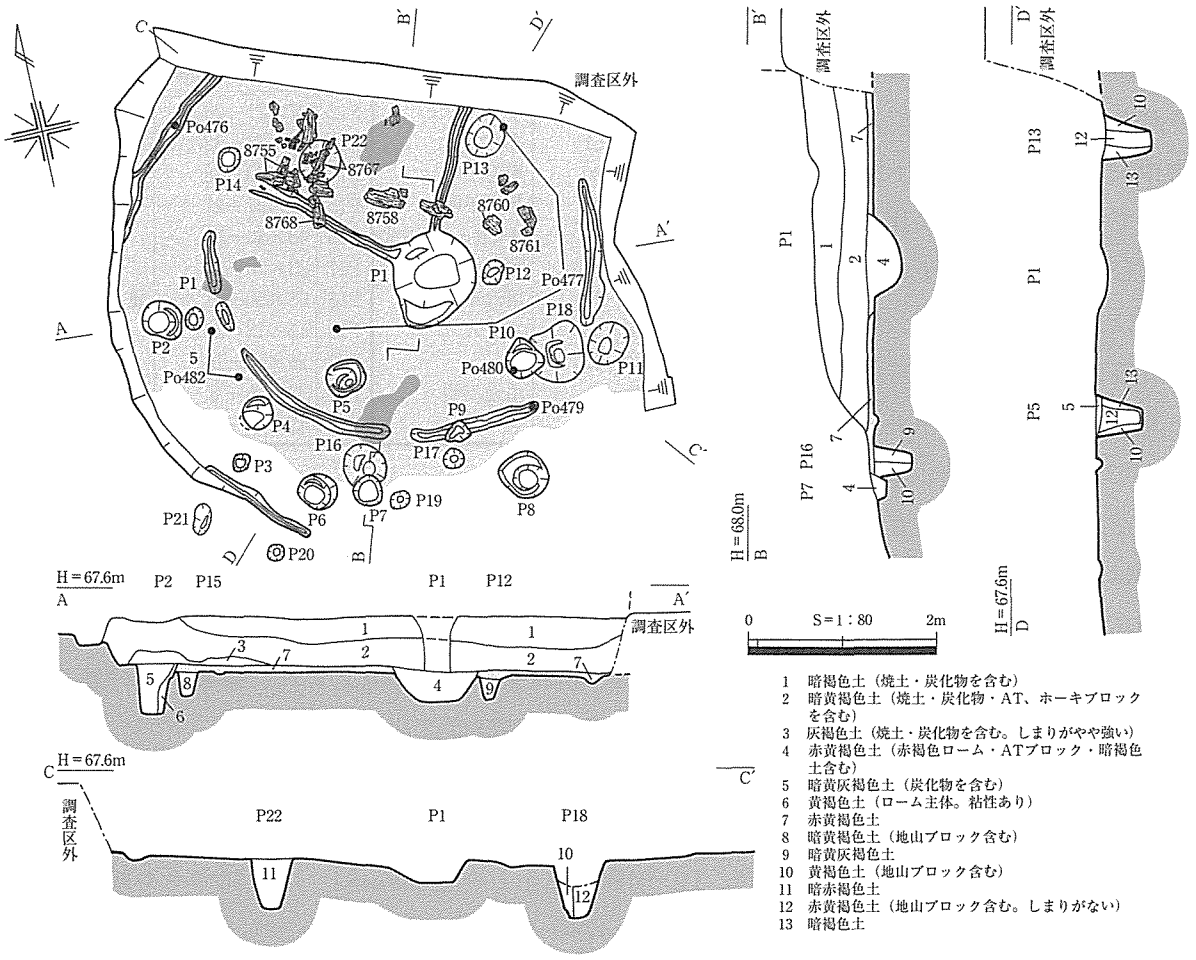
建て替え前の主柱穴は、貼床除去後に確認されたもので、P13・18・５・22の４基である。主柱穴間距離は、P13-P18間から順に2.4m、2.3m、2.3m、1.8mである。P18・５・13では柱痕

表55　笠見第３遺跡SI93ピット一覧表

ピット番号	長　径（cm）	備　　考
P１	48×45－37	主柱穴
P２	30×22－38	主柱穴
P３	45×32－48	主柱穴

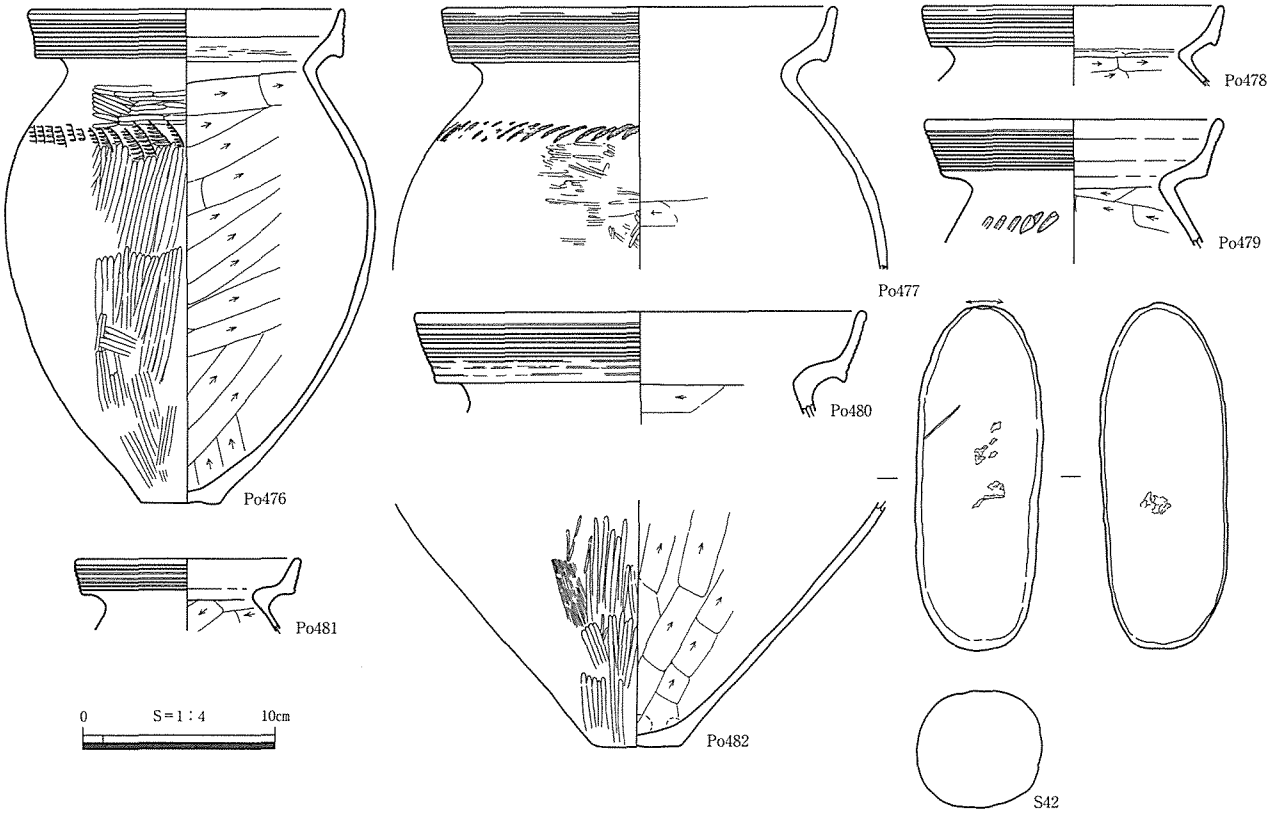


第192図　笠見第３遺跡SI93遺構図



1　暗褐色土（焼土・炭化物を含む）
2　暗黄褐色土（焼土・炭化物・AT、ホーキブロックを含む）
3　灰褐色土（焼土・炭化物を含む。しまりがやや強い）
4　赤黄褐色土（赤褐色ローム・ATブロック・暗褐色土含む）
5　暗黄灰褐色土（炭化物を含む）
6　黄褐色土（ローム主体。粘性あり）
7　赤黄褐色土
8　暗黄褐色土（地山ブロック含む）
9　暗黄灰褐色土
10　黄褐色土（地山ブロック含む）
11　暗赤褐色土
12　赤黄褐色土（地山ブロック含む。しまりがない）
13　暗褐色土

第193図　笠見第３遺跡SI95遺構図



第194図　笠見第３遺跡SI95出土遺物実測図

が確認され、復元される柱径は約18cm前後である。その他にもピットが検出されたが、用途は不明である。

建物中央には、中央ピットP4が掘り込まれている。主柱穴に比べて浅く、埋土は、暗黄灰褐色土で建物下層埋土とは異なることから、廃絶の際には、既に埋まっていた可能性がある。北側と北東側から中央ピットに向かって、幅７～10cm、深さ２～４cmの溝が２本接続している。

表56　笠見第３遺跡SI95ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	104×84－31	中央ピット	P12	27×21－26	
P２	45×36－51	主柱穴	P13	46×38－52	建て替え前主柱穴
P３	18×17－20	用途不明	P14	25×22－48	
P４	34×32－45	用途不明	P15	22×21－27	
P５	40×34－30	建て替え前主柱穴	P16	43×40－35	
P６	41×35－66	主柱穴	P17	23×20－24	
P７	34×29－12	用途不明	P18	65×50－61	建て替え前主柱穴
P８	49×46－53	主柱穴	P19	15×13－20	
P９	24×24－17		P20	16×16－16	
P10	47×36－８	用途不明	P21	33×16－８	
P11	45×42－59		P22	47×43－52	建て替え前主柱穴

床面には、ほぼ全面に赤黄褐色土による貼床が施されている。また、中央ピットを挟んで不整形な焼土面が３箇所認められた他、炭化材が床面からやや浮いた状態で部分的に検出された。中央ピット北側の東西方向の炭化材（№8758・8760・8761）は、桁材又は棟木と考えられ、樹種同定の結果クスノキと判明した。その他垂木と考えられる№8765・8767・8768はクリであった。

埋土は、炭化物、焼土粒を含む３層に分層できた。これらのことから、この建物は、焼失したものといえる。

遺物は、床面北東側で出土した甕Po476、P2-P4間で出土した底部Po482、中央部でやや離れたもの同士が接合した甕Po477、P10付近で出土した甕Po479・480、その他埋土中から出土した甕Po478・481、敲石S42を図化した。

出土遺物から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後半ごろと考えられる焼失住居である。^{14}Ｃ年代測定の結果では、1810±60B.P.、A.D230年との結果であり若干新しい値であると考える。（牧本）

SI96（第195図、PL. 37）

調査区北側、F4グリッドの標高67.8m付近の緩斜面に立地する。削平及び破壊が顕著で壁溝の一部のみ遺存する。

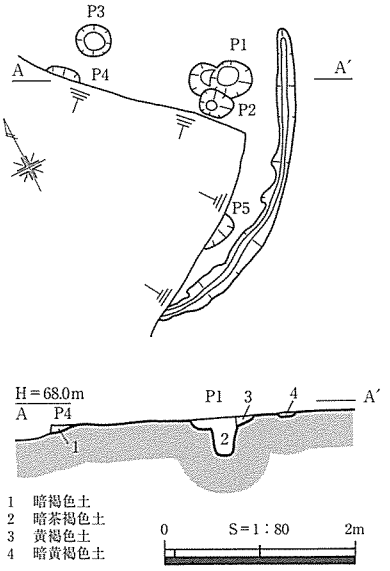
円形を呈すと思われ、復元される規模は直径5.4mである。壁溝は幅11～23cm、深さ５～8.2cmでややいびつな円弧を描く。

床面で柱穴を５基検出した。このうちP1は主柱穴のうちの一つとみられる。柱穴の埋土中から赤色顔料が付着した礫が１点出土した。建物内の埋土はすべて失われていた。

出土遺物も皆無に等しく、時期決定は困難であるが、弥生時代中期のものかと推定される。（小山）

表57　笠見第３遺跡SI96ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	68×39－58	主柱穴
P２	36×28－18	
P３	38×34－24	



第195図　笠見第３遺跡SI96遺構図

SI97（第196・197図、PL. 37・105）

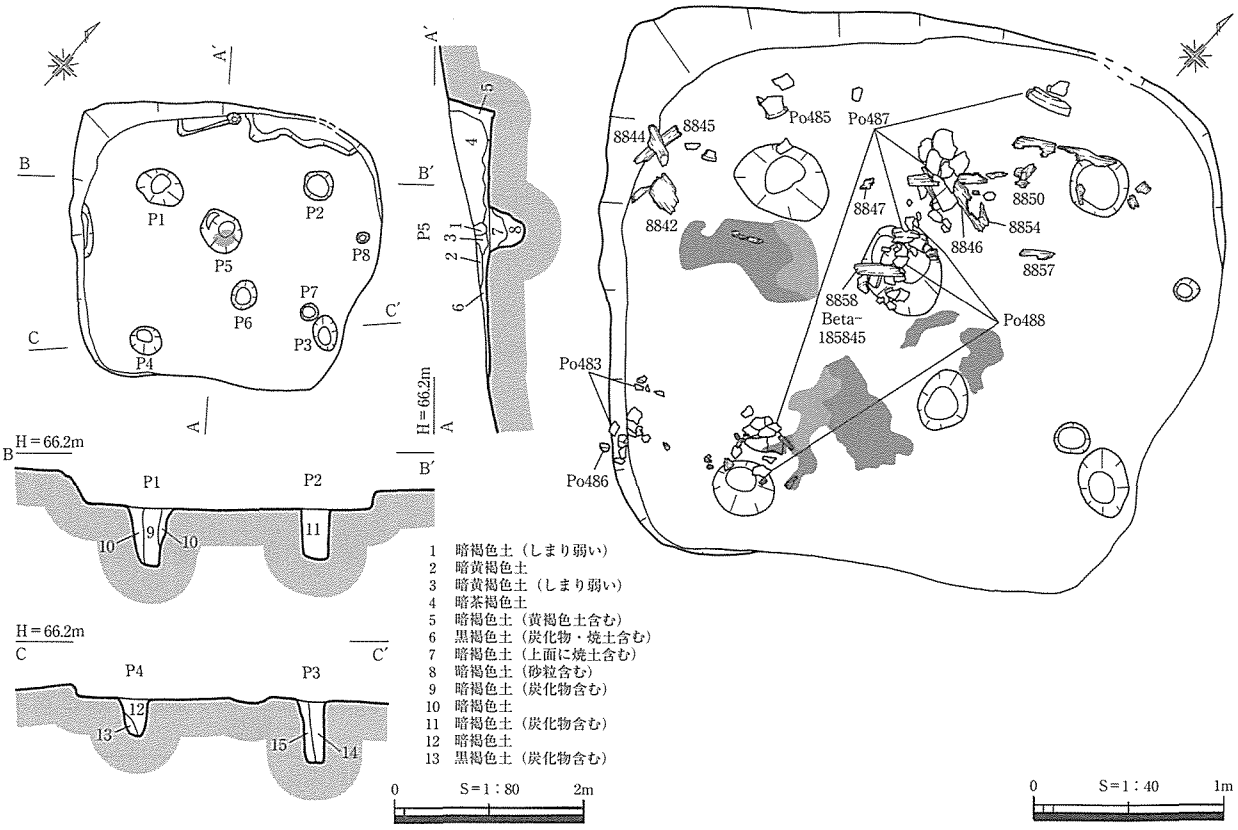
H1グリッドの標高66.1～65.6mの斜面に位置する。弥生時代後期の包含層である黒色土ならびにその下層の赤褐色土を除去したところで検出した。

建物跡の東半部の壁はすでに失われ、遺存状況は良好とはいえない。平面は隅丸方形を呈すとみられる。規模は、長軸3.2m、短軸2.9m、床面積7.6㎡以上を測る。壁高は、遺存状況が比較的良好な西隅で45cmを測る。壁際には幅８cm、深さ２cmの壁溝が、東壁と西壁際の一部にめぐる。

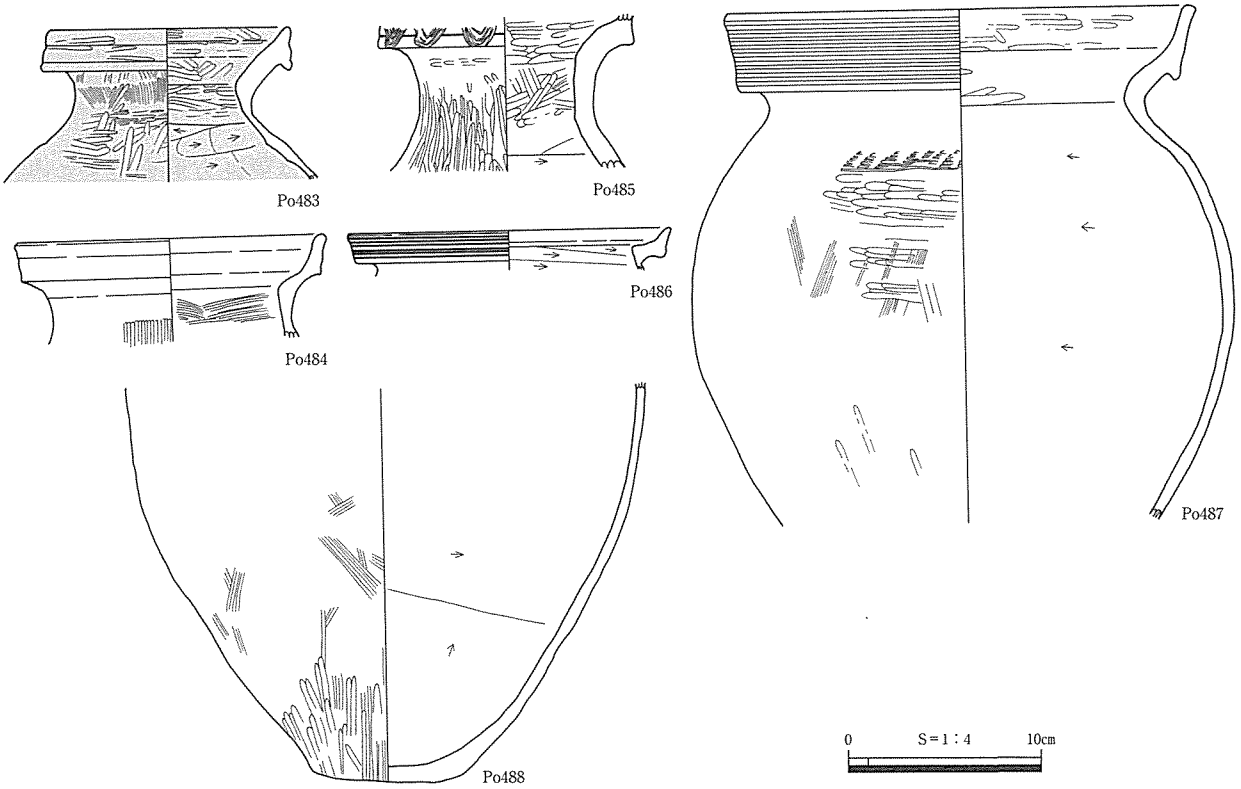
床面で８基のピットを検出した。このうち主柱穴はP1～P4である。主柱穴間距離はP1-P2から以下順に1.65m、1.6m、1.9m、1.6mである。P5は中央ピットである。

建物の埋土は６層に分層可能であった。床面直上は厚さ４cm前後の黒褐色土で覆われ、この層中には多量の炭化材を含む。また焼土も建物中央部の床より５cmほど上に若干認められる。このことから当建物は焼失したものとみられる。黒褐色土の上層は、しまりが弱い暗黄褐色系の土が堆積する。これは自然堆積土とみられる。

炭化材の出土状況は、東壁に直交して、建物内に倒れこんだ炭化材が２本（No.8857）認められる。両者は約40cmの間隔をあけ、ほぼ平行に出土した。ともに直径が約５cmの丸太状のもので、垂木の可能性がある。またこれに直交する材（No.8850）も出土した。直径約３cmの丸木状のものもあるが、遺存状況は良くない。一方西壁からはやや北寄りに倒れこんだ状態で炭化材（No.8845）が出土した。またその上に重なった状態で、これに直交する板材（No.8844）も出土した。炭化材の遺存状況はあまり良好ではなく、材の形状や、部材が特定できるものは少ない。埋土中に焼土があまり顕著ではないことから見て、土屋根と考える積極的根拠は見出せない。このことから当住居跡は草葺の屋根であった



第196図　笠見第３遺跡SI97遺構図・遺物出土状況図



第197図　笠見第３遺跡SI97出土遺物実測図

可能性が高いと考えられる。樹種同定の結果、No.8842はアシで屋根材、No.8844はヤマグワ、No.8845、No.8846①はアカメガシワ、No.8846・8847・8850はミツバウツギ、No.8854はアカメガシワ、No.8857はヤマグワで、他の住居とは異なる樹種が多く使用されていた。

表58　笠見第３遺跡SI97ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	51×38－63	主柱穴	P５	50×40－54	中央ピット
P２	33×33－64	主柱穴	P６	31×25－66	
P３	37×25－71	主柱穴	P７	19×16－11	
P４	33×29－63	主柱穴	P８	13×12－26	

出土遺物は、床面南隅で弥生土器壺Po483、甕Po486、床面北西隅付近で壺Po485、床面直上の炭化材と同一面で甕Po487、胴部Po488が出土した。

出土遺物から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後半頃の竪穴住居跡と考えられる。^{14}C年代測定では、1960±70B.P.、AD60年ごろの値であった。（小山）

SI98（第198・199図、PL. 37・128）

H1グリッドの標高64.2～65.1mの斜面に立地する。建物の東半は調査区外である。削平により南半は失うなど遺存状況は悪い。

平面円形、復元直径６mの竪穴建物跡とみられる。壁高は最も残りが良い北西部で59cmである。壁溝は南西側に一部認められた。幅14cm、深さ１～５cmである。床面には南半部を中心に貼床層が認められた。

表59　笠見第３遺跡SI98ピット一覧表

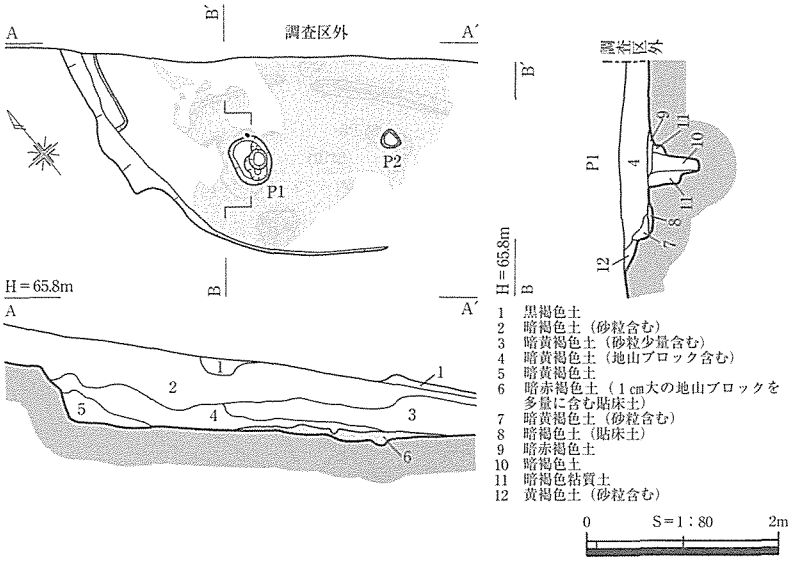
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	51×40－56	主柱穴
P２	19×16－19	

床面で２基のピットを検出した。このうちP1は主柱穴のうちの

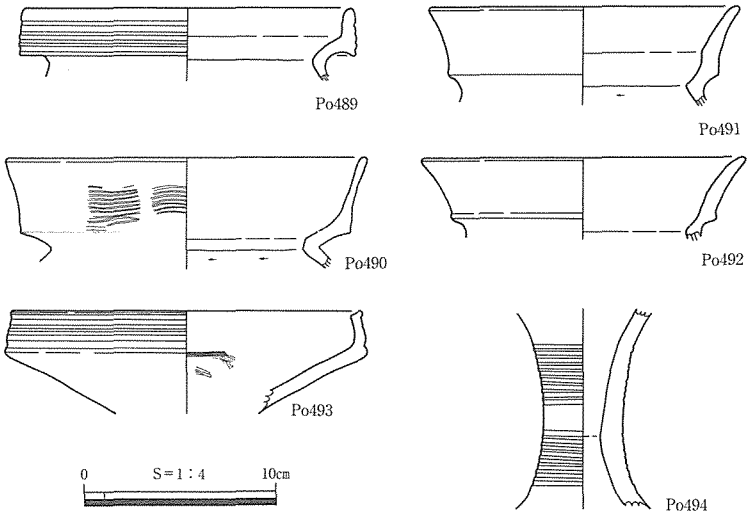
ひとつとみられる。

建物の上面は厚さ約40cmの流土で覆われ、流土中から弥生時代後期の土器が若干出土した。埋土は４層に分層可能であった。その大半は流入土とみられることから、自然堆積による埋没とみられる。

出土遺物は、検出中に弥生土器甕Po489～492が出土した。時期が明確なものは認められないが、建物東南側の斜面下方にあたる流土中から高杯Po493・494が出土していることから、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）



第198図　笠見第３遺跡SI98遺構図



第199図　笠見第３遺跡SI98出土遺物実測図

SI101（第200・201図、PL. 38・129）

調査区中央東側のK5グリッドにあり、標高70.6mのほぼ平坦面に立地する。笠見３号墳の旧表土下でSI100・102とともに検出された。南側はSI100、上部は笠見３号墳によって掘削を受けている。古いものからSI101→SI102→SI100となる。

平面は円形又は多角形（五角形）を呈す竪穴建物跡で、１回の建て替えがあったものと考えられる。以下一回り大きいものをSI101－１、小さいものを－２として記述する。

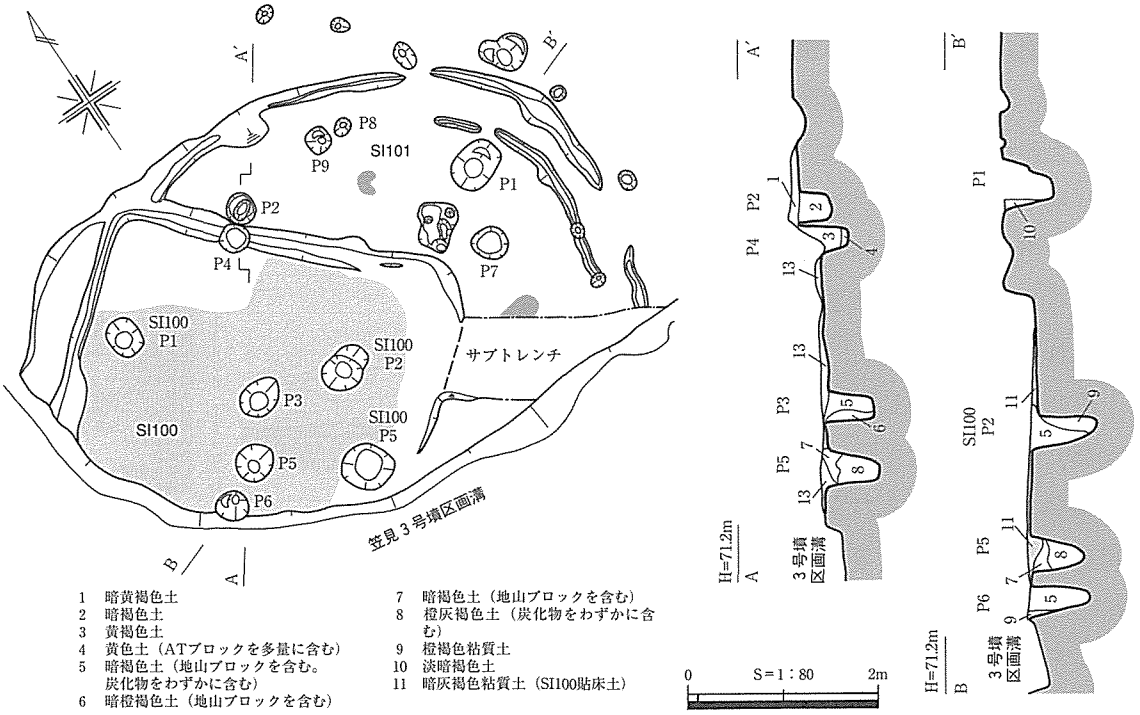
SI101－１は、長軸５m前後、床面積6.9m²以上である。壁は10cm前後とほとんど残っていなかった。壁際には、幅12～30cm、深さ10cm前後の壁溝が巡ると考えられる。

主柱穴は、位置的にSI100床面上でも検出されたP1～P3であるが、本来は５基あったものと考えられる。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に、3.2m、2.4mである。

SI101－２は、－１の壁溝内側で検出された一回り小さいものである。主柱穴はP1を共有して、P4、P5の

表60　笠見第３遺跡SI101ピット一覧表

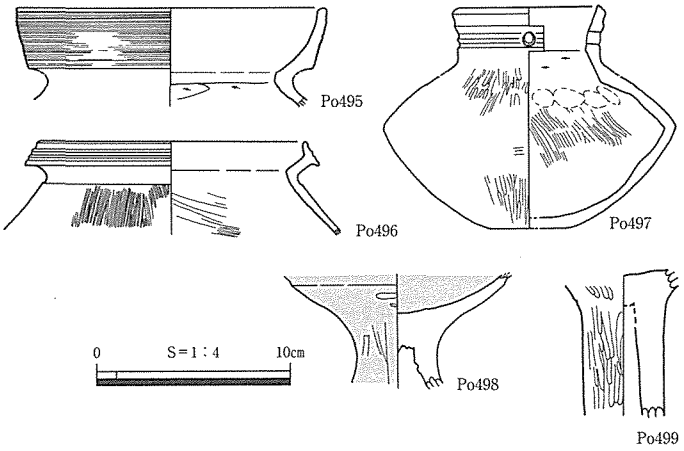
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	70×51－53	－１、－２主柱穴	P９	26×25－23	用途不明
P２	34×30－42	－１主柱穴	P10	23×17－14	用途不明
P３	40×38－52	－１主柱穴	P11	17×14－12	用途不明
P４	32×32－35	－２主柱穴	P12	50×44－51	用途不明
P５	46×34－56	－２主柱穴	P13	30×20－？	用途不明
P６	34×30－65	用途不明	P14	20×15－60	用途不明
P７	38×34－20	用途不明	P15	20×16－56	用途不明
P８	20×17－13	用途不明			



第200図　笠見第３遺跡SI101遺構図

３基を確認したが、本来は５基あったものと考えられる。P5では柱痕が確認され、推定される柱の太さは、径約16cmである。主柱穴間距離はP1-P4間から順に3.0m、2.0mである。

その他に、SI100床面上及び周辺でP6～P15が検出されたが、いずれも用途は不明である。中央ピットに相当するものは検出されなかった。



第201図　笠見第３遺跡SI101出土遺物実測図

床面には、中央部とP1-P2間、P7の南側で焼土面が２箇所検出された。

埋土は、暗黄褐色土単層である。

遺物は、埋土中で弥生土器甕Po495・496、短頸壺Po497、高杯Po498・499などが出土している。

出土遺物から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後半ごろのものと考えられる。（牧本）

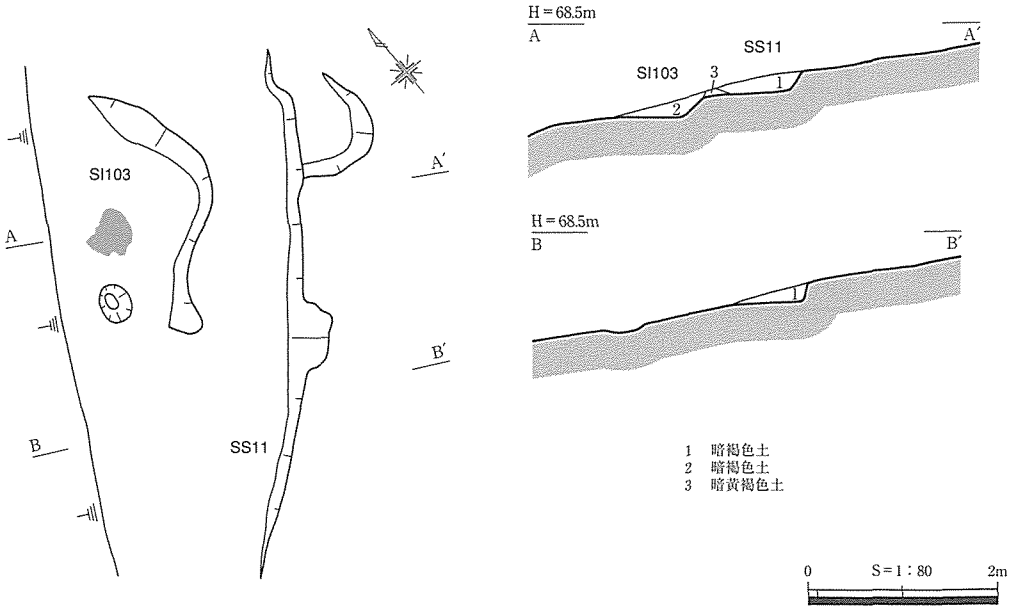
SI103（第202図、PL. 38）

調査区北西部、B17グリットの標高67.7m付近の緩斜面に位置する。遺存状況は悪く、建物の東南隅が残るのみである。

このため規模は不明であるが、平面隅丸方形ないしは方形の建物跡とみられる。

床面で焼土面が検出されたほか、（40×34－６）cmのピットを１基検出した。

出土遺物は皆無であるが、近接するSS11に前後する弥生時代後期後半ごろのものと考えられる。通



第202図　笠見第３遺跡SI103・SS11遺構図

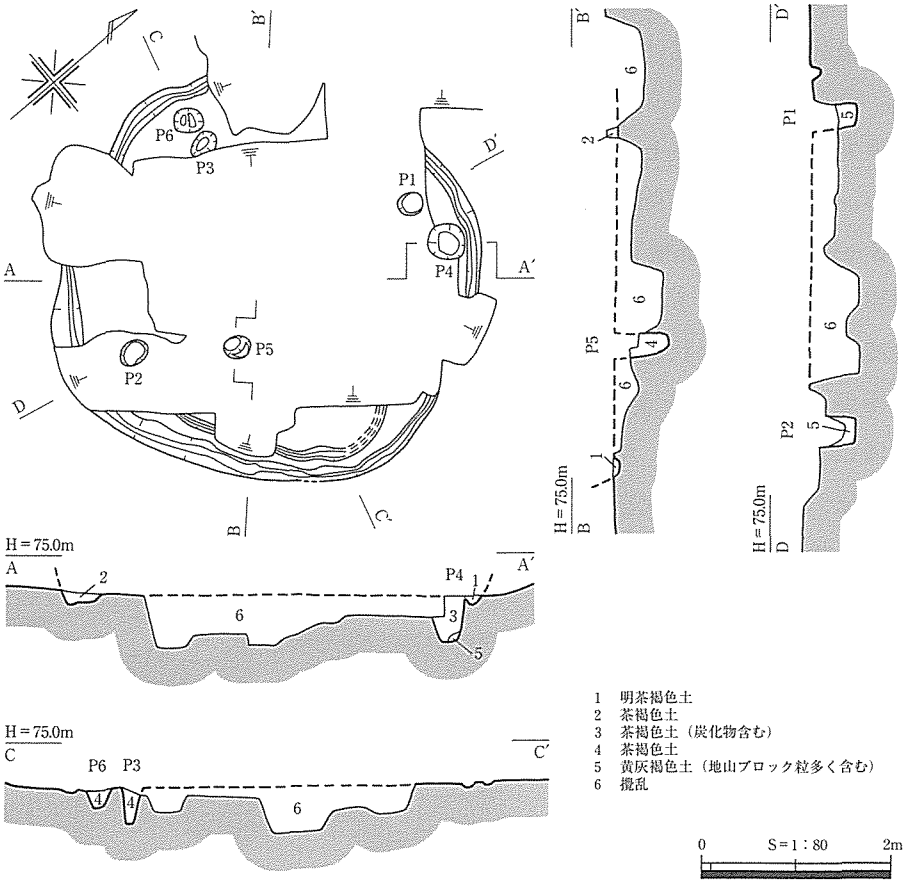
常の竪穴住居跡に比べて規模が小さく、明確な主柱穴等が検出されていないことから、住居以外の建物の可能性がある。（小山）

SI105（第203・204図、PL. 39・129）

調査区南側N16グリッド内にあり、標高74.6mのほぼ平坦面に立地する。遺構の大半が梨栽培の攪乱により破壊されており、遺存状態は悪い。

平面は隅丸方形で、規模は長軸4.7m、短軸4.5m、床面積は推定12.8m²を測る。残存壁高は南側で最大９cmを測る。壁溝は、攪乱による削平が著しいが、全周していたものと考えられる。幅約９～33cm、深さ10cm前後である。

主柱穴はP1～P3の配置から本来４基あっ

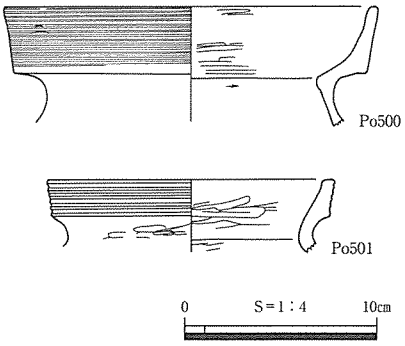


第203図　笠見第３遺跡SI105遺構図

たと想定されるが、攪乱のために北東側のピットは確認できなかった。主柱間距離は平均して2.3mを測る。その他のピットは、用途不明である。

表61　笠見第３遺跡SI105ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	27×24－30	主柱穴
P２	32×23－32	主柱穴
P３	30×24－30	主柱穴
P４	39×38－46	
P５	28×26－52	
P６	31×25－21	



第204図　笠見第３遺跡SI105出土遺物実測図

その他床面で、北東側壁溝の内側で１条の溝を検出した。規模は、残存長2.1m、幅約７～13cm、深さ４cm前後である。

埋土は、茶褐色土を主体とした自然堆積と推測される。

埋土および攪乱土中から、弥生土器が出土した。図化したものは、甕Po500・501である。

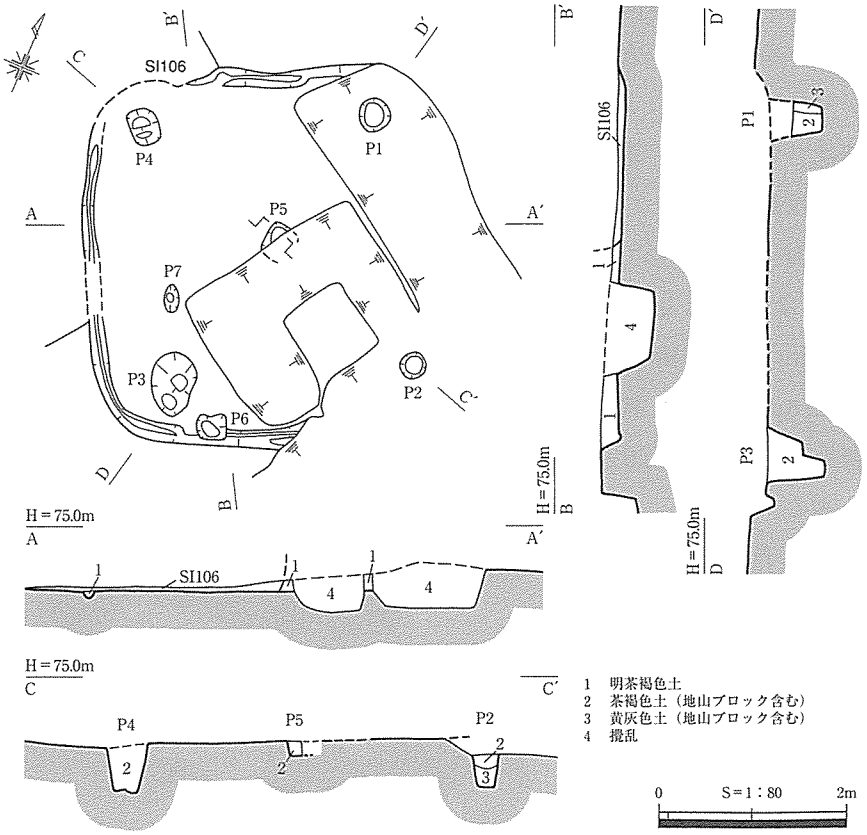
これらの出土遺物と形態的特徴から、清水Ⅴ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI107（第205・206図、PL. 39・129）

調査区南側、M15グリッドの標高74.5m付近のほぼ平坦面に立地している。調査区内でも標高の高い場所に立地する。北西をSI106によって掘り込まれている。

遺存状態は悪く、耕作による攪乱を大半で受けている。遺存する壁から、平面は隅丸方形を呈すると思われる。規模は南北3.9m、東西３m以上で、床面積は推定13.2m²以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい南側で最大19cmを測る。壁溝は、幅10～15cm、深さ約10cm、断面はＵ字状を呈する。検出状況からほぼ全周めぐるものと考えられる。

主柱穴と考えられるのはP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.65m、2.6m、2.8m、2.5mである。P5は中央ピットで



第205図　笠見第３遺跡SI107遺構図

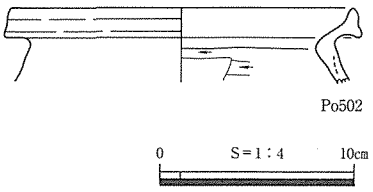
あると考えるが、大半が攪乱を受けているため詳細は不明である。その他のピットは用途不明である。

埋土は単層で、粘性のある地山土を含んだ自然堆積と考えられる。

遺物は、埋土中から出土したもので甕口縁部Po502を図化した。

表62　笠見第３遺跡SI107ピット一覧表　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	35×33－32△	主柱穴
P2	27×26－27△	主柱穴
P3	65×45－63	主柱穴
P4	38×30－51	主柱穴
P5	39×　－24	中央ピット
P6	30×24－19	
P7	30×15－33	



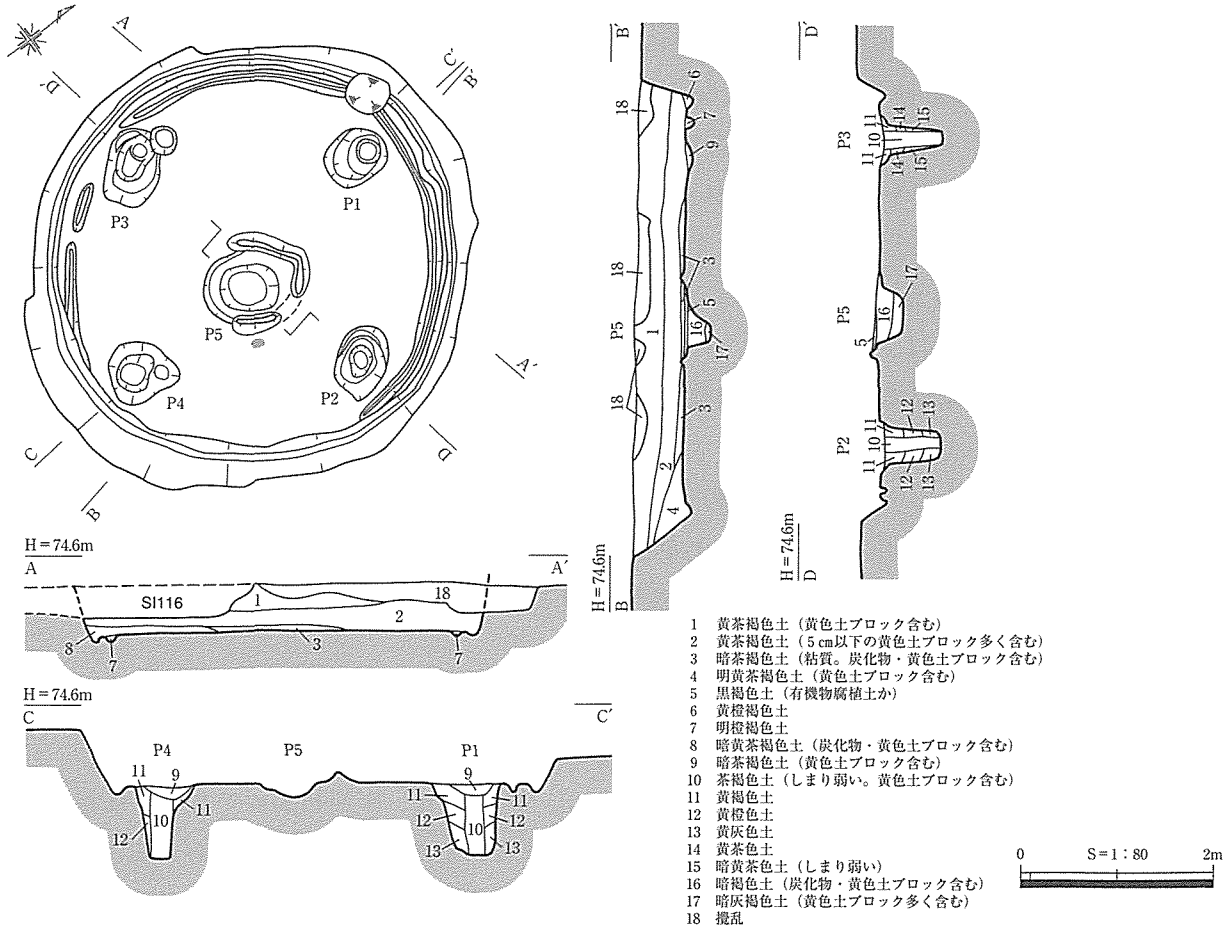
第206図　笠見第３遺跡SI107出土遺物実測図

出土遺物及び形態的特徴から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

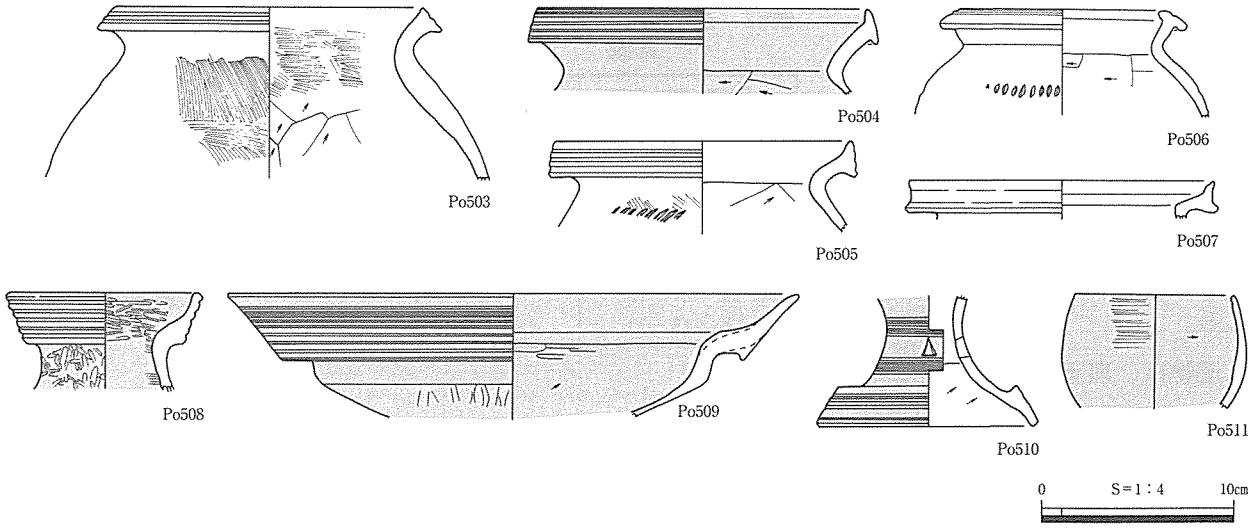
SI109（第207・208図、PL. 39・129）

調査区南側、L17グリッドの標高74.0～74.3mの緩斜面に立置する。西側は、SI116によって掘り込まれる。

平面は円形を呈し、直径4.6～5.1m、床面積は13.1m²を測る。壁高は最大54cm残存する。壁溝は、幅約14cm、深さ約９cmで、断面Ｕ字状である。さらにその内側で、P2-P4を基点にして、ほぼ同規模



第207図　笠見第３遺跡SI109遺構図



第208図　笠見第３遺跡SI109出土遺物実測図

表63　笠見第３遺跡SI109ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	66×54－74	主柱穴(柱痕有)	P4	74×72－76	主柱穴(柱痕有)
P2	74×54－64	主柱穴(柱痕有)	P5	92×68－30	中央ピット
P3	80×56－70	主柱穴(柱痕有)			

の壁溝がもう一重めぐっていた。それぞれ、建物拡張後と前の溝であり、同時に開いていたものではない。また、拡張に伴った主柱位置の移動も認められなかった。この拡張により、床面積は全体で約1.5㎡広がった。

主柱穴はP1～P4で、いずれも柱痕跡が明瞭に残る。柱径はそれぞれ20.0cm前後に復元できる。主柱間距離はP1-P2から時計回りに2.2m、2.5m、2.3m、2.5mである。P5は中央ピットで、周囲には馬蹄形に土盛りした土手を廻らせ、その内側にわずかな平坦面をもつ。P5の埋土掘り下げ中、土手内側の平坦部上面で、半円形をなす非常に弱いしまりの黒褐色土を検出した。厚さは１～２cmとごくわずかで、茶褐色系を主体とした建物の埋土と比較すると異質である。周辺からも同質の土が検出できなかったことから、この土は埋土ではなく、有機物が腐食したものと考えられる。もし、P5に直接関わるものであるとすれば、P5を覆っていた板状の蓋が想定できるであろう。その場合、P5内の埋土をどう理解するかが重要であったが、現地では十分に検討できなかった。中央ピットの使用方法を考える上での一案として提示しておく。

出土遺物は、図化したものに弥生土器甕Po503～507、壺Po508、高杯Po509・510、椀Po511がある。Po509が床面直上から、Po510がP2の掘方埋土から出土した他は、埋土中からの出土である。

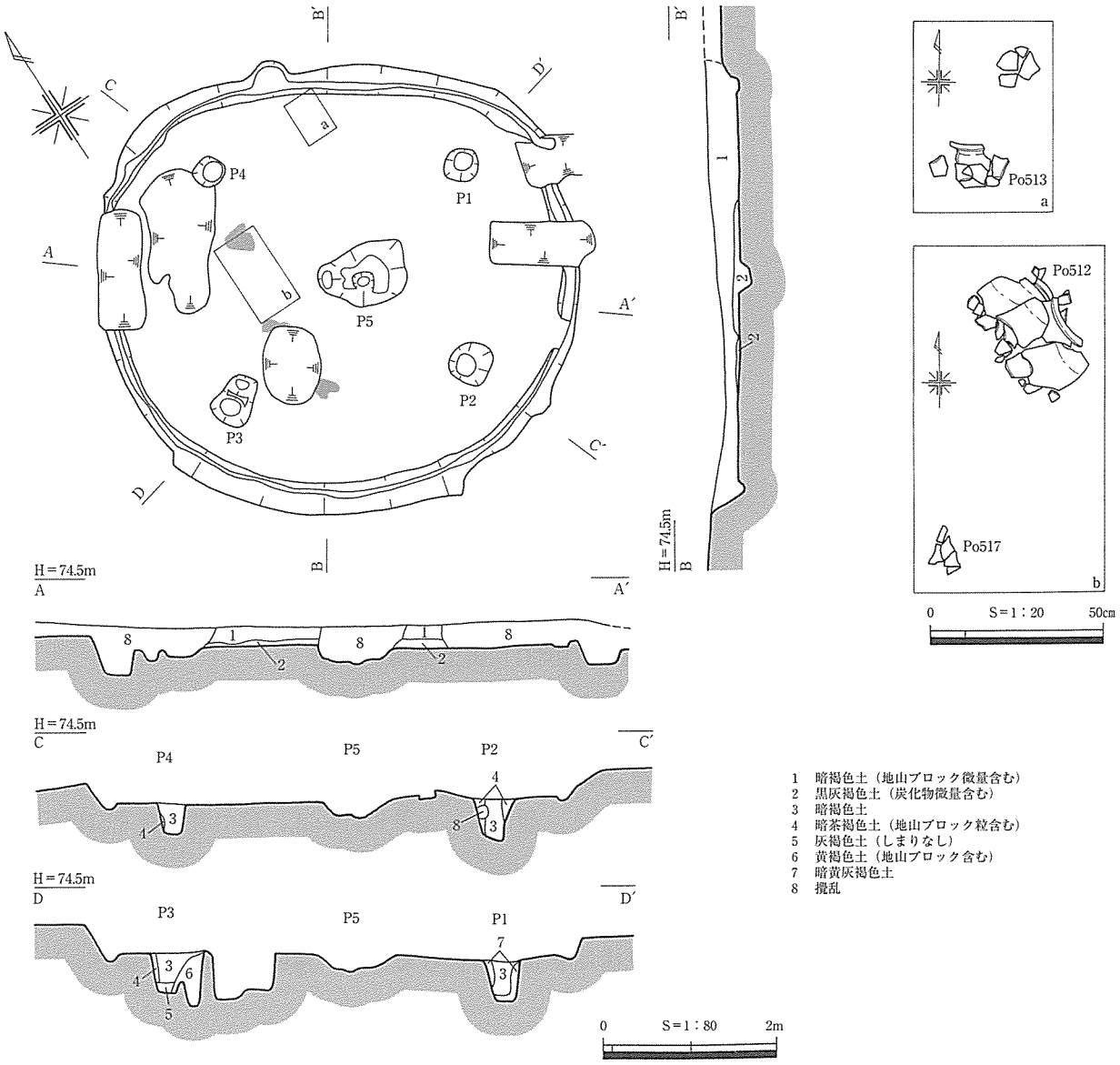
出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。(西川)

SI112（第209・210図、PL. 40・105・177）

調査区南側Ｌ15グリッド内にあり、標高74.1m前後のほぼ平坦面に立地する。

遺存状態はよい。平面は楕円形を呈する。長軸5.6m、短軸5.2m、床面積20㎡である。残存壁高は南西側で最大35cmを測る。壁溝は、一部攪乱により壊されているが全周すると考えられる。幅20cm前後で、深さ10cm程、断面は逆台形状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離は、P1-P2から順に2.35m、2.6m、2.43m、2.9mである。P5



第209図　笠見第３遺跡SI112遺構図

は中央ピットと考えられ、平面形は不整楕円形である。埋土に炭化物が微量認められた。

その他床面では、被熱硬化した焼土面を検出した。焼土面はP4の南側に１箇所、P3とP5の間に２箇所認められる。

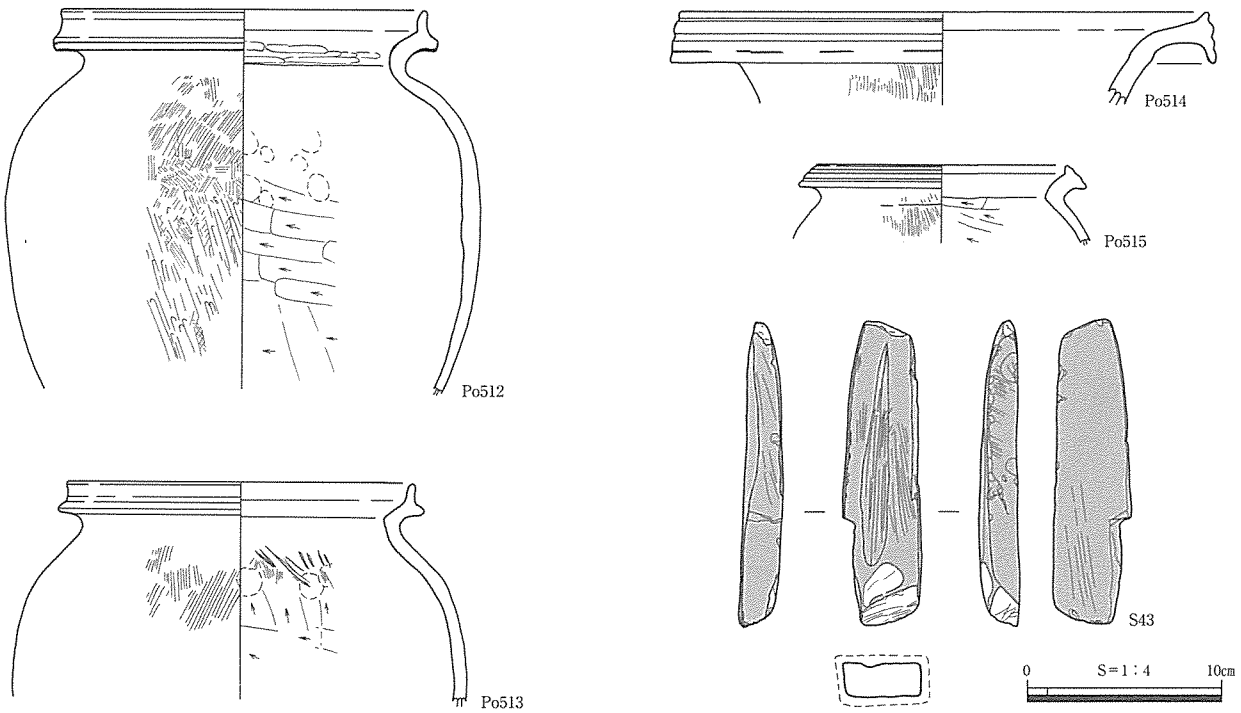
埋土は、地山土を少量含んだ暗褐色土で自然堆積によるものと考えられる。

遺物は、床面から弥生土器甕Po512・513、壺Po514、および砥石S43が出土し、埋土中から甕Po515が出土している。砥石S43は、砥面４面のうち１面に断面逆三角形の筋状の窪みが刻まれており、玉砥石と考えられる。しかし、埋土中および床面上で玉作りに関わる遺物が他に認められなかったことから、工房の可能性は低いと考える。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

表64　笠見第３遺跡SI112ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	40×38－50	主柱穴
P2	52×49－57	主柱穴
P3	58×32－63	主柱穴
P4	38×35－37	主柱穴
P5	104×69－22	中央ピット



第210図　笠見第３遺跡SI112出土遺物実測図

SI114（第211・212図、PL. 40・41・129）

調査区南側M14グリッド内にあり、標高74.3m前後のほぼ平坦面に立地する。北東側でSI115を掘り込んでおり、拡幅を伴う建て替えも行われている。建て替え前をSI114－２、建て替え後をSI114－１と呼称する。なお、SI114－１は建て替え時に貼床が施されている。

SI114－１は遺存状態がよい。平面は不整円形を呈し、長軸6.85m、短軸6.3m、床面積28.9㎡を測る。残存壁高は、南側で最大73㎝を測る。壁溝は全周すると考えられ、幅約12～24㎝、深さ約10㎝である。断面はＵ字状を呈する。

床面に施された貼床は、検出時、やや削りすぎのため確認には至らなかった中央部分を除くと、ほぼ全面を覆っていたと考えられる。貼床土は、地山土を主体とした黄灰褐色土である。厚さは８㎝ほどである。

主柱穴はP1～P6の６基で、主柱間距離は、P1-P2から順に2.6m、2.8m、2.7m、2.8m、2.9m、3.1mである。P3では、柱掘方埋土中に直径24㎝前後の台状の石が落ち込んでいた。その台石は、柱抜き取り後やや埋没してから混入していたもので、柱の沈み込みを防ぐ礎板的役割を担っていたのではなく、住居内で使用後破棄されたものと考えられる。P7は中央ピットと考えられ、平面形は楕円形で二段掘りになっている。埋土は単層で焼土や炭化物などは含まれていなかった。その他のピットは用途不明である。

その他床面で溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は、中央ピットから東側へ伸びるものと南側に伸びるものがある。規模は長さ約２

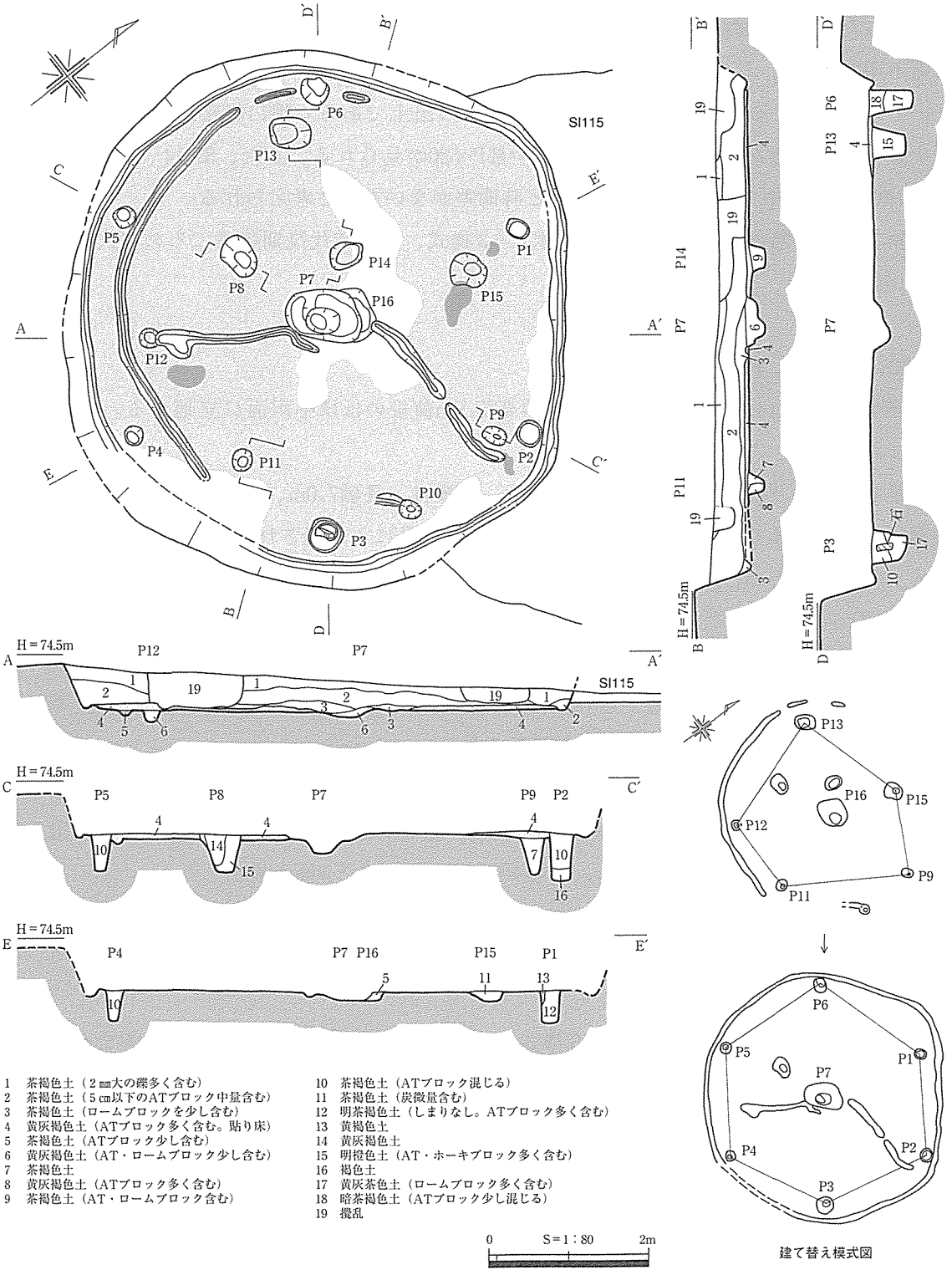
表65　笠見第３遺跡SI114ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P1	30×21－40	SI114－１　主柱穴	P9	32×20－51	SI114－２　主柱穴
P2	33×28－60	SI114－１　主柱穴	P10	27×24－16	
P3	45×43－42	SI114－１　主柱穴	P11	30×25－27	SI114－２　主柱穴
P4	24×23－37	SI114－１　主柱穴	P12	25×23－18	SI114－２　主柱穴
P5	27×26－45	SI114－１　主柱穴	P13	53×32－41	SI114－２　主柱穴
P6	36×32－41	SI114－１　主柱穴	P14	45×32－16	
P7	90×65－24	SI114－１　中央ピット	P15	48×45－22	SI114－２　主柱穴
P8	40×35－45		P16	96×69－32	SI114－２　中央ピット

m、幅約７～20cm、深さ約５cmである。直線的ではなくやや蛇行する。焼土面はP12の東側とP15付近で検出した。

埋土は３層に分層でき、いずれも自然堆積と考えられる。

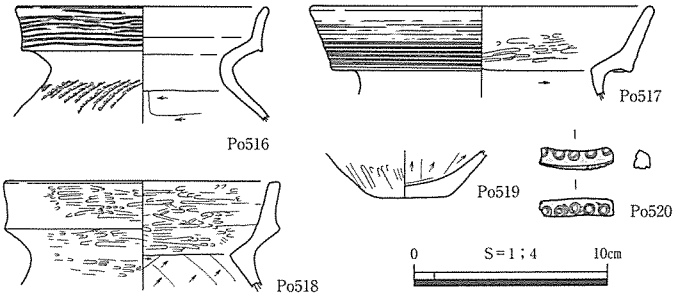
SI114－２は、－１の貼床を除去すると、その下から壁溝とピットを検出した。遺存状態はあまりよくない。平面形は隅丸五角形を呈すると推察される。長軸6.0m、短軸5.7m、床面積25m²である。壁溝は西側から南側にかけて検出した。全周していたかどうかは不明である。幅約７～14cm、深さは７



第211図　笠見第３遺跡SI114遺構図

cm前後を測る。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP9、P11、P12、P13、P15の５基で、主柱間距離はP9-P11から順に3.1m、2.0m、3.1m、2.9m、2.2mのやや歪な五角形となる。P16は中央ピットと考えられ、平面は楕円形で二段掘りになっている。埋土に焼土や炭化物は含まれていなかった。その他のピットに関しては用途不明である。



第212図　笠見第３遺跡SI114出土遺物実測図

SI114-１・２に関する遺物は、すべて埋土中からの出土である。甕口縁部Po516～518（Po518の外面には少量の赤色塗彩あり）、底部Po519、把手部Po520が見られる。また、SI114-１と-２は、貼床が-２の床面直上で施されている状況からさほど時間差がないものと考えられる。

出土遺物と形態的特徴から、両者とも清水Ｖ-３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI115（第213・214図、PL. 41・129・177）

調査区南側L14～M14グリッド内にあり、標高73.9m前後のほぼ平坦面に立地する。南西側はSI114に掘り込まれている。

遺存状態はよい。平面は隅丸五角形を呈する。規模は、長軸7.0m、短軸6.5m、床面積は29㎡を測る。残存壁溝は南東側で最大52cmを測る。壁溝は一部攪乱により壊されているが、ほぼ全周すると考えられる。幅約６～25cm、深さ10cm前後になる。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P5の５基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.7m、2.7m、2.9m、2.7m、2.9mである。P2では、柱掘方底面に直径30cm、厚さ４cmほどの扁平な石を検出した。これは、柱の沈み込みを防ぐ礎板の役割を担っていたと考えられる。P6は中央ピットと考えられる。埋土に焼土や炭化物は認められなかった。その他のピットは用途不明である。

その他床面で溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は、中央ピット東側から伸びP2と直結する。形状はやや直線的である。規模は長さ約1.6m、幅７～13cm、深さ３cm前後である。用途は不明である。焼土面はP10の南東側に１箇所、中央ピットの南東側で２箇所検出した。

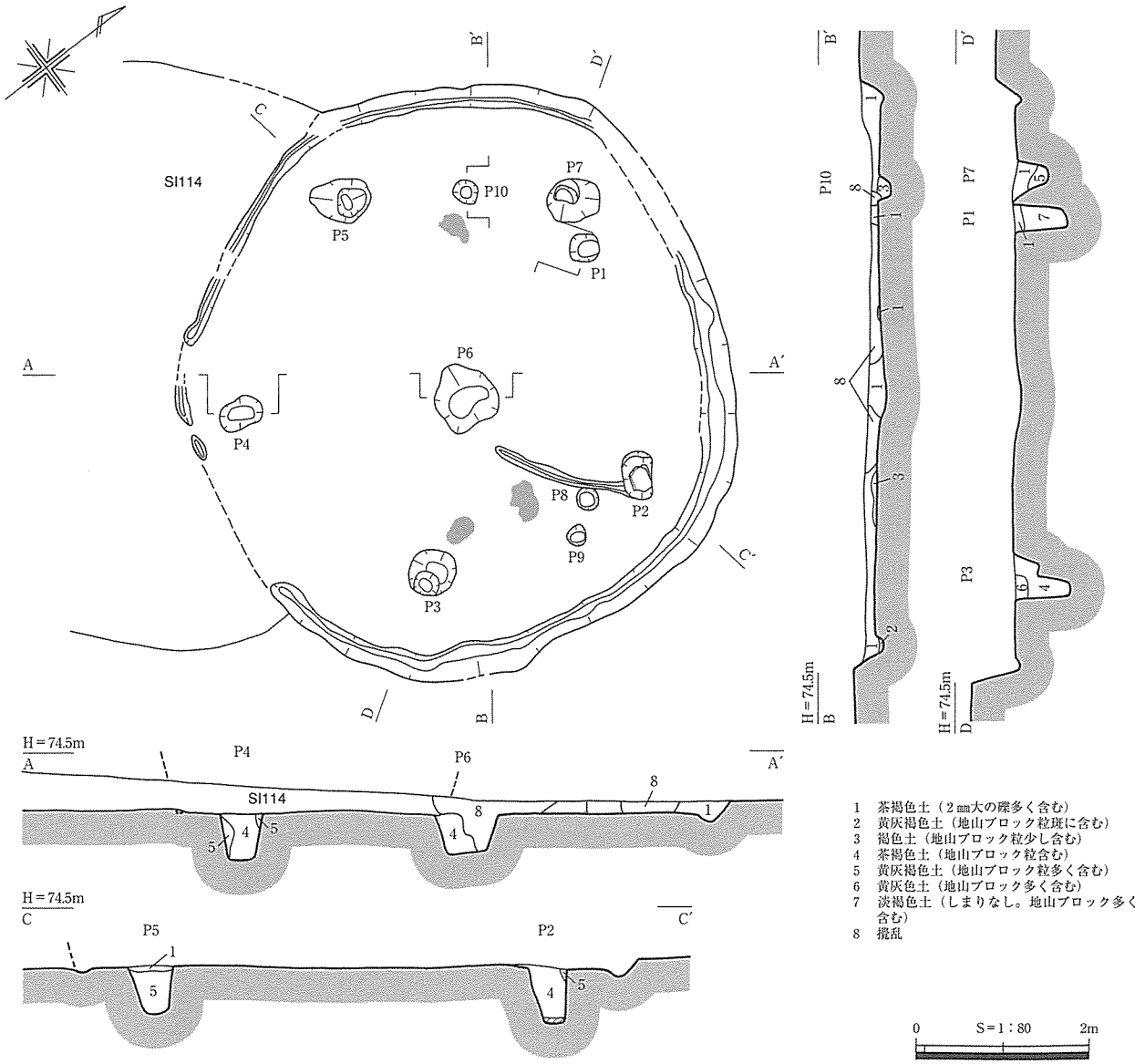
埋土は自然堆積によると考えられる。

遺物は、すべて埋土中からの出土である。甕Po521～524、蓋Po525、土玉Po526などがあり、砥石Ｓ44も見られる。

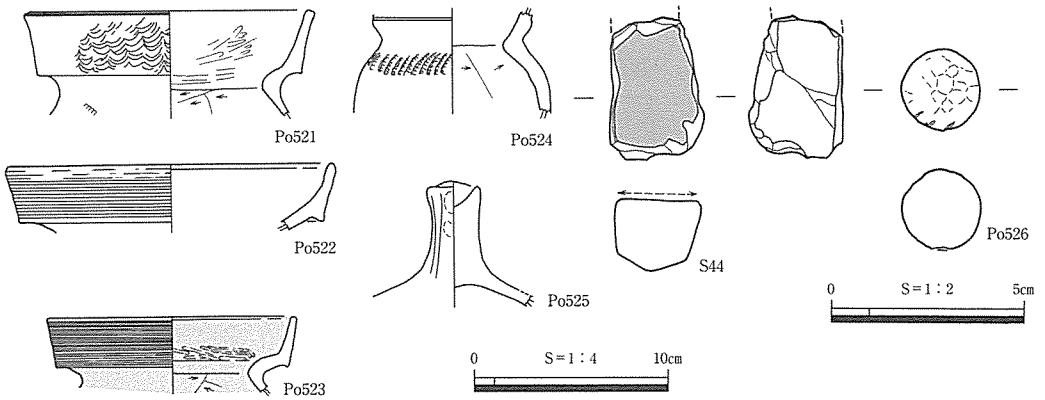
出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ-３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。SI114との切り合い状況から、SI115→SI114-２→SI114-１になると考えられる。（岩井）

表66　笠見第３遺跡SI115ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸-深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸-深さ(cm)	備　　考
P1	35×31-57	主柱穴	P6	78×69-44	中央ピット
P2	61×33-62	主柱穴	P7	61×52-31	
P3	52×43-63	主柱穴	P8	25×24-56	
P4	51×32-55	主柱穴	P9	25×21-26	
P5	70×52-54	主柱穴	P10	32×26-19	



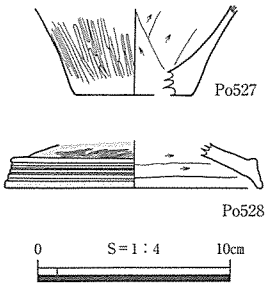
第213図　笠見第３遺跡SI115遺構図



第214図　笠見第３遺跡SI115出土遺物実測図

SI118（第215・216図、PL. 41・130）

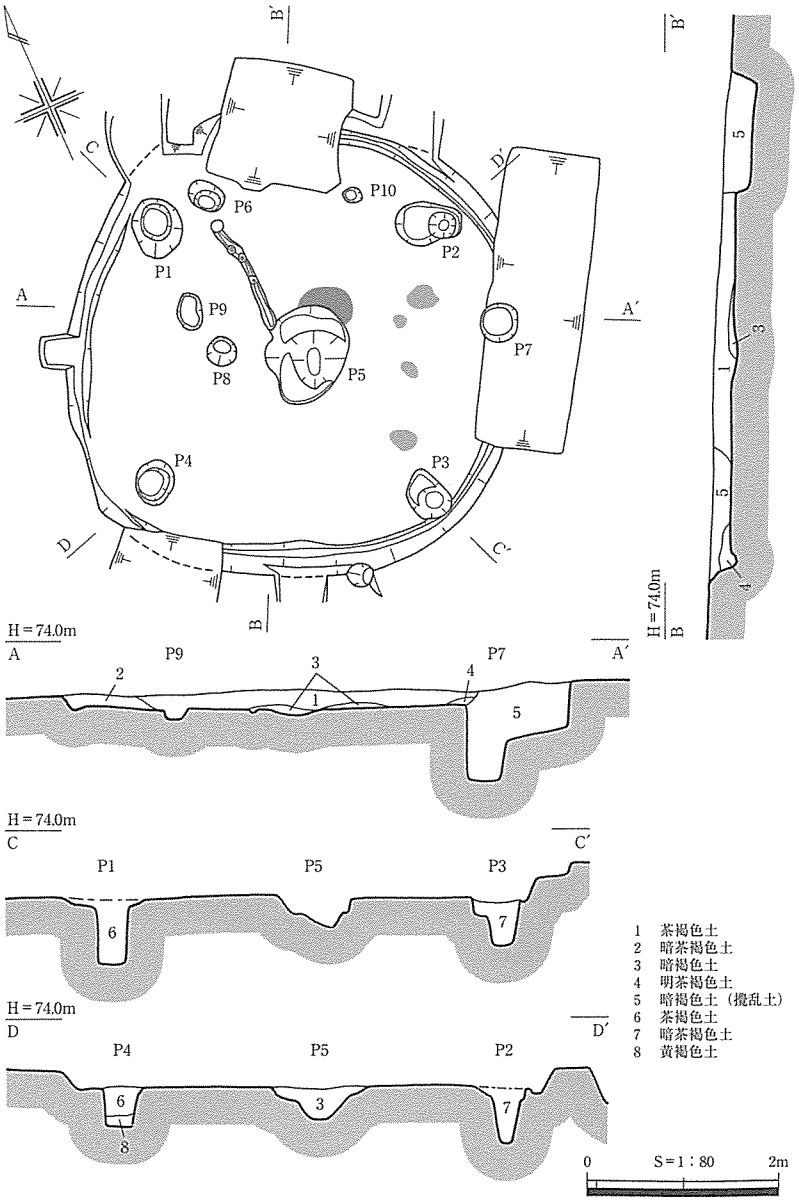
調査区中央南側Ｊ・K16グリッド内にあり、標高73.6m～73.3mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。北側にSI134が隣接している。



第215図　笠見第３遺跡SI118出土遺物実測図

遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈する。長軸5.2m、短軸5.0m、床面積15.8㎡を測る。残存壁高は、南側で最大34cmを測る。壁溝は部分的に攪乱を受け壊されているが、ほぼ全周めぐるものと考えられる。幅約13～20cm、深さ約７cmを測る。断面は逆台形状を呈する。

主柱穴はP1～P４の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に3.0m、2.9m、3.0m、2.75mである。P5は中央ピットと考えられ、平面形は不整形で二段掘りされている。埋土に炭化物や焼土等は認められなかった。その他のピットに関しては用途不明である。



第216図　笠見第３遺跡SI118遺構図

その他床面で溝と被熱硬化した焼土面、および炭層を検出した。床溝は中央ピットから北側に向かって直線的に伸びる。長さは1.2m、幅約10cm、深さ約３cmを測る。なお、床溝内には用途不明の小ピットが数基認められた。焼土面は中央ピットの東側、炭層は北東側で認められた。

表67　笠見第３遺跡SI118ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	63×52－63	主柱穴	P6	40×30－64	
P2	70×35－62	主柱穴	P7	40×38－79	
P3	50×41－52	主柱穴	P8	32×30－17	
P4	50×40－47	主柱穴	P9	40×26－14	
P5	103×90－38	中央ピット	P10	20×16－12	

埋土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物は床面と埋土中から弥生土器が出土した。床面の脚部Po528、埋土中の底部Po527を図化した。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI119（第217・218図、PL. 41・130）

調査区南側、K19グリッドの標高73.4～74.8mの緩斜面に位置する。西側ではSI120を掘り込む。

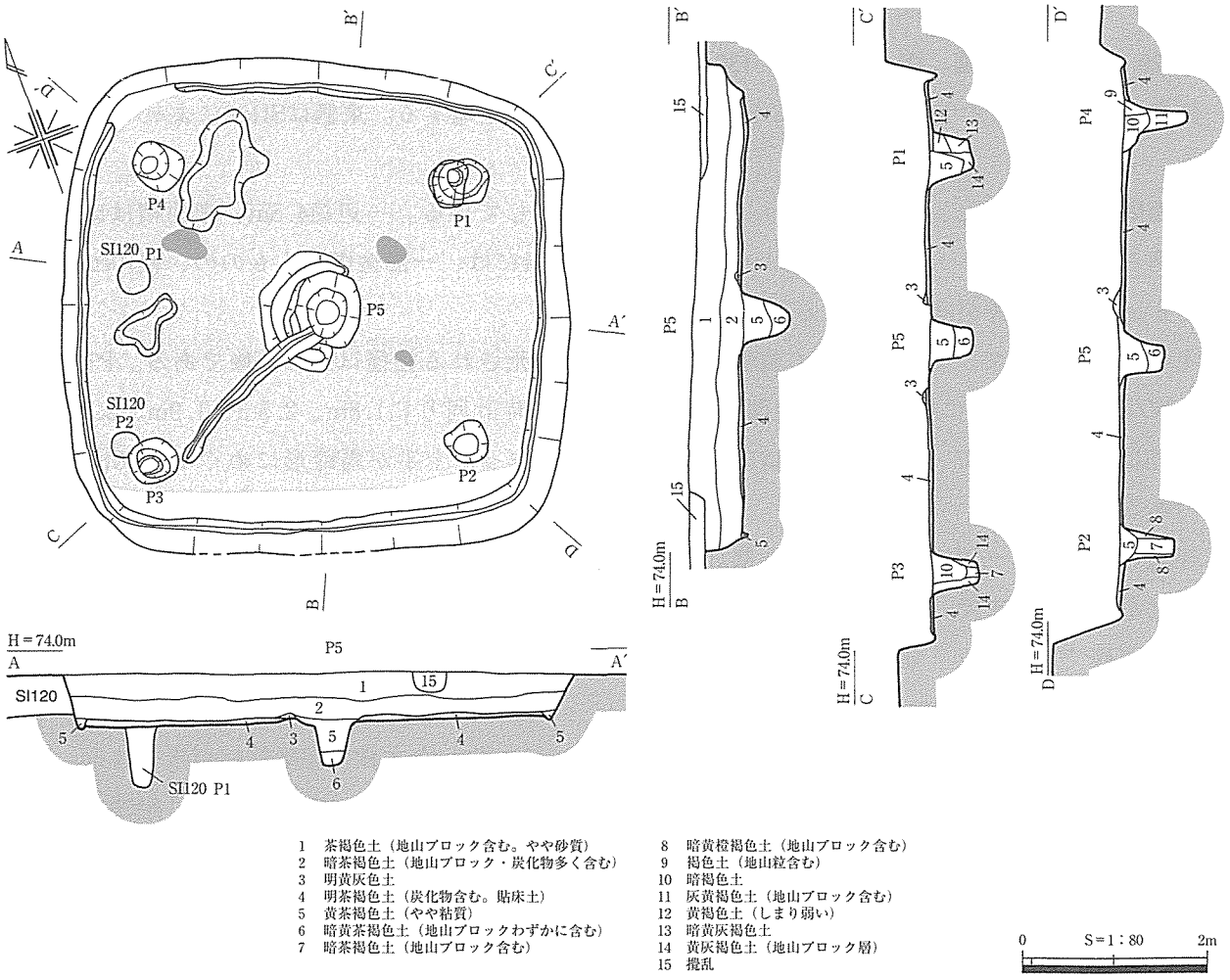
平面隅丸方形を呈し、長軸5.5m、短軸5.3m、床面積は21.1㎡を測る。壁高は最大で56㎝残存する。壁溝は、幅10㎝前後、深さ12㎝前後で、断面Ｖ字状である。北西隅では明確な壁溝を検出できなかった。

主柱穴はP1～P4で、いずれのピットからも柱痕が検出され、復元される柱径は10～15㎝である。主柱間距離はP1―P2から時計回りに2.9m、3.4m、3.2m、3.3mである。P5は中央ピットで、周囲にＣ字形の土手を土盛りしてめぐらせる。また、その土手の一部を崩して、南西方向に浅い溝を開削する。ただし壁溝までは到達しない。

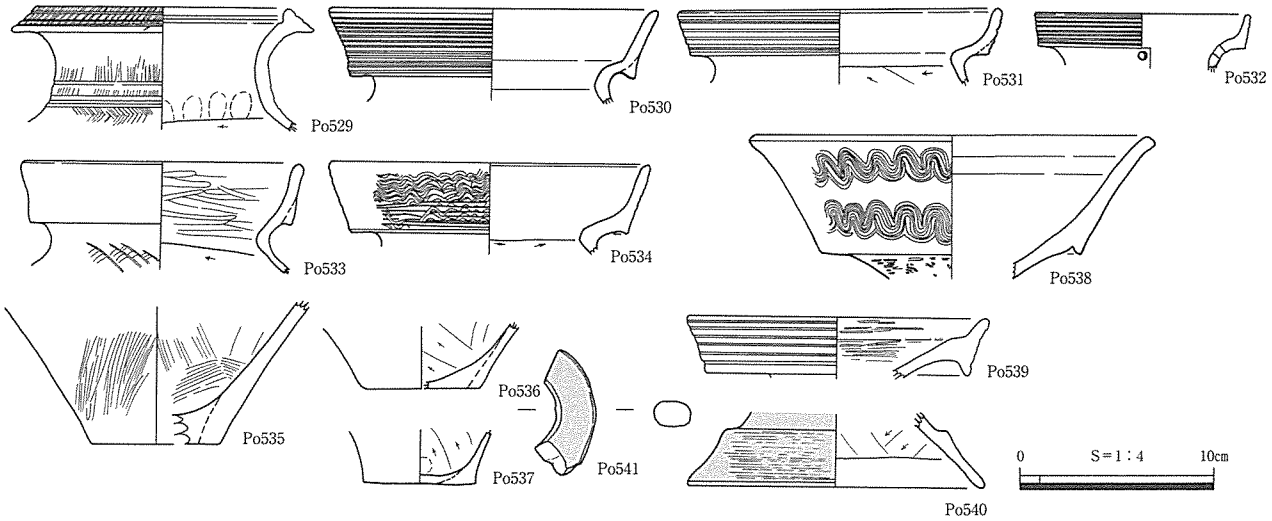
床面には、ほぼ全面に貼床土を付加していた。それらを除去したところ、北西側が特に厚く整地されており、旧地形の凹凸の著しさが判明した。一方、P1・P3などでは貼床土除去後、柱掘方の規模が広がりをみせた。これが本来の柱掘方であり、当初、貼床土上面で検出したP1・P3の掘方は建物廃絶後の柱抜取穴となる。SI119は貼床土の精査によって、柱掘方の掘削→主

表68　笠見第３遺跡SI119ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P1	64×47－66	主柱穴(柱痕有)	P4	50×48－48	主柱穴(柱痕有)
P2	45×44－47	主柱穴(柱痕有)	P5	78×70－50	中央ピット
P3	54×46－44	主柱穴(柱痕有)			



第217図　笠見第３遺跡SI119遺構図



第218図　笠見第3遺跡SI119出土遺物実測図

柱・梁桁材などの組み上げ→床面の整地（貼床土の付加）という作業工程を想定することができる。

埋土は茶褐色系のものが主体となり、ほぼ水平に堆積する。

出土遺物には、いずれも埋土中から出土した弥生土器壺Po529、小型壺Po532、甕Po530・531・533・534、底部Po535～537、器台Po538・539、脚部Po540、把手Po541を図化した。

出土遺物から、清水V－3様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（西川）

SI120（第219～221図、PL. 42・43・130）

調査区南側、K19グリッドの標高73.3～73.6mの緩斜面に立地する。東側はSI119によって掘り込まれる。

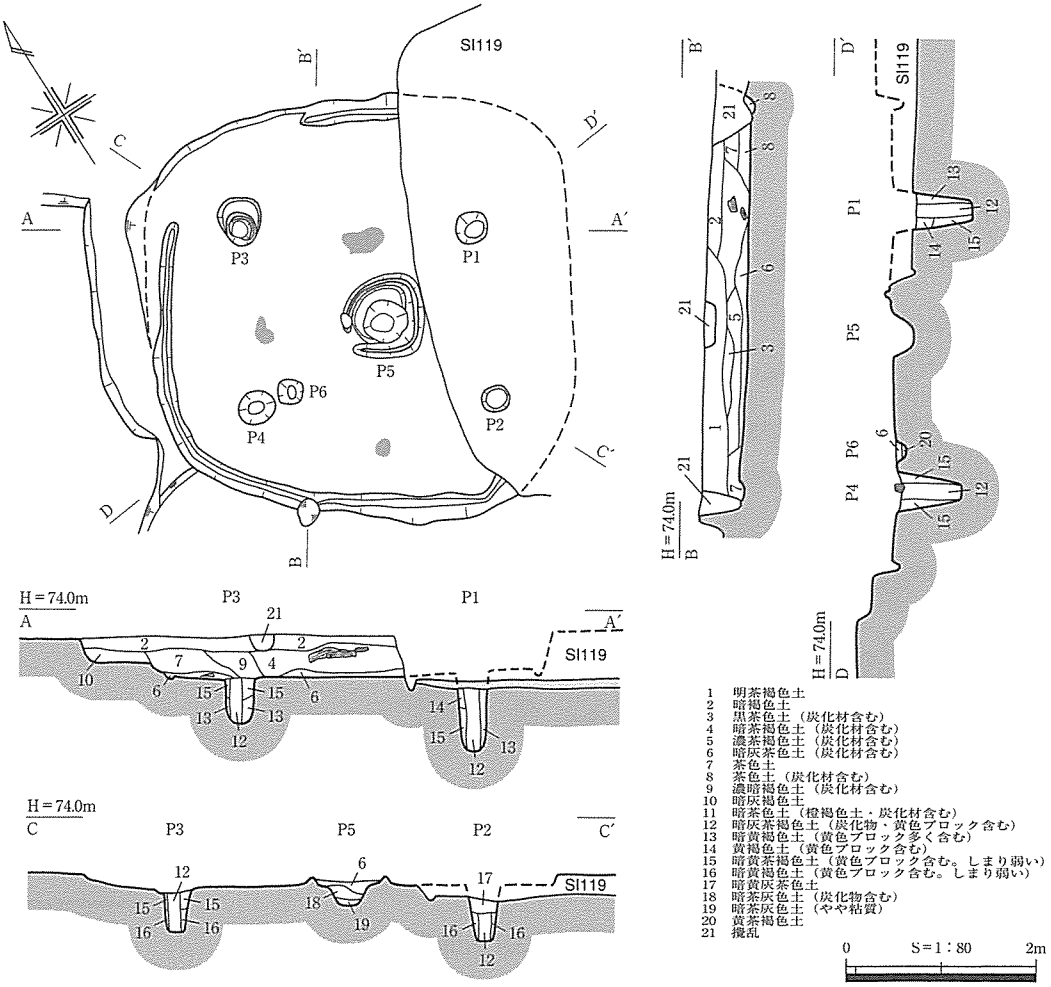
平面隅丸方形を呈し、後述するように火災により廃絶している。一辺約4.5m、床面積は13.9㎡以上を測る。周壁は低く、高い所でも30㎝を超えない。壁際には、一部途切れるものの、幅10㎝前後、深さ5㎝前後の壁溝がほぼ全周すると思われる。

主柱穴はP1～P4で、いずれからも柱痕が検出され、復元される柱径は15㎝前後である。P3・P4はSI119の貼床土除去後に検出した。柱間距離はP1-P2から時計回りに1.8m、2.5m、1.9m、2.5mである。P5は中央ピットで、その周囲には床面を削り出して作った土手が馬蹄形にめぐる。P6は性格不明である。

建物の西側には一段高く張り出した部分がある。比高差約20㎝と緩やかな段差ではあるが、SI120の埋土がこの部分まで一連に堆積しており、建物に伴った遺構の可能性が高い。北辺が削平を受け、全容は明確ではないが、建物の正面にあることを考慮すると、出入り口に関連する遺構が考えられる。

埋土は茶褐色系のものが大きく二層にわかれ、下層には炭化した大量の建築部材が含まれる。その中には微量の赤変した焼土粒も含まれており、下層埋土は屋根を覆っていた葺き土の可能性が高い。

床面のほぼ全域で、炭化材が検出された。部材の落下状況を以下に列挙すると、1.主柱は南東側に腰折れし、倒壊する。2.それに対応した方向に北側の桁材（第220図―①）と西側の梁材（第220図―②）が倒れる。3.桁材の上に板状の垂木材（第220図―③）がのる。4.茅材は垂木材の下にもぐり込むもの（第220図―④）と上にのるもの（第220図―⑤）が両者存在する。5.垂木材は桁材・梁材と直



第219図　笠見第３遺跡SI120遺構図

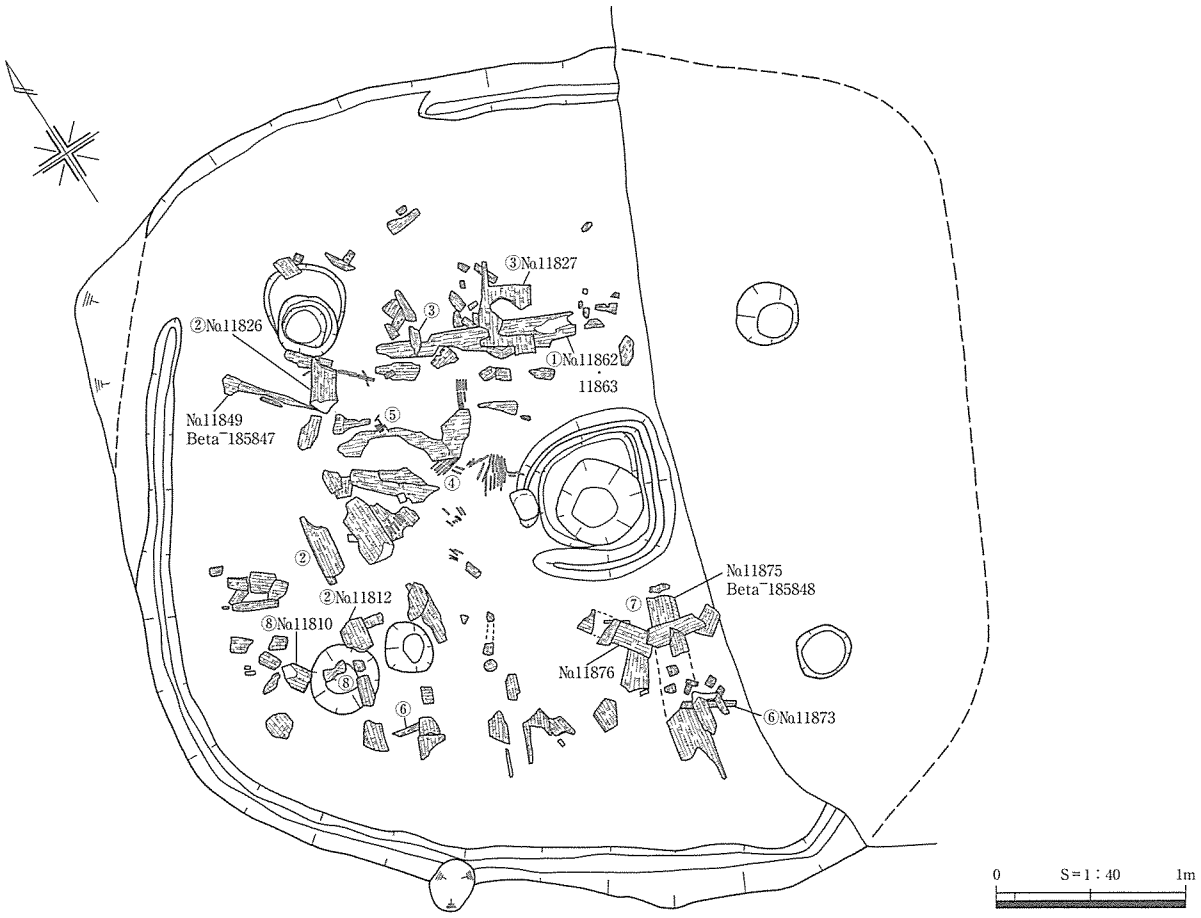
交するように架ける。6.隣りあう垂木どうしを繋ぎとめる木舞と思われるもの（第220図―⑥）が残る。7.P5の南側では垂木材の上部で別の板状の部材を交叉させたような状況（第220図―⑦）が見られる。8.P4の主柱が残る（第220図―⑧）。

表69　笠見第３遺跡SI120ピット規模一覧表

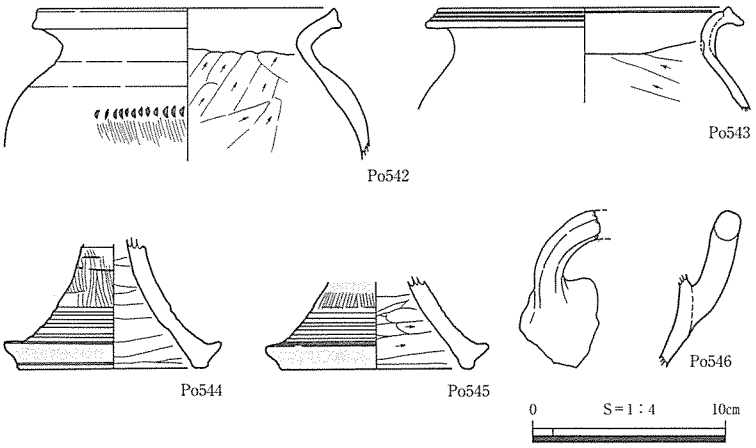
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	32×32－62	主柱穴(柱痕有)	P4	40×34－70	主柱穴(柱痕有)
P2	30×27－44	主柱穴(柱痕有)	P5	60×56－30	中央ピット
P3	52×44－46	主柱穴(柱痕有)	P6	27×26－10	不明

建築部材は落下後の攪乱を受けていなかった。これらの状況から、建物は断続的に崩落し、折り重なるように部材が落下したものと考えられる。土層堆積の細分はできなかったが、大まかには、建物周辺から中央に向って順に堆積していく状況が認められた。先述したように、下層堆積が葺き土を反映しているならば、部材の落下もほぼ対応した順序と想定できるであろう。

部材の種類は、丸太材と板状の割り材がある。前者は主柱・梁・桁などに、後者は垂木・木舞などにそれぞれ使用された。樹種同定の結果から前者はタブノキ、後者はクリであることが判明した。部材によって樹種を選択している可能性が高い。丸太材は中心まで完全に焼けていなかったようで、生木部分が腐食し、中空になっているものが多く見られた。桁材（第220図―①）の直径は19.0cmに復元できる。板状の割り材は、幅20cm前後のものが多いが、幅27cmをこえるもの（第220図―③）もある。厚さはいずれも５cm前後となる。



第220図　笠見第３遺跡SI120炭化材出土状況図



第221図　笠見第３遺跡SI120出土遺物実測図

SI120は火災によって廃絶した建物であるが、部材の遺存状況、床面に被熱面がほとんど無いこと、焼土となった葺き土がわずかしかないことなどからみて、あまり強い火を受けた様子は窺えない。

床面から出土した土器もごくわずかな破片のみであることから、SI120の火災は意図的なもので、最小限の放火によって行われた、建物の廃棄行為であったと思われる。

出土遺物には、埋土中から出土した弥生土器甕Po542・543、高杯Po544・545、把手Po546などがあり、それらを図化した。

出土遺物から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。また、クリ２点をAMSによる、放射性炭素年代測定を行ったところ、暦年代の交点がそれぞれA.D. 40・A.D. 60という結果を得た。土器型式とほぼ見合うものと考えられる。（西川）

SI123（第222・223図、PL. 44・130・174）

調査区南側L14グリッド内にあり、標高73.8～73.4mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。西側をSK58に掘り込まれている。

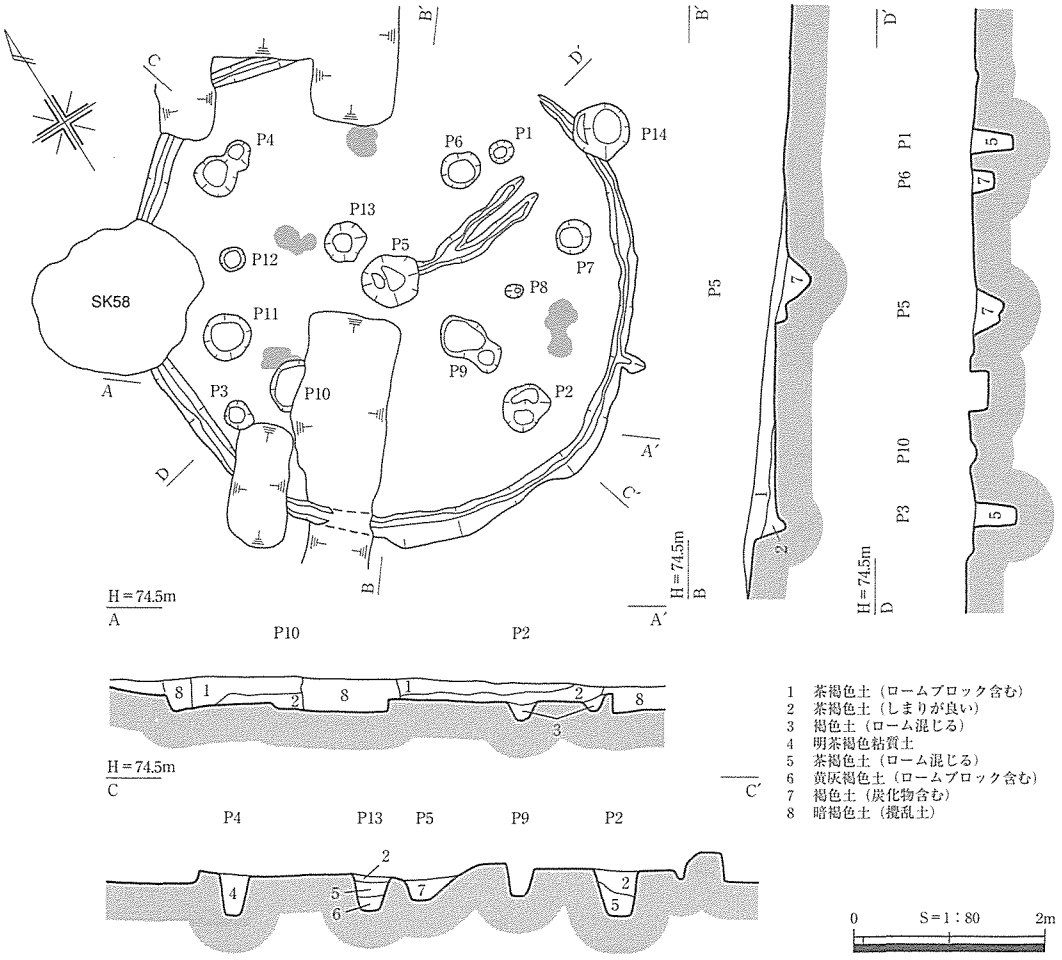
遺存状態は比較的よい。平面はほぼ円形を呈する。規模は直径約5.3mで、床面積は推定19.7㎡を測る。残存壁高は、南側が最も残りがよく28cmを測る。壁溝は一部攪乱によって壊されているが、ほぼ全周めぐると考えられる。幅約12～24cm、深さ８cm前後で、断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.8m、3.0m、2.8m、2.8mである。P5は中央ピットになると考えられる。平面は不整円形で、埋土中に炭化物が認められた。P8、P11は主柱軸間に配され、深さもあることから、建物構造に関わる補助的な材であった可能性がある。また、P10は床面上の焼土面を掘り込んでいることから後世のものであると考えられる。その他のピットに関しての用途は不明である。

床面では、この他に溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は、中央ピットから東側に伸び二股に分かれている。長さは約1.5m、幅約10

表70　笠見第３遺跡SI123ピット一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	25×21－43	主柱穴	P8	21×13－20	
P2	50×40－50	主柱穴	P9	71×32－39	
P3	27×27－41	主柱穴	P10	55×△30－ 7	
P4	30×30－40	主柱穴	P11	52×50－34	
P5	60×55－37	中央ピット	P12	28×26－ 7	
P6	42×36－22		P13	40×40－40	
P7	40×36－41		P14	45×42－21	

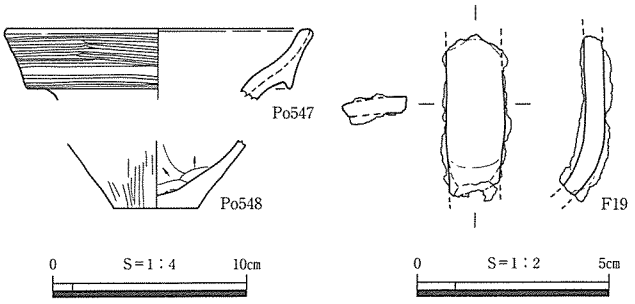


第222図　笠見第３遺跡SI123遺構図

～18cmで、深さは約２～５cmである。用途は不明である。焼土面はP2の北側で１箇所、P13の西側と北東側で２箇所、P10の北側で１箇所認められる。

埋土は２層に分層でき、粘性のある地山土を含むもので、自然堆積によるものと考えられる。

遺物は、埋土中から器台口縁部Po547、底部Po548、鉄製品F19が出土している。



第223図　笠見第３遺跡SI123出土遺物実測図

出土遺物、形態的特徴から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

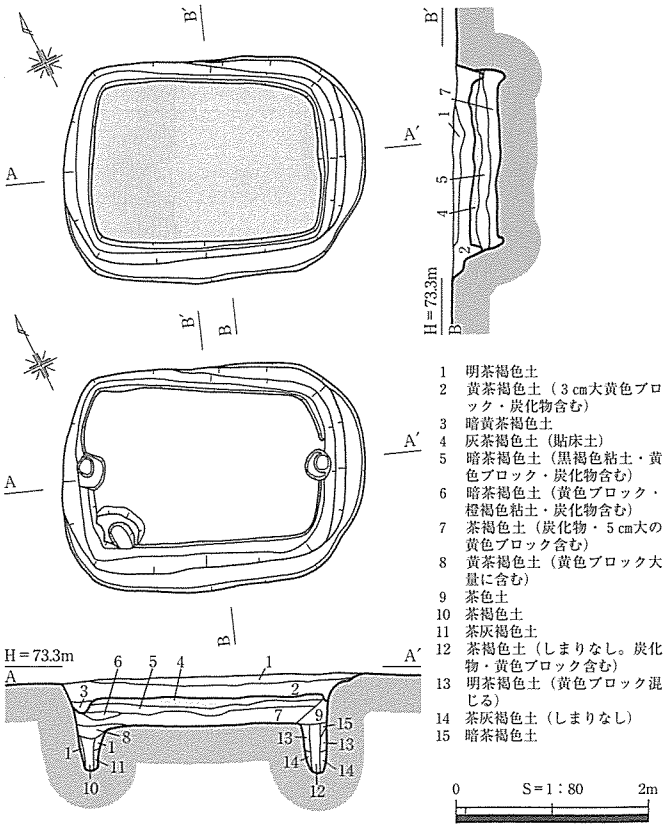
SI125（第224・225図、PL. 44・130）

調査区南側、Ｊ・K19グリッドの標高72.0～72.2mの緩斜面に位置する。SI124の南側に隣接する。

平面長方形の小規模な竪穴建物である。長軸3.0m、短軸2.4m、床面積は3.6㎡を測る。壁高は最高で54cm残存する。ほぼ同じ平面形をなす床面が上下に二面あることを確認した。

下層建物は短辺中央に主柱（P1・P2）を持つ。柱間距離は2.5mで、柱径は10cm前後に復元できる。地山土を床面とし、幅10～15cm、深さ10cm前後の壁溝がめぐる。ただし、壁溝は主柱の両側で途切れる。平面観察の結果、壁溝→主柱穴の順で開削されていることを確認。南西隅には床面を削り出して成形した高まりがわずかに残る。出入り口に関連するものであろうか。

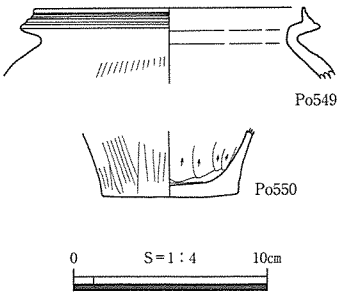
次に上層は、下層の床面から壁高の約半分くらいの高さまで埋め戻して、床面を設ける。床面は地山を含んだ貼床土を付加して整地している。上層に伴う柱穴



第224図　笠見第３遺跡SI125遺構図

表71　笠見第３遺跡SI125ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	32×27－52	主柱穴(柱痕有)
P2	34×30－42	主柱穴(柱痕有)



第225図　笠見第３遺跡SI125出土遺物実測

がなく、幅７～15cm、深さ８～14cmの壁溝がめぐるのみである。建物外周でも柱穴の検出を試みたが、確認できなかった。

出土遺物は、埋土上層から弥生土器甕口縁部Po549が出土している。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられる。通常の住居跡に比べて非常に小さく、構造的にも異なることから、住居以外の性格をもつ建物であると考えられる。（西川）

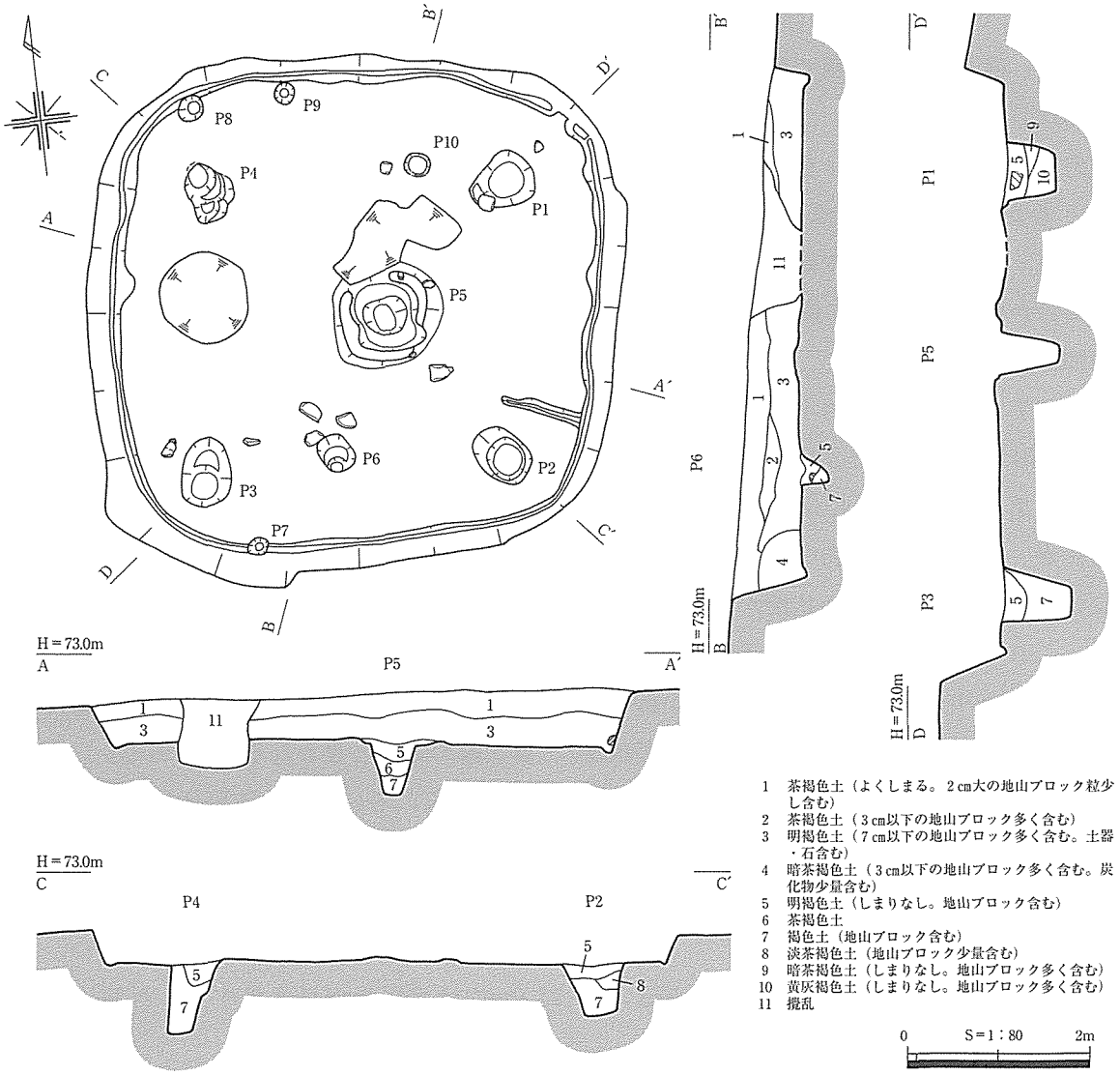
SI129（第226・227図、PL. 45・131・174）

調査区西側I17グリッド内にあり、標高72.8m～72.3mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。北東側にSI134が隣接する。

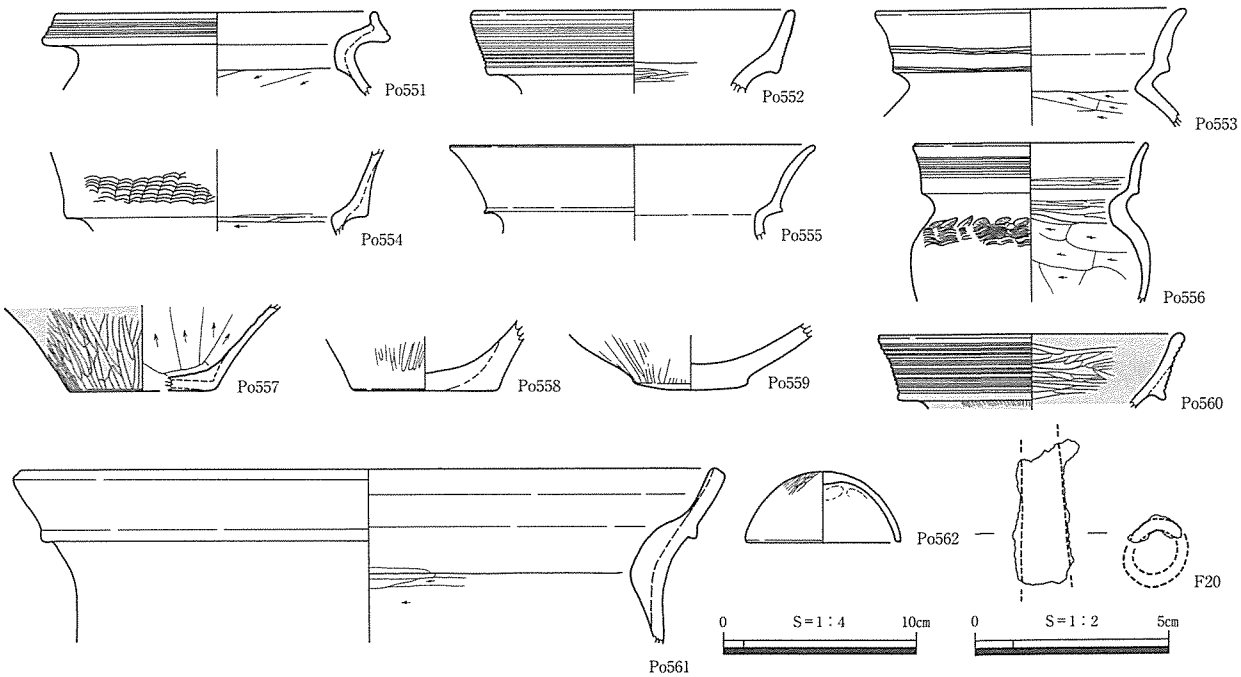
遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈し、一辺5.8m、床面積は

表72　笠見第３遺跡SI129ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	70×57－59	主柱穴	P6	41×35－35	
P2	66×50－59	主柱穴	P7	20×17－13	
P3	74×55－76	主柱穴	P8	28×23－23	
P4	56×37－76	主柱穴	P9	23×21－ 5	
P5	50×42－66	中央ピット	P10	27×23－34	



第226図　笠見第３遺跡SI129遺構図



第227図　笠見第３遺跡SI129出土遺物実測図

23㎡を測る。残存壁高は南側で最大80cmを測る。壁溝は全周めぐる。幅約７～20cm、深さ約８cmである。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、柱間距離はP1-P2から順に3.0m、3.3m、3.4m、3.4mである。P5は中央ピットと考えられ、平面形は不整円形で周囲に土手を持つ。土手は幅約８～17cm、高さ約４cmである。中央ピット内に炭化物や焼土粒などの混入物は認められなかった。P6、P10は主柱軸間に配されていることから、建物構造に関わる補助材であった可能性がある。その他のピットは用途不明である。

その他床面で溝を検出した。床溝は、南西壁溝から１条中央に向かって直線的に伸びている。長さ90cm、幅約７～14cm、深さ約４cmである。

埋土は４層に分層された。粘性のある地山土を多分に含んでおり、自然堆積によるものと考えられる。なお、第１層・第３層には土器片や拳大の礫が混入しており、第３層中の床から数センチ上位では土器片が、床面直上では10～25cm前後の自然石が多数散らばって出土した。石は被熱赤化したものが中には含まれていた。出土状況から建物内で使用された、もしくは意図的に置かれたものとは考えにくく、これらは建物廃絶後の混入物と考えられる。

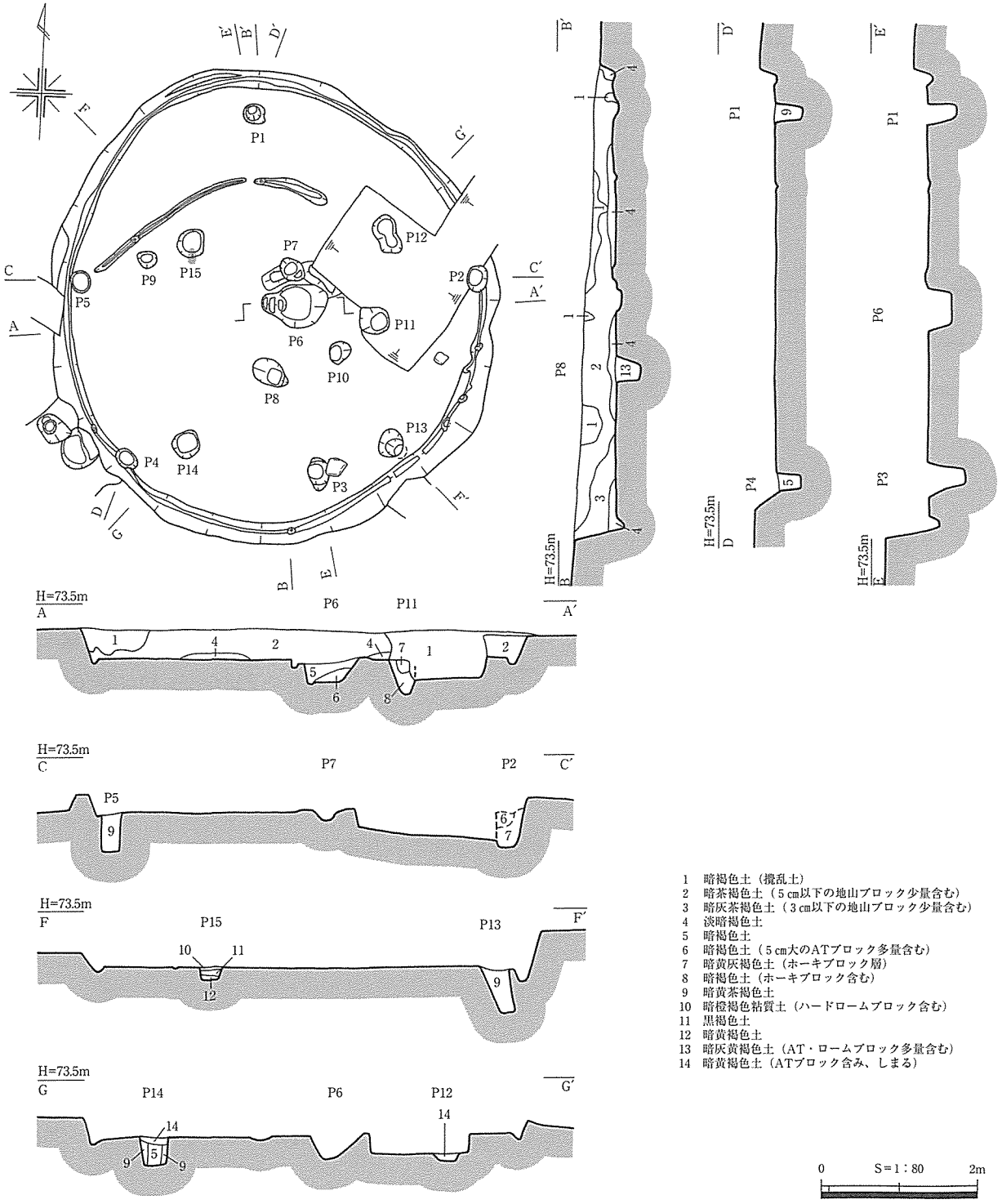
遺物は、埋土中の床面に近い位置で出土した。弥生土器甕Po551～554・556、土師器Po555、壺Po561、底部Po557～559、器台Po560、土師器蓋Po562、袋状鑿の袋部と思われるF20がある。

出土遺物、形態的特徴から、清水Ⅵ-２様式、弥生時代終末ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI130（第228・229図、PL. 46）

調査区南側J16グリッド内にあり、標高73.3m～73.0mのほぼ平坦面に立地する。西側にSI128、南側にSI118が隣接している。

遺存状態は、一部攪乱を受けているが良好である。平面はやや南北に長い楕円形を呈し、長軸6.1



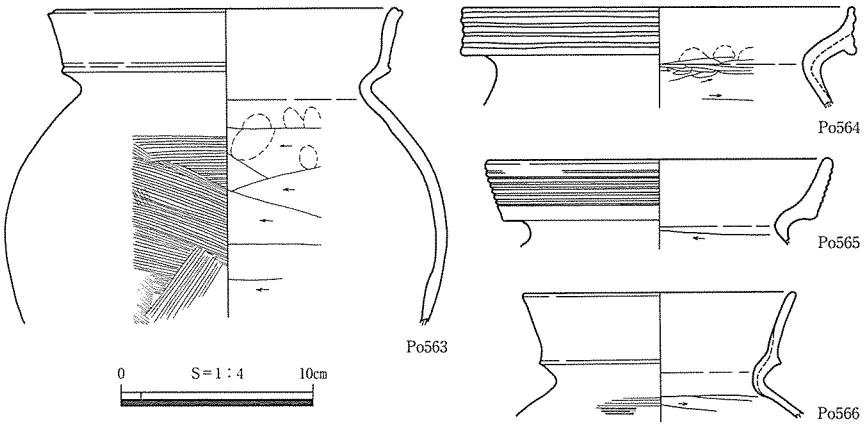
第228図　笠見第３遺跡SI130遺構図

m、短軸5.8m、床面積22.5㎡を測る。残存壁高は最大南側で53cmである。壁溝は全周する。幅約７～20cm、深さ約10cm、断面は逆台形状を呈する。

主柱穴はP1～P5の５基で、主柱間距離はP1-P2から順に3.6m、3.3m、2.5m、2.4m、3.1mである。P6は中央ピットと考えられる。平面形は不整形で北側に地山削り出しの土手を持つ。土手は途中P7に切られているが、幅約11cm、高さは４cmを測る。埋土は地山ブロック粒を含む。P14、P15は、埋土上層で地山ブロックを多量に含む土が堆積しており、部分的な貼床と考えられる。また、P15上には被熱硬化した焼土面がのっている。

表73　笠見第３遺跡SI130ピット一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	30×24－37	主柱穴	P9	25×22－16	建て替え前ピット
P2	35×25－47	主柱穴	P10	26×25－17	
P3	40×25－45	主柱穴	P11	38×32－47	建て替え前ピット
P4	30×20－33	主柱穴	P12	50×33－８△	建て替え前主柱穴
P5	25×25－49	主柱穴	P13	37×35－59	建て替え前主柱穴
P6	90×66－33	中央ピット	P14	38×34－37	建て替え前主柱穴
P7	34×27－17		P15	40×35－14	建て替え前主柱穴
P8	45×33－32	建て替え前ピット			



第229図　笠見第３遺跡SI130出土遺物実測図

その他床面で、床溝を検出した。これは、床面西側から中央にかけて横断するように伸びている。幅約５～17cm、深さ約６cmを測る。形状及び前述した貼床を持ったピットの存在から、一度建て替えが行われていると考えられ、建て替え前の壁溝と考えられる。

建て替えの平面形は不明であるが、床面積拡大を目的としたものと考えられる。P8～P15は埋土と深さの関係から、建て替え前のピットであり、P12～P15は主柱穴に相当すると考えられる。主柱間距離はP12-P13から順に3.0m、2.7m、2.7m、2.5mである。その他のピットは用途不明である。

埋土は、地山ブロック粒を含んだ土による自然堆積と考えられる。

遺物は埋土中からの出土である。すべて甕であり、土師器Po563と弥生土器Po564～566である。出土遺物と形態的特徴から、清水Ⅵ－２様式、弥生時代終末ごろに相当する竪穴住居跡であると考えられる。（岩井）

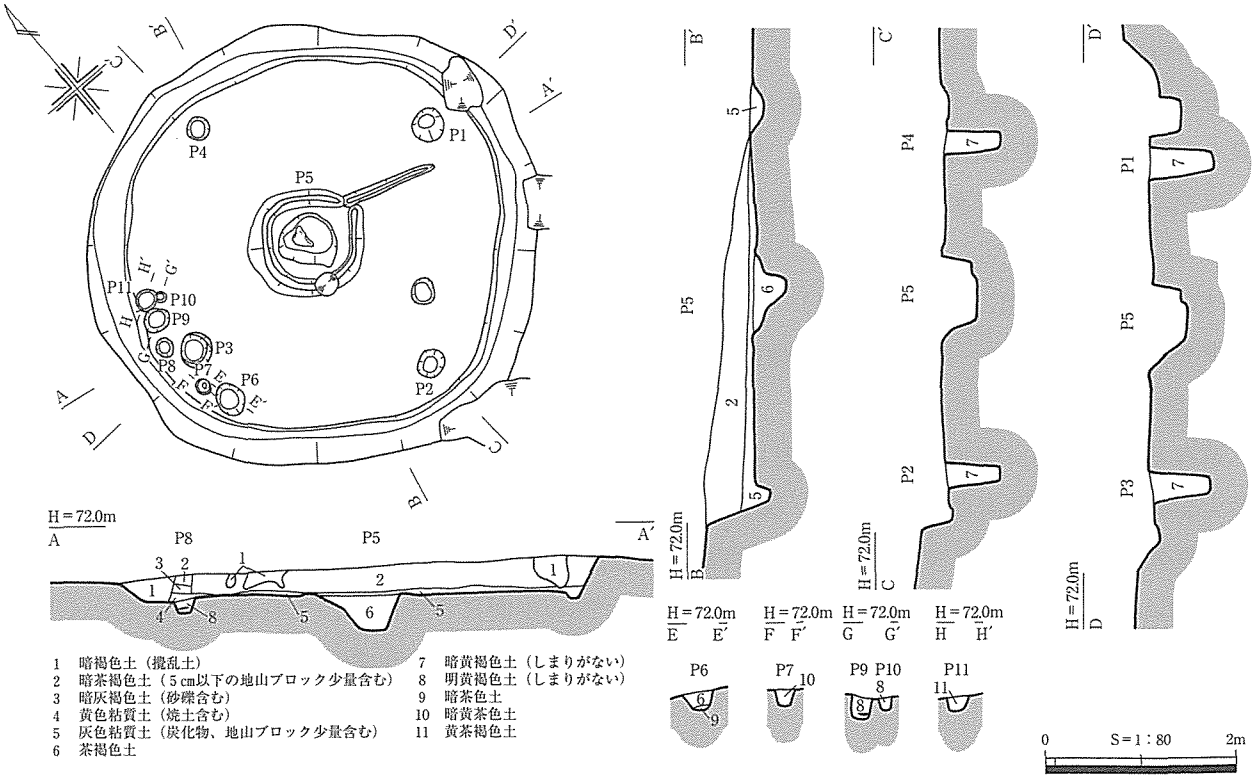
SI132（第230・231図、PL. 46・105・131）

調査区中央西側のH17・18グリッド、標高71.2～71.8mの緩斜面に位置する。平面円形の竪穴建物である。直径4.7m前後で、床面積は12.5㎡である。壁高は最高で50cm残存する。壁溝は幅15～20cm、深さ８～15cmで断面Ｕ字状で、底面に平坦面をもつ。

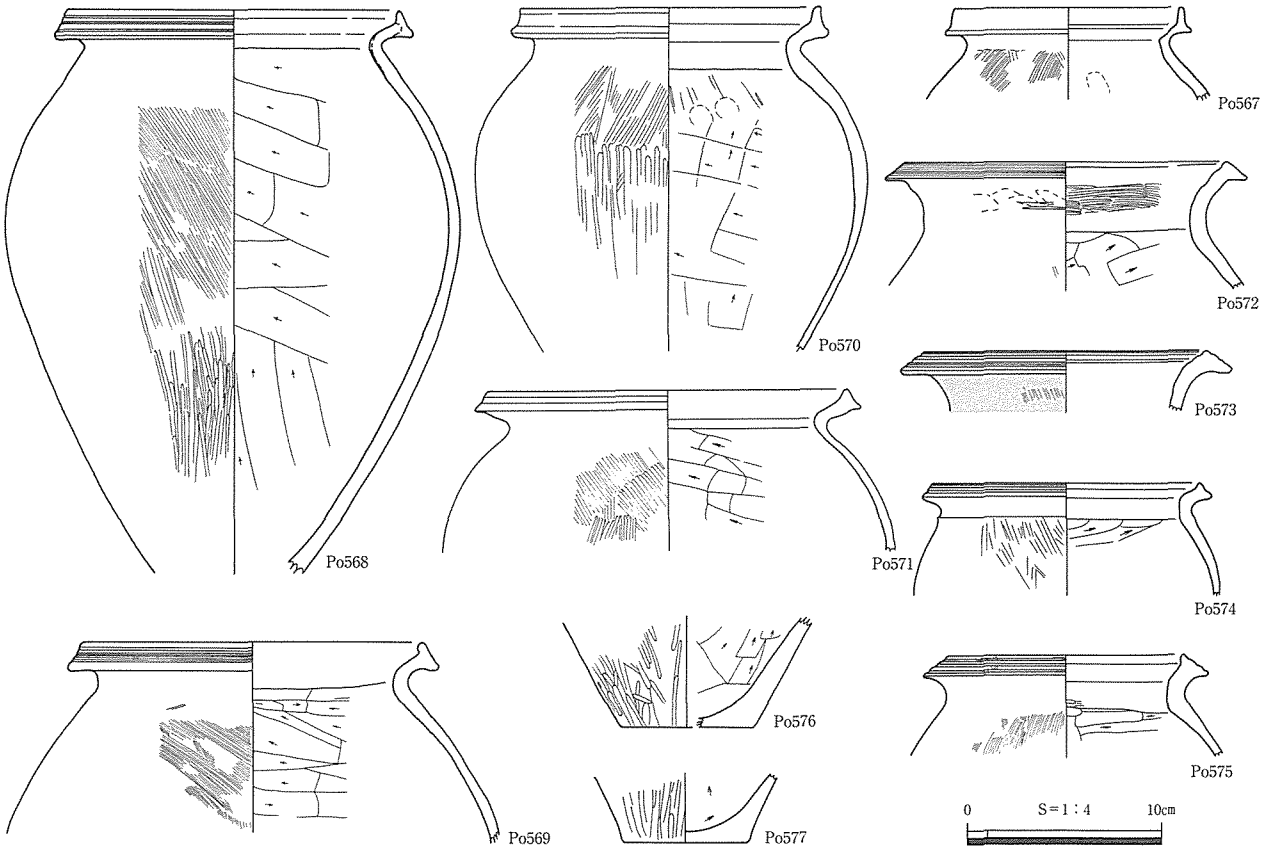
主柱はP1～P4で、柱間距離はP1-P2から時計回りに2.5m、2.5m、2.3m、2.4mである。P5は中央ピットで、底面に平石が残っていた。P5の周囲にはＣ字形の土手をめぐらせる。また、土手の開口部から周壁溝に向って浅い溝を開削する。ただし、壁溝までは到達しない。この他には、周囲が熱を受け、赤紫色に硬化した小ピット（P6～10）を確認した。これらはP4をはさんだ両側のほぼ対称位置にある。P6、８、９底面寄りの埋土中には炭化物が含まれていたが、何らかの素材を加工したような痕跡は

表74　笠見第３遺跡SI132ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	36×34－68	主柱穴	P6	35×28－20	被熱面有
P2	29×28－54	主柱穴	P7	17×14－18	被熱面有
P3	24×24－58	主柱穴	P8	21×18－17	被熱面有
P4	36×32－64	主柱穴	P9	28×25－24	被熱面有
P5	80×76－40	中央ピット	P10	10×10－16	被熱面有



第230図　笠見第３遺跡SI132遺構図



第231図　笠見第３遺跡SI132出土遺物実測図

認められなかった。

埋土は暗褐色系のものが主体をなす。

出土遺物にはPo567～577などの弥生時代後期中葉（Ｖ－１）を示す土器がある。Po569・570は床面直上、Po577はP6埋土上層から出土している。

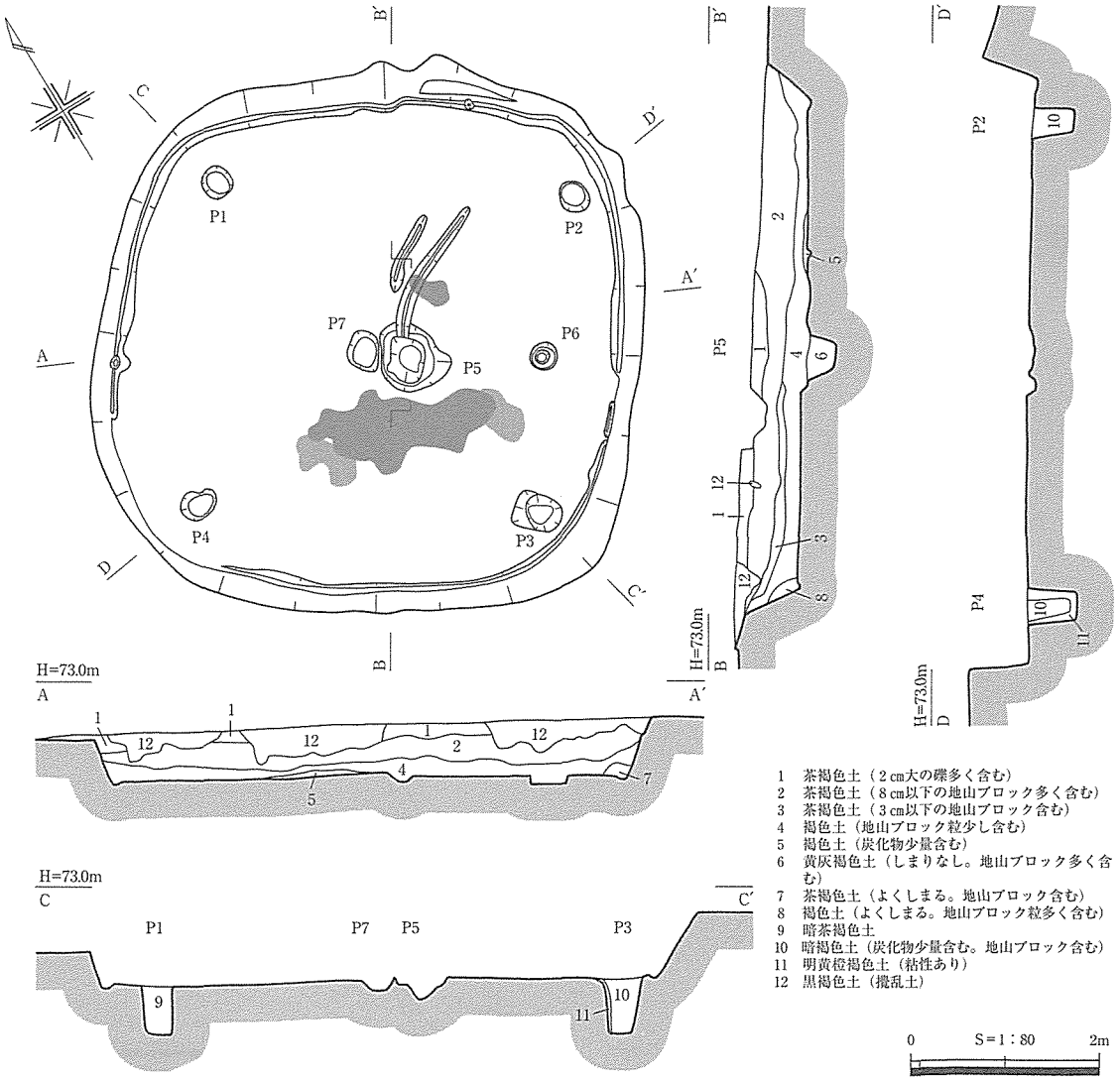
出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と思われる。（西川）

SI133（第232・233図、PL. 46・131）

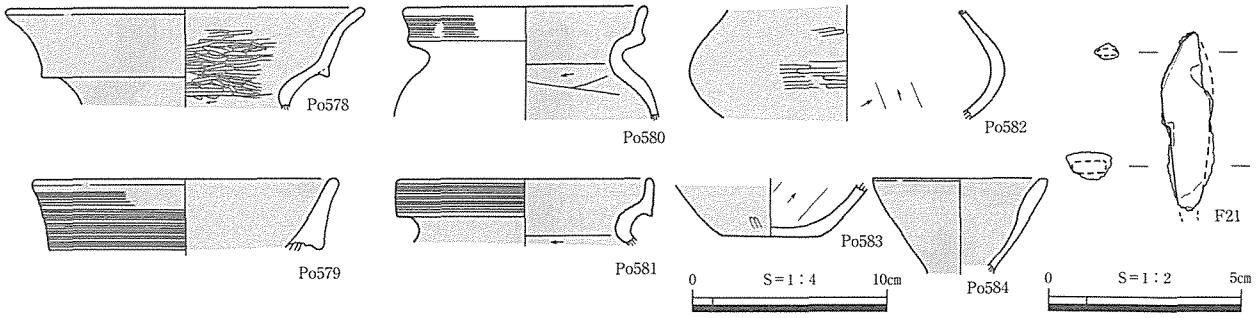
調査区中央I15グリッド内にあり、標高72.7mのほぼ平坦面に立地する。北東側でSI135、西側でSI143を切り、SD5に切られている。

遺存状態はよい。平面は隅丸正方形を呈し、一辺5.7m、床面積23.0㎡を測る。残存壁高は南側で最大69㎝を測る。壁溝は全周めぐり、幅約10～20㎝、深さ約５㎝である。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基である。主柱間距離はP1-P2から順に、3.8m、3.4m、3.6m、3.5mで、平均値が3.6mと比較的長い柱間を持つ。このため、P2とP3の中間にあるP6は、主柱軸線上からやや外れているが、長い柱間を克服するための補助的な柱と考えられる。そうするとP2-P6間、P6-P3間の柱



第232図　笠見第３遺跡SI133遺構図



第233図　笠見第３遺跡SI133出土遺物実測図

間距離は平均1.7mとなる。P2～４は埋土中に炭化物が少量認められたが、柱痕跡は確認できなかった。P5は中央ピットと考えられる。平面形は不整形で二段掘りされている。埋土中に炭化物等の混入は認められなかった。

表75　笠見第３遺跡SI133ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	35×35－49	主柱穴	P5	82×66－37	中央ピット
P2	33×32－45	主柱穴	P6	25×22－52	
P3	51×38－58	主柱穴	P7	40×32－11	
P4	36×31－53	主柱穴			

その他床面では、溝と被熱硬化した焼土面、および厚さ１cmほどの薄い炭層の広がりを検出した。床溝は、中央ピットから東側に向かって伸びている。１条で、長さ1.5m、幅約８～15cm、深さ約４cmと、その北側の１条で、長さ85cm、幅約10～15cm、深さ約５cmの２条を検出した。焼土面は中央ピットの南側と西側で２箇所検出した。炭層は、焼土面および床溝を覆うような状態で検出された。

埋土は、地山ブロックを多く含んだ土による自然堆積と考えられる。

遺物は、床面上から壺Po582、埋土中から壺Po578、甕Po579～581、底部Po583、鉢Po584、不明鉄製品F21がある。出土した遺物には、赤色塗彩されたものが比較的多く特徴的である。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

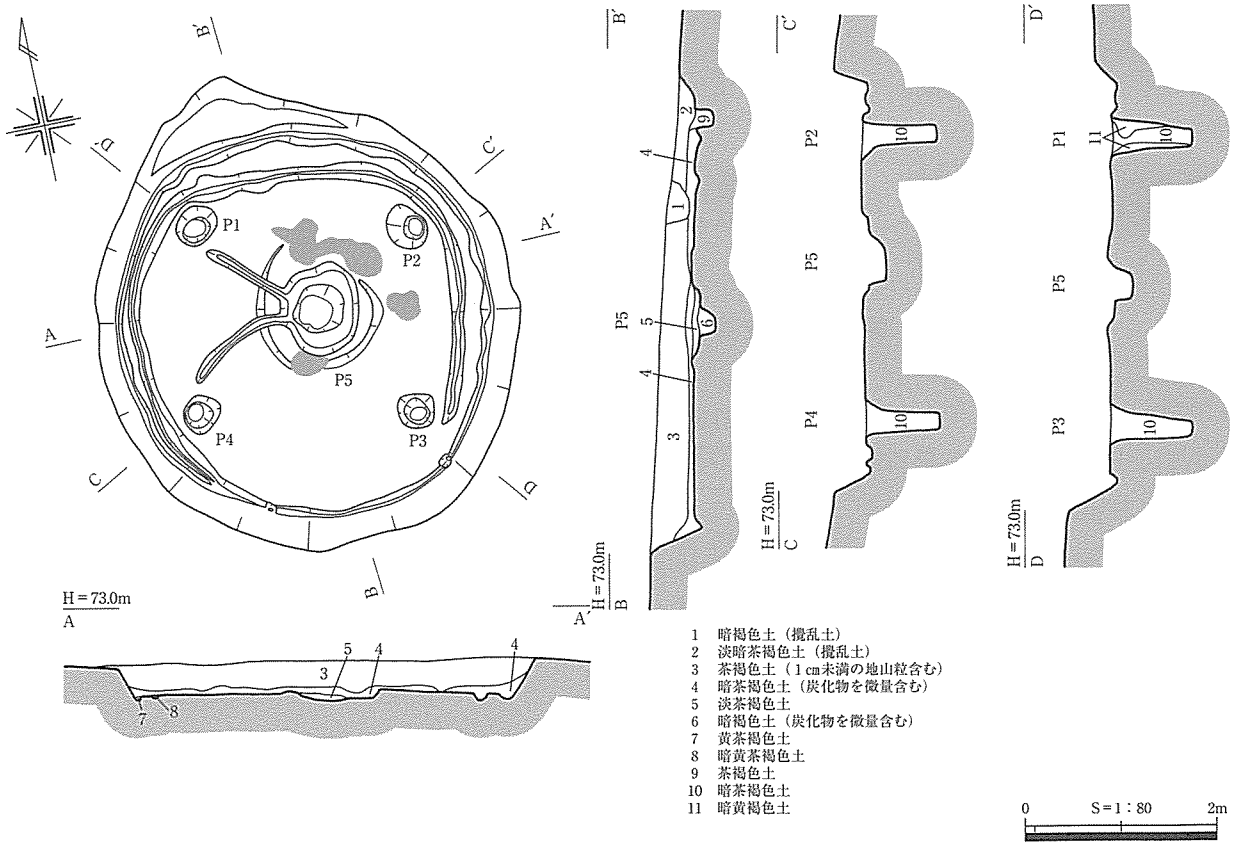
SI134（第234・235図、PL. 47・106・132）

調査区中央西側Ｉ～J17グリッド内にあり、標高72.6m～72.2mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。

遺存状態はよい。平面はほぼ円形を呈する。直径4.5m、床面積11.5m²を測る。残存壁高は、南側で最大49cmを測る。壁溝は全周する。幅約５～22cm、深さ約６cmである。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.3m、2.0m、2.3m、1.9mである。P5は中央ピットである。平面形はほぼ円形で二段掘りされており、周囲に地山削り出しの土手を持つ。土手は幅約５～22cm、高さ約６～８cmである。中央ピット埋土内には、微量の炭化物を含む。建物下層埋土とは異なることから、廃絶時には埋まっていた可能性がある。

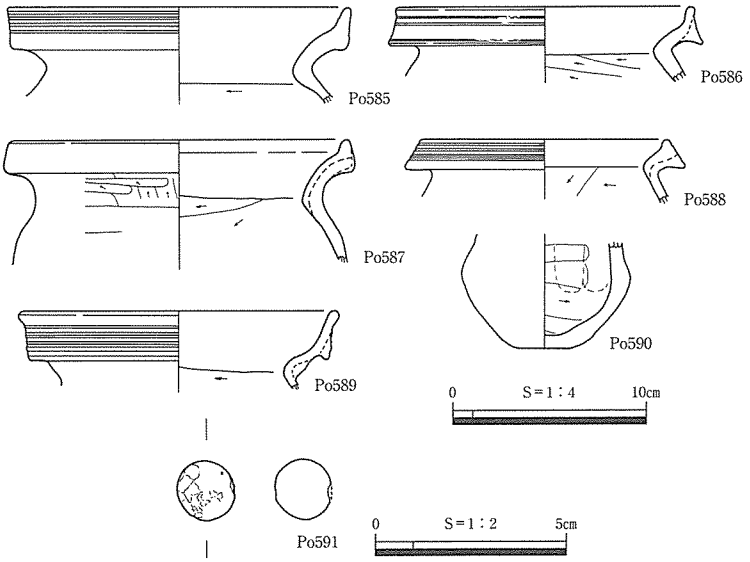
その他床面では溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は中央ピットから２条東側に向かって伸びている。幅約７～15cm、深さ約２～３cmである。また、壁溝内側をめぐる溝も検出した。南側では途切れている。幅約７～25cm、深さ約６cmで壁溝と同じ様相を呈している。貼床などは検出できなかったが、この溝は建て替え前の壁溝と考えられる。建て替えは同主柱を利用していると考えられ



第234図　笠見第３遺跡SI134遺構図

表76　笠見第３遺跡SI134ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	43×35－82	主柱穴
P2	42×40－77	主柱穴
P3	38×36－88	主柱穴
P4	40×35－80	主柱穴
P5	73×70－17	中央ピット



第235図　笠見第３遺跡SI134出土遺物実測図

る。焼土面は中央ピット周囲と土手上で認められた。

埋土は地山ブロックを含む土による自然堆積であると考えられる。

遺物は埋土中からの出土である。弥生土器甕Po585～589、土師器小型丸底壺Po590、土玉Po591などがある。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI135（第236・237図、PL. 47・134）

調査区中央I15グリッド内にあり、標高72.6～72.3mの南から北に緩やかに傾斜する斜面に立地す

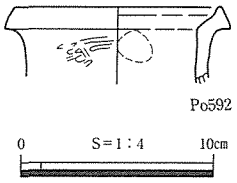
る。南西側はSI133に切られている。北側にはSI64が隣接している。

遺存状態はよい。平面は円形を呈し、直径4.8m、床面積は推定13.1㎡を測る。残存壁高は南側で最大49cmを測る。壁溝は南西側をSI133に壊されているが、全周すると考えられる。幅約10～20cmで、深さ約10cmである。断面は逆台形からＵ字状を呈する。

主柱はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.1m、2.3m、2.1m、2.2mである。P5は中央ピットと考えられ、平面形は不整形で南東側は部分的に二段掘りになっている。ピットの埋土は、下層に炭片が微量に認められた。建物下層埋土とは異なることから、廃絶時には埋まっていた可能性がある。また、ピット周囲東側から南側にかけてと北西側に、地山削り出しの土手がめぐる。幅約７～23cm、高さ約４cmである。土手の内側に被熱痕跡は認められなかった。P6は埋土が黒褐色土で、他のピットと様相を異にしていることから、当遺構に属するピットではないと考えられる。

その他、床面で溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は床面北東側で検出した。形態は蛇行している。長さ2.4m、幅約６～15cm、深さ約２～８cmである。用途は不明である。焼土面は中央ピットの東側に１箇所認められる。

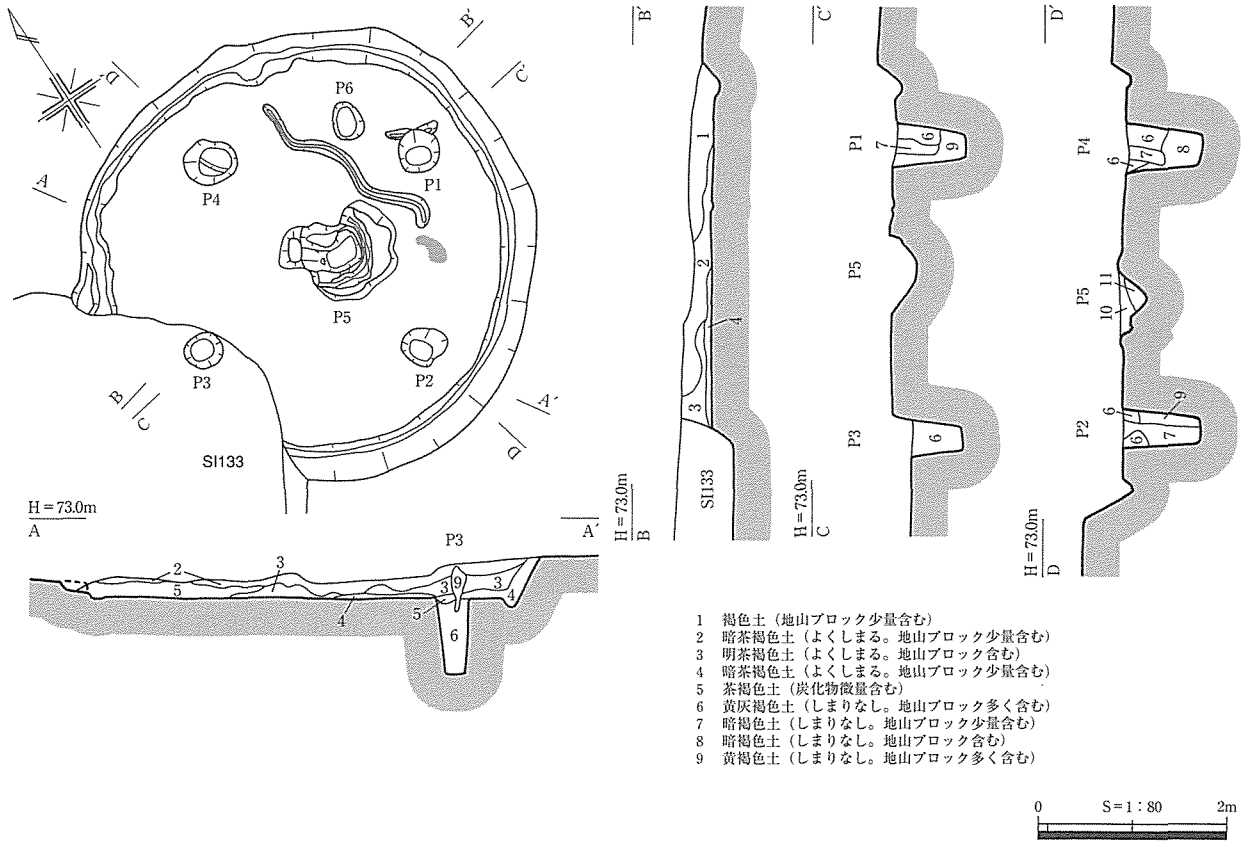
埋土は、地山ブロックを含んだ土による自然堆積と考えられる。



第236図　笠見第３遺跡SI135出土遺物実測図

表77　笠見第３遺跡SI135ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	46×43－78	主柱穴	P4	55×50－83	主柱穴
P2	51×38－83	主柱穴	P5	70×60－36	中央ピット
P3	38×38－76	主柱穴	P6	40×34－32	



第237図　笠見第３遺跡SI135遺構図

出土遺物のうち、図化できたものは、弥生土器壺Po592である。

SI133に切られていることと、出土遺物および形態的特徴から、当遺構は、清水Ⅳ－３～Ⅴ－１様式、弥生時代中期末から後期初頭に相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI138（第238・240図、PL. 48・132）

調査区中央J14グリッド内にあり、標高72.6～72.2mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。西側でSI139に切られている。また当遺構は、１回の建て替えがあると考えられる。

遺存状態はよい。平面形はほぼ円形を呈すると思われる。直径約5.4m、床面積は12.2㎡を測る。残存壁高は、南側で最大68㎝を測る。壁溝は幅約10～20㎝、深さ約10㎝である。断面は逆台形状を呈する。

主柱穴はP16～P19の４基で、主柱間距離はP16-P17から順に、2.4m、2.8m、2.2m、2.8mである。P20は中央ピットと考えられ、平面形は不整形で、埋土に微量の炭化物を含む。P21～P25は、位置と埋土から前述したピットとは異なる様相を見せており、建て替え前のピットであると考えられる。建て替え前の主柱穴は、P21、P24、P25、および再利用したと考えられるP18の４基で、主柱間距離は2.5m、3.2m、2.7m、2.8mである。当初、床面上に壁溝などの痕跡が認められなかったことから、同平面を利用した建て替えと考えていた。しかし、建て替え前の主柱配置が全体的に北東側へ寄ることから、平面形は現存の形態よりもやや狭まると考えられ、建て替えは南西側への床面積拡張を目的としたものであり、壁溝は建て替え時に削平されたと推察される。

床面上では、床溝と被熱硬化した焼土面、および炭層の広がりを検出した。これらは、建て替え後の所作によるものと判断される。床溝は中央ピットの東側に１条と南東側で中央ピットと連結する１条とがある。規模は長さ１m前後で、幅約８～20㎝、深さ約３㎝を測る。焼土面は床面北東側、炭層は南西側で検出した。

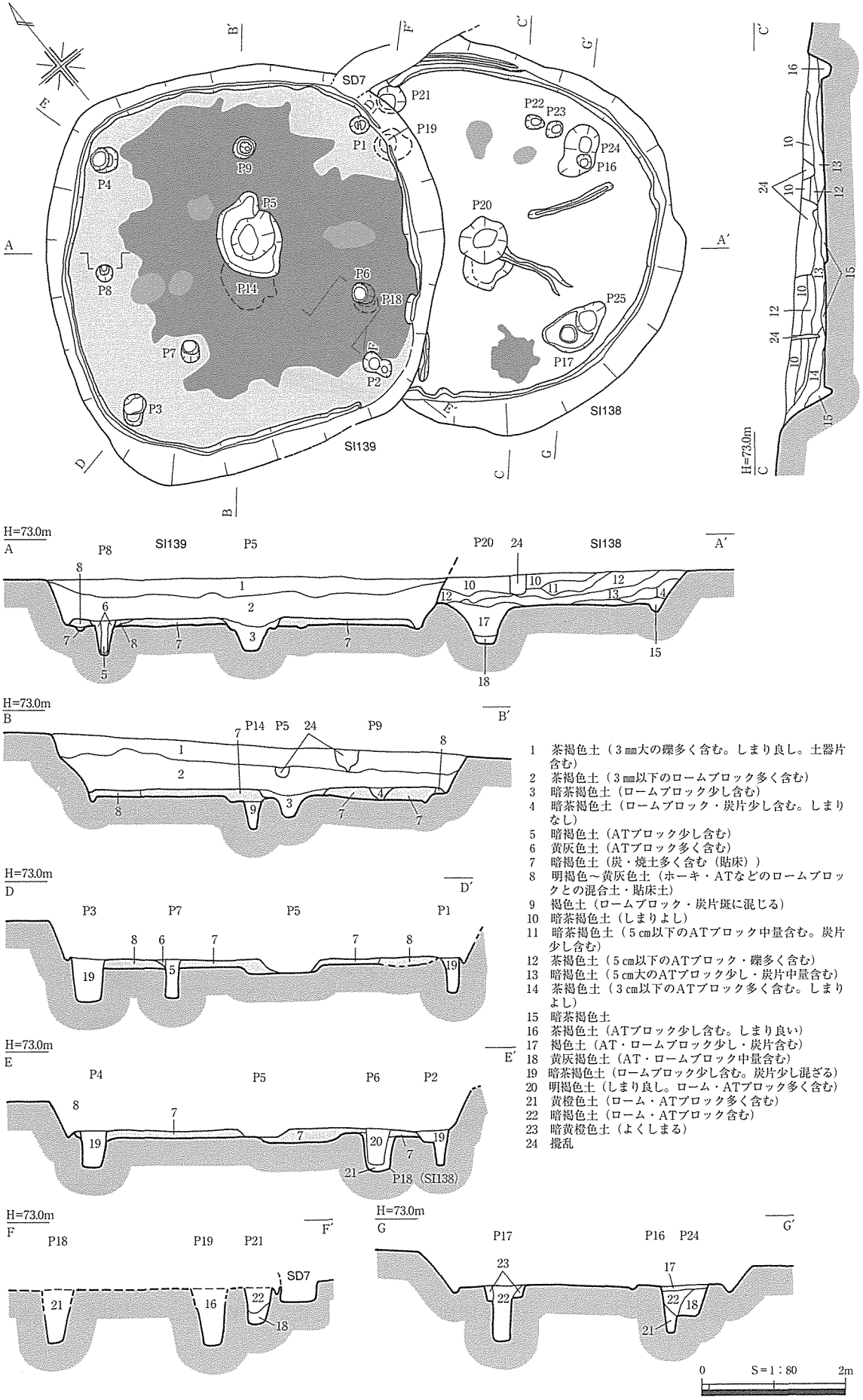
埋土は７層に分層できた。床面直上では炭片を中量含む第13層が認められ、床面上の状況からも当遺構が廃絶後間もなく火災にあったことを示していると考えられる。

遺物は床面および埋土中から出土した。床面からは甕Po593、高杯Po597、埋土中からは甕Po594～596がある。

出土遺物と形態的特徴から、当建物は竪穴住居跡と考えられる。時期は、清水Ⅴ－２様式、弥生時代後期中葉ごろに相当すると考えられる。建て替えは床面積の一部拡張であることから、それほど時間差が認められず、前述した遺物より古い時期を示す遺物の出土がないことから、この時期内での建て替えと考えられる。（岩井）

表78　笠見第３遺跡SI138・139ピット一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P1	30×25－46	SI139主柱穴	P16	70×43－65	SI138主柱穴
P2	40×27－42	SI139主柱穴	P17	100×52－73	SI138主柱穴
P3	36×30－40	SI139主柱穴	P18	35×30－54△	SI138主柱穴
P4	30×23－50	SI139主柱穴	P19	50×42－81	SI138主柱穴
P5	102×83－41	SI139中央ピット	P20	110×72－50	SI138中央ピット
P6	25×22－52		P21	39×38－48	SI138建て替え前主柱穴
P7	26×25－50		P22	27×20－20	
P8	25×25－51		P23	27×22－21	
P9	30×27－16		P24	70×47－44	SI138建て替え前主柱穴
P10	62×44－51	SI139建て替え前主柱穴	P25	50×40－40	SI138建て替え前主柱穴
P11	35×21－47	SI139建て替え前主柱穴			
P12	32×30－52	SI139建て替え前主柱穴			
P13	51×36－52	SI139建て替え前主柱穴			
P14	120×75－46	SI139建て替え前中央ピット			
P15	23×16－27				



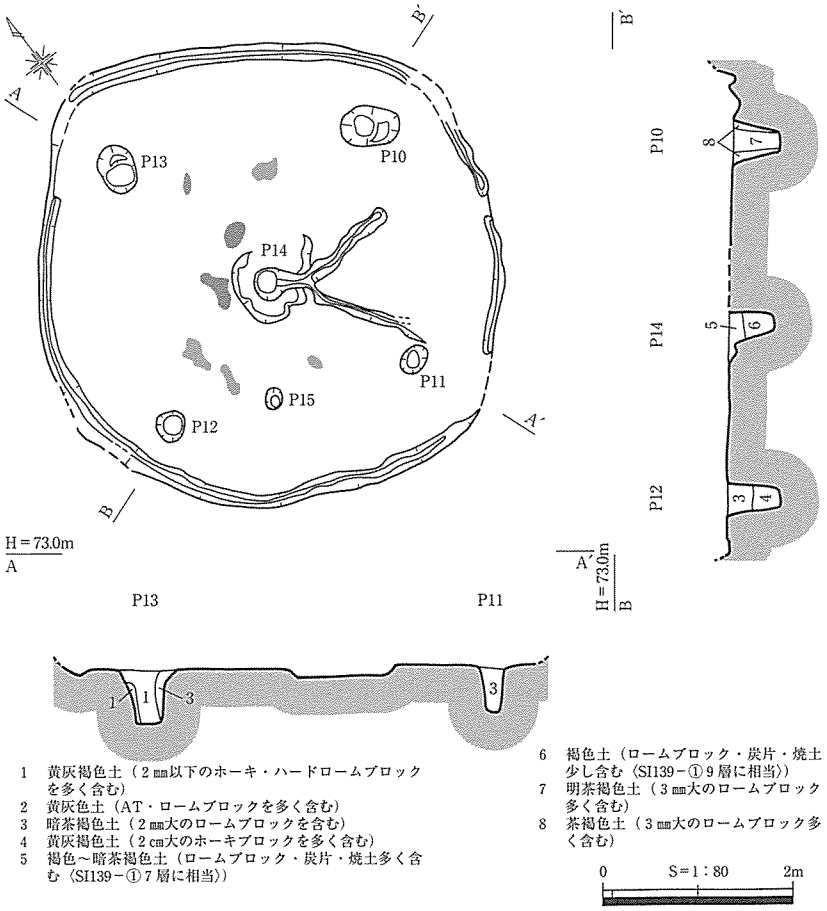
1　茶褐色土（３㎜大の礫多く含む。しまり良し。土器片含む）
2　茶褐色土（３㎜以下のロームブロック多く含む）
3　暗茶褐色土（ロームブロック少し含む）
4　暗茶褐色土（ロームブロック・炭片少し含む。しまりなし）
5　暗褐色土（ATブロック少し含む）
6　黄灰色土（ATブロック多く含む）
7　暗褐色土（炭・焼土多く含む（貼床））
8　明褐色～黄灰色土（ホーキ・ATなどのロームブロックとの混合土・貼床土）
9　褐色土（ロームブロック・炭片斑に混じる）
10　暗茶褐色土（しまりよし）
11　暗茶褐色土（５㎝以下のATブロック中量含む。炭片少し含む）
12　茶褐色土（５㎝以下のATブロック・礫多く含む）
13　暗褐色土（５㎝大のATブロック少し・炭片中量含む）
14　茶褐色土（３㎝以下のATブロック多く含む。しまりよし）
15　暗茶褐色土
16　茶褐色土（ATブロック少し含む。しまり良い）
17　褐色土（AT・ロームブロック少し・炭片含む）
18　黄灰褐色土（AT・ロームブロック中量含む）
19　暗茶褐色土（ロームブロック少し含む。炭片少し混ざる）
20　明褐色土（しまり良し。ローム・ATブロック多く含む）
21　黄橙色土（ローム・ATブロック多く含む）
22　暗褐色土（ローム・ATブロック含む）
23　暗黄橙色土（よくしまる）
24　攪乱

第238図　笠見第３遺跡SI138・139遺構図

SI139（第238・239・241図、PL. 48・132・175・176）

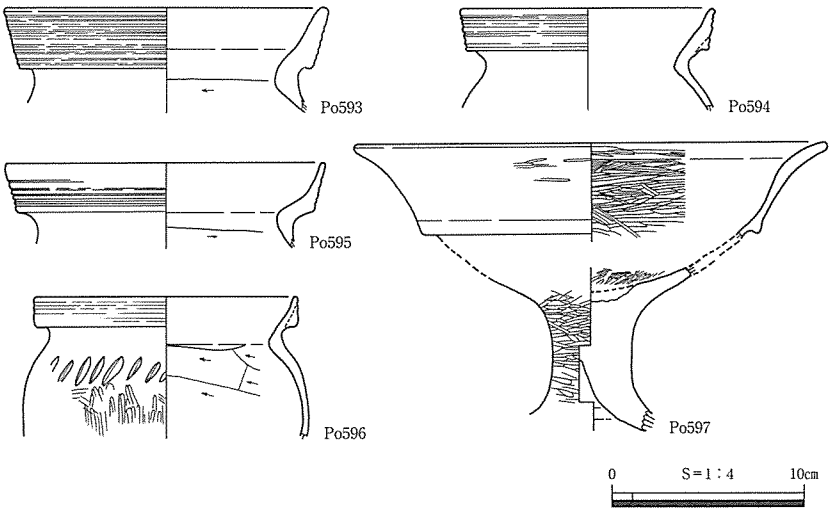
調査区中央I14～J14グリッド内にあり、標高72.5m前後のほぼ平坦面に立地する。東側でSI138を切っている。当遺構では、床面積の拡張を伴う建て替えが、貼床を施すことで行われている。建て替え前をSI139－２、建て替え後をSI139－１と呼称する。

SI139－１は、遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈し、長軸5.9m、短軸5.7m、床面積は20.1㎡を測る。残存壁高は、南側で最大74cmを測る。壁溝は南側で一部途切れている。幅約５～20cm、深さ約５～７cmである。断面は逆台形からＵ字状を呈する。



第239図　笠見第３遺跡SI139遺構図

床面全体に施された貼床は、２種類の土により施されている。ひとつは、焼失したと考えられるSI139－２の炭化物等を多量に含んだ埋土第７層で、SI139－２と重なる範囲に施されている。もう一方は、西側から南西にかけての縁辺部にあたる拡張された範囲を、粘性のある地山土を多く含んだ第８層で充填するように施している。当初この第７層は単なる埋土であると考えていたが、その直上で焼土面およびピットを確認したことから、当層を床面として認識した。貼床の厚さは平均して８cmほどである。



第240図　笠見第３遺跡SI138出土遺物実測図

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に3.4m、3.6m、3.5m、3.7mである。P5は中央ピットと考えられる。平面形は不整形で二段掘りになっている。埋土は単層で、炭化物等は認めら

れなかった。主柱軸線上に配されているP6、P8、P9は、補助柱穴の可能性が考えられる。P7は、断面で柱痕跡が確認でき、直径15～20cm前後の柱状ものが建てられていたと推察されることから、建物構造材ではなく何らかの施設に関わる柱穴であった可能性がある。

その他床面では被熱硬化した焼土面を検出した。中央ピットの周囲に４箇所ほど認められる。

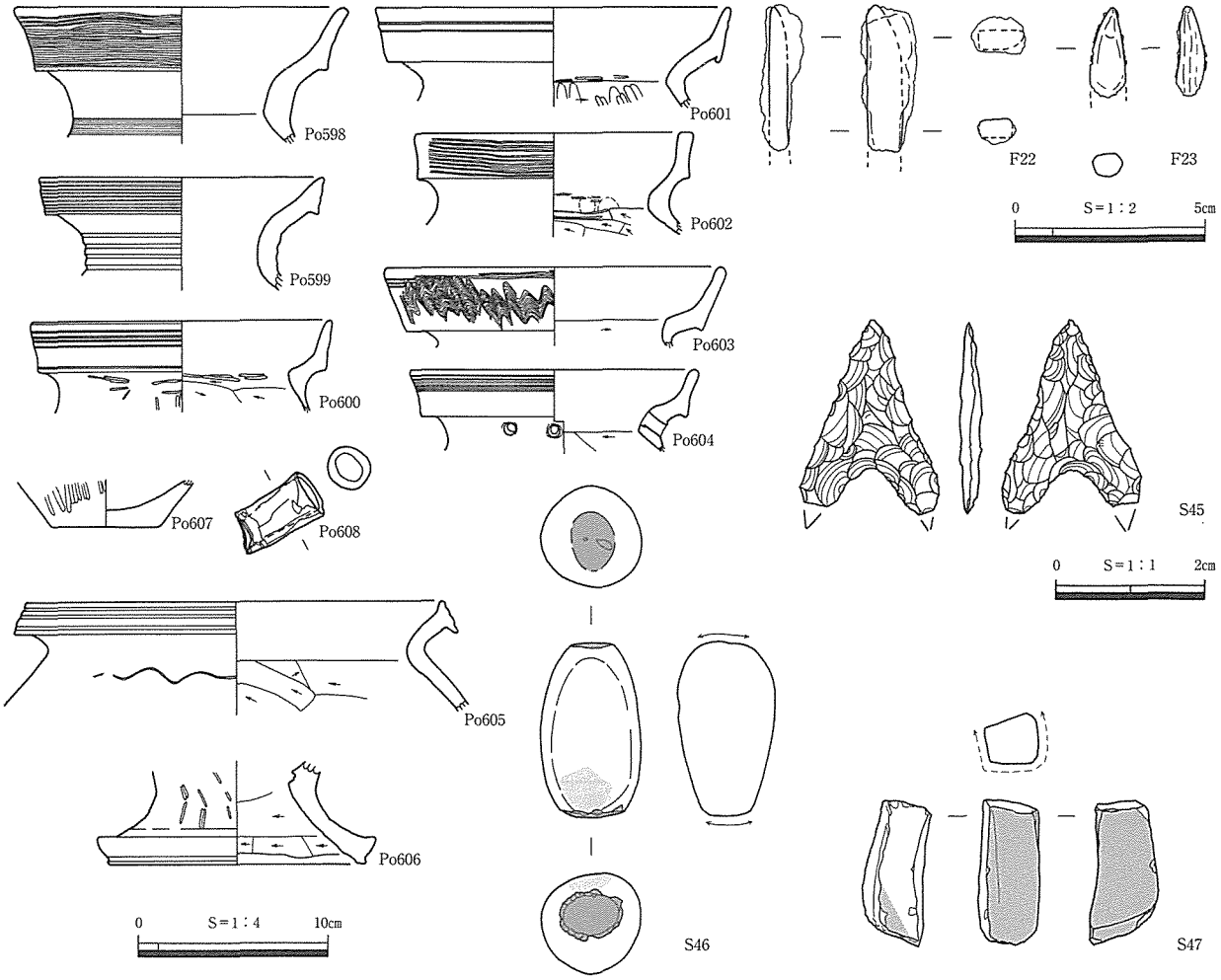
埋土は自然堆積によると考えられる。

SI139－２は、第７・８層の貼床を除去し検出した。遺存状態はよい。平面形は不整五角形を呈する。長軸4.9m、短軸4.4m、床面積17.3㎡である。壁溝は部分的に途切れているが、本来全周していたものと考えられる。幅約10～20cm、深さは5cm前後である。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴と考えられるのはP10～P13の４基で、主柱間距離はP10-P11から順に、2.6m、2.65m、2.65m、2.6mである。P14は中央ピットと考えられ、北側は一部壊されているが、二段掘りを呈する。埋土中には炭片や焼土粒が多く認められた。P15は主柱軸線上に配されており、補助柱穴と考えられる。

床面上では、溝と被熱硬化した焼土面、小規模な厚さ１cmほどの薄い炭層を検出した。床溝は中央ピットから東側へ二股に分かれながら伸びる。規模は、北側が長さ1.1m、幅約10～16cm、深さ約６cm、南側が長さ1.7m、幅約７～15cm、深さ約５cmを測る。焼土面および炭層は中央ピット周囲に３～４箇所ほど認められる。

床面直上のSI139－２の埋土であり、SI139－１の貼床である第７層は、炭化材の出土は認められな



第241図　笠見第３遺跡SI139出土遺物実測図

かったが、炭化物および焼土粒が多分に含まれており、上述した床面上の焼土面や炭層を覆っていた。また、中央ピットでも同様の埋土が堆積していることから、SI139－２は、建物廃絶後間もなく焼失したと考えられる。

遺物は、床面からは刀子F22と不明鉄器F23が出土し、埋土中からは壺Po598～599、甕Po600～605、脚部Po606、底部Po607、注口土器Po608、石鏃S45、敲石S46、砥石S47が出土した。

出土遺物と形態的特徴、および埋土の堆積状況から考えると、SI139の１と２の時間差はさほど認められず、両遺構とも清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI140（第242・243図、PL. 49・132）

調査区中央J13グリッド内にあり、標高72.9m～72.5mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。北側にSI138・140が近接している。

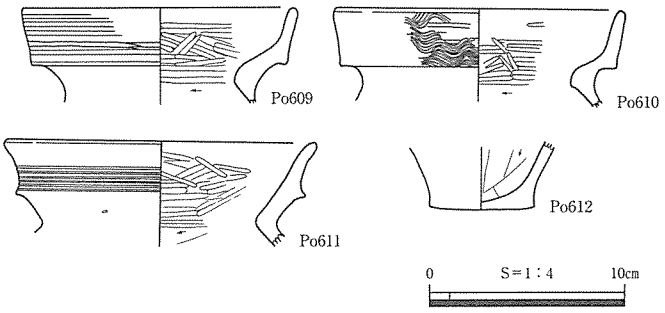
遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈し、長軸5.5m、短軸5.4m、床面積19.8㎡を測る。残存壁高は南側で最大71㎝を測る。壁溝は南西側では検出されなかったが、それ以外は壁下をめぐる。幅約７～20㎝、深さ約６㎝である。断面はＵ字状を呈する。

主柱はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.9m、3.2m、2.8m、3.1mである。P5は中央ピットと考えられ、平面形は不整形で埋土中に炭化物および土器片を含む。P6は、断面観察からP3を掘り込んでおり、後世のものであると考えられ、P7も同様である。P9はP1とP2の中間に配され、主柱間の補助柱穴と考えられる。その他のピットに関しては用途不明である。

埋土は、粘性のある地山ブロックを含んだ土による自然堆積によるものと考えられる。

遺物は、埋土中からの出土で、甕口縁部Po609～Po611、底部Po612がある。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する竪穴住居跡であると考えられる。（岩井）



第242図　笠見第３遺跡SI140出土遺物実測図

表79　笠見第３遺跡SI140ピット規模一覧表

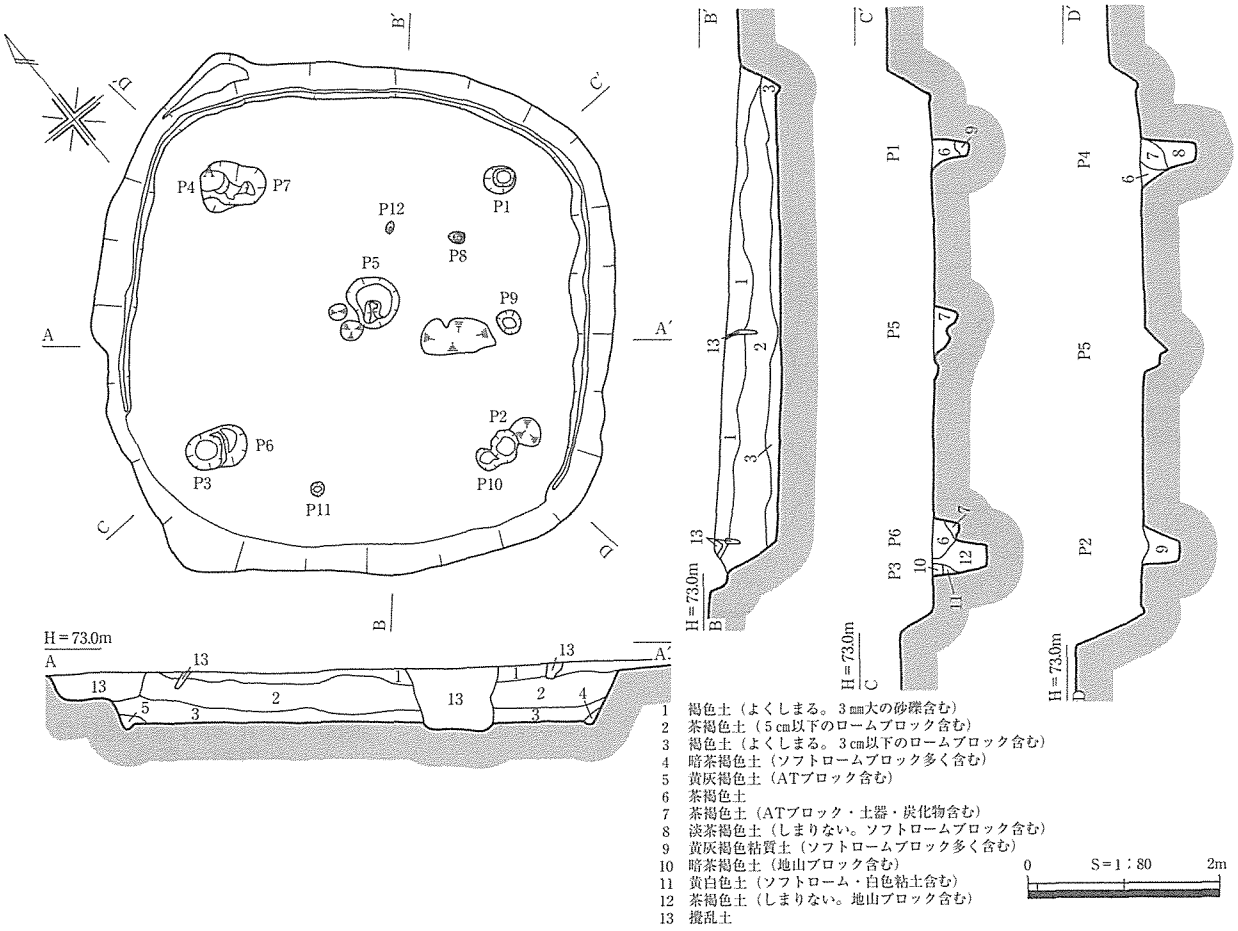
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	35×28－40	主柱穴	P7	43×40－20	
P2	35×30－40	主柱穴	P8	18×13－31	
P3	40×40－52	主柱穴	P9	25×23－31	
P4	55×40－52	主柱穴	P10	20×20－19	
P5	60×55－26	中央ピット	P11	15×14－ 6	
P6	45×45－25		P12	13× 7 － 7	

SI141（第244・245図、PL. 49・133・174・177）

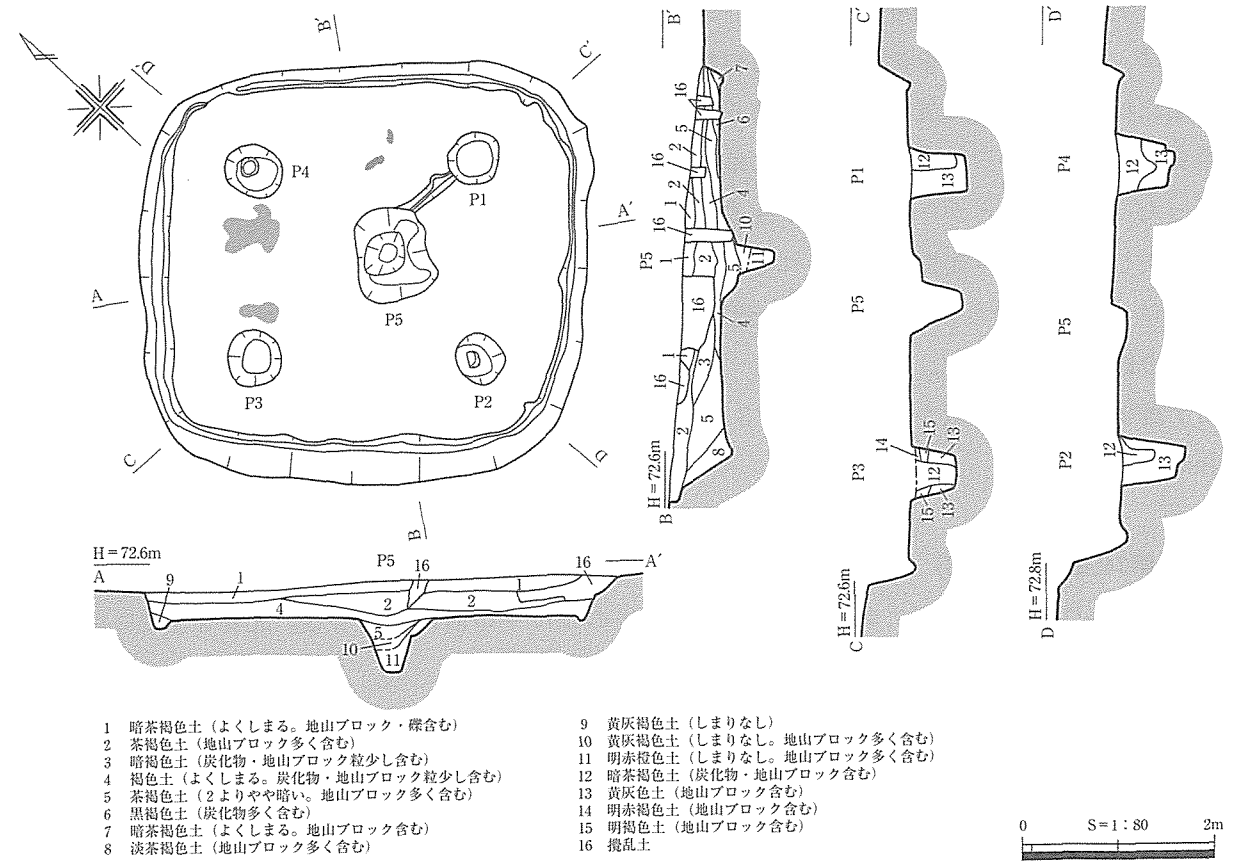
調査区中央J13グリッド内にあり、標高72.6m～72.1mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。西側にSI138、南西側にSI140が隣接する。

遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈し、長軸4.75m、短軸4.4m、床面積14.4㎡を測る。残存壁高は南側で最大57㎝である。壁溝は全周めぐる。幅約５～20㎝、深さ約10㎝で、断面はＵ字状を呈す。

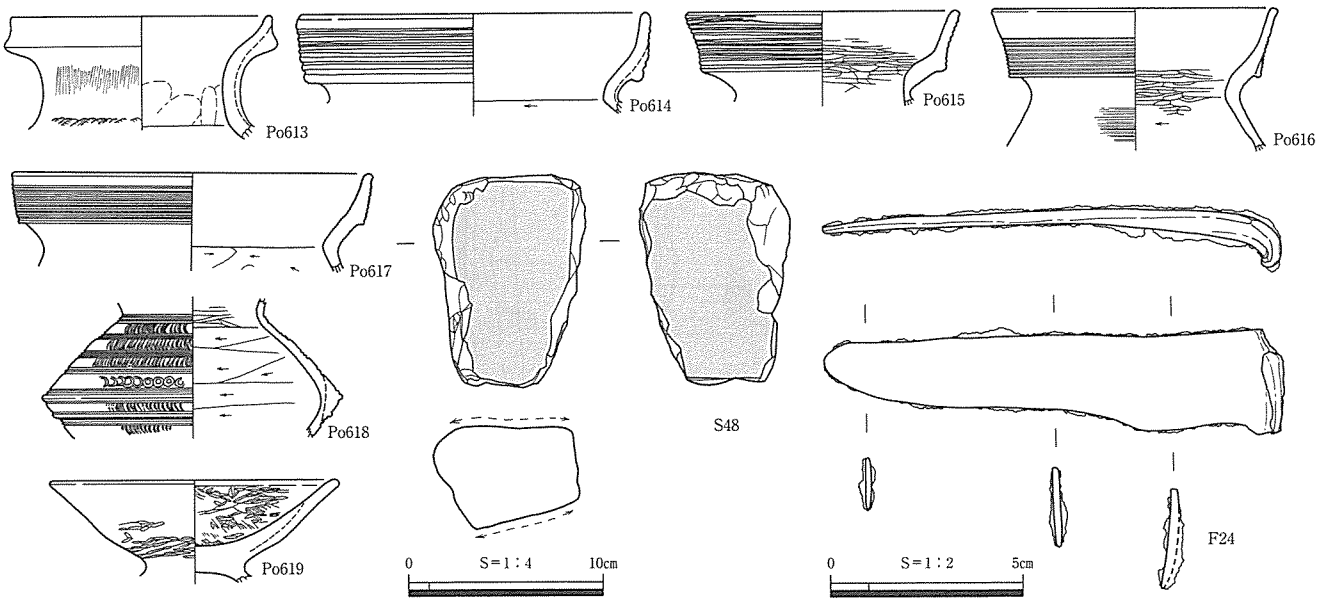
主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.1m、2.2m、2.0m、1.9mである。P3は



第243図　笠見第３遺跡SI140遺構図



第244図　笠見第３遺跡SI141遺構図



第245図　笠見第３遺跡SI141出土遺物実測図

柱痕跡が認められ、推定される柱直径は約20cmとなる。P5は中央ピットと考えられ、平面形は不整形で南東片側が二段掘りされている。埋土内に炭化物等は認められなかった。

その他床面では溝と被熱硬化した焼土面、薄い炭層を検出した。 床溝は中央ピットとP1を連結するような状態で検出された。幅約10～15cm、深さ約５cmである。焼土面はP3とP4の間、炭層は中央ピットの北東側で認められた。

表80　笠見第３遺跡SI141ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	58×53－62	主柱穴
P2	54×52－71	主柱穴
P3	58×58－46	主柱穴
P4	63×53－62	主柱穴
P5	98×72－57	中央ピット

埋土は、地山ブロックを含む土による自然堆積であると考えられる。一部床面の炭層直上では、少量の炭化材および多量の炭化物を含む第６層黒褐色土が堆積していた。この層は、北東壁上端付近から中央ピットに向かって流れ込むように堆積している。ただし、炭化材を多量に含む層は他で見られなかった。以上のことからこの炭層が生成された要因として、全体的な焼失は考え難いが、上屋材が一部焼失し堆積した可能性が考えられる。

遺物は、埋土中からの出土である。壺Po613、甕Po614～617、装飾壺Po618、低脚杯Po619、砥石S48、直刃鎌F24を図化した。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

Si43（第246図、PL. 50）

調査区中央I16グリッド内にあり、標高72.5m前後のほぼ平坦面に立地する。北側をSI63に切られ、南東側をSI133に掘り込まれ、遺構の大半が壊されている。

現存する遺存状態は比較的よい。平面はほぼ円形を呈していたと考えられる。規模は長軸4.1m、床面積4.6m²以上を測る。残存壁高は南側で最大29cmを測る。壁溝は、検出状況から壊されている部分もめぐっていたと考えられ、全周すると考えられる。幅約10～20cm、深さ約６cmである。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1、P2の２基のみの検出で、主柱間距離は2.8mである。P3は大半をSI133によって壊されているが、中央ピットと考えられる。埋土に炭化物がわずかに認められる。また、北側に地山削り出しの土手を持つ。土手は、幅約４～９cm、高さ約４cmである。土手の内側に被熱痕跡は見られなかった。壁溝内で検出されたP6～P10は長径約10cm、深さが約４～11cmでほぼ同じ形状を呈している。おそらくこれらのピットは、周壁の堰板などを留める杭痕跡であった可能性が考えられる。

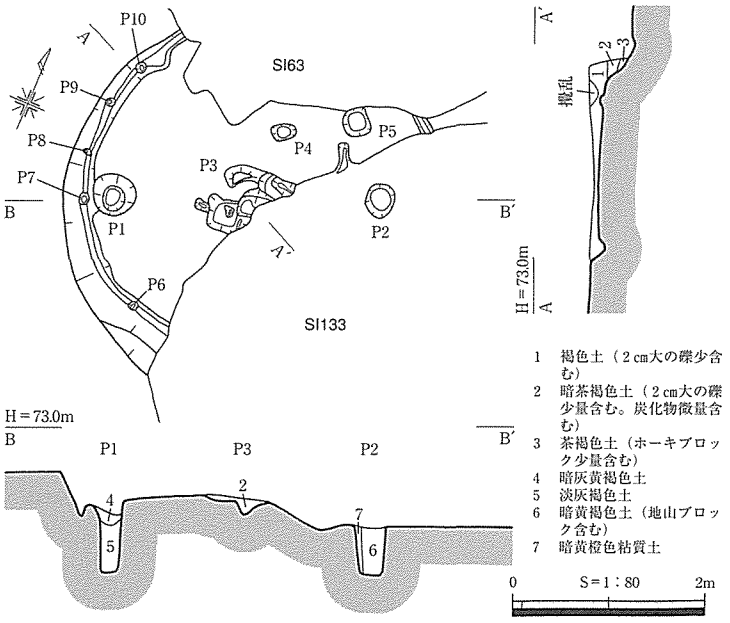
埋土は自然堆積であると考えられる。遺物は細片のみで図化に耐えうるものはなかった。

形態的特徴から弥生時代に属するものであり、また、SI63・SI133に切られていることから、弥生時代中期後葉以前の竪穴住居跡と考えられる。

（岩井）

表81　笠見第３遺跡SI143ピット規模一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	50×42－78	主柱穴	P6	9×7－11	
P2	35×32－50△	主柱穴	P7	10×10－11	
P3	70×16△－18△	中央ピット	P8	10×6－4	
P4	25×17－20		P9	10×7－9	
P5	30×25－25		P10	10×10－6	



第246図　笠見第３遺跡SI143遺構図

SI144（第247・248図、PL. 50・106・133・134・174・177・178）

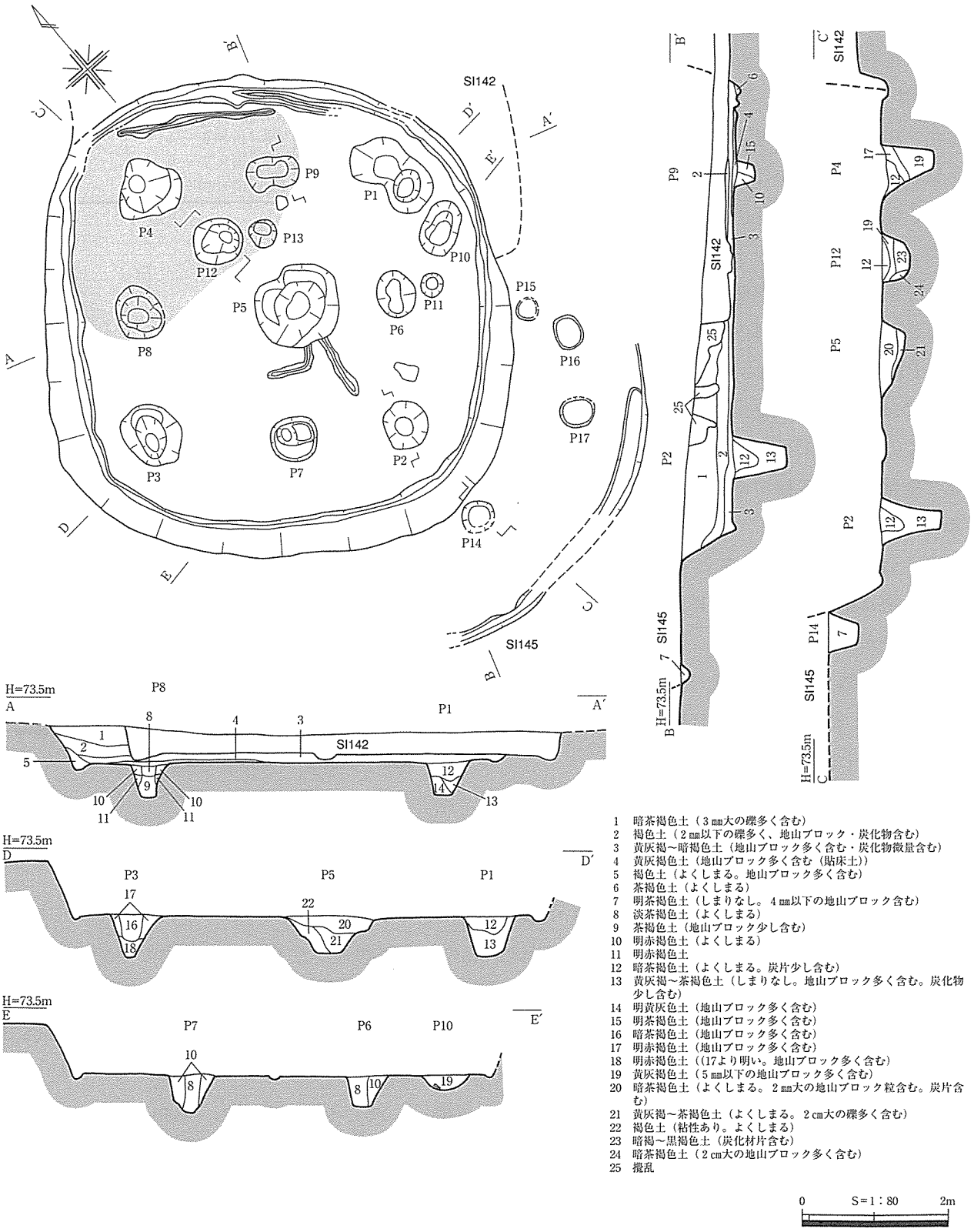
調査区中央南側K13グリッド内にあり、標高73.3mのほぼ平坦面に立地する。建物の半分をSI142に掘り込まれ、南側ではSI145を掘り込む。当遺構は１回の建て替えが行われている。

平面は隅丸方形を呈し、長軸5.6m、短軸5.45m、床面積27㎡を測る。残存壁高は南側で最大65cmである。壁溝は、幅約10～25cm、深さ約10cmで全周する。断面は逆台形からＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に3.3m、3.4m、3.4m、3.6mである。主柱穴は、掘方の上端が広がり、断面では柱痕跡も認められないことから、柱は建物廃絶後にすべて抜き取られたと推察される。P5は中央ピットで、平面形は不整形で二段掘りされている。埋土上層では炭化物を含んでいる。また、中央ピットから南側に向かって２条の溝が伸びている。長さ90cm前後、幅約９～15cm、深さ約３～５cmである。直線的なものと途中で折れ曲がるものとがある。

埋土は、炭化物を少量含む土が見られるが自然堆積によると考えられる。その直下の床面北側一画で貼床を検出した。貼床は地山ブロックを多く含む第４層である。

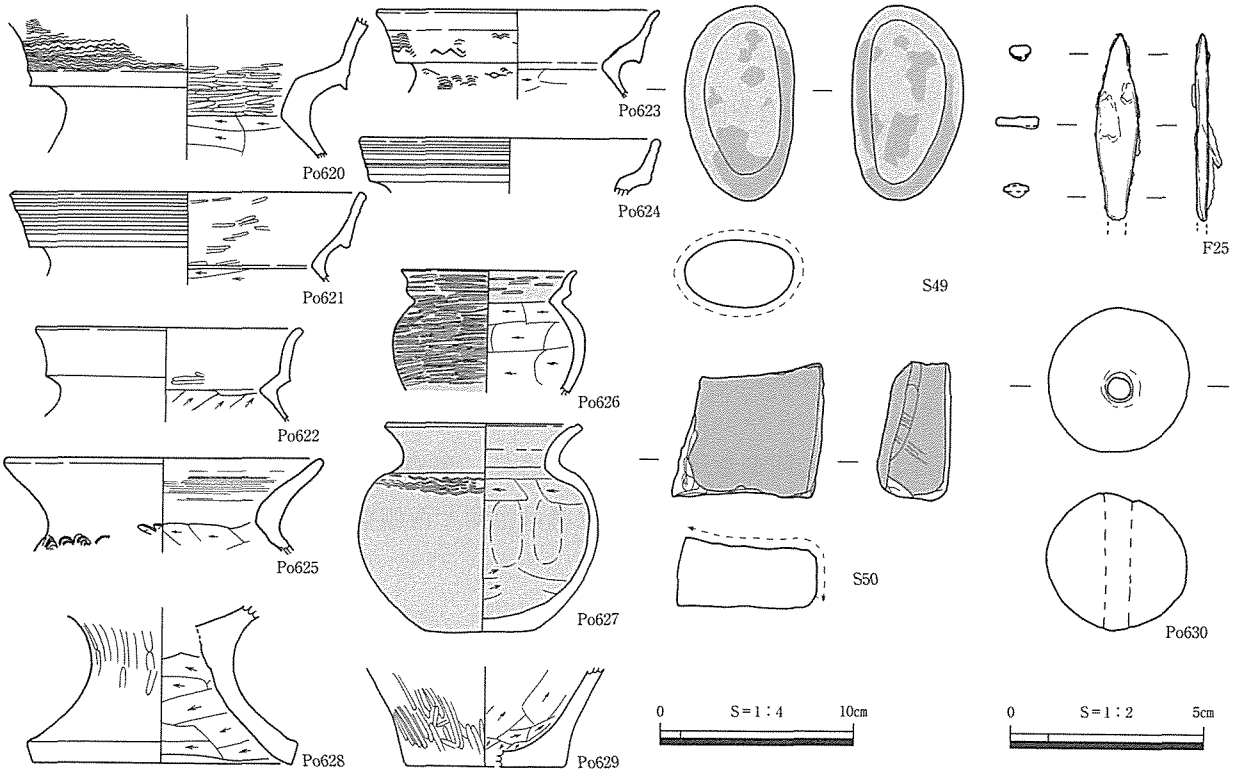
貼床を除去すると建て替え前のP8、P9、P13、および直線的に伸びる溝を検出した。また、P6、P7、P11は貼床下のピットと同様の埋土が確認できたことから、これらも建て替え前のピットと判断される。建て替え前の平面形や規模は不明である。主柱穴はP6～P9の４基で、主柱間距離はP6-P7か



第247図　笠見第３遺跡SI144・145遺構図

ら順に2.5m、2.6m、2.65m、2.5mである。断面では柱痕跡が認められ、柱径は20㎝前後と考えられる。また、床溝は、長さ2.1m、幅約５～15㎝、深さ約３㎝である。

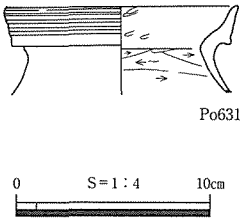
遺物は床面と埋土第２・４層中で多く出土した。床面からは弥生土器甕Po621、埋土中から壺Po620、甕Po622～625、小型甕Po626・627、高杯Po628、底部Po629、土玉Po630、砥石Ｓ50、鉄鏃F25が



第248図　笠見第３遺跡SI144出土遺物実測図

表82　笠見第３遺跡SI144・145ピット規模一覧表　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	103×70－59	SI144主柱穴	P10	75×51－20	SI144
P2	65×60－80	SI144主柱穴	P11	30×30－42	SI144建て替え前
P3	93×73－61	SI144主柱穴	P12	66×62－37	SI144建て替え前
P4	105×98－75	SI144主柱穴	P13	37×37－42	SI144建て替え前
P5	117×112－50	SI144中央ピット	P14	50×44△－31	SI145
P6	65×55－43	SI144建て替え前主柱穴	P15	35×32－45	SI145茶褐色土
P7	65×55－49	SI144建て替え前主柱穴	P16	42×42－55	SI145茶褐色土
P8	68×66－45	SI144建て替え前主柱穴	P17	50×40－30	SI145茶褐色土
P9	71×41－38	SI144建て替え前主柱穴			



第249図　笠見第３遺跡SI145出土遺物実測図

出土している。また、全面に赤色塗彩された自然石S49も出土している。

これら出土遺物と形態的特徴、および埋土の状況から両遺構の建て替えにそれほど時間差は認められない。両遺構とも清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI145（第247、249図、PL. 133）

調査区中央南側L13グリッド内にあり、標高73.2mのほぼ平坦面に立地する。北側はSI144に掘り込まれている。

遺存状態は悪い。平面はおそらく円形になると思われる。残存する最大長4.5m、床面積は６㎡以上になる。残存壁高は南側で12cmを測る。壁溝は、南側で検出した。幅約15～33cm、深さ約６cmである。断面は逆台形状を呈する。

ピットは４基検出した。遺構全体が把握できないため、主柱に相当するピットの判断は困難であるが、形態と深さからいずれも主柱穴の可能性がある。

埋土は、壁溝でのみ検出した。ブロック状の地山土を含んだ明茶褐色土でおそらく自然堆積によるものと思われる。

遺物は埋土中からの弥生土器甕Po631を図化した。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI147（第250・251図、PL. 51・134）

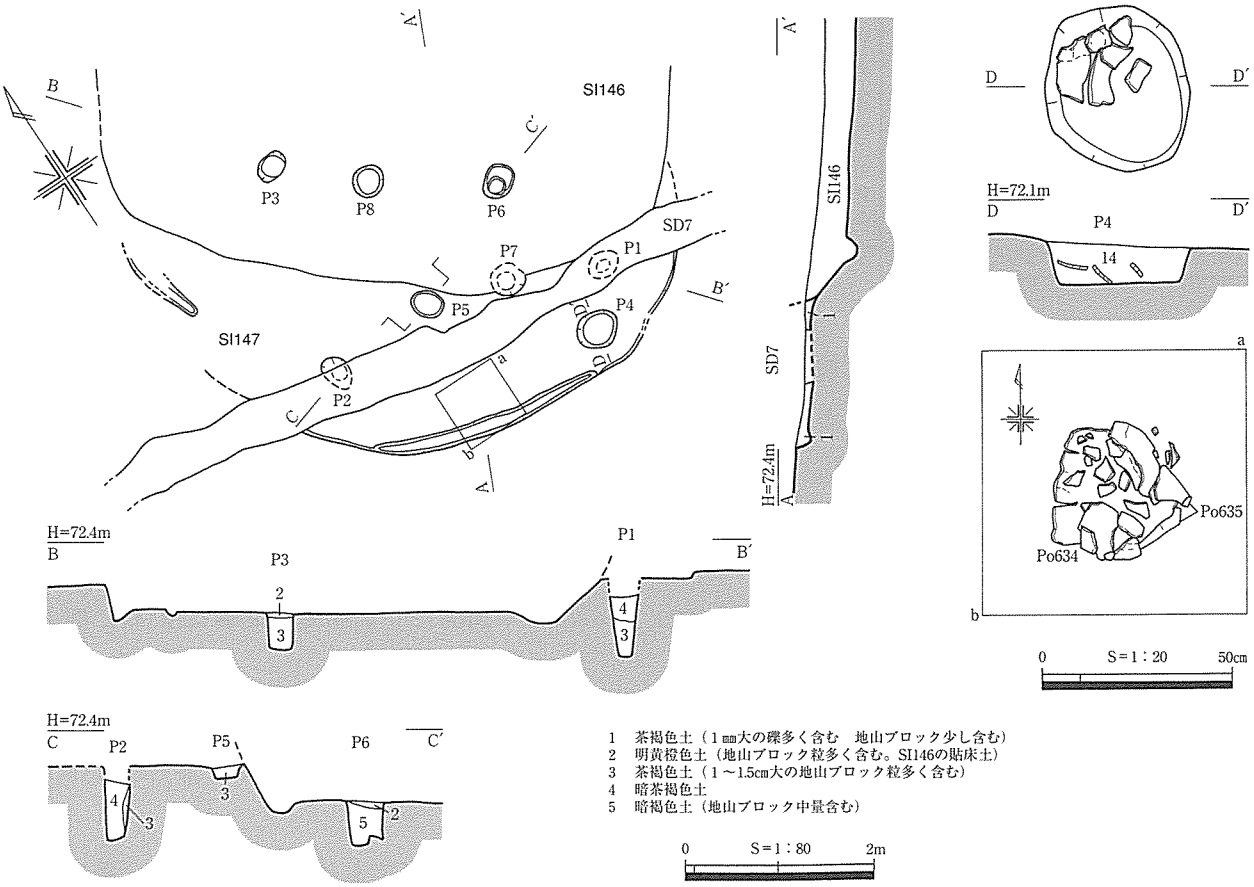
調査区中央Ｉ・J13グリッド内にあり、標高72.2mの平坦面に立地する。北側はSI146に掘り込まれ、SD7が東西を横断している。

遺存状態は悪い。平面はおそらく円形を呈すると思われる。残存する最大長は5.8m、床面積は7.9㎡以上になる。残存壁高は南側で最大16cmを測る。壁溝は南側と西側で検出した。幅は約５～20cm、深さ約３cm、断面はＵ字状を呈する。

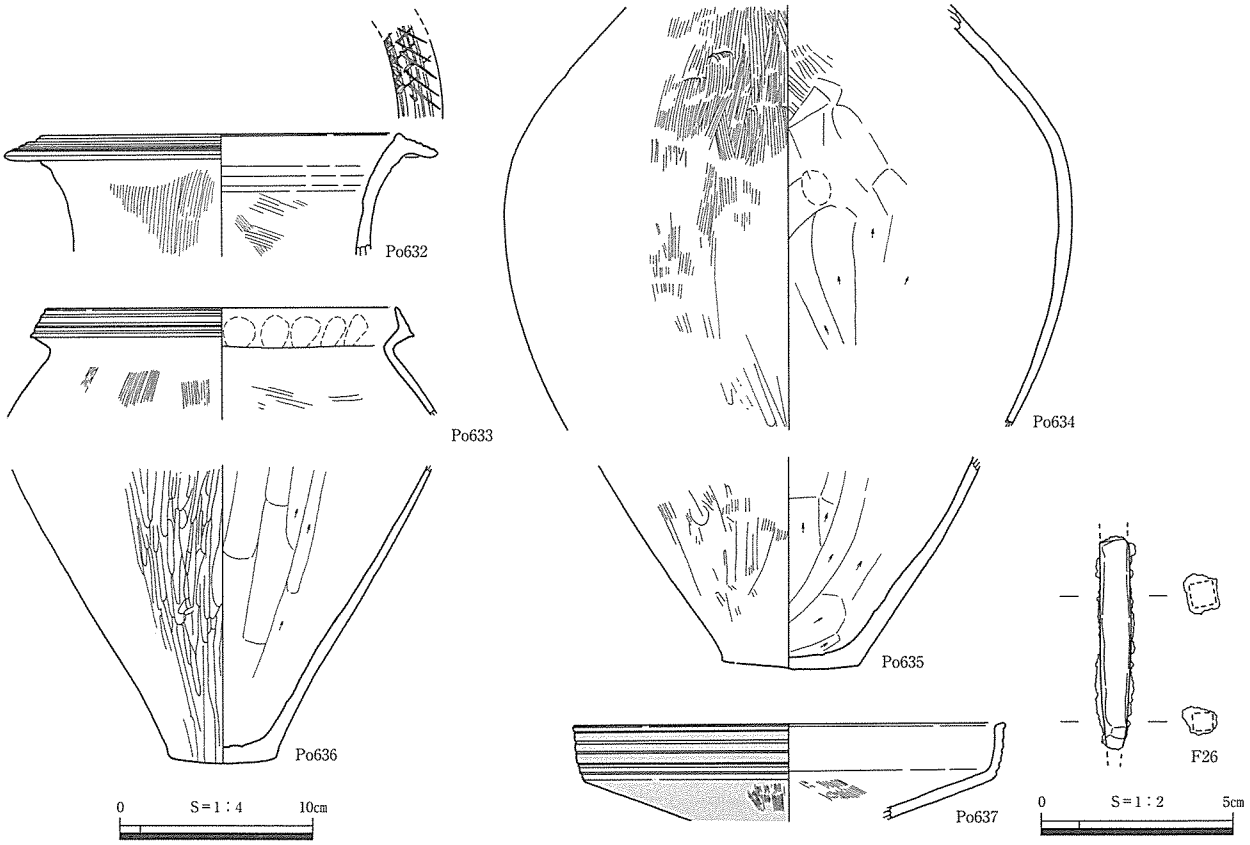
ピットは８基検出した。遺構全体が把握できないため、主柱に相当するピットの判断は困難であるが、形態と配置からP1とP2は主柱穴の可能性が考えられる。柱間距離は3.0mである。P3、P6、P8は

表83　笠見第３遺跡SI147ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	35×26－80	主柱穴	P5	35×26－ 9	
P2	40×25－64	主柱穴	P6	35×30－43	
P3	36×25－36		P7	38×35－55	
P4	45×37－13		P8	33×33－19	



第250図　笠見第３遺跡SI147遺構図



第251図　笠見第３遺跡SI147出土遺物実測図

古墳時代の住居跡であるSI146内の貼床下から検出した。これらは当初SI146に属するピットと考えていたが、埋土と主柱と考えられるP1・2などの底面レベルとほぼ同じであることから、当遺構のピットであると判断した。ただし用途は不明である。

埋土は単層で自然堆積によるものと考えられる。

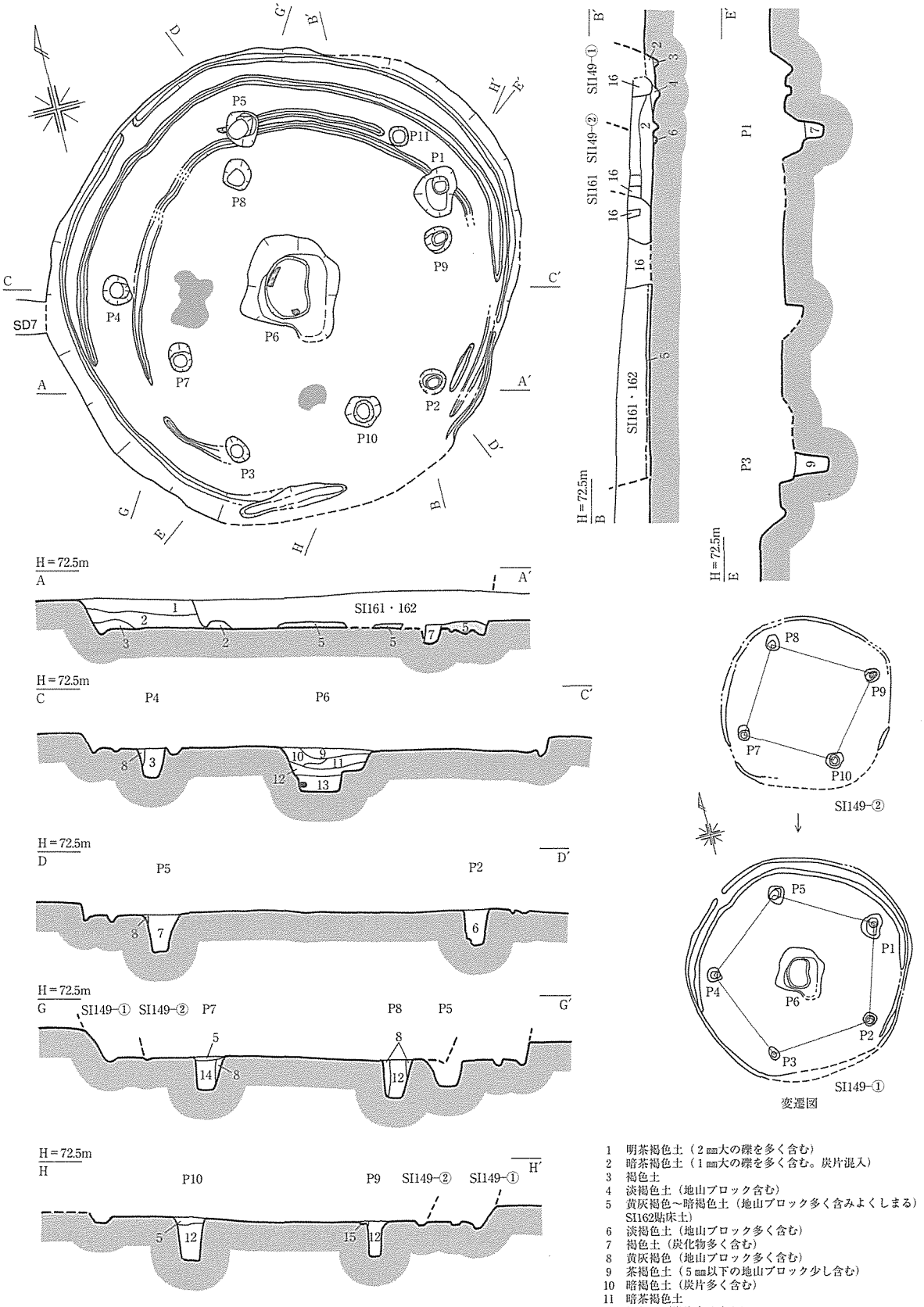
遺物は床面からの出土がほとんどである。床面から弥生土器壺Po632、甕Po633、南側壁溝近くからPo634・635、底部Po636、棒状鉄器F26、埋土中から高杯Po637が出土している。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろの竪穴建物跡であると考えられる。（岩井）

SI149（第252・253図、PL. 51・134・174）

調査区中央I12～13グリッド内にあり、標高72.2～71.7mの南西から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。南側をSI161・162に掘り込まれている。当遺構は、２回の建て替えが行われている。１度目は、隅丸方形から隅丸五角形へと、床面積の拡大に伴って主柱本数を増加させ、平面形も変化させたものと推測される。２度目は同主柱穴を利用し、北方向への拡張を目的とした建て替えである。平面形は変わらない。このことから、大きく主柱配置と平面形を変えるものを区別して呼び、新しい建物跡から順に、SI149－１、２とする。

SI149－１は、遺存状態はよい。平面は隅丸五角形を呈し、長軸6.6m、短軸6.2m、床面積27.4㎡を測る。残存壁高は南西側で最大47cmである。当遺構では壁溝が２重に検出された。外側の壁溝は、壁下をめぐり南側で一部途切れる。幅約12～15cm、深さ約６cmである。断面はＵ字状を呈する。内側の



1　明茶褐色土（２㎜大の礫を多く含む）
2　暗茶褐色土（１㎜大の礫を多く含む。炭片混入）
3　褐色土
4　淡褐色土（地山ブロック含む）
5　黄灰褐色～暗褐色土（地山ブロック多く含みよくしまる）
　SI162貼床土）
6　淡褐色土（地山ブロック多く含む）
7　褐色土（炭化物多く含む）
8　黄灰褐色（地山ブロック多く含む）
9　茶褐色土（５㎜以下の地山ブロック少し含む）
10　暗褐色土（炭片多く含む）
11　暗茶褐色土
12　褐色土（炭片多く含む）
13　黄灰褐色土（ロームブロック多く含む）
14　黄灰褐色土（1.5cm大の地山ブロック中量含む）
15　黄橙褐色土（地山ブロック多く含む）
16　撹乱

0　S＝1：80　2m

第252図　笠見第３遺跡SI149遺構図

溝は幅約５～10cm、深さ約３～７cmを測り、断面は外側と同様である。内側の溝は検出時、地山土を多く含む淡褐色土で覆われていた。これは建物埋土とは異なり、外側の溝と同時併存ではなく建て替え前の壁溝であると判断された。また、主柱配置は両壁溝内に納まることから、平面形のみの拡張を伴う建て替えであると推察される。ただし、当床面で建て替え前の所作によるものは埋土からこの内側壁溝のみであり、床面上で検出されたその他のものは建て替え後に属するものと考えられる。

主柱穴はP1～P5の５基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.7m、2.8m、2.7m、2.7m、2.8mである。P1、P5の埋土は炭片を多く含む層が認められた。P6は中央ピットと考えられる。平面形は不整形で二段掘りされている。深さがあり、底面からは、厚みと幅のある建物構築材であったような炭化材が検出され、埋土中から桃の炭化種子が出土した。

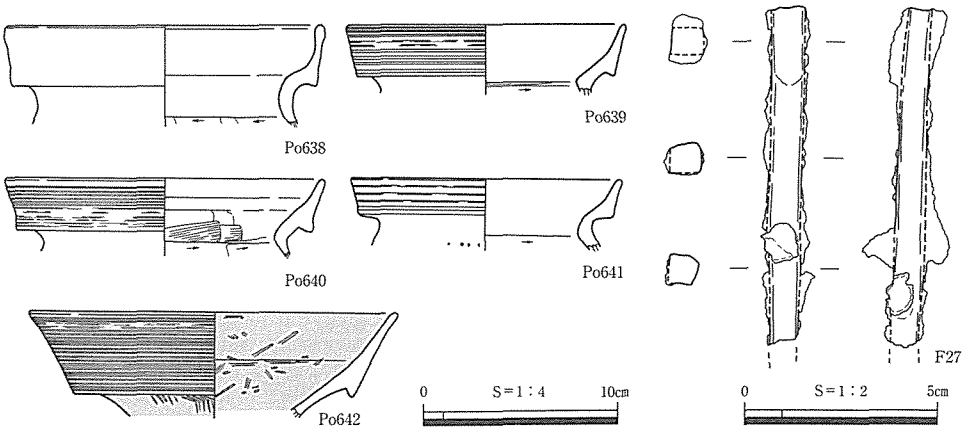
埋土は自然堆積と考えられる。床面に近い第２層中では炭片が斑状に含まれていた。

床面では、溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝はP5-P11間にあり、幅約７cm、深さ約５cmで、ピットを繋ぐような状態で検出された。焼土面は中央ピットの西側と南側で検出した。

中央ピット内の炭化材や建物内およびピット内埋土の炭片を多く含む層、焼土面が見られることから、当建物は焼失した可能性が高いと考えられる。また、P6底面で検出された炭化材は、上屋材の一部が焼け落ちたものと想像される。

SI149-２は、貼床下から壁溝とピットを検出し、当遺構を確認した。平面は隅丸方形を呈し、長さ4.8m、床面積は16.1㎡を測る。壁溝は南側で一部途切れる。幅約６～15cm、深さ約８cm、断面はやや逆台形状を呈する。

主柱はP7～P10の４基で、主柱間距離は2.6m、2.8m、2.6m、2.6mである。P7とP10の上層では、貼床土第５層が認められた。これは、古墳時代の住居であるSI162を建てる際の貼床土である。中央ピットは認められなかったが、建て替えにより壊されたと考えられ、P6は重複していた可能性がある。



第253図　笠見第３遺跡SI149出土遺物実測図

遺物は、埋土中から出土している。弥生土器甕Po638～641、器台Po642、棒状鉄器F27がある。Po641はP6内埋土から出土している。

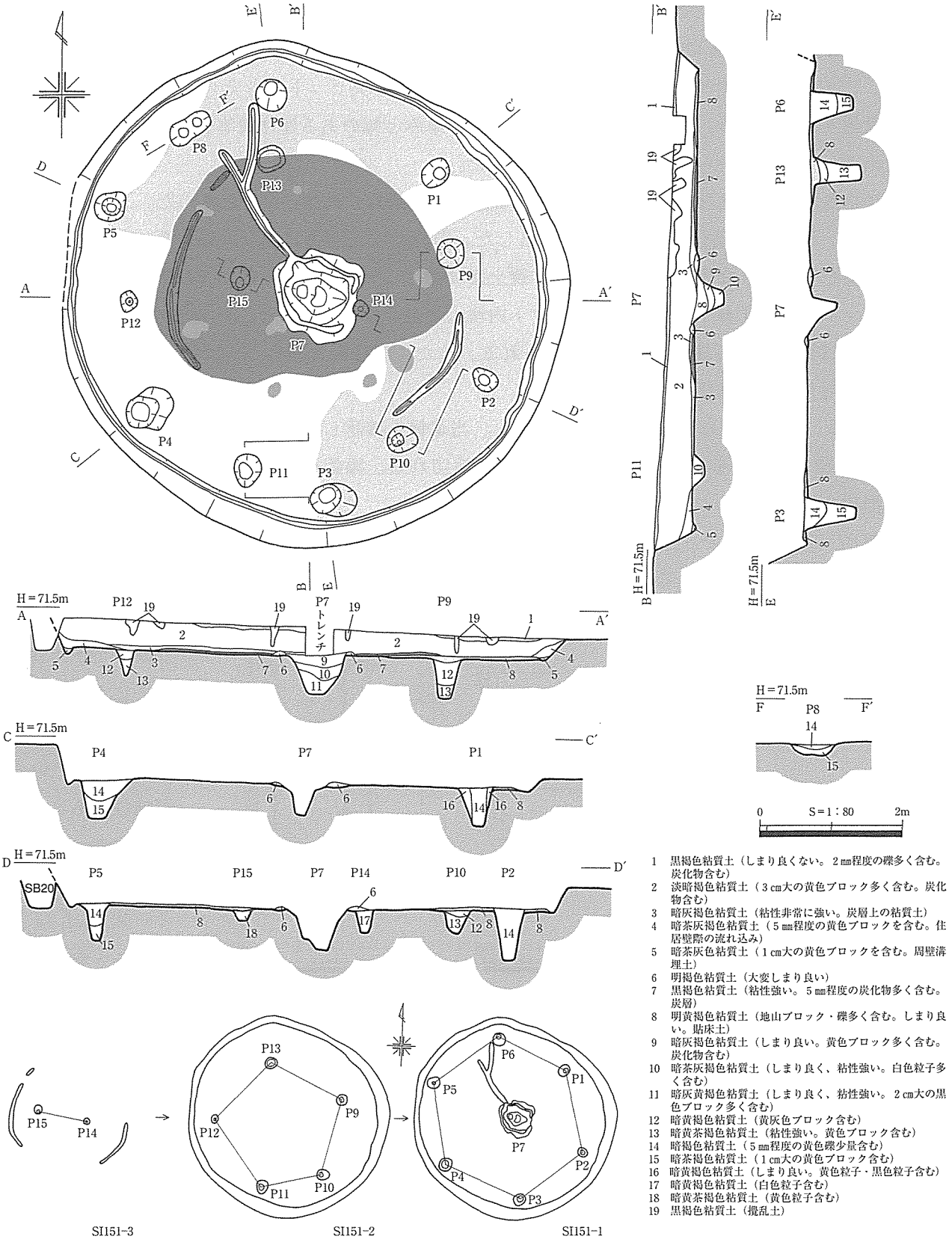
出土遺物と平面形態から清水V-３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられ、この時期内で建て替えも行われたと考えられる。（岩井）

表84　笠見第３遺跡SI149ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	65×45－52	主柱穴	P7	40×31－47	建て替え前主柱穴
P2	34×34－48	主柱穴	P8	42×40－53	建て替え前主柱穴
P3	37×30－62	主柱穴	P9	38×35－44	建て替え前主柱穴
P4	42×40－40	主柱穴	P10	50×40－58	建て替え前主柱穴
P5	50×42－52	主柱穴	P11	28×25－18	
P6	150×125－55	中央ピット			

SI151（第254・255図、PL. 52・133・135）

調査区中央やや西寄りのH14グリッドにあり、北東側に傾斜する標高71.1m～71.4mの緩斜面に立地する。北東側1.4mにSI152、北西側6.5mにSI150が位置する。SB20と重複関係にあるが、埋土の堆



1　黒褐色粘質土（しまり良くない。２㎜程度の礫多く含む。炭化物含む）
2　淡暗褐色粘質土（３㎝大の黄色ブロック多く含む。炭化物含む）
3　暗灰褐色粘質土（粘性非常に強い。炭層上の粘質土）
4　暗茶灰褐色粘質土（５㎜程度の黄色ブロックを含む。住居壁際の流れ込み）
5　暗茶灰色粘質土（１㎝大の黄色ブロックを含む。周壁溝埋土）
6　明褐色粘質土（大変しまり良い）
7　黒褐色粘質土（粘性強い。５㎜程度の炭化物多く含む。炭層）
8　明黄褐色粘質土（地山ブロック・礫多く含む。しまり良い。貼床土）
9　暗灰褐色粘質土（しまり良い。黄色ブロック多く含む。炭化物含む）
10　暗茶灰褐色粘質土（しまり良く、粘性強い。白色粒子多く含む）
11　暗灰黄褐色粘質土（しまり良く、粘性強い。２㎝大の黒色ブロック多く含む）
12　暗黄褐色粘質土（黄灰色ブロック含む）
13　暗黄茶褐色粘質土（粘性強い。黄色ブロック含む）
14　暗褐色粘質土（５㎜程度の黄色礫少量含む）
15　暗茶褐色粘質土（１㎝大の黄色ブロック含む）
16　暗黄褐色粘質土（しまり良い。黄色粒子・黒色粒子含む）
17　暗黄褐色粘質土（白色粒子含む）
18　暗黄茶褐色粘質土（黄色粒子含む）
19　黒褐色粘質土（攪乱土）

第254図　笠見第３遺跡SI151遺構図

積状況からSI151が先行する。二度の建て替えが行われているため、新しい住居からSI151－１、SI151－２、SI151－３と記述する。

SI151－１は、平面は円形を呈する。床面の規模は東西7.16m、南北7.08m、床面積は32.6㎡を測る。壁高は南西側で最大58cm測り、壁際に幅10cm～22cm、深さ８cm、断面Ｕ字状の溝がめぐる。

主柱穴はP1～P6である。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.98m、2.76m、2.96m、2.90m、2.84m、2.70mを測る。P1埋土の柱痕跡より、その径は16cmと推定される。Ｐ８は平面楕円形を呈し、底面では２つのピットが並存するようにあり、P5とP6の中間に位置することから、SI151の－１の入口として使用された可能性が考えられる。

住居中央部には、貼床する際に盛土による土手が廻る中央ピットP7がある。土手は最大幅32cm、高さ７cmを測る。埋土は、炭化粒を多く含む灰褐色系を主体とした３層に分かれる。

床面においては、中央ピットから北西壁に向かって直線にのびる床溝を検出した。中央ピットから約1.2mで、P6に向かって枝分かれする。規模は、長さ1.8m×幅16cm、深さ４cm、枝分かれした溝は長さ1.16m、幅14cm、深さ４cmを測る。どちらも断面Ｕ字状を呈する。なお、土手部においては、溝が堤を貫通するため中央ピットにともなう遺構と考えられる。

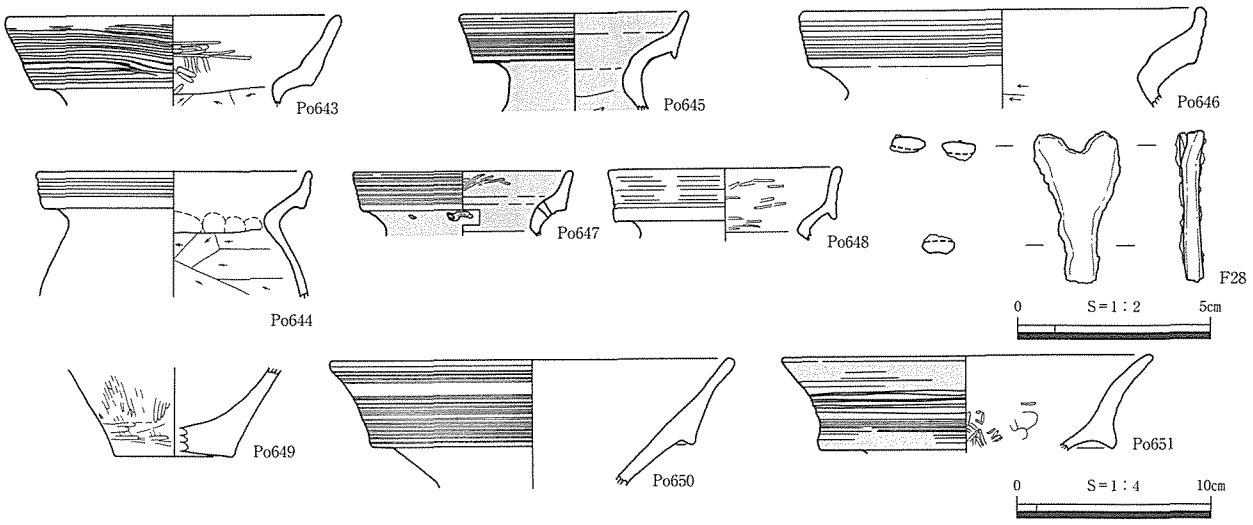
東側から南西側にかけてと北東側の床面から８箇所の焼土面を検出した。平面は円形または楕円形を呈し、規模は長軸12～40cm、短軸10～30cmを測る。

埋土は大別７層に分かれる。第６層は中央ピット周辺に、84～190cmの範囲で広がる炭層である。中央ピットの土手盛土下にも広がり、炭層上では５ケ所の焼土面が認められた。第７層は地山ブロックを多く含んだ貼床層である。北西側から南側の周壁側で、幅94cm～2.70mの範囲で検出された。

表85　笠見第３遺跡SI151ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	46×34－54	SI151－１主柱穴	P9	42×39－56	SI151－２主柱穴
P2	40×30－70	SI151－１主柱穴	P10	43×36－34	SI151－２主柱穴
P3	45×35－70	SI151－１主柱穴	P11	48×38－18	SI151－２主柱穴
P4	52×44－52	SI151－１主柱穴	P12	30×24－38	SI151－２主柱穴
P5	48×44－52	SI151－１主柱穴	P13	42×36－70	SI151－２主柱穴
P6	46×44－62	SI151－１主柱穴	P14	24×23－32	SI151－３主柱穴
P7	140×112－60	SI151－１中央ピット	P15	36×28－20	SI151－３主柱穴
P8	66×30－14				

SI151－２は、－１のひとまわり内側で検出された主柱穴で確認した。主柱穴はP９～P13で、主柱間距離



第255図　笠見第３遺跡SI151出土遺物実測図

はP9−P10間から順に、2.80m、2.24m、2.92m、2.86m、2.84mを測る。P9、P13の上層は貼床で覆われていた。周壁・壁溝はSI151−１と共存すると思われる。

SI151−３は、−１の貼床除去後に内側で検出された壁溝・主柱穴で確認した。

主柱穴はP14とP15で、主柱間距離1.76mを測る。壁溝は、幅９㎝～15㎝、深さ６㎝、断面Ｕ字状を呈す。

出土遺物のうち、弥生土器甕Po643～644、Po646～648、壺Po645、底部Po649、鼓形器台Po650・651、不明鉄器F28を図化した。このうち、Po646はP4内、Po647はP7内から出土した。その他は埋土中から出土した。

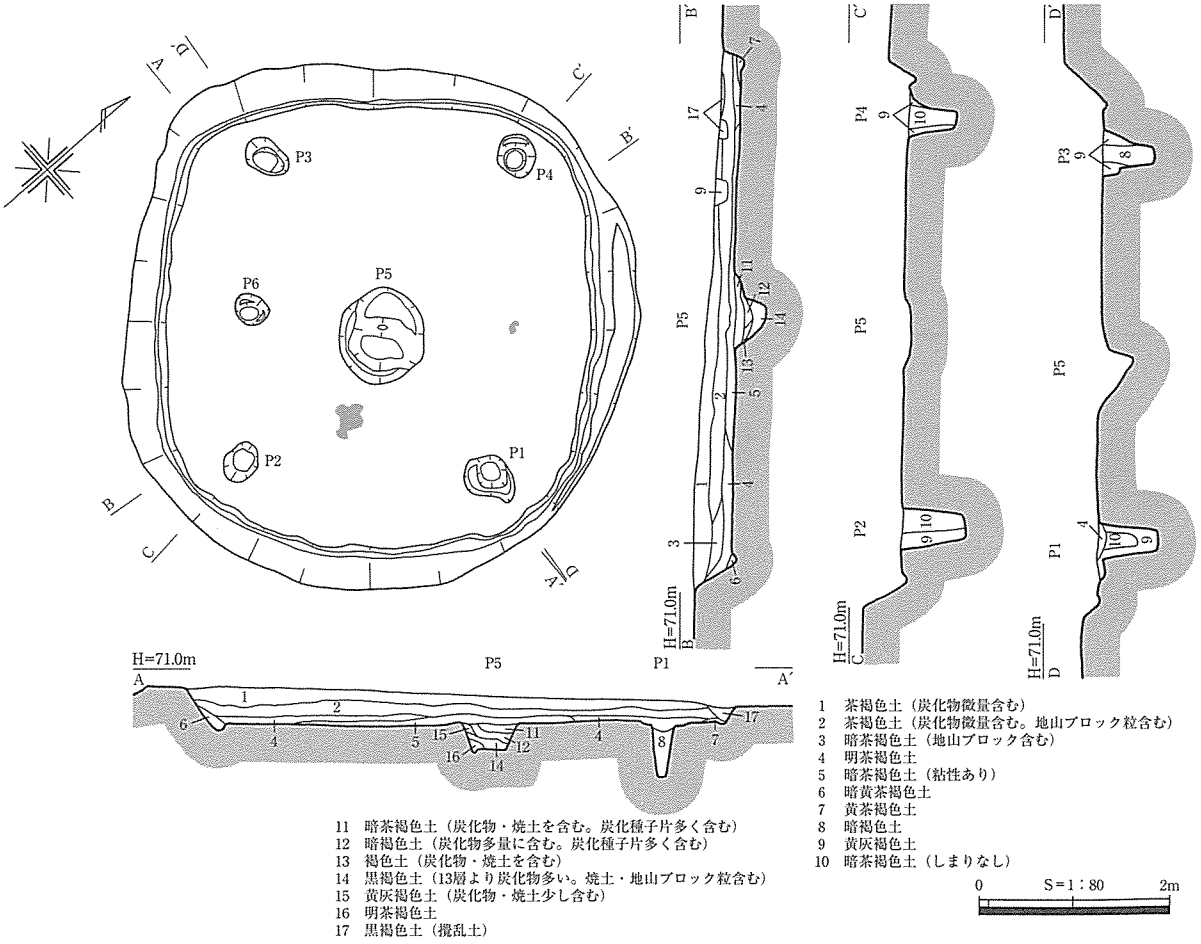
出土遺物から、清水Ｖ−３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（前島）

SI152（第256・257図、PL. 52・133・135）

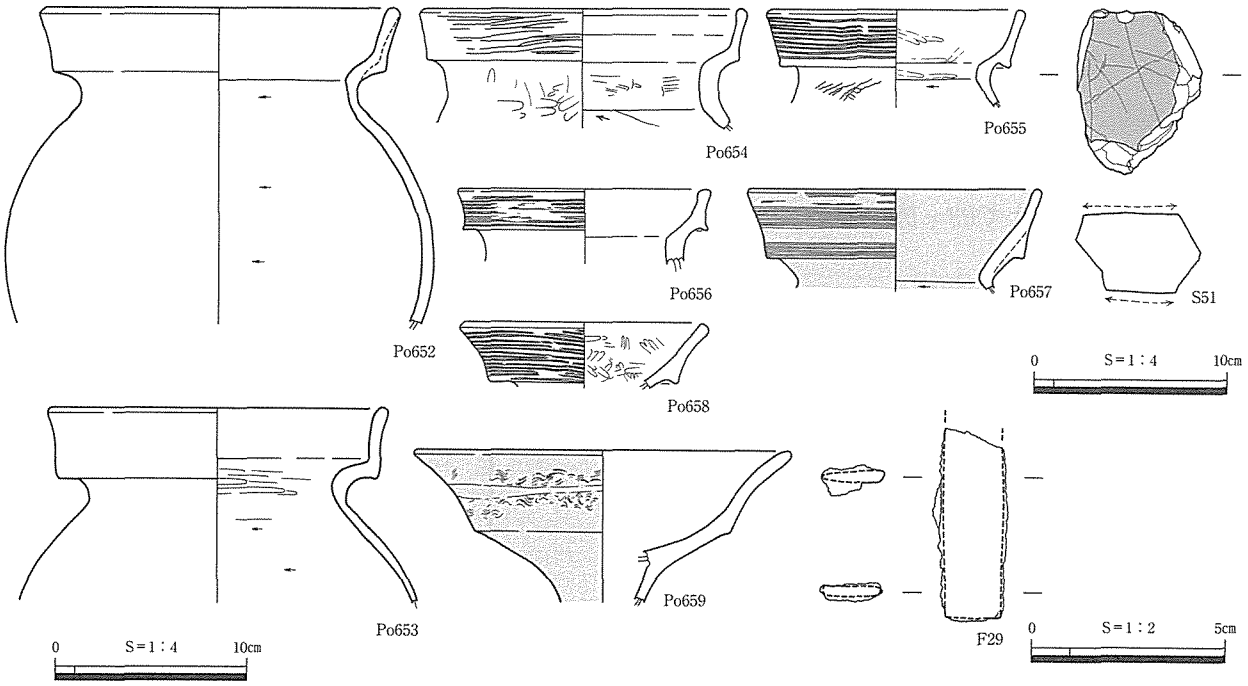
調査区中央G13グリッド内にあり、標高70.9m～70.5mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。南西側にSI151が隣接している。

平面は隅丸方形を呈し、長軸5.5m、短軸5.3m、床面積18.4㎡を測る。残存壁高は、南側で最大45㎝である。壁溝は幅約10～20㎝、深さ約７㎝で、断面Ｕ字状を呈し全周する。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1−P2から順に2.6m、3.1m、2.6m、3.3mである。P2、P3、P4では柱痕跡があり、推定される柱径は約15～20㎝である。P5は中央ピットで、平面形は不整楕



第256図　笠見第３遺跡SI152遺構図



第257図　笠見第３遺跡SI152出土遺物実測図

表86　笠見第３遺跡SI152ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	58×47－62	主柱穴	P4	43×40－50	主柱穴
P2	40×32－68	主柱穴	P5	102×87－35	中央ピット
P3	50×33－52	主柱穴	P6	35×28－ 7	

円形を呈し、北側が二段掘りされている。埋土は全体的に炭と焼土が混ざるような状態で堆積しており、下層に行くほど炭の量が多く黒褐色を呈する。上層では炭化した桃核が数個体分認められた。掘方内壁に被熱痕跡は見られなかった。P6はP2-P3の中間に位置することから補助柱穴であると考えられる。その他床面では、小規模な被熱硬化した焼土面や少量の炭化材片を検出した。

埋土は、粘性のある地山ブロックを含む土による自然堆積と考えられる。中央ピットの埋土は、炭化物を含むものの建物の焼失により堆積したものではなく、また、内面に被熱痕跡や埋土中灰の存在が全く検出されなかったことから、建物機能時に常時火を燃やし続けた結果、生成され堆積したものとも考え難い。おそらくは、他の場所で生成された炭を持ち込んだ可能性などが考えられる。

遺物は床面と埋土中からの出土である。床面から甕Po653、埋土中から甕Po652・655～657、壺Po654、器台Po658、高杯Po659、砥石S51、不明鉄器F29が出土している。

出土遺物等から、清水Ⅵ－１様式、弥生時代終末ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI153（第258～260図、PL. 52・53・135・174）

調査区中央H11グリッド内にあり、標高70.9m～70.4mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。南東側にSI154が近接している。当遺構は床面上で多数の炭化材が遺存し、埋土内で炭化物や焼土が多く含まれることから、焼失した建物跡と判断される。また、当遺構は１回の建て替えが認められる。

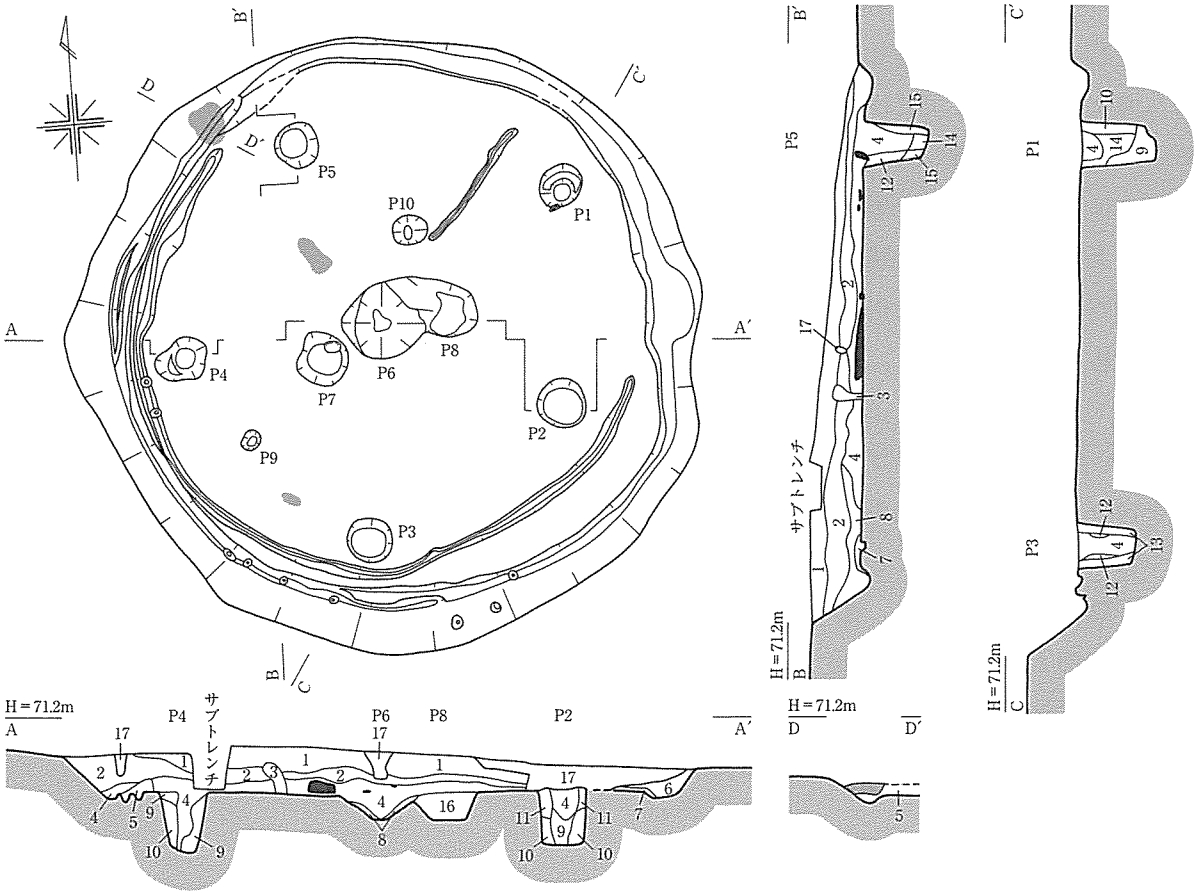
遺存状態はよく、平面は隅丸五角形を呈す。長軸6.8m、短軸6.4m、床面積24.5㎡を測る。残存壁

高は南側で最大50cmを測る。壁溝は全周し、幅約10～30cm、深さ約10cm、断面はＵ字状を呈する。また、壁溝内側で南東から北西にかけても、幅約６～25cm、深さ約５cm、断面逆台形状を呈す溝がめぐっており、埋土の状況から建て替え前の壁溝と考えられる。建物平面形は楕円形を呈する。

主柱穴はP1～P5の５基で、主柱間距離はP1-P2から順に、2.3m、2.5m、2.8m、2.5m、2.9mである。主柱穴内の埋土でP3～P5において、柱痕跡と考えられる炭化物や焼土を含む第４層が認められた。柱径はP3から順に20cm、16cm、20cmと推測される。P6は中央ピットと考えられる。平面は不整形で、内側に被熱痕跡は認められない。P8は、P6に掘り込まれていることから建て替え前のピットで、位置的に中央ピットであると考えられる。また、南側から西側にかけての壁溝内で小ピットが数基認められ、形状や

表87　笠見第３遺跡SI153ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	48×41－78	主柱穴	P11	10×７－11	
P2	53×50－58	主柱穴	P12	11×10－９	
P3	50×50－60	主柱穴	P13	14×12－30	
P4	55×45－63	主柱穴	P14	９×７－３	
P5	46×45－72	主柱穴	P15	９×８－２	
P6	78×70－21	中央ピット	P16	９×７－４	
P7	58×54－29		P17	14×９－10	
P8	65×55－30	建て替え前	P18	12×８－19	
P9	21×19－18		P19	11×９－10	
P10	35×30－18				



1　明茶褐色土（５㎜以下の礫多く含む。しまり良し）
2　茶褐色土（５㎜以下の礫・ホーキブロック含む。炭化物少し含む）
3　黒褐色土（炭化材と土壌化した土の混合土）
4　暗褐色土（炭化材・炭化物多く含む。焼土含む）
5　黄褐色土（ATブロック少し含む）
6　明褐色土（しまり良し）
7　黄灰褐色土
8　茶褐色土（５㎜以下の礫・ホーキブロック斑に含む。炭片少し含む）
9　明茶褐色土（ロームブロック多く含む）
10　黄灰色土（ホーキ・ロームブロック多く含む。しまり良し）
11　黄灰褐色土（ホーキブロック多く含む。よくしまる）
12　暗茶褐色土（ロームブロック含む）
13　明黄橙色土（ホーキ・ロームブロック多く含む）
14　褐色土（やや粘性あり。炭片少し含む）
15　黄灰褐色土（しまりなし）
16　暗褐色土（３㎜大のホーキ・ロームブロック含む。炭化物中量混じる）
17　攪乱

0　S=1：80　2m

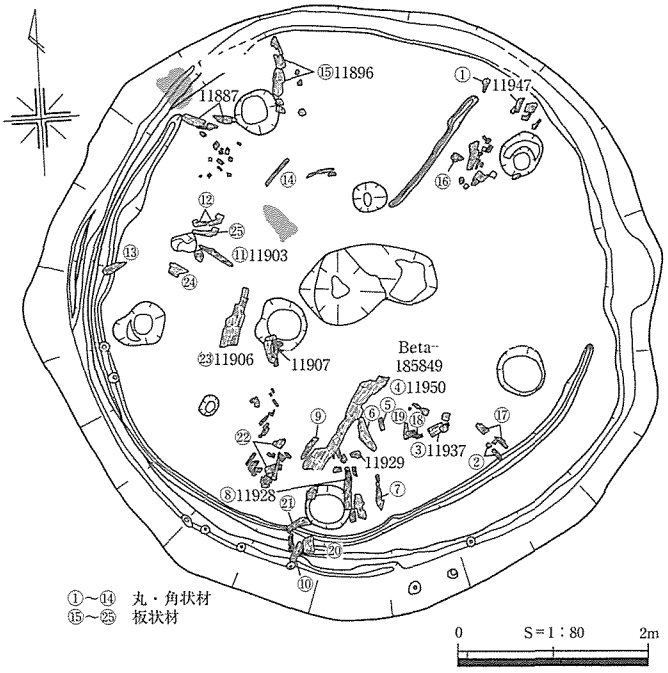
第258図　笠見第３遺跡SI153遺構図

ほぼ等間隔に配されている状況から、堰板等を留める杭痕跡と考えられるが、溝内すべてで検出していないことから、部分的なものである可能性も含んでいる。

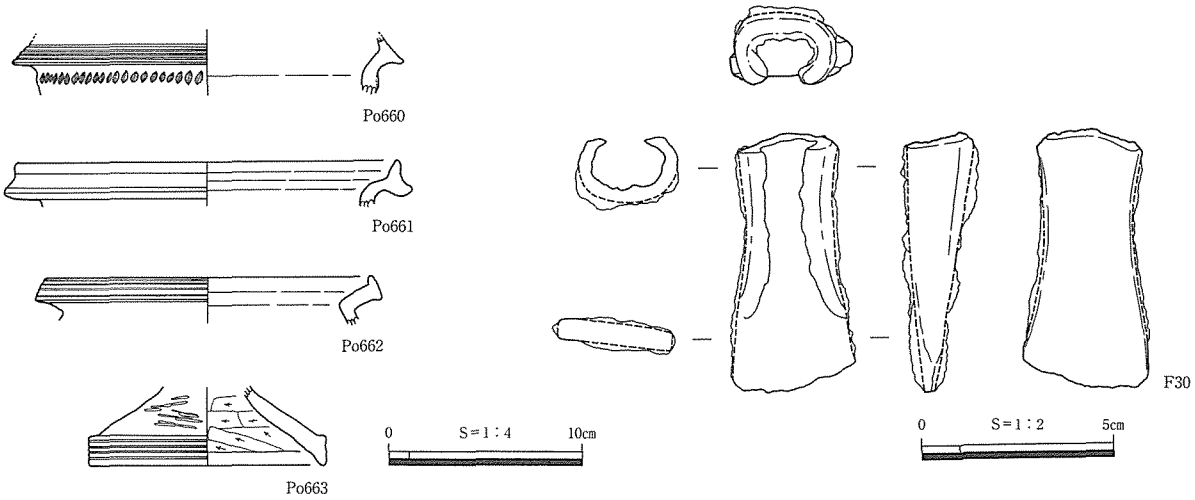
中央ピット周囲において、床面から高さ17cmの範囲内で炭化材が出土した。炭化材の形状は、丸太および角状、板状が混在して見受けられた。特に中央ピットに向かって放射状に広がる炭化材には、丸太状（①、②、⑦、⑧、⑩、⑪）および板状（⑮、⑰、⑳、㉒、㉔、㉕）のものがある。位置と形状から垂木材と考え、形状の異なる材が併用されていたと考えられる。最も残りのよい炭化材④は、床面直上で検出した。長さ125cm、幅15cm、厚さ10cmを測る。垂木と考えられる材の直上で垂木と直交するように検出された。この検出位置が主柱軸線上と平行することと材の形状から、梁材もしくは桁材と考えられる。炭化材の樹種同定では、スダジイの多用が確認された。

埋土は、焼失時生成された炭化物や焼土粒を多く含む第４層と、その上位で炭化物の混じりが少ない第２層が主な堆積である。この２層は、P1-P2の主柱軸線上から西側にかけての範囲で厚く堆積している。一方でこのP1、２周辺では、炭化材の出土が特に見られず、第２・４層の堆積も薄い。これは材が残らないほどよく燃えたと考えられ、P1-P2方向の東側に入口があったか、もしくは着火地点が想定される。

その他北西側壁溝の上位10cmのところで、焼土塊及び床面北側で溝を検出した。焼土塊は一見土屋根の焼け落ちた土と考えられるが、これ以外で焼土は認められず、床面上で焼土面はほとんど見られなかった。このことから当建物が土屋根を呈していたとは判断し難い。また、この焼土塊は壁溝内が埋まってから落下



第259図　笠見第３遺跡SI153炭化材出土状況



第260図　笠見第３遺跡SI153出土遺物実測図

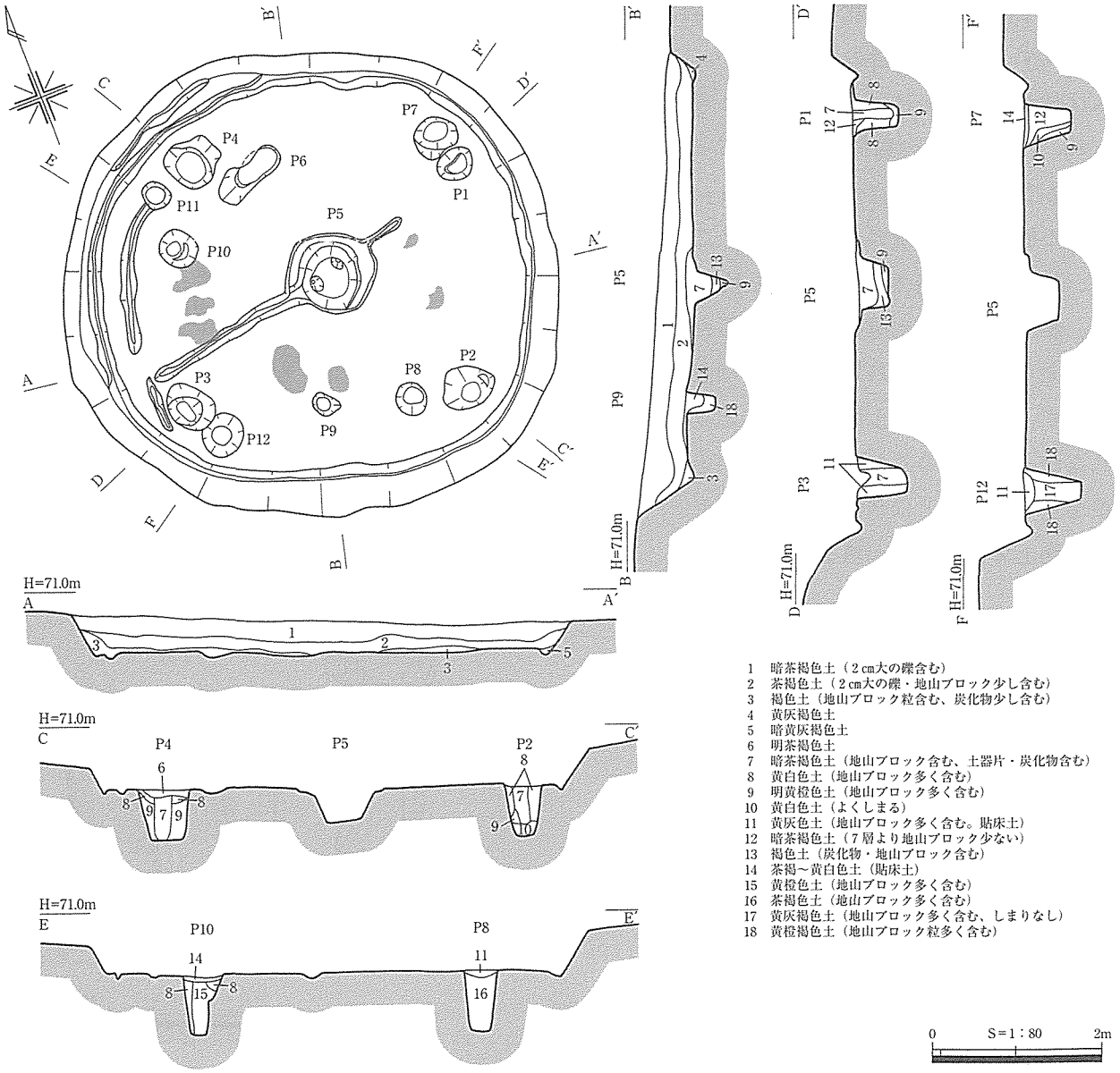
した状態を呈していることから、垂木尻を押さえていた周堤状の土、もしくは壁の一部が焼失の際に崩れたものと想像される。床溝は直線的に伸び、長さ1.45m、幅約５～12㎝、深さ約４㎝を測る。

遺物は埋土中からの出土である。弥生土器甕Po660～662、脚部Po663、袋状鉄斧F30を図化した。出土遺物と形態的特徴から、清水Ⅴ－１様式、弥生時代後期前葉ごろに相当し、建て替えもこの時期内に収まる竪穴住居跡と考えられる。また、炭化材の^{14}C年代測定では、A.D.80という結果を得、土器型式とほぼ見合うものと考える。（岩井）

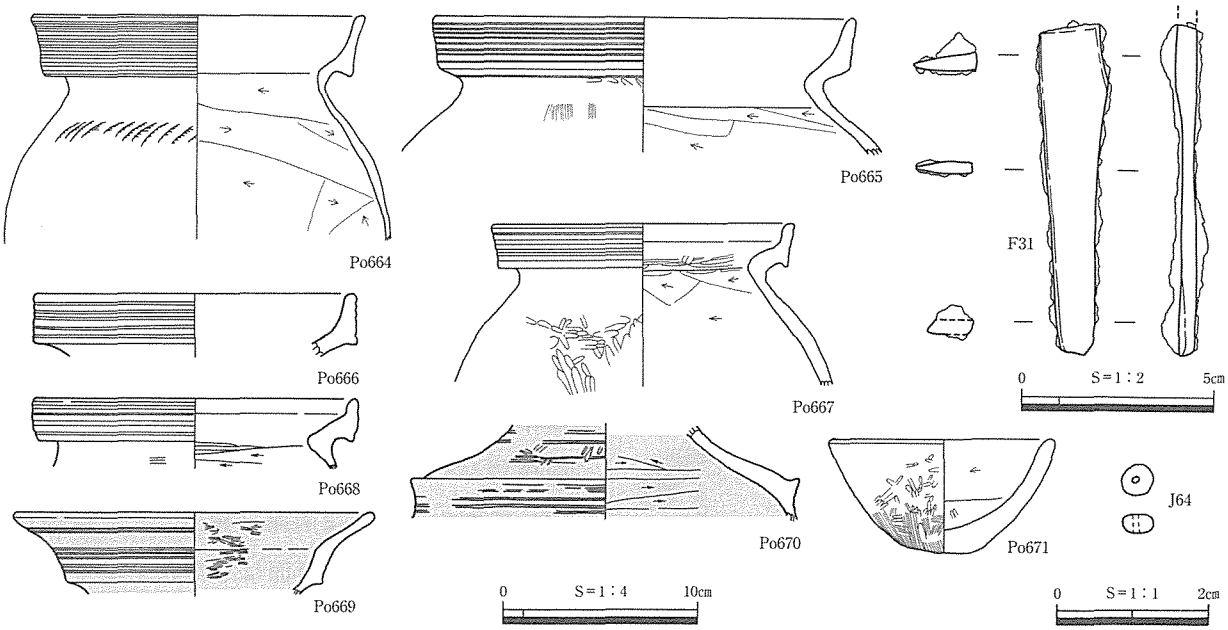
SI154（第261・262図、PL. 53・106・135・174・178）

調査区中央Ｈ・Ｉ11グリッド内にあり、標高70.8m～70.5mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。西側にSI153が隣接する。当遺構は床面積の拡大を目的とした建て替えが行われている。

遺存状態はよい。平面は隅丸方形を呈し、長軸5.9m、短軸5.5m、床面積19㎡を測る。残存壁高は南側で最大50㎝である。壁溝は全周する。幅約10～20㎝、深さ約７㎝、断面はＵ字状を呈する。ま



第261図　笠見第３遺跡SI154遺構図



第262図　笠見第３遺跡SI154出土遺物実測図

た、西側壁溝の内側にも溝が見られた。幅約６～20cm、深さ約４cmである。埋土は地山ブロックを多く含んだよくしまった土で、上記の壁溝の埋土とは異なるため、建て替え前の壁溝と考えられる。建て替え前の平面形および規模は不明である。

表88　笠見第３遺跡SI154　ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	43×40－53	主柱穴	P7	50×50－59	建て替え前主柱穴
P2	64×41－63	主柱穴	P8	40×36－70	建て替え前主柱穴
P3	60×50－60	主柱穴	P9	32×27－36	建て替え前
P4	60×60－63	主柱穴	P10	46×40－68	建て替え前主柱穴
P5	102×90－46		P11	34×30－42	
P6	85×32－50		P12	53×45－64	建て替え前主柱穴

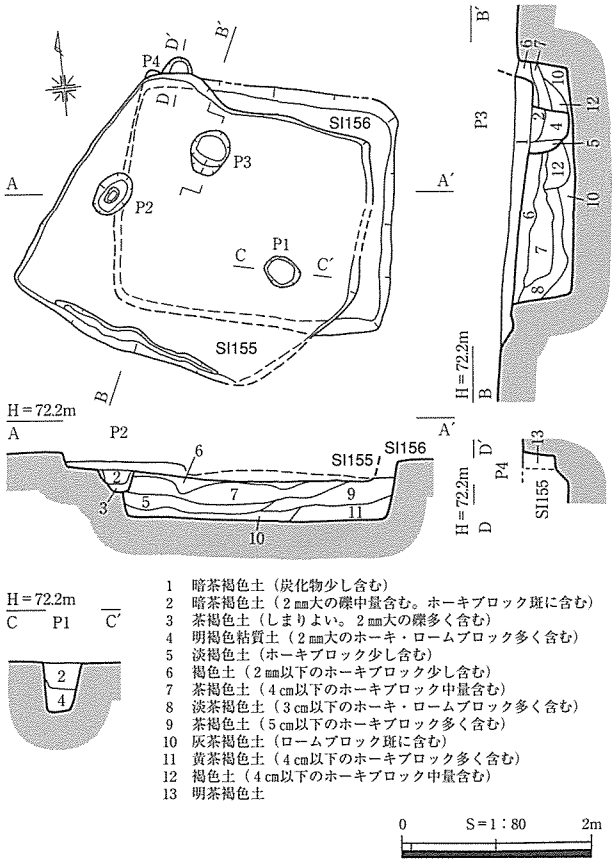
ピットは12基検出した。P1～P6、P11は建て替え後のピットであり、P7～P9、P10、P12は、埋土上層に地山ブロックを多く含む土で覆われており、建て替え前のピットである。建て替え後の主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.7m、3.4m、2.9m、3.2mである。主柱穴の断面は柱痕と考えられる第７層がすべてで認められ、柱径約10～20cmである。P5は中央ピットと考えられる。平面は不整円形で二段掘りされている。埋土内に土器片や炭化物を含んでいる。建て替え前の主柱穴はP7、P8、P12、P10で、主柱間距離はP7-P8から順に3.2m、2.3m、2.3m、3.4mである。P10、P12は土層断面から柱痕が認められ、柱径は約20cmになる。P7の位置がやや離れているが、埋土の状況から主柱穴と判断した。

その他床面では、溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は、中央ピットと連結し、東側と西側で直線的に伸びる。幅約７～15cm、深さ約２～７cmで、埋土から建て替え後のものと判断される。焼土面は中央ピットの周囲に７箇所検出した。

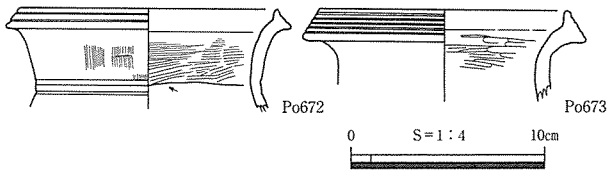
埋土は、床面直上で炭化物を少量含む第３層が見られ、中央ピットでも炭化物が認められたが、自然堆積によるものと考えられる。

遺物は床面と埋土中から出土した。床面からは、甕Po664、小型鉢Po671、埋土からは甕Po665～668、器台Po669・脚部Po670、鉄製刀子F31、ガラス小玉J64が出土している。

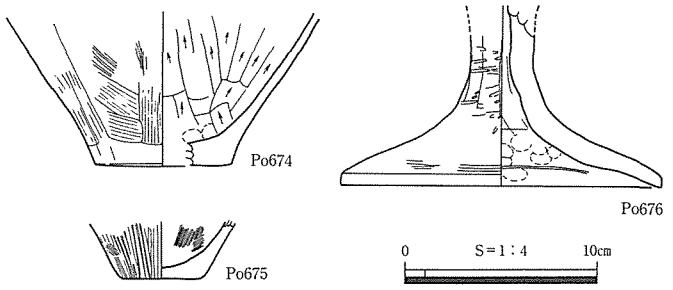
出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡で、埋土の状況



第263図　笠見第３遺跡SI155・SI156遺構図



第264図　笠見第３遺跡SI155出土遺物実測図



第265図　笠見第３遺跡SI156出土遺物実測図

表89　笠見第３遺跡SI155・156ピット一覧表　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P1	40×28－53	SI155
P2	50×34－21	SI155
P3	37×35－42	SI155
P4	24×８△－36	SI156

から建て替えに時間差は認められず、この時期幅内で収まる建て替えと考えられる。（岩井）

SI155・156（第263～265図、PL. 53・135）

調査区中央H14グリッド内にあり、標高71.8mのほぼ平坦面に立地する。SI155はSI156を掘り込んでいる。

SI155は、遺存状態はあまりよくない。平面は不整方形を呈し、長軸3.3m、短軸2.9m、床面積残存8.5㎡を測る。残存壁高は北側で最大18㎝である。壁溝は南側で検出した。幅約５～20㎝、深さ約３㎝、断面はＵ字状を呈する。

ピットは３基検出した。P1とP3は埋土と深さから主柱穴になる可能性がある。P2の用途は不明である。

埋土は炭化物を少し含んだ土による自然堆積であると考えられる。

SI156は、SI155を掘り下げ検出した。遺存状態はよい。平面は方形を呈し、長軸3.0m、短軸2.5m、床面積5.9㎡を測る。残存壁高は南側で最大43㎝である。壁溝は検出されなかった。

ピットは床面で認められず、北西側壁際でP4を検出した。上屋構造を支える柱の可能性がある。ただし、その他に同様のピットが検出されず、遺構外の柱穴が想定されたが検出には至らなかった。

埋土は地山ブロックを多く含む土による自然堆積と考えられる。

遺物は、検出中及び床面で出土した。SI155床面で弥生土器壺Po673、埋土中から壺Po672が出土した。SI156では、埋土中から弥生土器底部Po674・675、土師器高杯Po676が出土した。Po676については、調査中SI155・156は同時に掘り下げたため、SI155のものが混入した可能性がある。

出土遺物は、弥生時代中期末から古墳時代中期におよび、遺構の前後関係からSI155が古墳時代中期に属する可能性がある。SI156は切り合い関係からSI155よりも古く、遺物から弥生時代中期

ごろに相当すると考えられる。形態的特徴は両者とも上屋構造があることが想定されるが、通常の竪穴住居跡とは性格が異なると思われる。（岩井）

SI157（第266～268図、PL. 54・135）

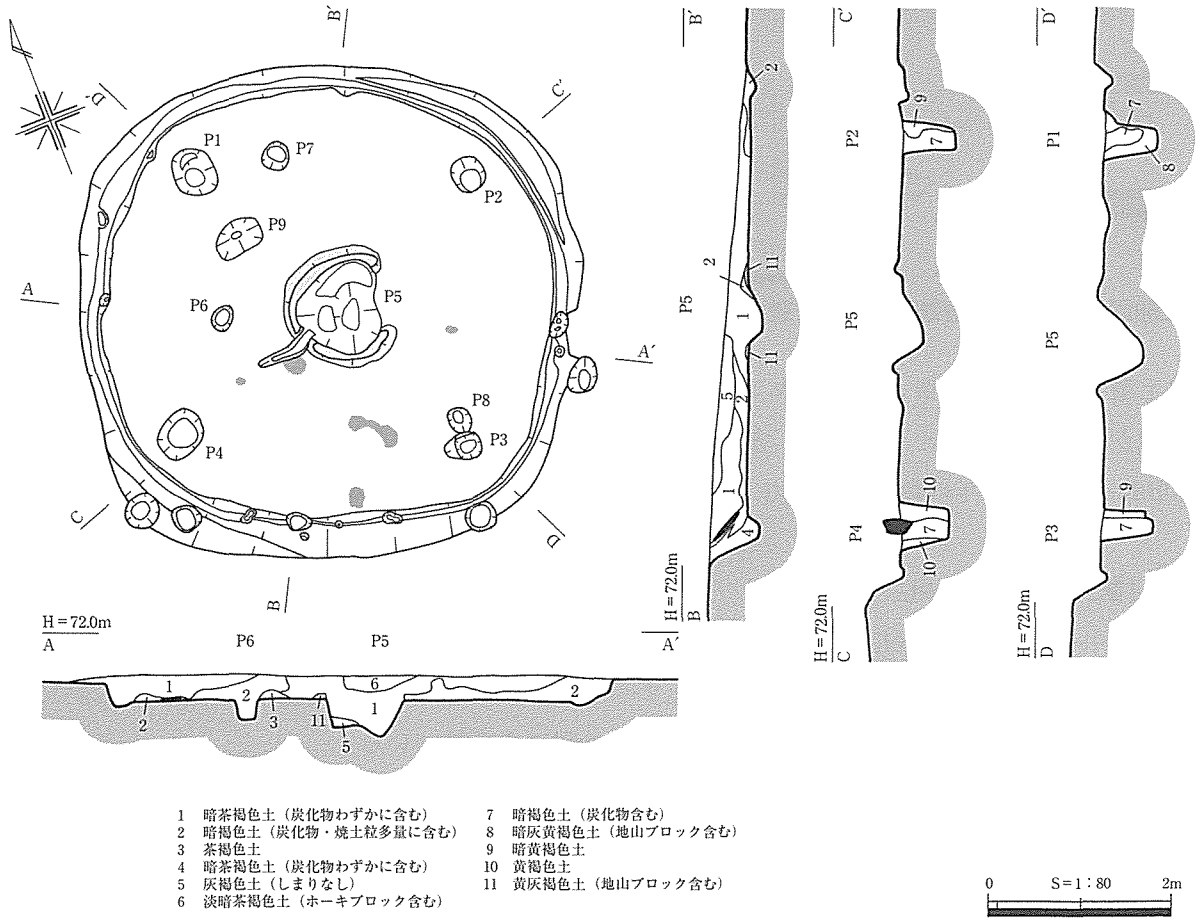
調査区中央部のJ10・11グリッド内にあり、標高71.3m～71.7mのほぼ平坦面に立地する竪穴住居跡である。東側約１mにはSI169、南東側約２mにはSI168が近接する。

遺存状態はよく、平面は隅丸方形を呈す。南北4.5m、東西4.73m、床面積17.5㎡を測る。残存壁高は、南側で最大43㎝を測る。壁溝は、幅９～33㎝、深さ２～９㎝を測り、全周する。断面は逆台形状を呈す。溝内に径10㎝前後のピットがあり、堰板を留める杭跡と考えられる。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱穴間距離はP1-P2から順に2.9m、2.8m、3.0m、2.7mである。すべての主柱穴で柱痕が確認でき、復元される柱径は約20㎝前後である。P5は中央ピットと考えられ、部分的に途切れるが、周囲には高さ約５㎝、幅20㎝前後の土手に囲まれる。平面形は不整形で一部二段掘りされている。埋土に炭化材が落ち込んでおり、焼失時には開口していたと考えられる。南西側には、土手を切り込んで長さ70㎝、幅10㎝前後、深さ７㎝前後の溝が接続する。

床面南側で焼土面が、大小あわせて６箇所検出された。後述するように当住居は焼失しているため、焼失の際に形成されたものか、生活時に形成されたものかどうかは不明である。

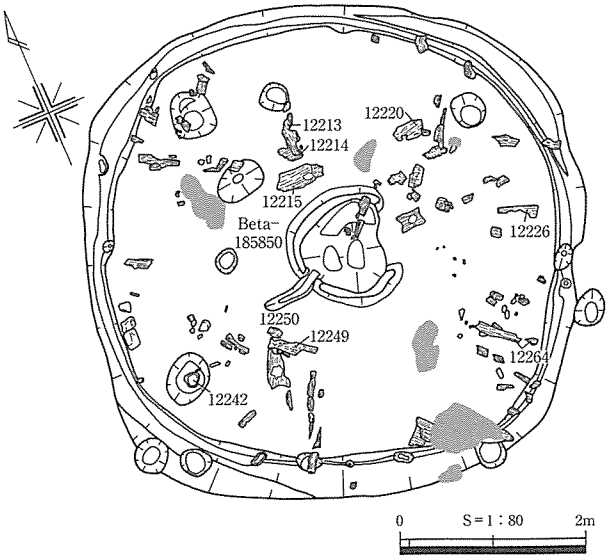
また、床面のほぼ全域にわたって炭化材及び焼土が検出され、焼失住居であることが判明した。部



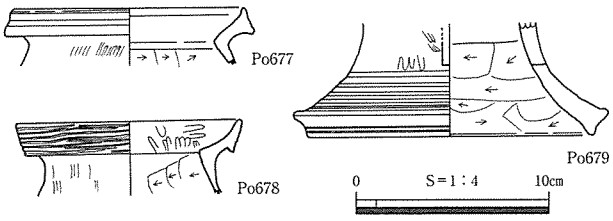
第266図　笠見第３遺跡SI157遺構図

表90　笠見第３遺跡SI157ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	52×45－56	主柱穴	P8	28×23－20	
P2	36×34－55	主柱穴	P9	54×36－12	
P3	40×28－54	主柱穴	P10	39×24－35	
P4	55×42－55	主柱穴	P11	32×28－28	
P5	97×90－48	中央ピット	P12	32×30－51	
P6	28×22－19		P13	38×29－25	
P7	29×29－15				



第267図　笠見第３遺跡SI157炭化材出土状況



第268図　笠見第３遺跡SI157出土遺物実測図

材が分かるものとしては、住居中心に向かって出土したものは垂木と考えられ、丸太状のもの（№12213・12250など）と板状のもの（№12256）がある。その他、P4には炭化した柱が約20cm立ったまま遺存している。径は約15cmである。また、垂木№12213の下の№12214は、桁又は梁材と思われる。同様の出土状況は№12250と№12249でも窺え、後者が桁又は梁材と考えられる。炭化材の樹種同定の結果、№12213・12214・12264はスダジイ、№12215・12220・12249はタブノキ、№12226・12229・12264はヤマグワ、№12242はサクラ属という結果であった。同時期の焼失住居に比べ、多様な樹種が用いられ、判明した限りではクリが用いられていないのが特徴である。また、炭化材の上に盛り上がるように焼土が乗る状況が窺え、土屋根であった可能性がある。

埋土は不規則な状態で６層に分層できた。焼失の際に土屋根材が崩落した状態であったものと考えられる。

出土遺物は、図化したものに弥生土器甕Po677・678、高杯Po679がある。いずれも、細片で、床面に近い位置で炭化材と一緒に出土している。

出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられ、出土遺物が床面上にはほとんどなく、故意の放火である可能性がある。また、^{14}C年代測定では、1860±60B.P.、A.D. 110年の数値が得られ、ほぼ土器型式に見合う年代観が与えられよう。（牧本）

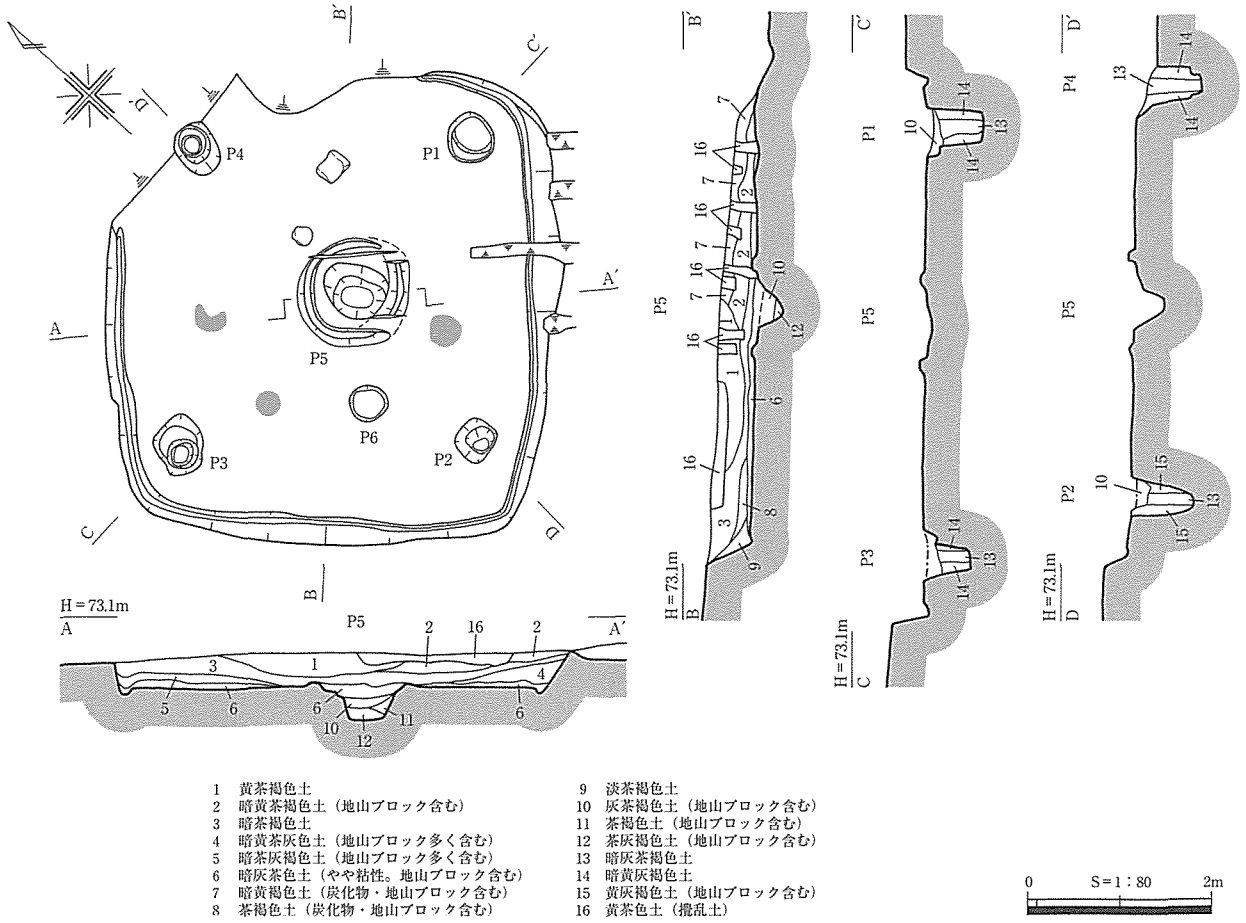
SI158（第269・270図、PL. 55・136）

調査区中央やや南側、K12グリッドの標高72.5～73.0mに位置する。北西側はSI159と接する。

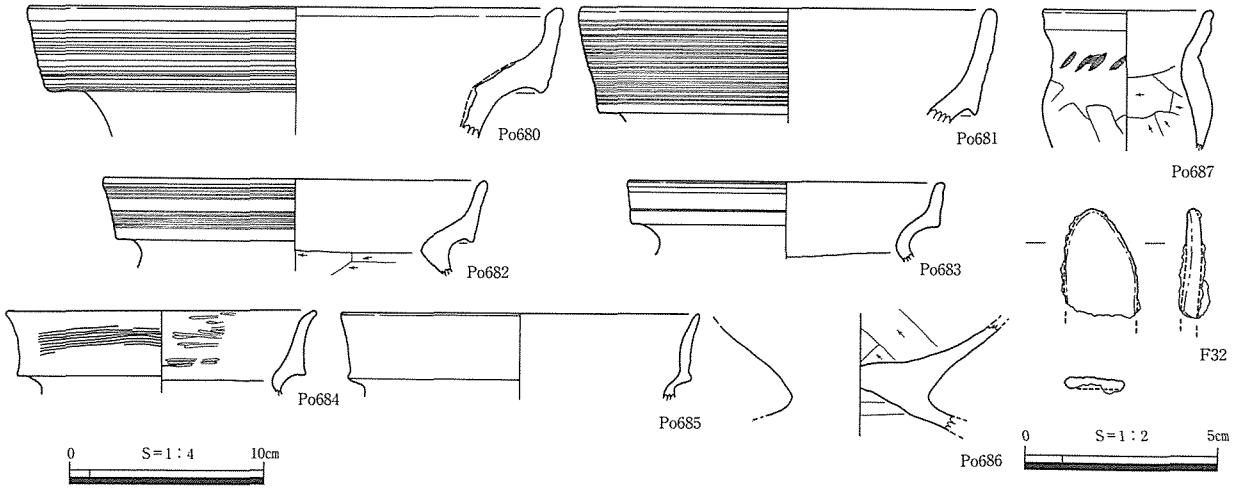
平面隅丸方形の竪穴住居跡である。一辺4.8～5.0m、床面積は18.0m^{2}を測る。壁高は最高で45cm残存する。北東側では周壁および壁溝、床面も攪乱で削平を受けている。

主柱穴はP1～P4で、柱間距離はP1-P2から時計回りに3.0m、3.2m、3.2m、3.2mである。柱直径はそれぞれ15cm前後に復元できる。P5は中央ピットで、周囲には地山を削り出して成形した環状の土手を廻らせ、その内側に平坦面を持つ。P6は性格不明である。

埋土は暗茶色系のものが主体となる。



第269図　笠見第３遺跡SI158遺構図



第270図　笠見第３遺跡SI158出土遺物実測図

出土遺物には、弥生土器甕Po680～685、脚付甕Po686、小型甕Po687がある。Po687が床面直上から出土している以外は、埋土中からの出土である。

時期は、Po684・685が示す清水Ⅵ－２様式、弥生時代後期終末ごろと考えられ、清水Ⅴ－３期、弥生時代後期後葉のPo680～683・687は、混入した可能性がある。（西川）

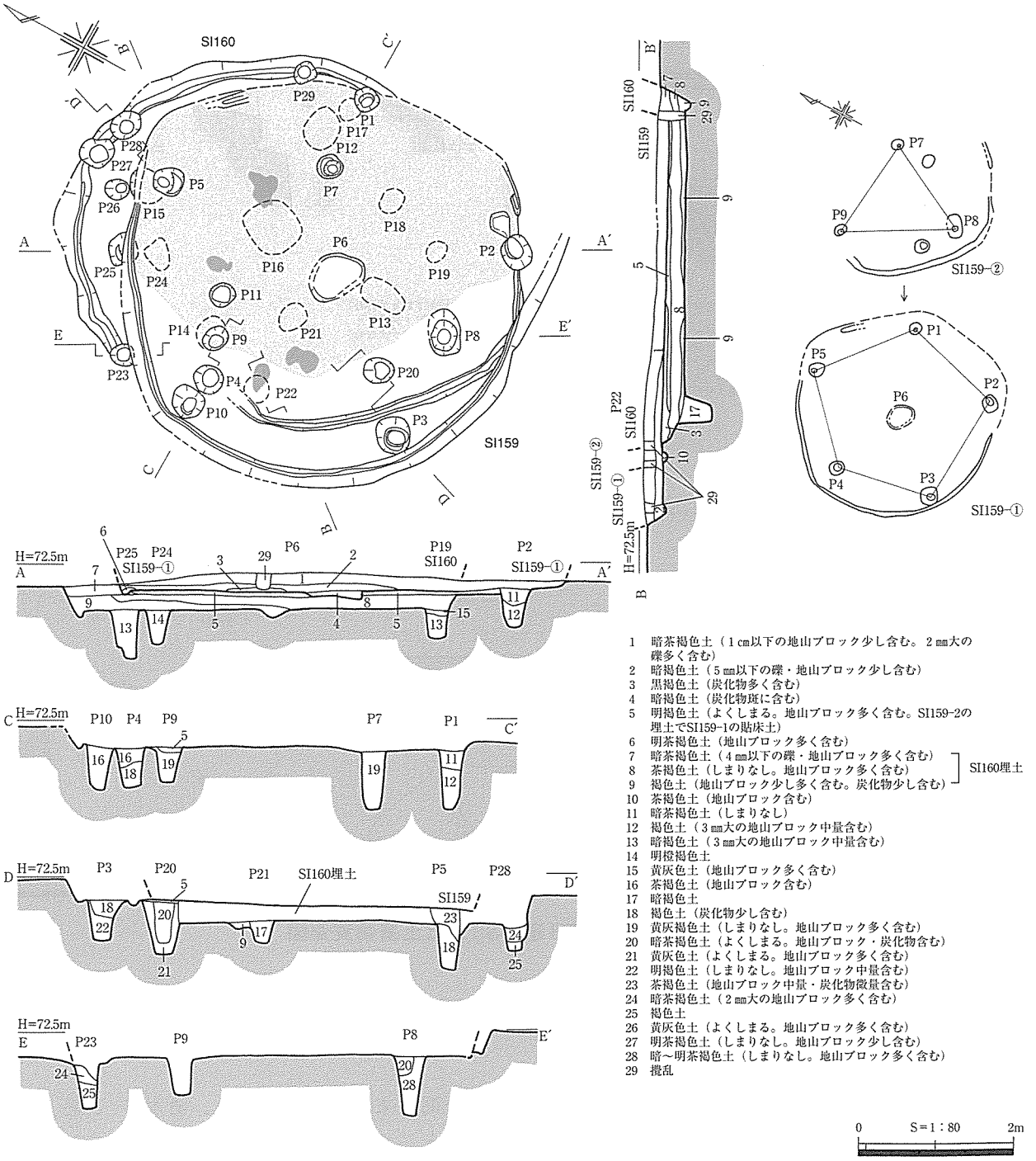
SI159（第271・272図、PL. 55・136）

調査区中央J～K12グリッド内にあり、標高72.5mのほぼ平坦面に立地する。SI160を切り、南側でSI158と近接する。当遺構は１回の建て替えがあり、新しい建物から順にSI159－１、２と呼称する。

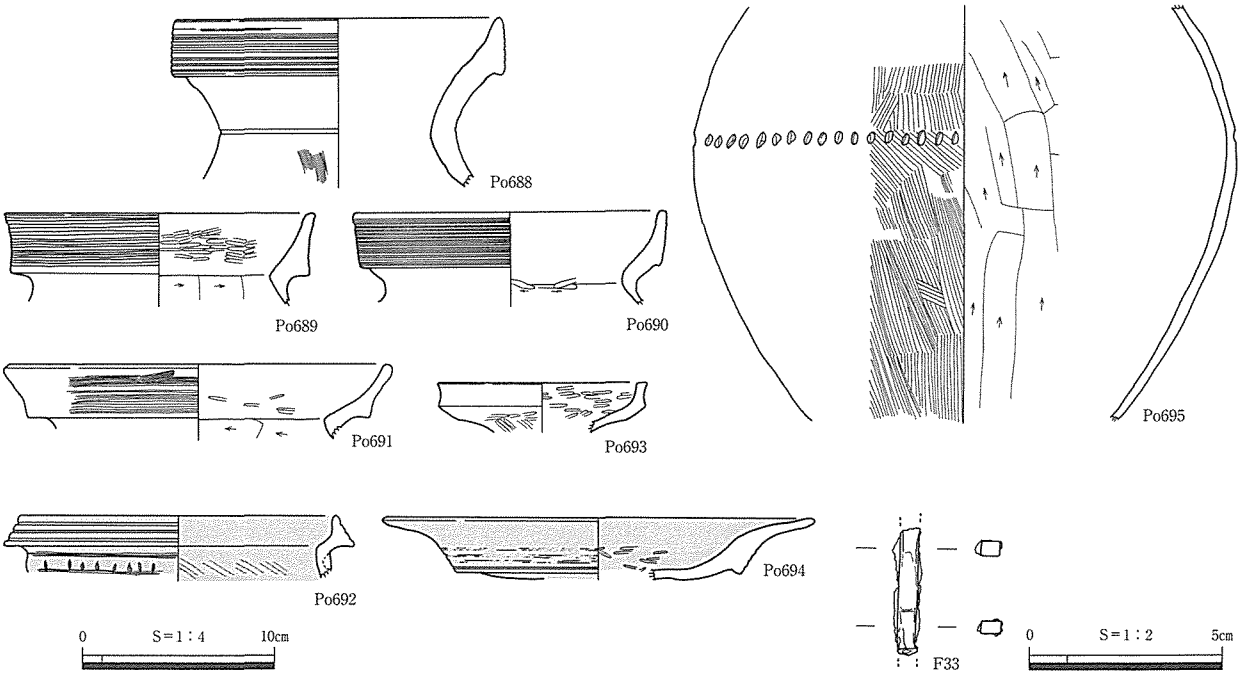
表91　笠見第３遺跡SI158ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	55×48－60	主柱穴(柱痕有)	P4	63×44－65	主柱穴(柱痕有)
P2	46×45－64	主柱穴(柱痕有)	P5	68×56－38	中央ピット
P3	64×53－48	主柱穴(柱痕有)	P6	40×37－10	不明

SI159－１は、遺存状態が悪く東壁は検出に至らなかった。平面は不整五角形を呈し、残存最大長5.5m、床面積21.2m²を測る。残存壁高は南側で最大32cmである。壁溝は西半分で検出した。幅約10



第271図　笠見第３遺跡SI159遺構図



第272図　笠見第３遺跡SI159出土遺物実測図

～15cm、深さ約５cm、断面Ｕ字状を呈する。

主柱穴はP1～P5の５基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.7m、2.85m、2.5m、2.6m、2.8mである。P6は中央ピットと考えられる。平面形は不整形で浅く、埋土内に炭化物を少量含む。

表92　笠見第３遺跡SI159ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	32×28－73	主柱穴	P7	35×30－72	建て替え前
P2	43×40－50	主柱穴	P8	60×42－75	建て替え前
P3	48×41－49	主柱穴	P9	35×28－41	建て替え前
P4	40×37－49	主柱穴	P10	45×41－55	
P5	40×35－73	主柱穴	P11	32×30－19	
P6	74×54－13	中央ピット	P20	36×35－55	建て替え前

埋土は、部分的に炭化物を多く含む第３層が床面上に堆積しているが、基本的に地山ブロックを含む土による自然堆積と考えられる。その直下の貼床土は、地山ブロックを多く含むよくしまった第５層で、主に床面中央から北側部分を覆っている。これは、SI159－２から１へ変わる際に施されたもので、SI159－２の範囲を覆っている。南側の壁溝上にも貼床が施されていたと推察される。

床面上では数箇所の焼土面を検出した。

SI159－１の北側貼り床を除去し、**SI159－２**を検出した。遺存状態は悪く、北側壁溝の一部とピットを検出したのみであった。平面形は不整形で、長軸4.5m、短軸4.0m、床面積17㎡を測る。壁溝は幅約５～15cm、深さ約６cm、断面Ｕ字状を呈する。

ピットは５基検出し、主柱穴と考えられるのはP7～P9である。主柱間距離はP7-P8から順に2.4m、2.9m、2.6mである。P20の断面で柱痕跡が認められたが、配置から主柱とは見なし難く、用途不明である。中央ピットは検出されなかった。

遺物はすべて埋土中からの出土である。壺Po688、甕Po689～692、高杯Po693・694、また、SI159－２のP20内から出土した甕Po695、用途不明鉄器F33がある。

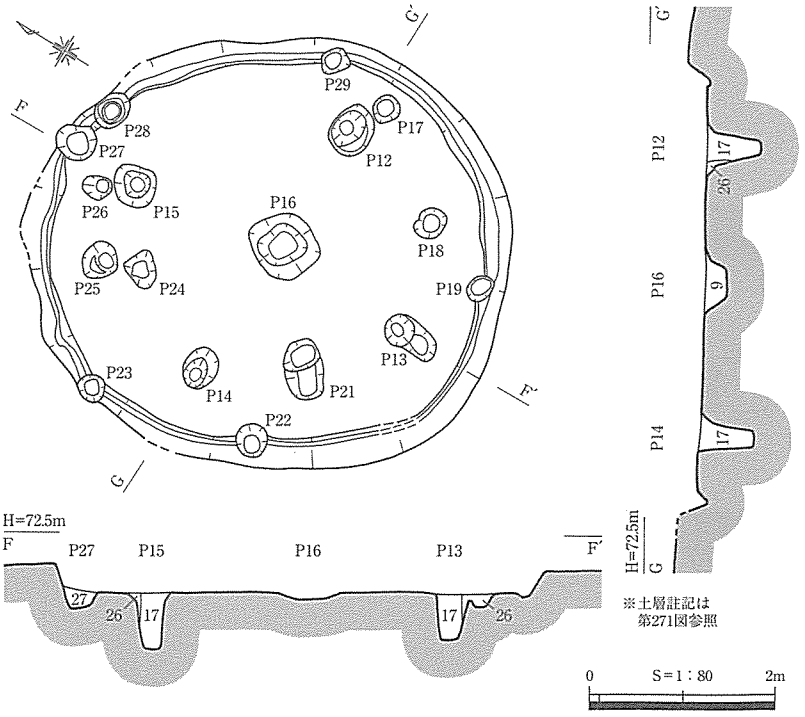
出土遺物から、SI159－１、－２とも時間差が認められず、いずれも清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後

葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI160（第273・274図、PL. 55・135）

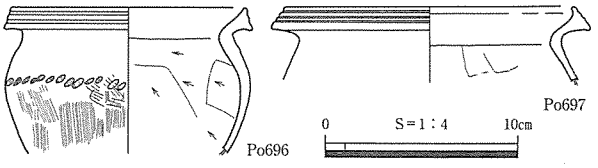
調査区中央J12グリッド内にあり、標高72.1mのほぼ平坦面に立地する。SI159に埋土の大半を削平されているが、貼り床土を除去し、20cmほど掘り下げSI160の床面を検出した。

遺存状態は比較的よい。平面は南北にやや長い楕円形を呈し、長軸5.2m、短軸4.5m、床面積15m²を測る。残存壁高は南側で最大22cmである。壁溝は全周する。幅約10～20cm、深さ約５cm、断面は逆台形状を呈する。



第273図　笠見第３遺跡SI160遺構図

主柱穴はP12～P15の４基で、主柱間距離はP12-P13から順に2.2m、2.2m、2.1m、2.3mである。P16は中央ピットと考えられ平面形は不整形で、埋土に炭化物を少量含む。内側に被熱痕跡は見られなかった。主柱軸線上にあるP21は補助柱穴としての用途が考えられる。その他のピットに関しては、建て替え時の痕跡が認められないことや、壁溝を切っているものもあることから後世の柱穴跡の可能性が考えられる。



第274図　笠見第３遺跡SI160出土遺物実測図

表93　笠見第３遺跡SI160　ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P12	55×42－58	主柱穴	P22	35×32－35	
P13	60×31－48	主柱穴	P23	30×30－35	
P14	42×30－55	主柱穴	P24	40×32－41	
P15	50×46－59	主柱穴	P25	40×38－59	
P16	70×64－24	中央ピット	P26	30×23－26	
P17	30×28－17		P27	45×40－19	
P18	35×28－32		P28	41×33－35	
P19	30×25－36		P29	26×24－25	
P21	62×35－26				

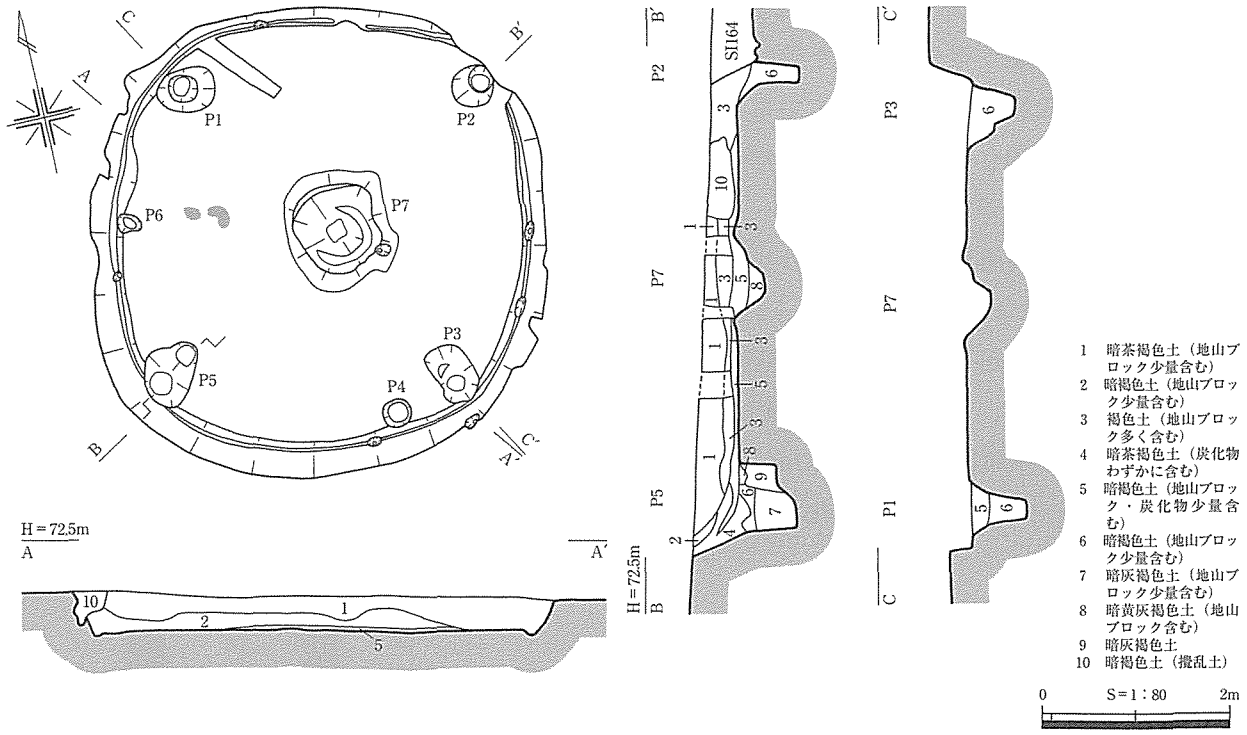
埋土は、炭化物を少量含む第９層などが堆積しているが、自然堆積によると考えられる。

遺物は埋土中から出土した。いずれもピット内からの出土である。小型甕Po696は、主柱穴であるP12内から、甕Po697はP24から出土した。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI163（第275・276図、PL. 56・136）

調査区中央J12グリッド内にあり、標高72.0mのほぼ平坦面に立地する。西側にSI149が隣接し、北



第275図　笠見第３遺跡SI163遺構図

東側でSI164に掘り込まれる。

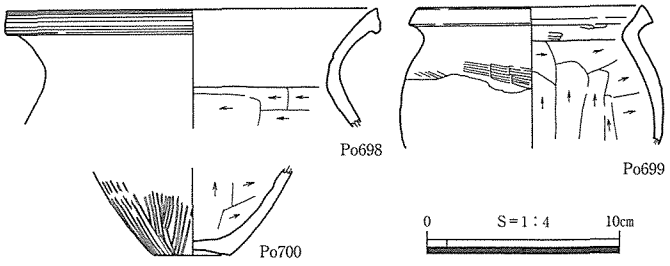
平面形は隅丸方形を呈し、一辺4.9m、床面積15.3㎡を測る。残存壁高は南側で最大52㎝である。壁溝は全周する。幅約５～20㎝、深さ約８㎝である。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～3、P5の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に3.1m、3.2m、3.1m、3.1mである。主柱穴は掘方が上方でやや広がり、埋土も自然堆積の様相を呈していることから、抜き取られた可能性がある。P7は中央ピットと考えられ、周囲に地山削り出しの幅約６㎝、高さ約５㎝を測る土手を持つ。土手の内側に被熱痕跡は見られなかった。中央ピット西側で被熱硬化した焼土面を検出した。

埋土は、中央ピット上層から床面直上にかけて炭化物を少量含む第５層が見られるが、自然堆積したものと考えられる。

遺物は埋土中から出土している。弥生土器壺Po698、甕Po699、底部Po700がある。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）



第276図　笠見第３遺跡SI163出土遺物実測図

SI164（第277・278図、PL. 56・136）

調査区中央I11グリッド内にあり、標高71.7m～71.0mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。南西側でSI163を掘り込んでいる。当遺構は壁溝が二重にめぐり、埋土で

表94　笠見第３遺跡SI163ピット一覧表

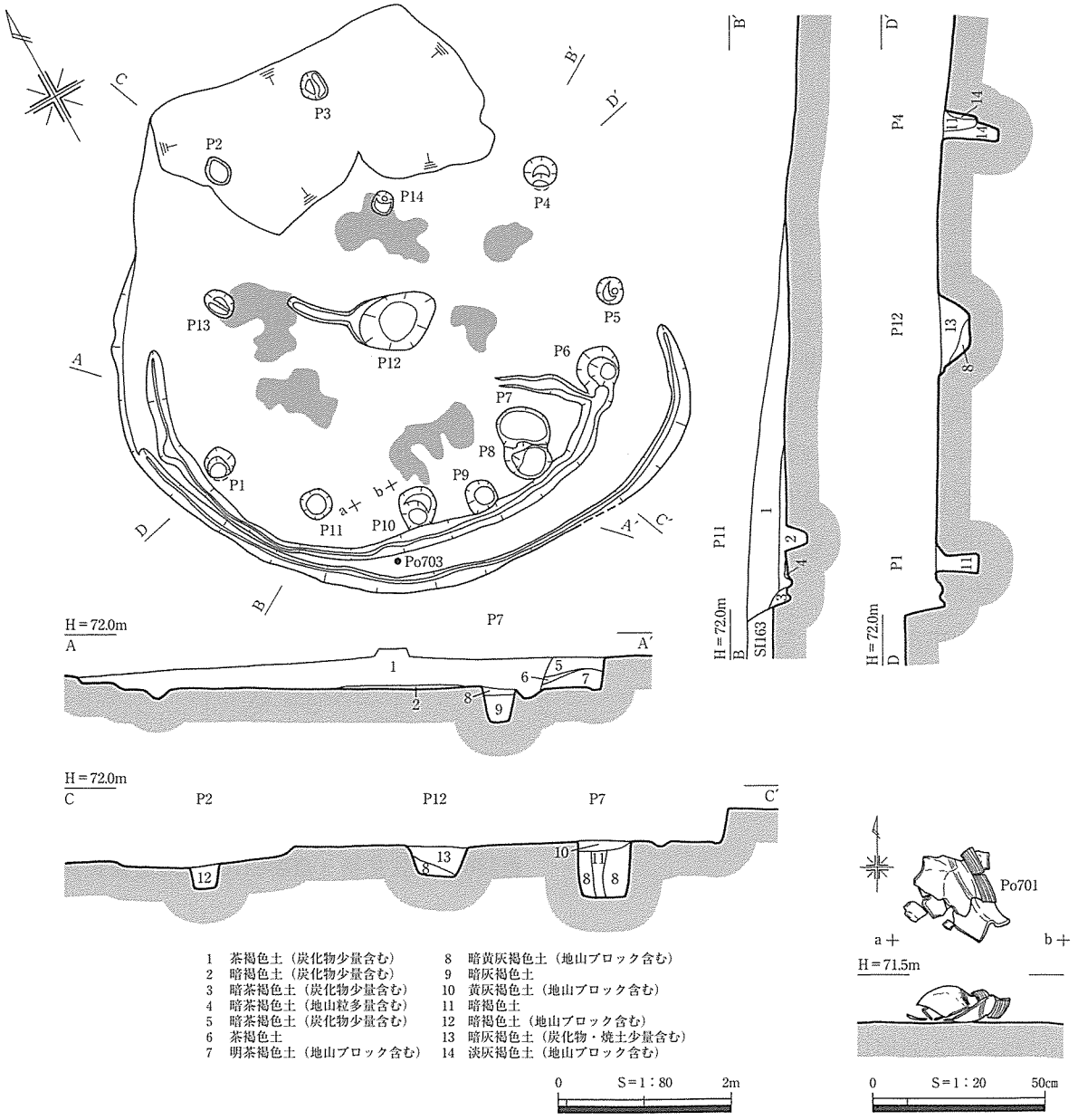
ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
P1	60×47－60	主柱穴	P5	70×55－61	主柱穴
P2	50×35－66	主柱穴	P6	25×18－11	
P3	65×40－50	主柱穴	P7	97×90－30	
P4	30×30－76				

は切り合いが認められることから、２棟の建物と判断され、新しい建物からSI164－１、２と呼称する。両遺構とも北側が後世の削平を受けているため、遺存状態はよくない。

SI164－１は、北側が削平を受けている。平面形は不整円形を呈すと考えられ、径5.5m、床面積推定21.8㎡を測る。残存壁高は南側で最大30㎝である。壁溝は南側でのみ検出できた。幅約12～22㎝、深さ約７㎝、断面はＵ字状である。

SI164－２も北側の遺存状態はよくないが、平面形は多角形を呈すと考えられる。長軸約6.5m、短軸約6.3m、床面積は推定31.2㎡を測る。残存壁高は南側で最大42㎝である。壁溝も南側のみの検出である。幅約５～18㎝、深さ約５㎝、断面はＵ字状である。

ピットはSI164－１、２合わせて14基検出した。SI164－１の主柱穴はP1、P2、P4、P8の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に、3.5m、3.7m、3.4m、3.7mを測る。P12は中央ピットと考えられ、平面は不整楕円形で、埋土に焼土および炭化物を少量含む。上記のピット以外ではP10、P13、P14はSI164－１に

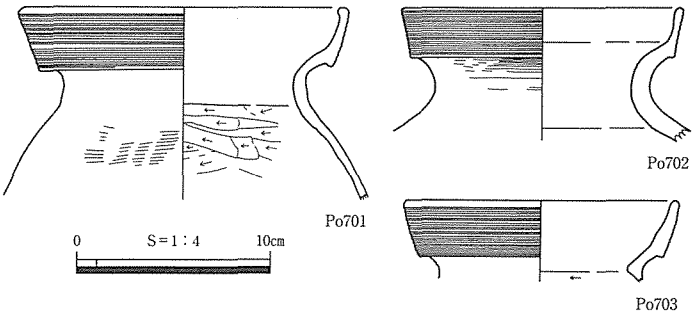


第277図　笠見第３遺跡SI164遺構図

属し、P3、P5、P7、P9、P11はSI164－２に属すると判断した。特にP7、P9、P11は上層が地山ブロックを多く含んだ土で覆われており、SI164－１を構築する際に施された貼床と考えられ、SI164－２に属するものと判断される。しかし、SI164－２のピットで柱痕跡が明瞭なP7以外は、等間隔に並ばないが多角形に配される主柱穴と判断される。

表95　笠見第３遺跡SI164ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	37×35－49	SI164－１主柱穴	P8	55×43－65	SI164－１主柱穴
P2	35×27－32	SI164－１主柱穴	P9	40×37－38	SI164－２
P3	30×25－21	SI164－２	P10	48×40－56	SI161－１
P4	36×35－55	SI164－１主柱穴	P11	35×35－36	SI164－２
P5	31×28－51	SI164－２	P12	90×66－37	SI164－１中央ピット
P6	53×50－50	SI161－１	P13	38×26－28	SI161－１
P7	65×47－69	SI164－２	P14	25×25－20	SI161－１



第278図　笠見第３遺跡SI164出土遺物実測図

SI164－１の床面上では、溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は中央ピットから西側に伸びる溝と、南東側壁溝から中央ピット寄りに伸びる溝とがある。幅は約10～22cm、深さ約７cmを測る。焼土面は中央ピット周囲で認められた。また、床面直上埋土で炭化物を含む層が見られるが、含まれる量は少量であり、建物が焼失し生成されたとはみなし難い。

埋土は、両遺構とも自然堆積であると考えられる。また、SI164－１は、SI164－２が完全に埋没してから掘り込まれていた。このことからSI164－１と２の関係は、建て替えではなく重複しているものと判断される。

遺物は床面と埋土中から出土した。SI164－１の床面上で弥生土器甕Po701、埋土中から甕Po702が出土している。またSI164－２の南側壁溝の20cm上で甕Po703が出土している。

出土遺物から、両遺構とも清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに収まり、この時期内で重複する竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

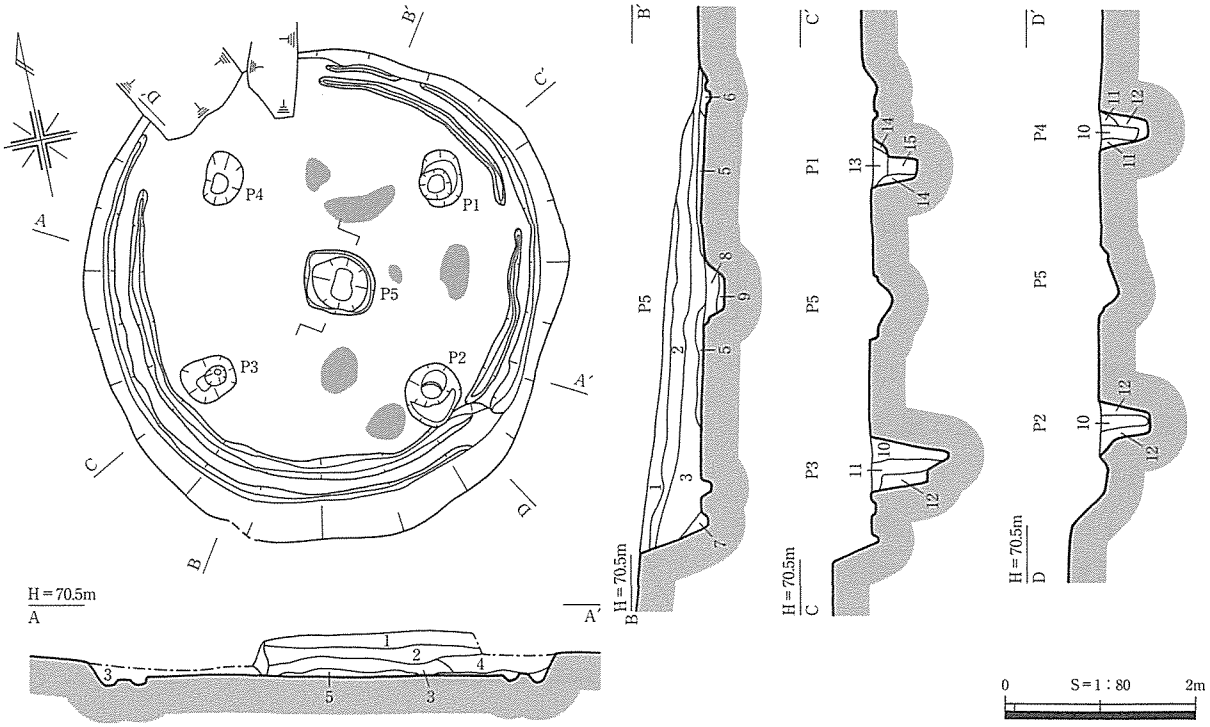
SI165（第279図、PL. 57）

調査区中央北側H10グリッド内にあり、標高70.4m～69.8mの南から北へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。南西にSI154が隣接している。当遺構は１回の建て替えがある。

遺存状態はよい。平面はやや南北に長い円形で、長軸5.2m、短軸5.0m、床面積15.9m²を測る。残存壁高は南側で最大67cmである。壁溝は北側で途切れるが、ほぼ全周する。二重に検出し、外側は幅約５～20cm、内側幅５～23cmで、深さはともに約５cm、断面は逆台形状を呈する。内側の溝は、地山ブロックを含むしまった土で覆われており、建て替え前の壁溝と考えられる。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.1m、2.3m、2.1m、2.3mである。P2～P4では柱痕跡が認められ、推定される柱径は約16cmである。P5は中央ピットで、平面は不整楕円形で、二段掘りされている。埋土上層で炭化物を少量含む。建て替えは同主柱穴を再利用して床面のみ拡張したと考えられる。

埋土は、床面直上で炭化物を多量に含む第５層が認められた。床面上でも中央ピットの北側から南



1　褐色土（地山礫多く含む）
2　暗茶褐色土（地山礫・ホーキブロック含む）
3　暗褐色土（炭化物少混、ホーキブロック多く含む）
4　茶褐色土（地山礫・ホーキブロック含む）
5　黒褐色土（炭化物多混、ホーキブロック少量含む）
6　黄灰褐色土（粘性あり）
7　暗褐色土
8　暗褐色土（炭化物少量含む）
9　黄灰暗褐色土（ホーキブロック含む）
10　暗褐色土（しまりなし）
11　明赤茶褐色土（よくしまる。ソフトローム・ホーキブロック含む）
12　黄灰色土（よくしまる。ホーキブロック層）
13　茶褐色土（炭化物少量含む）
14　黄茶褐色土（しまりなし。ソフトロームブロック多く含む）
15　明黄茶褐色土（しまりなし。ソフトロームブロック多く含む）

第279図　笠見第３遺跡SI165遺構図

側にかけて被熱硬化した焼土面を検出した。炭化材の出土は見られなかったが、埋土の状況から、当遺構は廃絶後まもなく焼失した可能性が高い。

表96　笠見第３遺跡SI165ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	57×45－46	主柱穴	P4	55×38－52	主柱穴
P2	62×56－54	主柱穴	P5	76×65－22	中央ピット
P3	60×41－82	主柱穴			

遺物は埋土中から出土したが図化するに至らなかった。しかし、検出中出土した遺物が清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろに相当する遺物であり、この時期の竪穴住居跡で、建て替えもこの時期内で行われたと判断される。（岩井）

SI166（第280～282図、PL. 57・106・137・174）

調査区中央部、K11グリッドの標高72.0～72.4mの緩斜面に位置する。北東側でSI167を掘り込む。

平面隅丸長方形を呈す竪穴住居跡である。壁溝が二重にめぐり、床面の拡張が行われている。拡張後の規模は長軸6.4m、短軸5.3mで床面積は23.2㎡を測る。壁高は最高で70cm残存する。壁溝は幅10～15cm、深さ10cmで、底面は丸みをおびる。その内側には一回り小さな拡張前の壁溝が廻る。これは貼床土除去後に検出した。内側壁溝で囲まれる床面積は17.7㎡を測る。

主柱穴はP1～P4で、柱間距離はP1-P2から時計回りに3.4m・3.6m・3.2m・3.6mである。復元できる柱径は14cm前後である。P5～P8は主柱間にあり、補助柱穴と考えられる。P6・８は主柱穴と同規模である。一方、P5・７は柱復元径10cmと細く、掘方も15～30cmと浅い。この他、柱穴と考えられるものにはP10～P12がある。これらの掘方も20～30cmと浅い。P10・14は掘方を掘り込んで柱を抜き

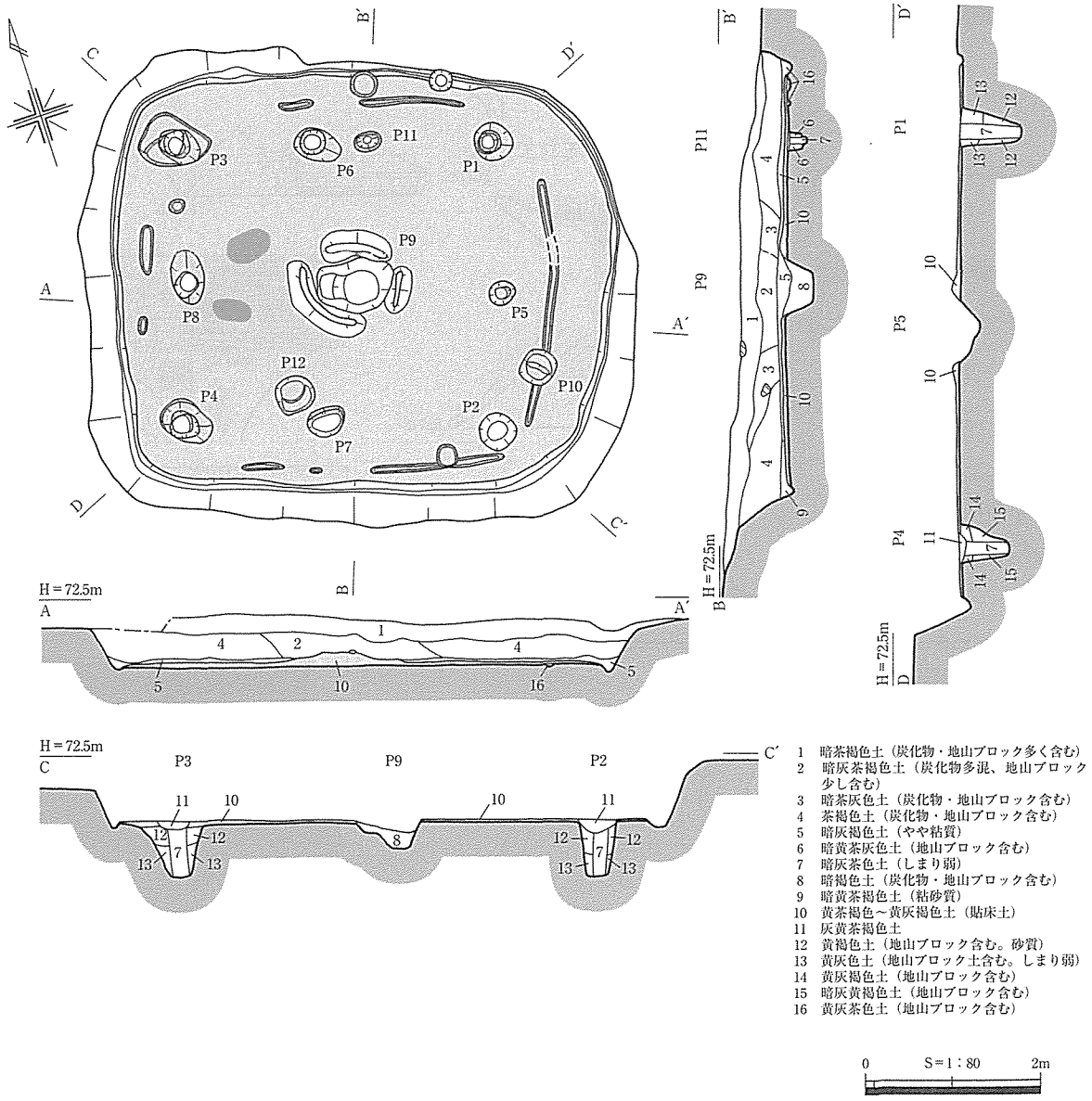
取っている。柱径を復元できるP11は８㎝と細い。P9は中央ピットで、周囲には盛土を行って成形した土手が廻り、その内側には平坦面を持つ。

土層断面観察から、貼床土を施す前にP1～P4、P5～P8、P10～P12に柱が立っており、主柱の位置は拡張前・後とも同じであることから、拡張時に下部構造まで解体した可能性は低い。P10～P12は拡張前建物の壁溝を掘り込み、貼床施工直前には撤去されていることから、上部構造の改修の際、足場的な役割を果たす可能性が考えられる。

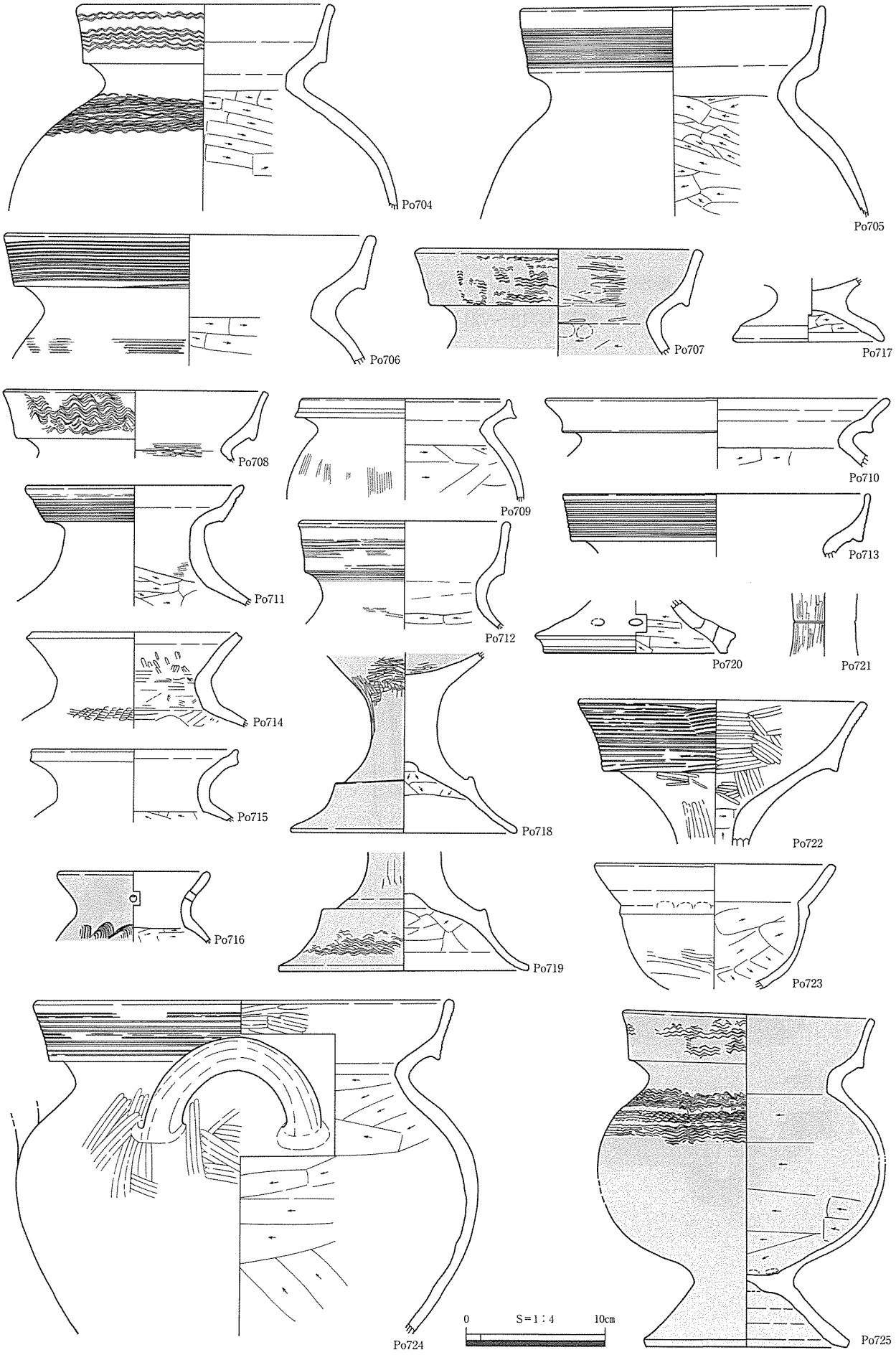
埋土は、５層に分層できた。後述するように人為的な埋め戻しの可能性がある。

埋土中からは大量の土器が出土した。図化したものは弥生土器壺Po711・712、甕Po704～710、把手付甕Po724、脚付甕Po717・724、高杯Po718～721、鉢Po723、鼓形器台Po722、有溝石錘Ｓ52、鉇F34、不明鉄器F35、茎部F36がある。

出土遺物から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのもので、埋土上層から下層まで幅広い範囲での出土状況からみて、建物解体後、埋め戻しに伴って遺物も一緒に投げ込まれたものと考えられる。（西川）



第280図　笠見第３遺跡SI166遺構図



第281図　笠見第３遺跡SI166出土遺物実測図(1)

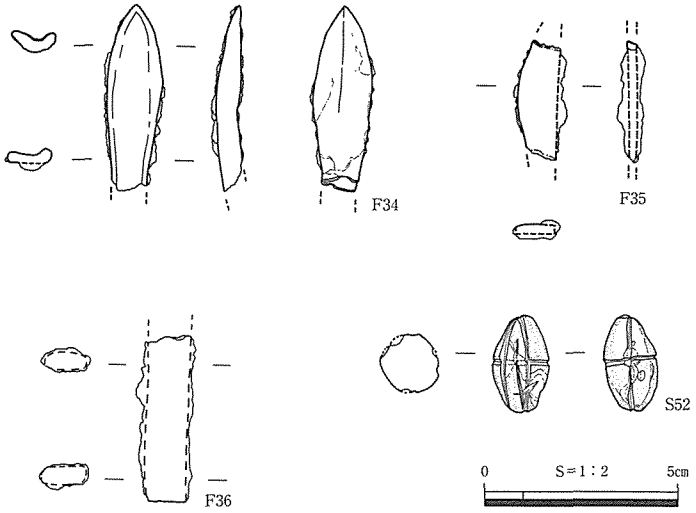
SI167（第283・284図、PL. 58・174）

調査区中央やや南寄り、K11グリッドの標高71.9～72.1mの緩斜面に立地する。南西側でSI166に掘り込まれる。平面円形を呈す竪穴住居跡で、直径4.5m、床面積は推定12.0㎡である。壁高は最高46cm残存する。壁溝は幅10cm、深さ８cmで、SI166重複箇所は部分的に残る。主柱穴はP1～P4で、柱間距離はP1-P2から順に2.4m、2.7m、2.4m、2.8mである。柱径は10cm前後に復元できる。P5は中央ピットで、壁溝に向って浅い溝がのびる。形態的な特徴から、本来は中央ピットの周囲に土手がめぐっていたものと思われる。

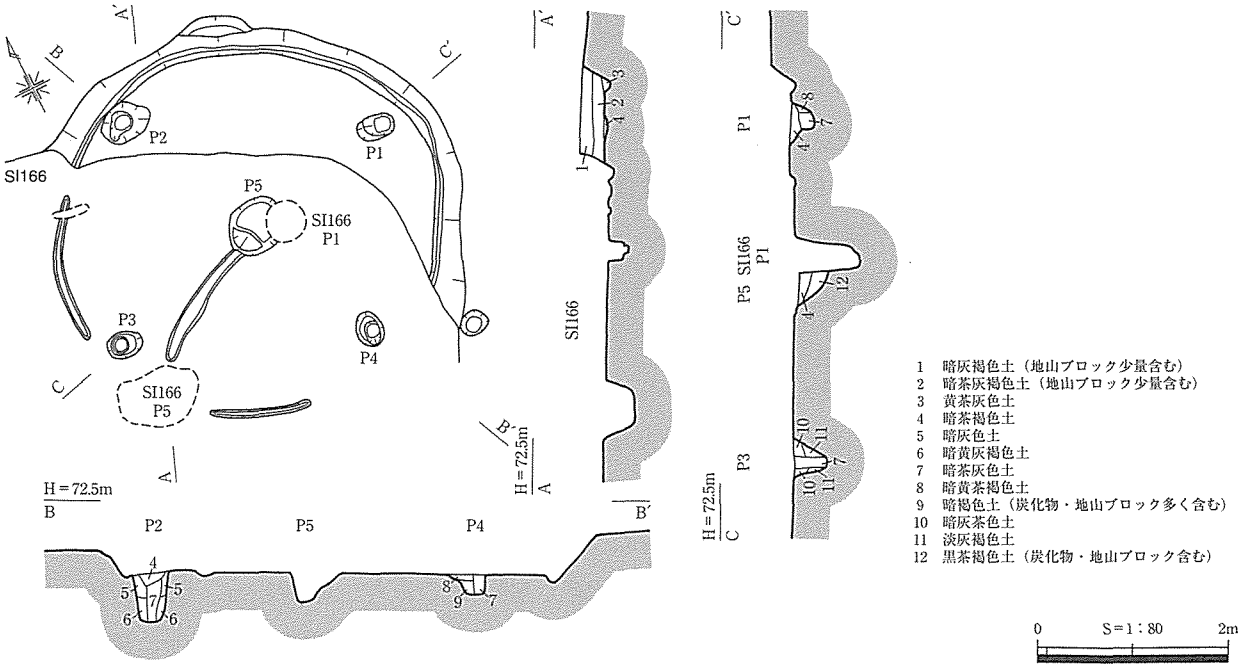
出土遺物には鉈F37がある。SI166との重複関係から、弥生時代後期後葉以前と考えられる。（西川）

表97　笠見第３遺跡SI166ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	44×43－68	主柱穴(柱痕有)	P7	44×33－17	補助柱
P2	40×40－65	主柱穴(柱痕有)	P8	61×39－56	補助柱
P3	82×60－68	主柱穴(柱痕有)	P9	84×64－36	中央ピット
P4	60×44－56	主柱穴(柱痕有)	P10	40×38－18	足場穴か
P5	31×26－30	補助柱	P11	30×22－19	足場穴か(柱痕有)
P6	54×36－54	補助柱	P12	44×42－18	足場穴か



第282図　笠見第３遺跡SI166出土遺物実測図(2)



第283図　笠見第３遺跡SI167遺構図

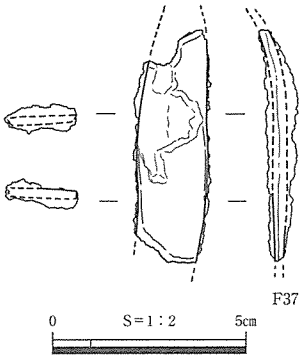
SI168（第285・286図、PL. 58・137）

調査区中央Ｊ～K10グリッド内にあり、標高71.5m～71.9mの緩斜面に立地する。北側にSI157、169が隣接する。

平面は隅丸方形を呈し、長軸6.1m、短軸5.6m、床面積25.1m²を測る。残存壁高は南側で最大34cmである。壁溝は部分的に途切れる。幅約15cm、深さ約６cm、断面は逆台形状を呈する。

表98　笠見第３遺跡SI167ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	41×25－21	主柱穴(柱痕有)
P2	38×30－36	主柱穴(柱痕有)
P3	56×40－26	主柱穴(柱痕有)
P4	38×28－53	主柱穴(柱痕有)
P5	64×56－37	中央ピット

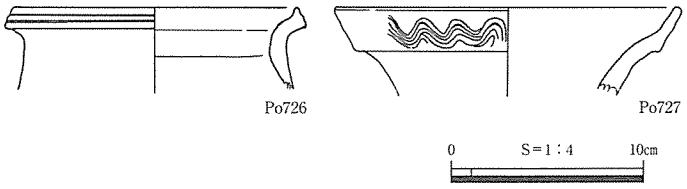


第284図　笠見第３遺跡SI167出土遺物実測図

主柱穴はP1、P3、P4、P6の４基で、主柱間距離はP1-P3から順に3.3m、3.2m、3.5m、3.4mである。P9は中央ピットと考えられる。平面形は不整方形で、西から南側にかけて地山削り出しの土手を持つ。土手は上端に平坦面を持たず断面山状を呈する。高さは約８cmである。埋土内に焼土粒、炭化物を少量含んでいる。内壁面に被熱痕跡は認められなかった。また、東側から溝が延びている。残存長80cm、幅約13cm、深さ約４cmを測り、先端はP7に切られている。溝内には深さ約10cmの小ピットを検出した。その他のピットに関して、P7は遺構埋土を切って掘り込まれているため、後世のピットであると考えられる。埋土は同じ様相を呈しているが、主柱軸線上から外れているため構造材に関わる柱穴ではないと考えられる。P7と同様に後世のピットの可能性もある。

表99　笠見第３遺跡SI168　ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	36×27－55	主柱穴	P7	25×23－17	
P2	28×22－28		P8	40×35－34	
P3	39×35－47	主柱穴	P9	105×105－23	中央ピット
P4	56×47－55	主柱穴	P10	28×25－26	
P5	35×35－37		P11	28×28－18	
P6	60×45－39	主柱穴			



第285図　笠見第３遺跡SI168出土遺物実測図

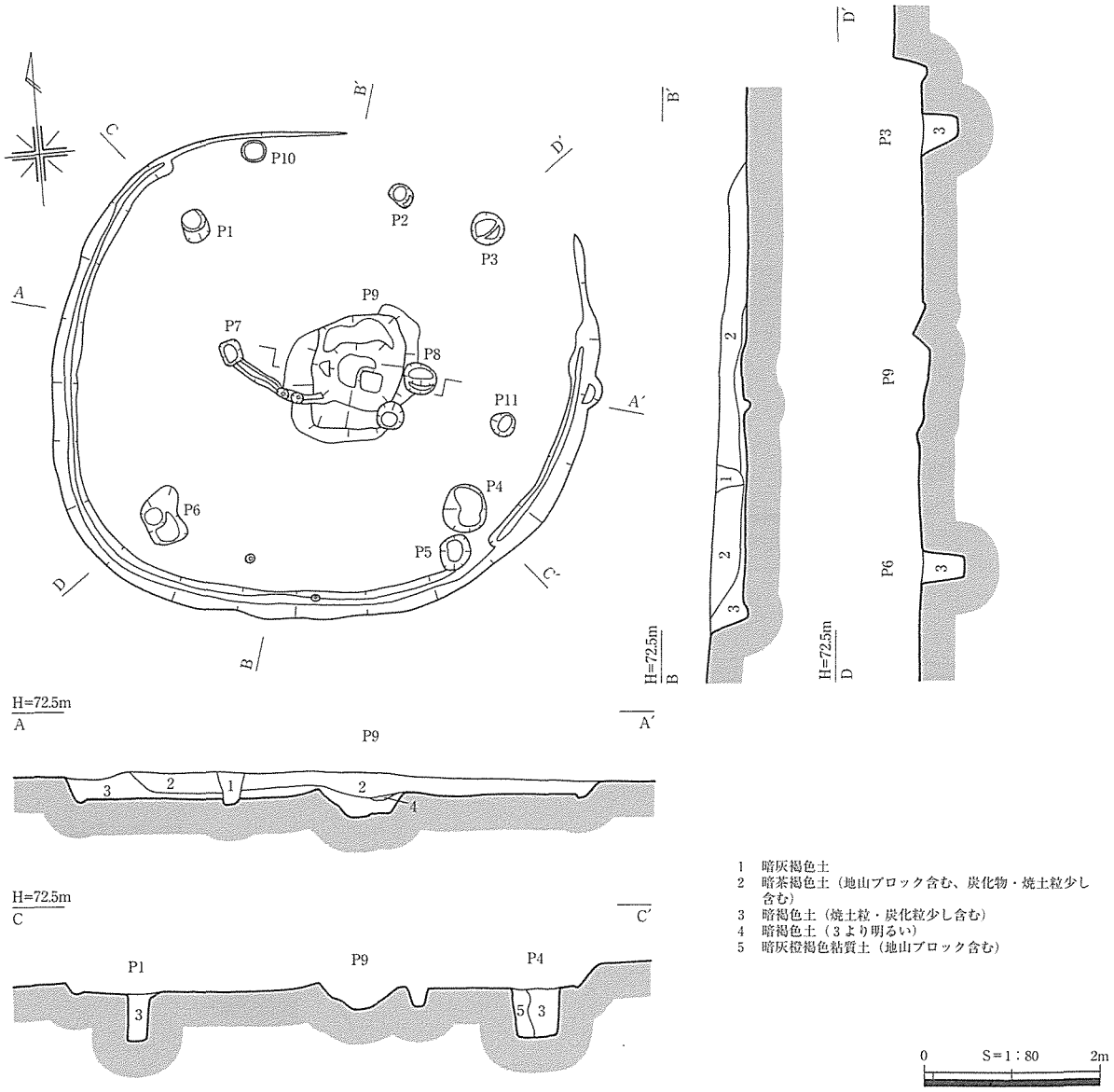
埋土は、全体的に少量の焼土や炭化物が含まれているが、床面に焼土面や炭化材など焼失の可能性を示すものが認められなかったことから、自然堆積と考えられる。

遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po726、器台Po727を図化した。出土した遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

SI169（第287・288図、PL. 58・59・137）

調査区中央J10グリッド内にあり、標高71.4mのほぼ平坦面に立地する。西側にSI157が近接する。当遺構は１回の建て替えがある。

平面形はやや南北に長い円形を呈し、長軸6.1m、短軸5.8m、床面積24m²を測る。壁高は南側で最大27cmである。壁溝は二重にめぐる。外側の溝は北側で途切れており、幅約15cm、深さ約10cmである。内側の溝は、削平された様子が窺える。北から東側にかけて途切れ、幅約５～15cm、深さ約６cmである。断面は両溝とも逆台形状を呈す。内側のものは、建て替え前の壁溝と考えられる。



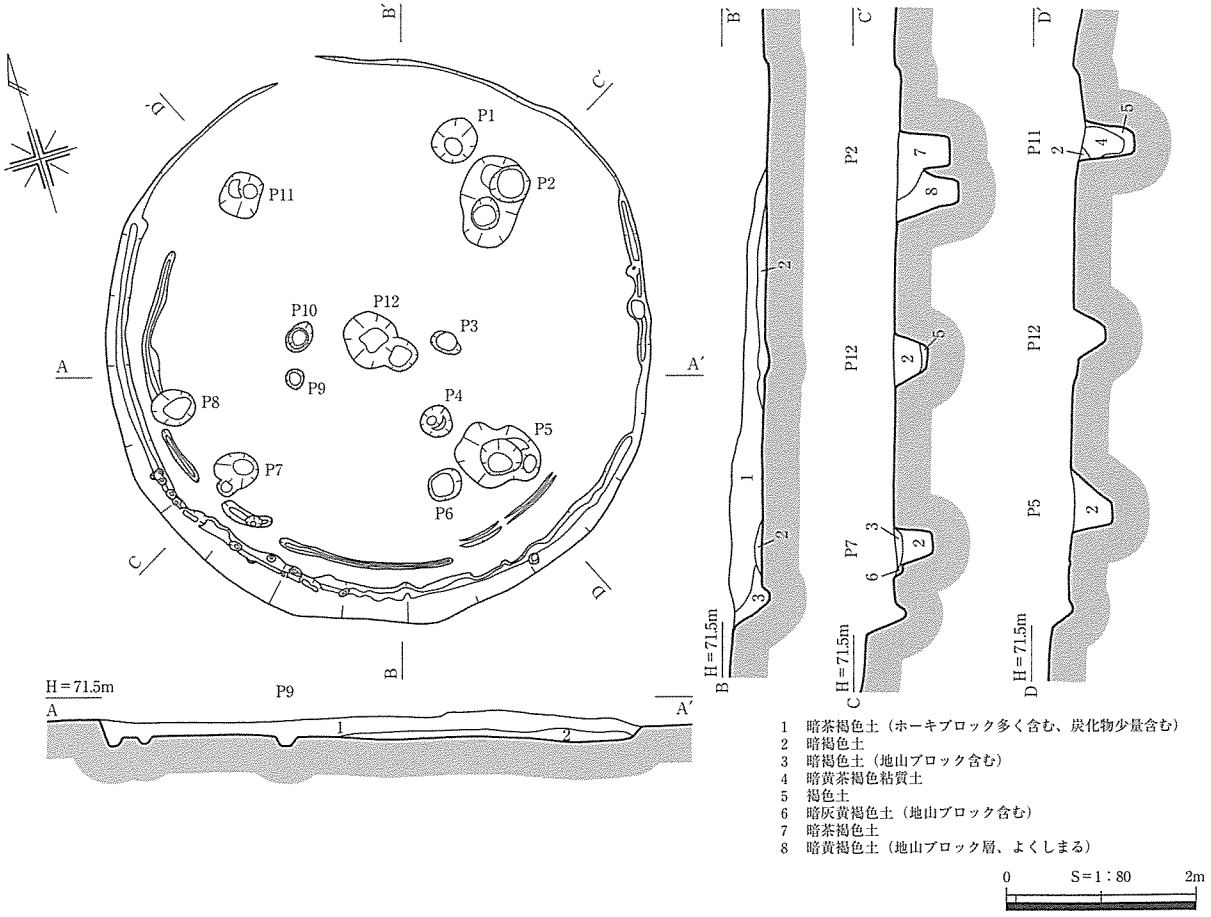
第286図　笠見第３遺跡SI168遺構図

主柱穴はP2、P5、P7、P11の４基で、主柱間距離は3.0m、2.8m、2.9m、2.8mを測る。中央ピットはP12と考えられ、平面は不整円形で、南東側に平坦面をもち二段掘りされている。P3とP10は、中央ピットを挟んで位置し、主柱軸線と平行することから、主柱以外の構造柱穴もしくは中央ピットに関わるものと考えられる。建て替えは同主柱穴を利用して行われ、P2のみ内側に寄っていたと判断され、主柱間距離はP2−P5から順に2.6m、2.8m、2.9m、2.5mである。建て替え前の平面形は楕円形を呈し、埋土は自然堆積と考えられる。

表100　笠見第３遺跡SI169 ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸−深さ(cm)	備　　考
P1	50×45−46	
P2新	98×65−54	主柱穴
P2古	98×54−64	建て替え前主柱穴
P3	32×22−30	
P4	35×30−54	
P5	90×70−43	主柱穴
P6	38×32−66	主柱穴？
P7	45×38−39	主柱穴
P8	50×37−43	
P9	21×18−10	
P10	34×24−25	
P11	50×40−54	主柱穴

遺物は、床面直上と埋土内から出土した。床面上では甕Po728、埋土内から甕Po729が出土した。出土遺物と形態的特徴から、清水Ⅳ−３様式、弥生時代中期末ごろの竪穴住居跡と考えられ、建て替えもこの時期内のものと考えら



第287図　笠見第３遺跡SI169遺構図

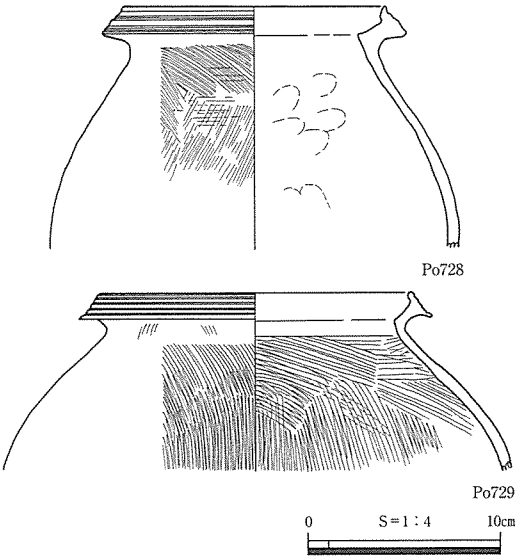
れる。（岩井）

SI170（第289・290図、PL. 59・107・108・174）

調査区中央北側谷部に近いD10グリッドにあり、標高67.5～68.6mの南から北へ下る斜面地に立地している。また、遺跡全体から見ると住居の密集する丘陵上からやや外れた位置にある。

平面形は隅丸方形を呈す。長軸4.15m、短軸4.0m、床面積は13.2㎡を測る。残存壁高は南側で最大73㎝を測る。壁溝は検出されなかった。

主柱穴はP1～P4の４基で、主柱間距離はP1-P2から順に1.9m、2.7m、1.9m、2.7mである。埋土から柱痕跡は明確に見られなかったが、P1～３の掘形内底面で沈み込んだ柱材跡と思われる窪みが見られた。このことから柱径は約16～20㎝ほどと推察される。P5は中央ピットと考えられ、東側に土堤をもつ。土堤は、長さ40㎝、幅約10㎝、高さ約4㎝を測る。埋土は２層に分層できたが炭化物等の混入は認められなかった。その他床面では、中央ピット西側で被熱硬化した焼土面が見られた。その直上で、微量の炭化材および炭化物を少量含む層の堆積が見られたが、出土した炭化材が少量であることと埋土



第288図　笠見第３遺跡SI169出土遺物実測図

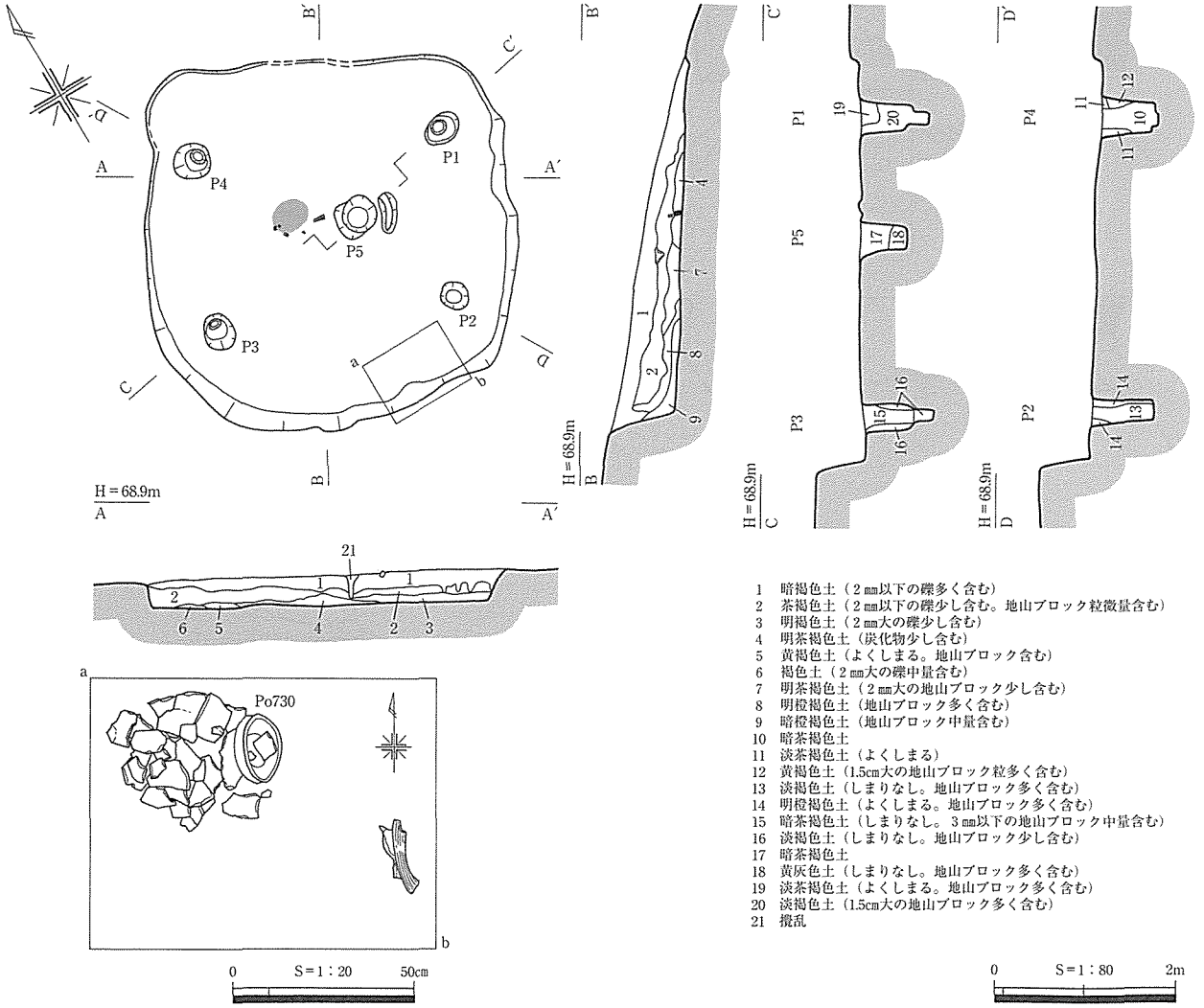
の状況から、焼失住居ではないと考える。その他の埋土は、南側からの流入による自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、埋土中および床面で土器が大量に出土した。第１～２層中で、遺存状態のよい土器および拳大の石が集積して見られた。これらは、出土状況から流れ込みによるものではなく、住居廃絶後の埋没段階で投げ込まれたものと考えられる。当遺構に関わる遺物として床面では、ほぼ完形の壺Po730が出土した。埋土中からは甕Po731～734、壺Po735・736、不明鉄器F38がある。

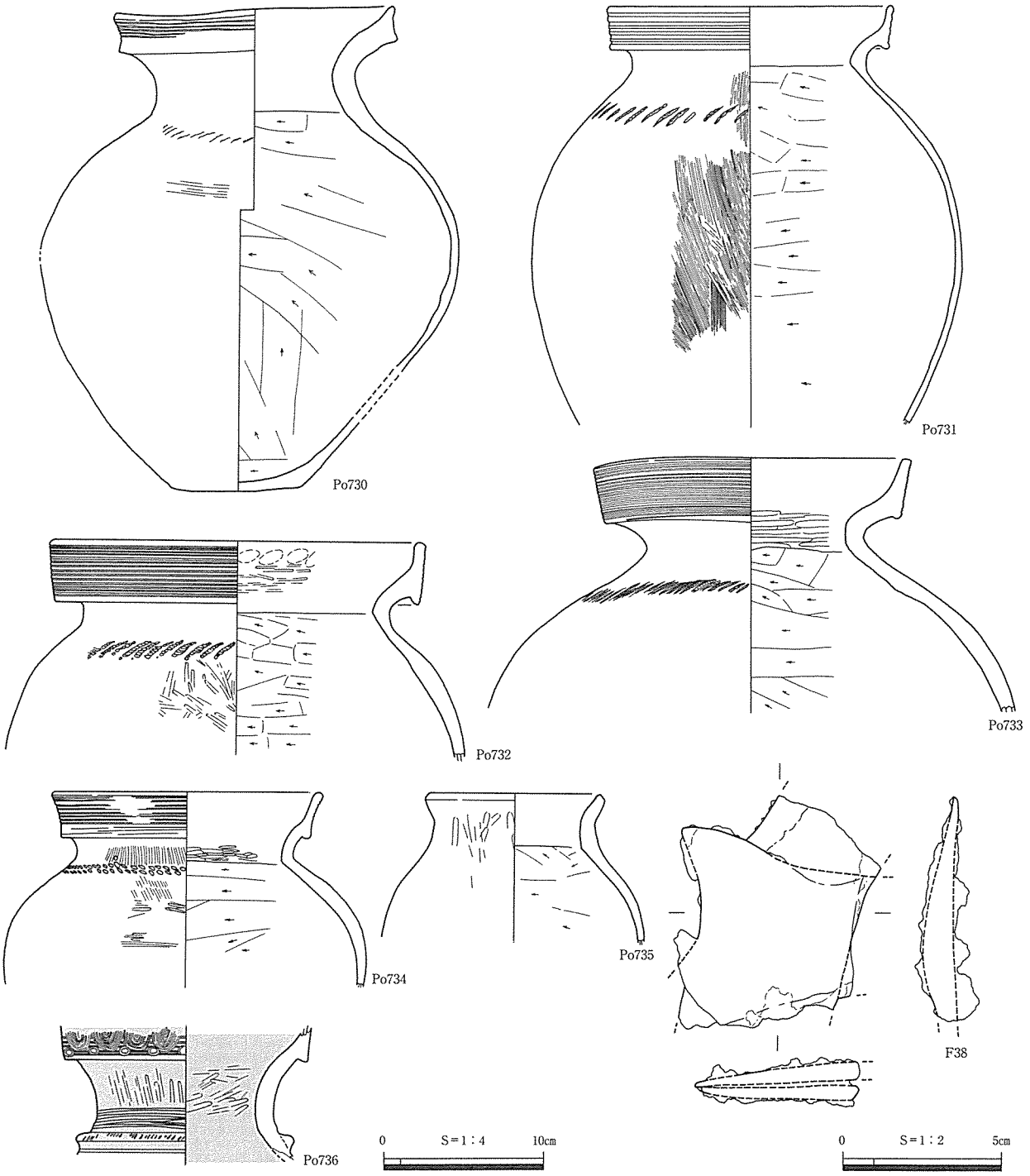
出土遺物等から清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

表101　笠見第３遺跡SI170ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	41×30－73	主柱穴	P4	41×38－58	主柱穴
P2	32×28－67	主柱穴	P5	50×47－48	中央ピット
P3	41×26－78	主柱穴			



第289図　笠見第３遺跡SI170遺構図



第290図　笠見第３遺跡SI170出土遺物実測図

第３節　掘立柱建物跡

SB1（第291・292図、PL. 60・138）

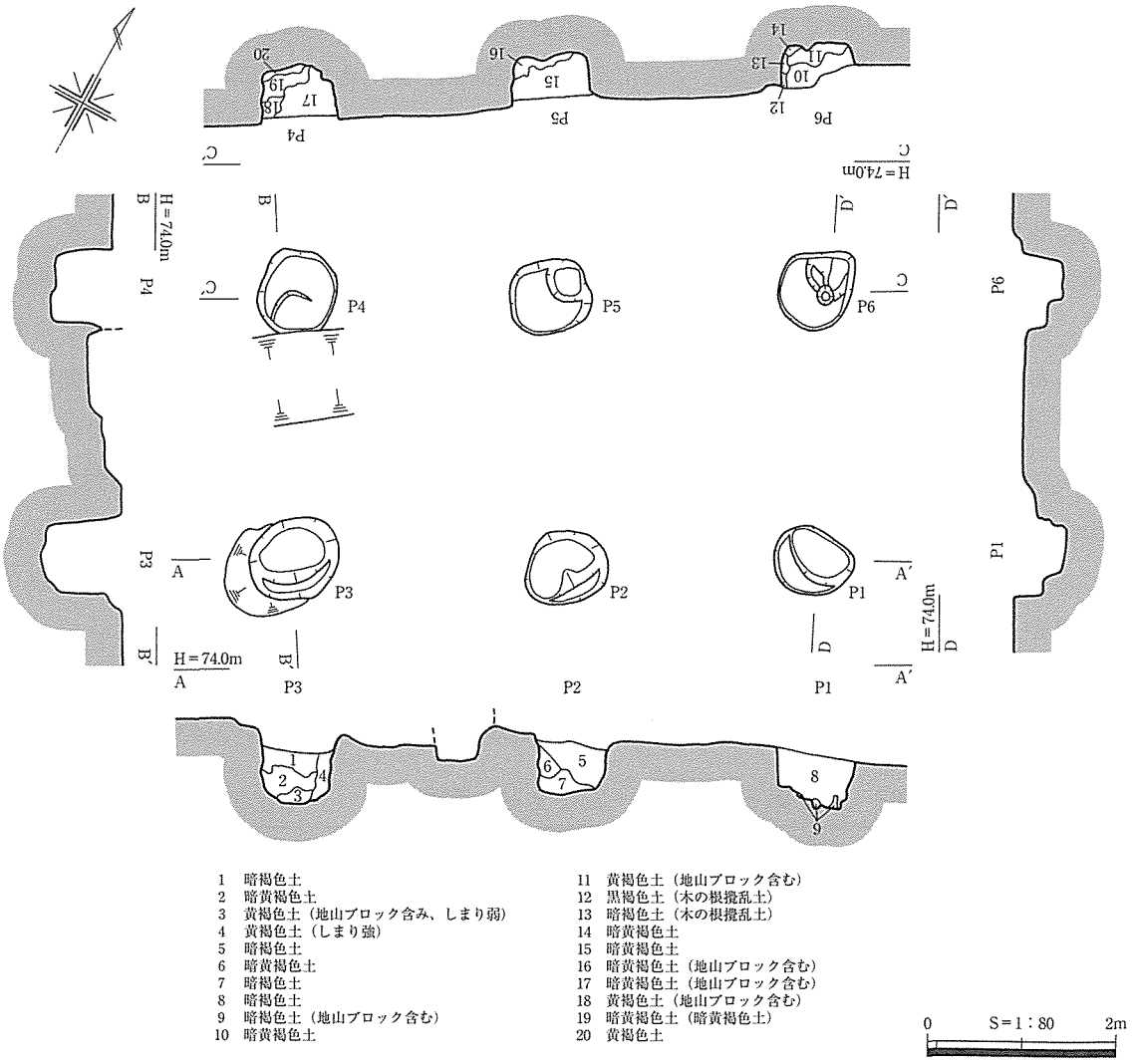
調査区南側、L12・M12グリッドで検出した掘立柱建物である。この周辺は遺跡内においても最高所付近に位置しており、一見平坦な立地のようにもみえるが、標高73～73.6mと南西から北東へ下る緩やかな斜面地である。南西側約７mには、主軸は異なるが同時期と考えられるSB16がある。

建物の規模は、桁行２間（5.7m）、梁行１間（2.8m）である。主軸はN-61°37′30″-Eで、北東―南西方向を向く。柱穴距離間は、P1-P2の順に2.9m、2.8m、2.8m、2.9m、2.8m、2.8mである。柱穴の掘方は一辺約80cmの隅丸方形、もしくは不正円形で、すべて二段掘りである。

北隅の柱穴P6で、柱痕跡が認められた。柱材はすでに腐朽していたが、その痕跡は明瞭であり、

表102　笠見第３遺跡SB1ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	85×73－48		P4	98×87－65	SB1ピット
P2	94×80－65		P5	83×78－54	
P3	100×88－82		P6	84×78－46	

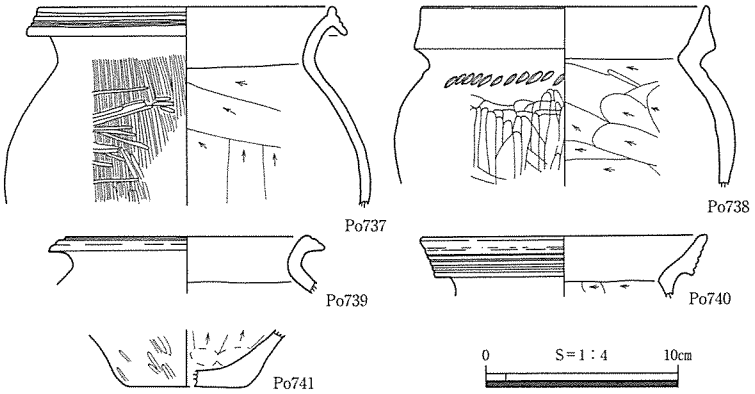


第291図　笠見第３遺跡SB1遺構図

これから推定される柱の直径は20cmであった。柱穴掘方は暗黄褐色系の粘質土により埋め戻されていた。

出土遺物には、図化できたものに、柱穴埋土から出土した弥生土器甕Po737～740、底部Po741がある。

これらは、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉のものとみられ、柱穴規模等から高床倉庫である可能性がある。（小山）



第292図　笠見第３遺跡SB1出土遺物実測図

SB4・27（第293・294図、PL. 60・138）

調査区南側M13グリッドの、標高73.8～74.1mの調査区内でも高い所で、わずかに北へ傾斜する緩斜面上に位置する。

SB4は、桁行方向の掘方を溝状に開削する布掘り形式の掘立柱建物である。東側柱筋にはSB16のP8が上に重複、西側柱筋はSK20を掘り込む。

柱間は桁行３間×梁行１間でN-20°-E方向に主軸をとる。掘方の規模は、東側柱列で全長5.48m、幅45cm前後、深さ30～80cm、西側で全長5.87m、幅45cm前後、深さ30～65cmである。柱痕跡はP3を除いたすべての柱位置で確認した。復元される柱径は18cm前後である。桁行柱間は東側柱列でP1-P2から順に1.7m・推定1.5m・推定1.7m。西側柱列でP5-P6から順に1.8m、1.7m、1.6mである。梁行柱間はそれぞれ約2.8mである。

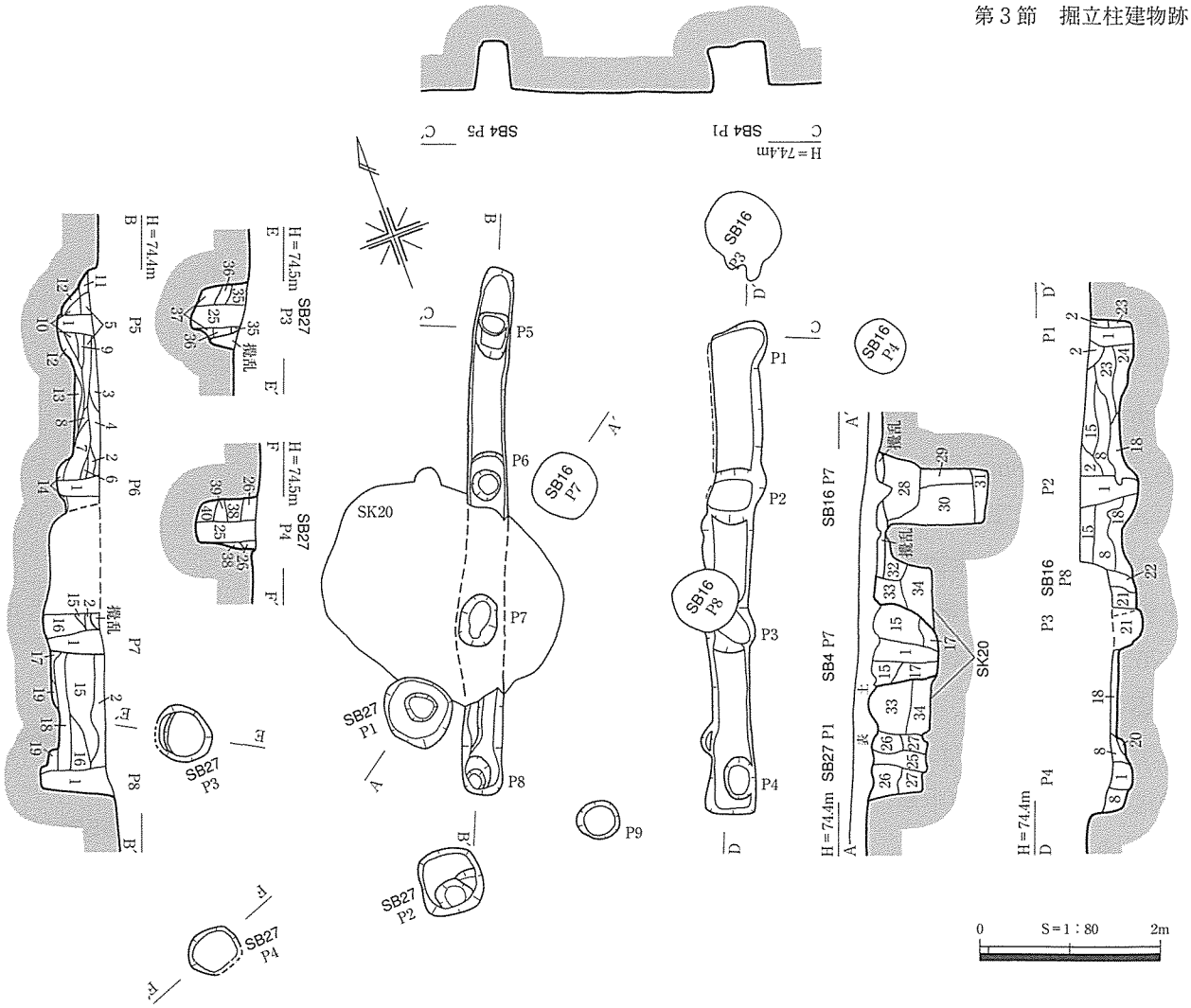
掘方埋土は地山を含んだ黄褐色系のものが主体となる。柱を立てた後、10～20cmの厚さを単位として互層状に埋め立てている。P7-P8（18層）の水平堆積は、貫木を利用して側面から固定した痕跡の可能性がある。調査当初、P6-P7の一部をSK20の埋土と誤認して掘り下げたため、西側柱列の底面を明確に把握できていないが、P6-P7にも対応する貫木があったと想定できる。各柱列内での埋土の重複関係から、作業単位は大きく二つに分けられ、東側柱列は両妻の二か所から、西側柱列は入り側中央の二か所から先に作業が行われたと考えられる。

南側にあるP9は、各側柱列のほぼ中間に位置し、棟持柱の可能性がある。身舎の外側に独立する特徴をもつが、北側では対応する柱穴を検出することができなかった。

遺物は掘方埋土から弥生土器甕Po742～744、底部Po745などが出土している。このうちPo744は弥生時代後期中葉（清水Ｖ－２様式）ごろと考えられ、造営時期の一端を示すものといえる。SB4は構造

表103　笠見第３遺跡SB4・27ピット一覧表　※は復元値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
SB4P1	？×？－７	主柱穴	SB4P8	22×18－８	主柱穴
SB4P2	62×60－13	主柱穴	SB4P9	47×43－126	棟持柱か
SB4P3	55※×46－10	主柱穴	SB27P1	78×72－64	主柱穴(柱痕有)
SB4P4	48×36－７	主柱穴	SB27P2	75×69－70	主柱穴
SB4P5	36×26－７	主柱穴	SB27P3	67×63－70	主柱穴(柱痕有)
SB4P6	34×32－10	主柱穴	SB27P4	60×50－68	主柱穴(柱痕有)
SB4P7	58×43－８	主柱穴			



1　暗褐色土（炭化物微量含む。AT・ホーキブロック少量含む。柱痕跡）
2　暗黄褐色土（AT・ホーキ・ロームブロック含む）
3　明黄茶色土（AT・ホーキブロックわずかに含む）
4　黄茶色土（AT・ホーキブロック含む）
5　茶褐色土（AT・ホーキブロック多く含む）
6　黄茶褐色土
7　黄茶褐色土（ATブロック含む）
8　暗黄褐色土（AT・ホーキブロック含む。ローム土多く含む。しまり強い）
9　茶褐色土（AT・ホーキブロックわずかに含む）
10　灰褐色土
11　暗褐色土（ATブロック含む）
12　黄灰褐色土（ATブロック含む）
13　暗茶褐色土
14　暗黄茶色土
15　暗褐色土
16　暗黄褐色土（AT・ホーキブロック含む）
17　暗黄褐色土（ATブロック多く含む）
18　暗灰褐色土（ロームブロック含む。粘性強い。貫木か）
19　暗灰褐色土（ロームブロック多く含む。粘性強い）
20　赤褐色土（ロームに暗褐色土混じる。しまり強）
21　暗黄褐色土（ロームブロック・炭化物含む。しまり強。SB16 P8埋土。柱痕跡）
22　暗褐色土（ATブロック多く含む。しまり弱。SB16 P8埋土）
23　暗褐色土（炭化物含む）
24　暗黄褐色土（AT・ホーキ・ロームブロック含む。粘性強い）
25　暗褐色土（AT・ホーキブロック含む。SB27 埋土。柱痕跡）
26　黄褐色土（AT・ホーキブロック多く含む。SB27 埋土）
27　暗褐色土（AT・ホーキブロック多く含む。SB27 P1埋土）
28　淡黄茶褐色土（AT・ホーキブロック含む。SB16 P7埋土）
29　暗褐色土　（AT・ホーキ・ロームブロック含む。しまり弱。SB16 P7埋土）
30　暗褐色土（AT・ホーキ・ロームブロック多く含む。SB16 P7埋土）
31　黄褐色土（SB16 P7埋土）
32　黄茶褐色土（ATブロック含む。SK20埋土）
33　暗黄茶褐色土（AT・ホーキ・炭化物含む。SK20埋土）
34　暗茶褐色土（AT・ホーキブロック含む。SK20埋土）
35　明茶褐色土（SB27 P3埋土）
36　茶褐色土（ATブロック含む。SB27 P3埋土）
37　暗灰茶褐色土（ATブロック含む。SB27 P3埋土）
38　黄茶褐色土（ホーキブロック含む。SB27 P4埋土）
39　明黄茶褐色土（ホーキブロック含む。SB27 P4埋土）
40　暗黄褐色土（SB27 P4埋土）

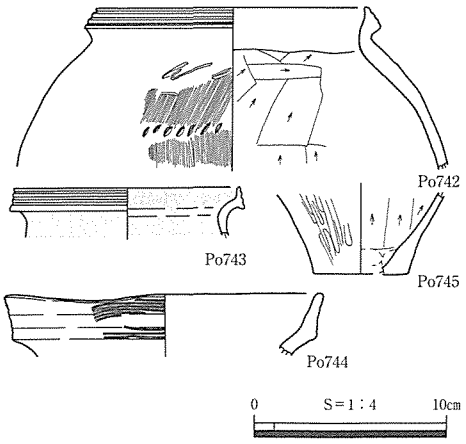
第293図　笠見第３遺跡SB4・27遺構図

的な特徴からみて、高床倉庫の可能性がある。

SB27はSB4南西側のさらに高い位置にあり、SK20を掘り込んでいる。

１間×１間で東西方向の柱間は約2.8m、南北方向は約2.2～2.5mである。円形あるいは隅丸方形の柱掘方は深さ60～70cmで、断面観察による柱径は23cm前後に復元できる。

時期は、遺物が出土していないため不明であるが、弥生時代の他の掘立柱建物とは主軸が異なることから、古墳時代以降の可能性がある。性格も不明であるが、櫓状建物の可能性も考えられる。（西川）



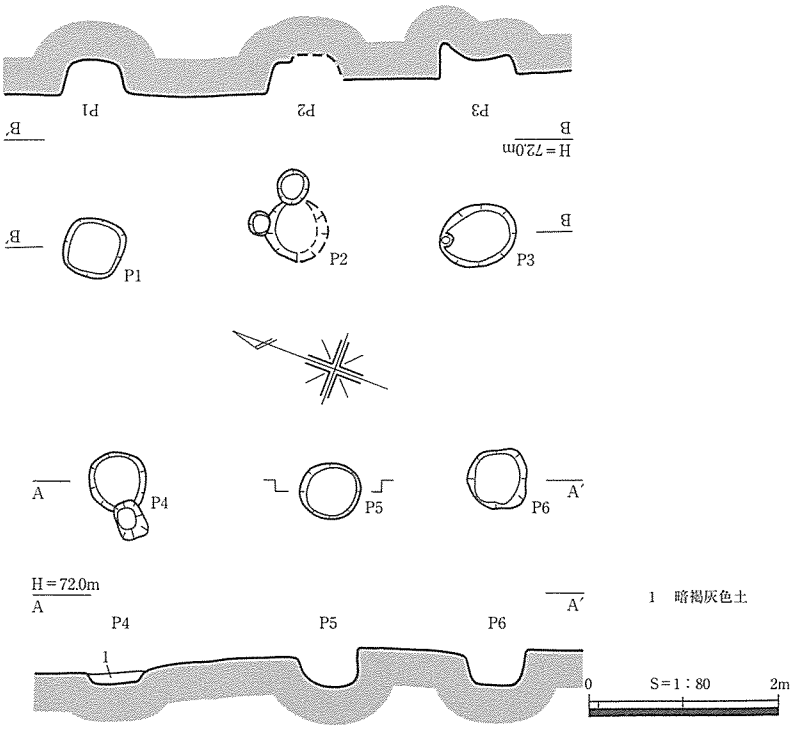
第294図　笠見第３遺跡SB4 出土遺物実測図

SB5（第295・296図、PL. 138）

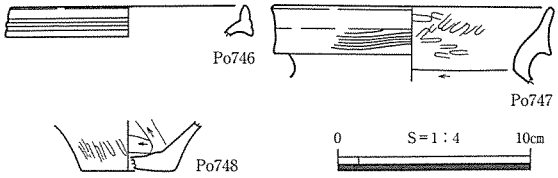
調査区東側、L7グリッドの標高71.5m付近のほぼ平坦面に立地している。柱穴の並びで所在を判断した。

桁行２間(4.2m)、梁行１間(2.6m）の掘立柱建物である。柱間は桁方向P1～P2の順に2.2m、2.0m、2.3m、1.8m、梁方向P1-４が2.3m、P3-６が2.6mである。掘方は不正円形で、素掘りである。主軸はN-21°-Wである。

出土遺物は、P5埋土から弥生土器甕Po746・747、底部Po748が出土した。これらは、清水V-２様式、弥生時代後期中葉ごろのものとみられる。柱穴規模等から高床建物ではないといえる。（牧本）



第295図　笠見第３遺跡SB5遺構図



第296図　笠見第３遺跡SB5出土遺物実測図

表104　笠見第３遺跡SB5ピット一覧表　※は復元値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	62×60－34	
P2	64※×64－32	
P3	80×65－20	
P4	31×30－12	
P5	61×59－42	
P6	60×62－37	

SB16（第297図、PL. 61）

調査区南側、M13グリッドの標高73.4～73.9mの緩斜面に位置する。

桁行３間（6.1m)、梁行１間（3.1m）の掘立柱建物である。N-40°-Wに主軸をとる。P1がSK100の上に重複し、P8がSB4の東側柱列の上に重複する。柱間寸法は桁行2.0～2.1mである。柱掘方は隅丸方形あるいは楕円形で、深さは60～120cmを測る。

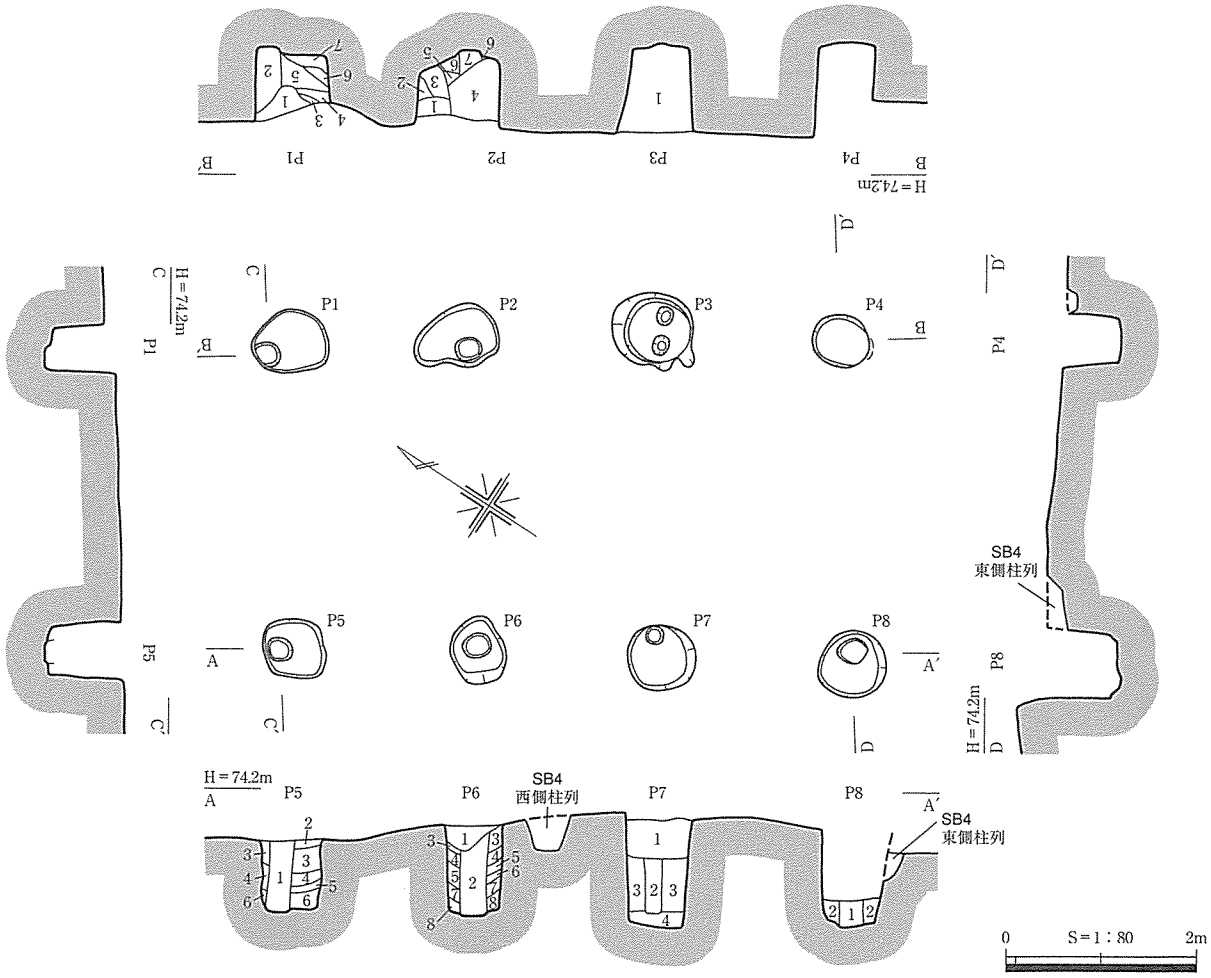
埋土は地山を含んだ黄茶褐色系のものが主体となる。柱痕跡の断面観察から柱径は22cm前後に復元できる。P4は土層堆積状況未記録のため不明である。

図示していないが、P2埋土から清水V-３様式ごろの甕口縁部が出土した。後述するSB17と主軸を同じくすることから、弥生時代後期後葉ごろと考えられる。（西川）

SB17（第298・299図、PL. 61・138）

調査区南側、M13グリッドの標高73.3～74.0mの緩斜面に位置する。東側1.5mにSB16がある。

桁行２間（4.7～5.0m）×梁行１間（2.6～2.8m）の掘立柱建物である。N-40°-Wに主軸をとる。P3がSK20の上に重複する。柱間寸法は桁行が2.2～2.6mである。柱掘方は隅丸方形あるいは楕円形で、深さは55cm前後を測る。



P1－１　明茶褐色土（黄色ブロック・炭化物含む）
　　２　暗黄茶褐色土（黄色ブロック・炭化物含む）
　　３　明黄茶褐色土（やや粘質）
　　４　黄灰色土（やや粘質、黄色ブロック含む）
　　５　茶褐色土（黄色ブロック・黄灰色粘質ブロック・炭化物含む）
　　６　黄褐色粘質土（黄色ブロック含む）
　　７　暗黄灰褐色土（黄灰色粘質ブロック含む）
P2－１　茶褐色土（１～４はP2に重複する新しいピット埋土）
　　２　淡灰茶褐色土（黄色ブロック・炭化物含む）
　　３　茶灰褐色土（黄色ブロック・炭化物含む）
　　４　茶褐色土（黄色ブロック・黄褐色粘質ブロック含む）
　　５　淡茶灰褐色土（黄色ブロック含む）
　　６　暗黄灰褐色土（黄色ブロック多く含む）
　　７　暗黄茶褐色土
P5－１　淡茶褐色土(橙褐色ブロック多く含む)
　　２　茶褐色土（黄色ブロック含む）
　　３　黄茶褐色土（黄色ブロック含む）
　　４　黄茶褐色土（しまりやや弱、橙褐色ブロック含む）
　　５　明橙灰褐色土（橙褐色ブロック含む）
　　６　暗茶灰褐色土（しまりやや弱、橙褐色ブロック含む）
P6－１　茶灰色土（黄色ブロック含む）
　　２　暗茶褐色土（橙褐色ブロック・炭化物含む）
　　３　明褐色土（しまり強、やや粘質）
　　４　明褐色土（しまりやや弱、やや粘質）
　　５　明褐色土（しまり弱、やや粘質）
　　６　橙茶灰色土
　　７　淡黄茶色土（やや粘質）
　　８　黄茶色土
P7－１　淡黄茶褐色土（黄色ブロック・黄灰色砂質ブロック・橙褐色ブロック含む、しまり弱）
　　２　暗褐色土（黄色ブロック・黄灰色砂質ブロック・橙褐色ブロック含む、しまり弱）
　　３　暗褐色土（黄色ブロック多く含む・黄灰色砂質ブロック・橙褐色ブロック含む）
　　４　黄褐色土（黄色ブロック含む、しまり強）
P8－１　暗黄褐色土（炭化物含む、しまり強）
　　２　暗褐色土（黄色ブロック多く含む、しまり弱）
P3－１　暗褐色土

第297図　笠見第３遺跡SB16遺構図

埋土は地山を含んだ茶褐色系のものが主体をなす。柱痕跡の断面観察から柱径は22cm前後に復元できる。P3はSK20に重複していたが、SK20の埋土上面では明確にP3を検出できず、SK20の底面を掘り込んでいるところで初めてその掘方を確認した。

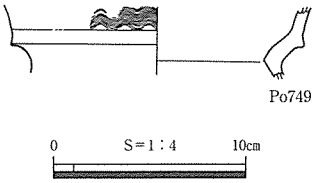
P2掘方埋土から、清水Ⅴ－３様式、弥生時代後期後葉の甕Po749が出土している。その他にも図示していないが、P4からも同時期の甕口縁部が出土しており、造営期の一端を示すものと考えられる。（西川）

表105　笠見第３遺跡SB16ピット一覧表　※は復元値

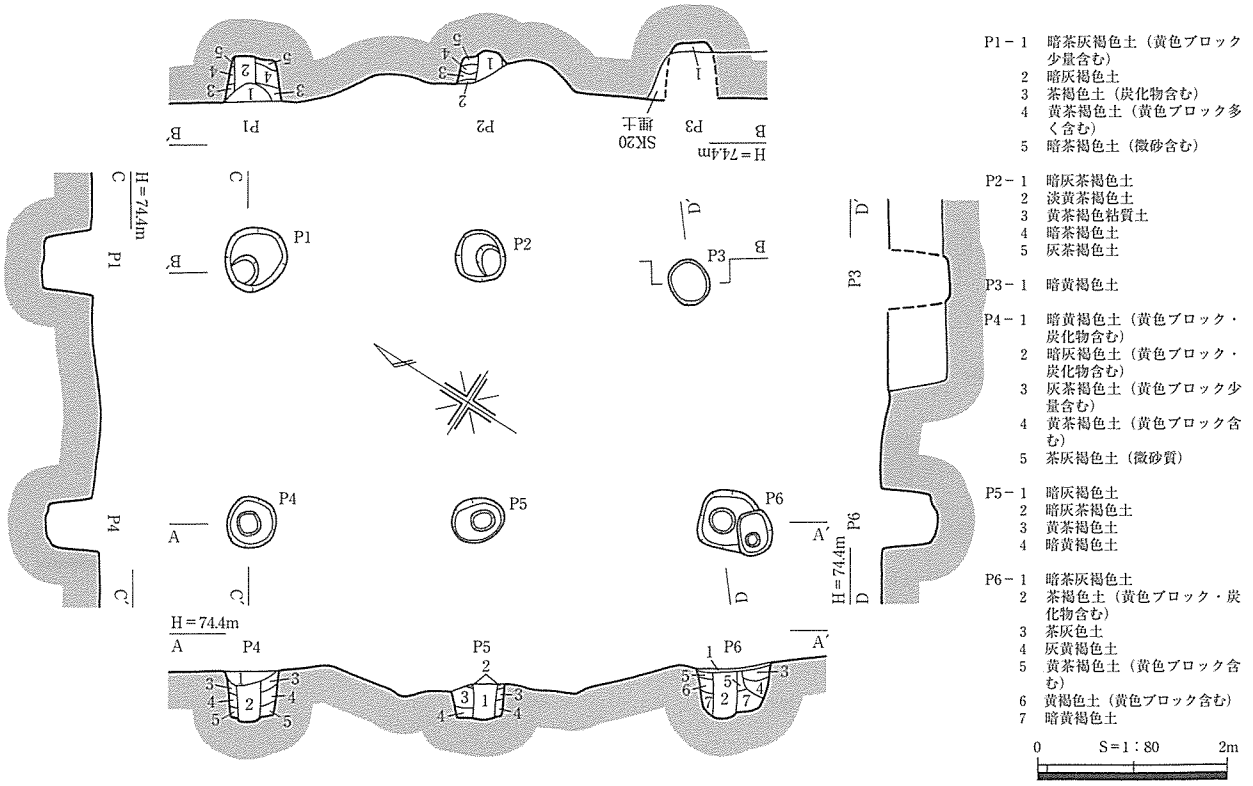
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	84×67－78	主柱穴(柱痕有)
P2	70※×68－85	主柱穴(柱痕有)
P3	86×77－95	主柱穴
P4	60×55－100	主柱穴
P5	68×63－75	主柱穴(柱痕有)
P6	59×73－95	主柱穴(柱痕有)
P7	72×70－125	主柱穴(柱痕有)
P8	73×71－103	主柱穴(柱痕有)

表106　笠見第３遺跡SB17ピット一覧表　※は復元値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	69×66－53	主柱穴(柱痕有)
P2	54×54－35	主柱穴(柱痕有)
P3	49×44－10	主柱穴
P4	54×52－57	主柱穴(柱痕有)
P5	56×48－39	主柱穴(柱痕有)
P6	70※×64－59	主柱穴(柱痕有)



第298図　笠見第３遺跡SB17出土遺物実測図



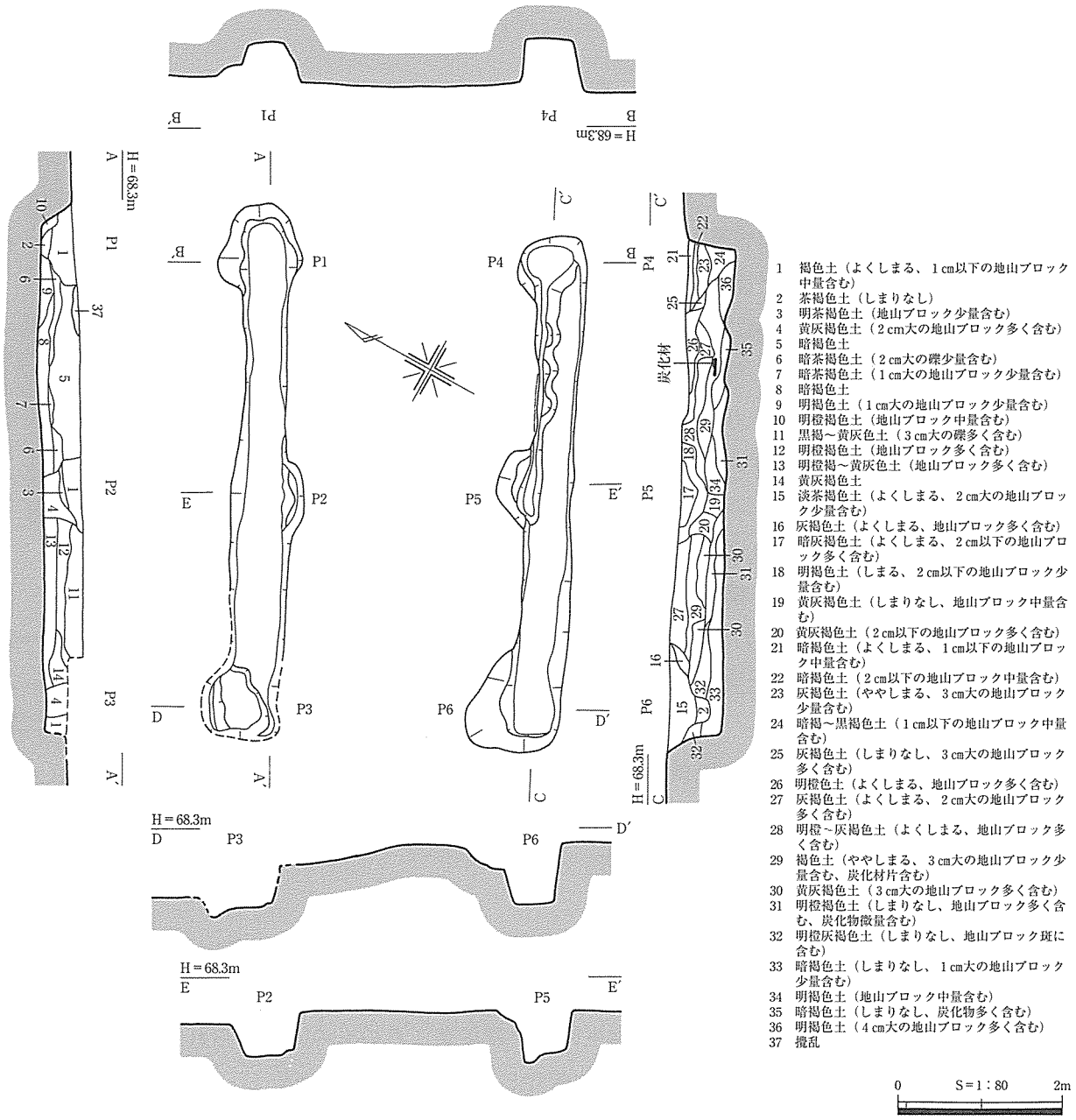
第299図　笠見第３遺跡SB17遺構図

SB21（第300・301図、PL. 60・138）

調査区北側F6グリッド内にあり、標高68.1m～67.7mの南東から北西へ下る斜面に立地する。

N－62°－Eに主軸をとり、桁行を溝状に連結する布掘り状掘立柱建物跡である。桁行２間（5.4m）、梁行１間（3.4m）を測る。掘方の規模は北側柱列で、全長6.45m、幅約60cm、深さ47cmである。南側は全長6.25m、幅約57cm、深さ62cmを測る。掘方内底面は平坦で、内壁はほぼ直立に立ち上がる。柱位置は、土層断面観察から柱痕跡が認められなかったため、布掘り平面でそろばん状に広がった部分と、断面観察で水平堆積土を掘り込んでいる部分とが一致した箇所を柱掘方と判断した。柱穴は６基で柱間距離は、P1-P2間が2.8m、P2-P3間が2.6m、P4-P5間が2.7m、P5-P6間が2.7mでほぼ等間隔になる。

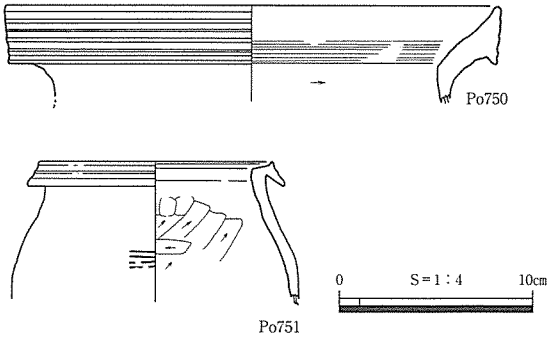
埋土は粘性のある地山ブロックを多量に含んでおり、何層にも水平に堆積しよく締まっている。また、南側の掘方内P4とP5の間で、長さ2.9m、底面から深さ約10cmの掘り込まれた箇所が認められた。その埋土からは、炭化材および炭化物を多量に含むしまりのない層が見られた。これは、部分的な貫状のものか、もしくは柱間に材を噛ませることで柱の固定を図ったものが、腐食した痕跡である



第300図　笠見第３遺跡SB21遺構図

と想像される。全体的な埋土の状況から一方では、当掘立柱建物の築造工程を窺わせる状況を呈しているが、もう一方で柱掘方内の土層は自然堆積を示している。以上のことから、柱を立て互層状に土を埋め戻すことで柱の安定を強化して堅固な建物を構築し、廃絶後に柱を抜き取ったと考える。

遺物は、溝埋土中から甕Po750、751が出土している。出土遺物と形態的特徴から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの高床倉庫の可能性がある。（岩井）



第301図　笠見第３遺跡SB21出土遺物実測図

第４節　土坑・土壙

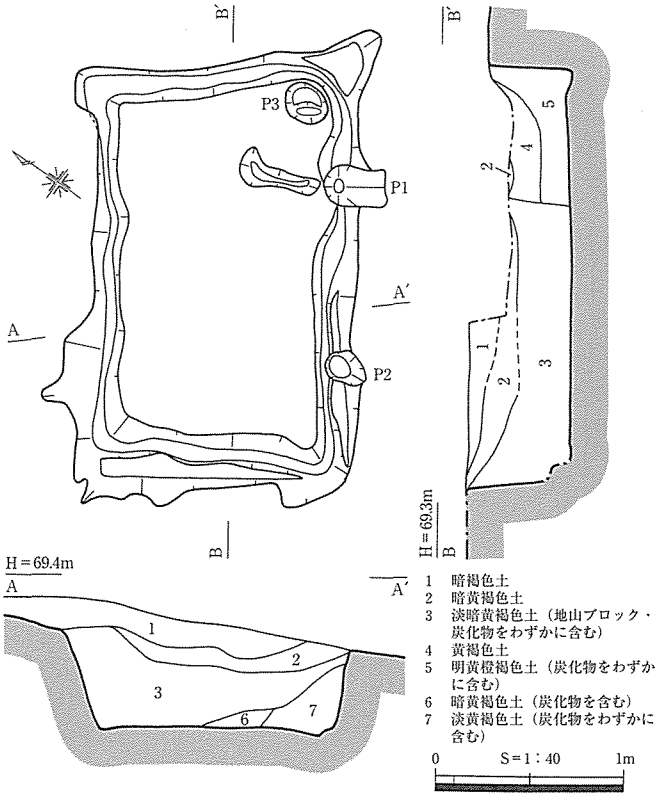
SK1（第302・303図、PL. 62・107・138）

Ｃ区中央東側のL4グリッドにあり、標高69～69.2mの緩やかに南東側に傾斜する斜面に立地する。北側約２mには、SI49がある。

遺存状態は比較的よく、平面長方形を呈し、規模は長軸2.44m、短軸1.37m、深さ0.55mを測る。底部周囲には、幅７～15cm、深さ３cm前後の浅い壁溝が掘られ、北東隅には（25×19－20）cmを測るP3が掘り込まれている。P3の用途は不明である。

また、東側壁には壁を抉り込むようにP1・２が掘り込まれている。規模は、P1（32×21－51）cm、P2（24×18－47）cmを測る。長辺片側のみに見られるが、上屋構造を支える柱穴の可能性がある。

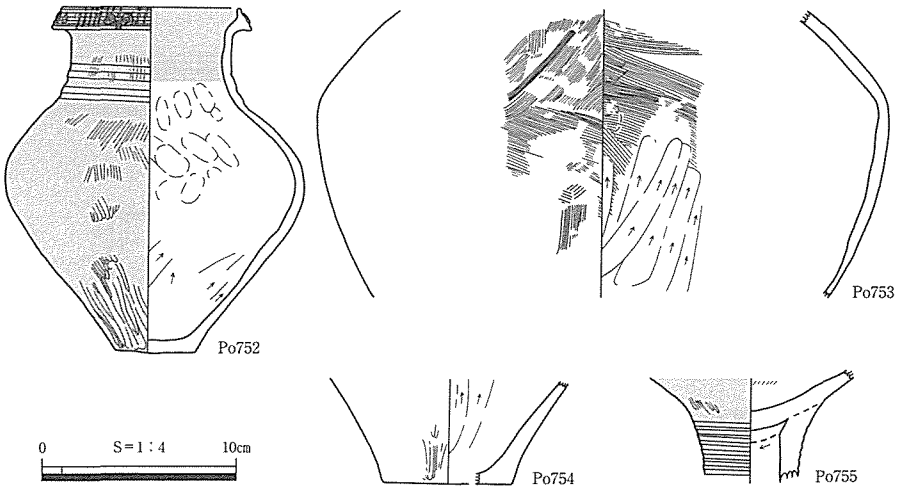
埋土は、７層に分層できた。南西側で４、５層を切り込むように３層が入り込んでおり、一旦埋まった後に埋土を掘り込み、二次的に再利用された可能性がある。



第302図　笠見第３遺跡SK1遺構図

出土遺物には、底面北西隅で出土した赤色塗彩された弥生土器甕Po752～754、埋土上層で高杯Po755がある。

時期は、出土遺物から清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられ、規模及び形態的に住居跡とは考えにくく、位置関係から屋外貯蔵穴と考えられる。（家塚）



第303図　笠見第３遺跡SK1出土遺物実測図

SK3（第304・305図、PL. 62・138）

Ｃ区L9グリッドの、標高71.8m付近のほぼ平坦面に位置する。SI20、SI21に掘り込まれており、上部はかなり削平されているものと考えられる。

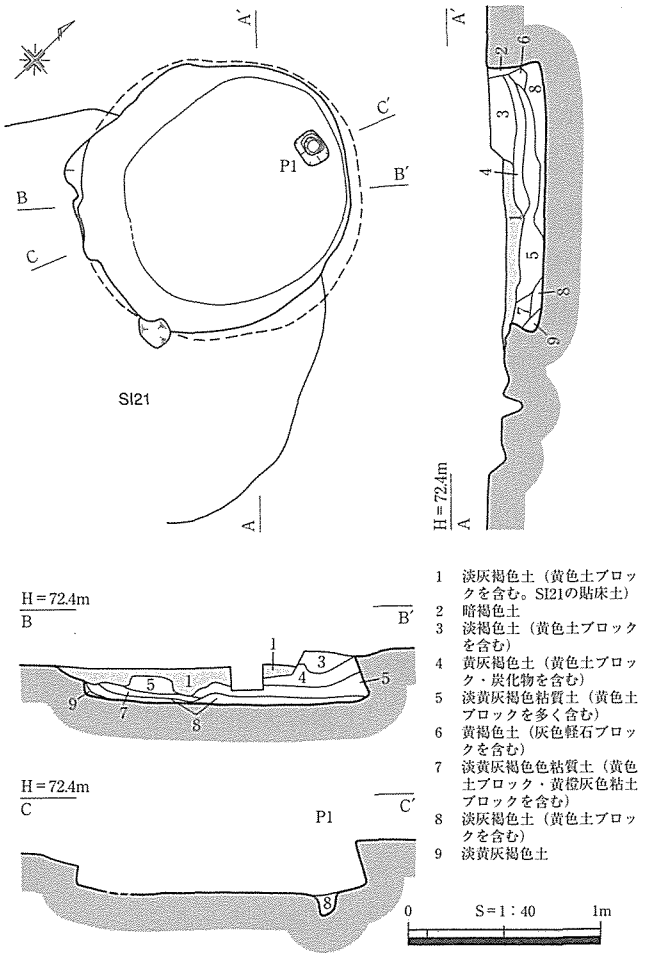
平面円形を呈し、上縁部の直径は2.8m、底面の直径は3.1mを測る。現状では、深さ60cm程度である。断面三角フラスコ状となる。

底面の北寄りに（35×25－26）cmのピットがある。ピット埋土は、土坑の最下層埋土と同質であったので、土坑に伴うピットと考えられる。用途は覆屋を支えるための柱穴であったものと考えられる。

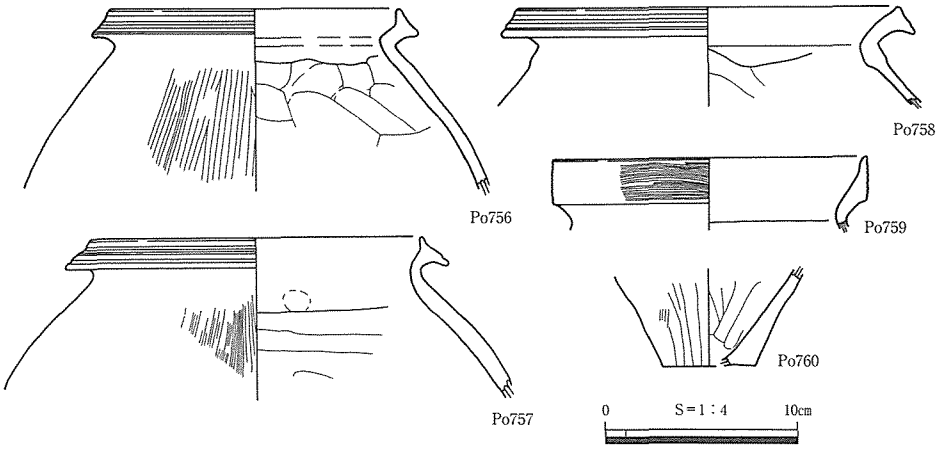
埋土は、第１層のSI21貼床土を除けば、地山ブロックを含む皿状の堆積状況であることから、自然堆積したものとみなされる。

埋土中層及び下層で弥生土器甕Po757～759、底部Po760、土坑底面で甕Po756等が出土している。

出土遺物から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろと考えられる。規模的には住居跡とも考えられるが、焼土面が無いことと、壁が内傾することから、住居跡ではなく屋外貯蔵施設と考えられる。（家塚）



第304図　笠見第３遺跡SK3遺構図



第305図　笠見第３遺跡SK3出土遺物実測図

SK4（第306・307図、PL. 62・139）

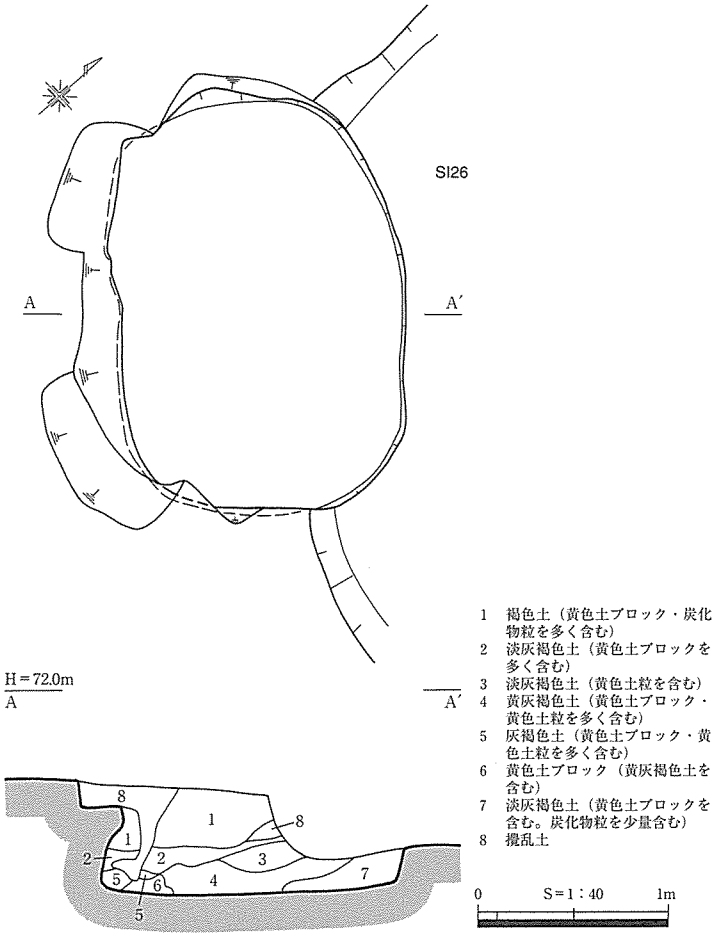
Ｃ区J9グリッドの、標高71.5m付近のほぼ平坦面に位置する。北側をSI26によって掘り込まれている。

平面長楕円形を呈し、上縁部長軸2.23m、短軸1.5m、深さ54cmを測る。底面は長軸2.20m、短軸1.54mを測り、わずかに底面部分が抉れるように掘り込まれ、断面フラスコ状を呈す。

埋土は、下層には地山ブロックを多く含み、皿状堆積することから壁が崩落しながら自然堆積したものとみられる。

床面で弥生土器甕Po761、埋土中層及び下層で弥生土器甕Po762～764が出土している。この他にも、土器片が出土しているが図化できなかった。

出土遺物から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろと考えられ、形態的特徴及び位置関係から屋外貯蔵施設と考えられる。（牧本）

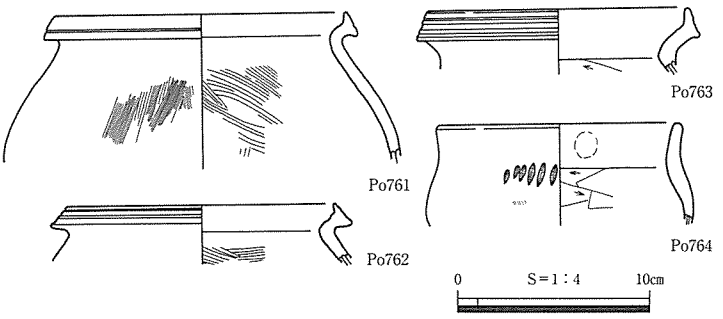


第306図　笠見第３遺跡SK4出土遺構図

SK5（第308・309図、PL. 139）

Ｃ区南東側のN8グリッドにあり、標高71.2m付近の緩やかに東側に傾斜する斜面に立地する。西側約６mにはSB3がある。

周囲は梨攪乱及び東側は流失しており遺存状態はよくないが、平面は長楕円形を呈し、規模は長軸69cm以上、短軸35cm以上、深さ11cmを測る。

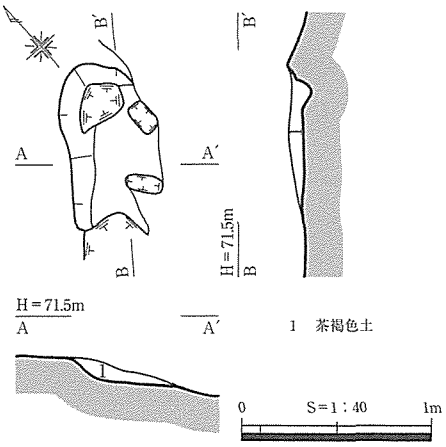


第307図　笠見第３遺跡SK4出土遺物実測図

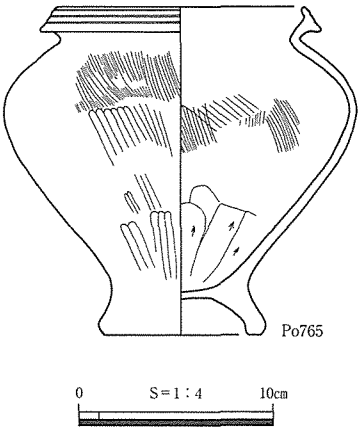
埋土は、茶褐色土単層である。

出土遺物は、埋土上面で弥生土器脚付甕Po765がある。

出土遺物から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろと考えられるが、用途は不明である。（牧本）



第308図　笠見第3遺跡SK5遺構図



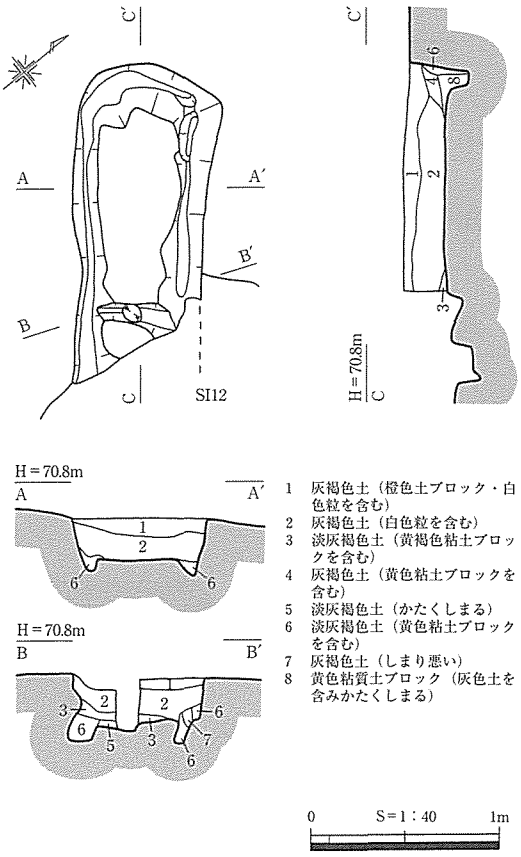
第309図　笠見第3遺跡SK5出土遺物実測図

SK9（第310・311図、PL. 62・139）

調査区中央やや南東よりのK10グリッドにあり、標高70.6m付近のほぼ平坦面に立地している。

南東側はSI12によって掘り込まれている。残存長1.7m、最大幅0.75m、深さ20cmを測る。主軸はN-51°-Wである。幅は北西端が最も広く、南東に行くほど狭くなる。壁際には幅5～10cm、深さ10～12cmの溝をめぐらせる。

溝部分は壁寄りにしまりの悪い土が堆積し、溝内側から土坑底面にかけて地山を用いた土で固く締められていた。このことから溝部分には板材のようなものが立てられ、それを内側から土で固定したものと考えられる。

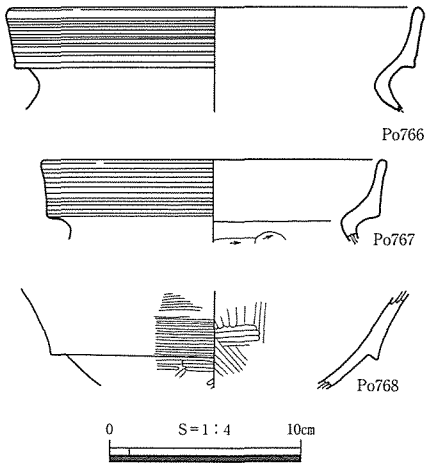


第310図　笠見第3遺跡SK9遺構図

南東側の土坑底面に、小口板に平行する溝を検出している。埋土は硬くしまった土であり、埋め戻されたような状態であった。

形状からは小口板と側板を用いた土壙墓と判断できる。ただし集落の中心部に単独で存在している点が異様である。

遺物は、弥生土器甕Po766・767、高杯Po768



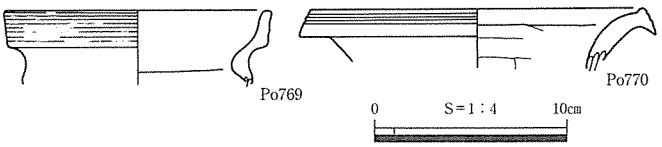
第311図　笠見第3遺跡SK9出土遺物実測図

が埋土中から出土しているが、床面上の出土はない。

出土遺物は、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後半ごろを示すものである。土壙墓であるならば蓋の陥没時に流入したものと考えられるため、正確な遺構の時期を示すものではないと考えられる。（家塚）

SK13（第312・313図、PL. 62・139）

調査区中央やや東寄り、J9グリッドの標高71.2m付近のほぼ平坦面に位置する。SI26と重複する。切り合い関係は明確ではないが、SI26が当遺構埋土を掘りこんでいると考えられ、当遺構が先行するものと考えられる。西側は調査区外にある。



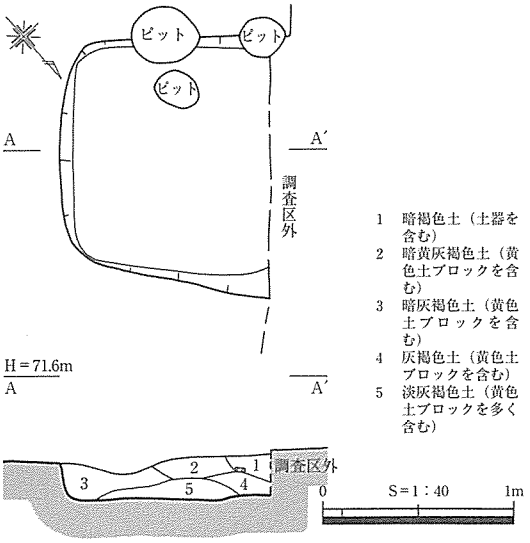
第312図　笠見第３遺跡SK13出土遺物実測図

平面は方形と推定され、南北1.3m、東西1.05m以上を測る。深さは23cmである。

埋土は、下層に地山ブロックを含む層が堆積し、自然堆積したものと考える。

埋土中から、弥生土器甕Po769・770が出土している。

出土遺物から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろと思われ、形態的には貯蔵穴とも考えにくく性格については不明であるが、住居に付属する何らかの施設と思われる。（牧本）



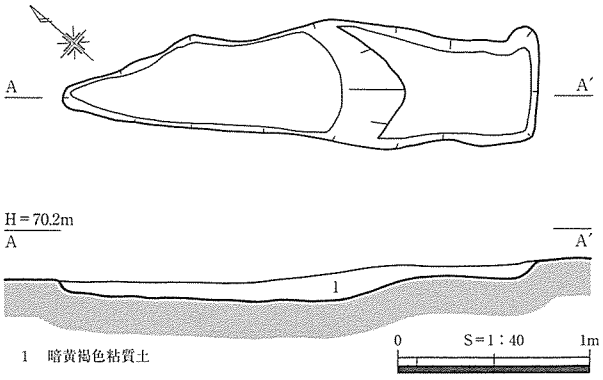
第313図　笠見第３遺跡SK13遺構図

SK14（第314・315図、PL. 62・139）

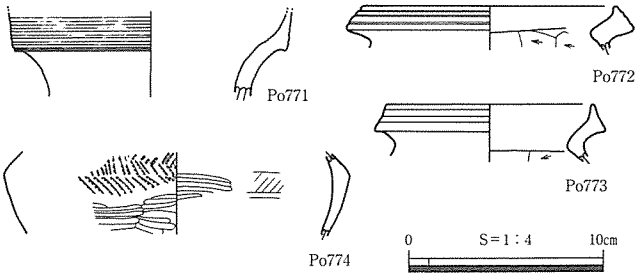
調査区やや北東寄り、H6グリッドの標高70m付近のほぼ平坦面に位置する。SI36に接するようにある。

北側は削平を受けている。平面は長方形と推定され、長軸2.5m以上、短軸0.65mを測る。底面は段状になり、深さは最大17cmである。

埋土は、暗褐色土単層である。



第314図　笠見第３遺跡SK14遺構図



第315図　笠見第３遺跡SK14出土遺物実測図

埋土中から、弥生土器甕Po771～773、胴部Po774が出土している。

出土遺物から、清水Ⅴ－2様式、弥生時代後期中葉ごろと思われる。性格は不明である。（牧本）

SK17（第316・317図、PL. 62・139）

調査区北東側、G2グリッドの標高67.1mの緩斜面に位置する。SI42と重複するが、住居跡検出の際にはまだ当土坑の輪郭は検出してはおらず、住居埋土を除去していくに従い当土坑の存在が明らかとなった。このようなことから、当土坑の検出面はSI42の床面直上であるが、住居の埋土中を掘り込んでいた可能性も残る。

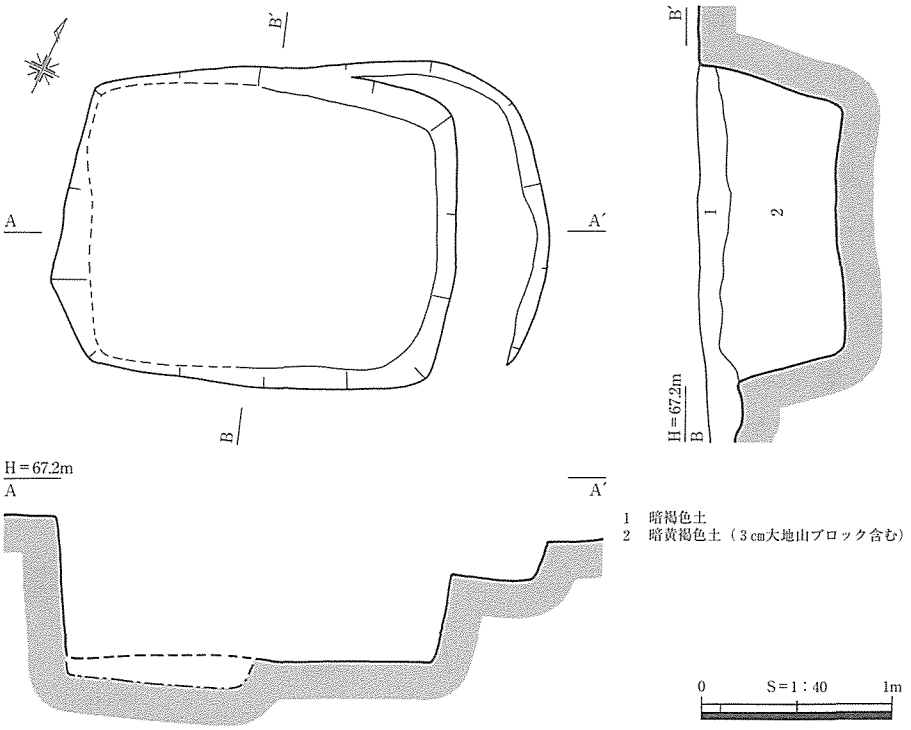
平面は長方形で、長軸1.9m、短軸1.5m、深さ77cmを測る。東側は上端がさらに50cmほどのびて、約20cmの段差が認められる。段差の埋土はこの土坑内とほぼ同じ色調であった。

埋土は2層に分かれ、下層の暗黄褐色土が大半を占める。

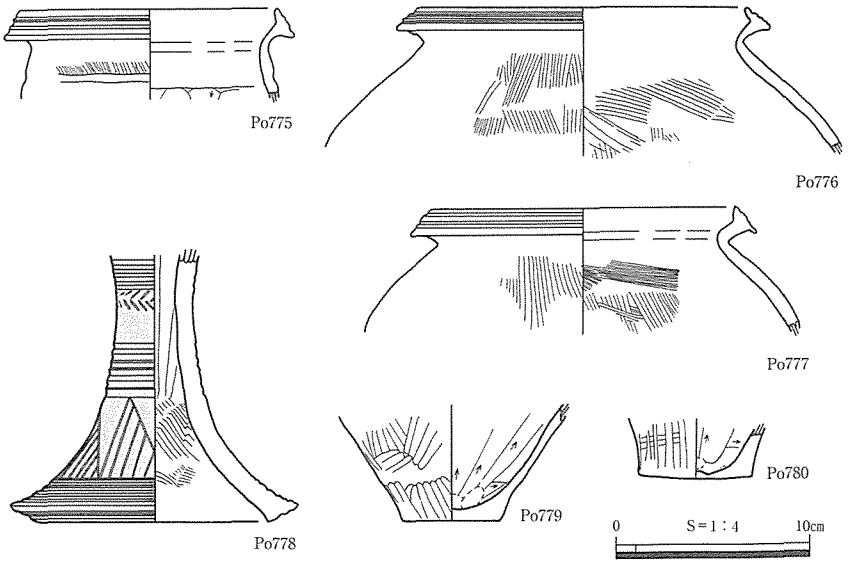
検出面に近いレベルから遺物の大半が出土しており、底面付近からの出土は認められなかった。図化したものは、弥生土器甕Po775～777、高杯Po778、底部Po779・780である。

出土した土器からみて、清水Ⅳ－3様式、弥生時代中期後葉ごろのものとみられる。底面にピットがみられないことや、一辺が2m以下の短小な規模からみて、住居跡とは考えにくい。このため性格については不明であるが、貯蔵穴の可能性があると思われる。

（小山）



第316図　笠見第3遺跡SK17遺構図



第317図　笠見第3遺跡SK17出土遺物実測図

SK20（第318・319図、PL. 62・139）

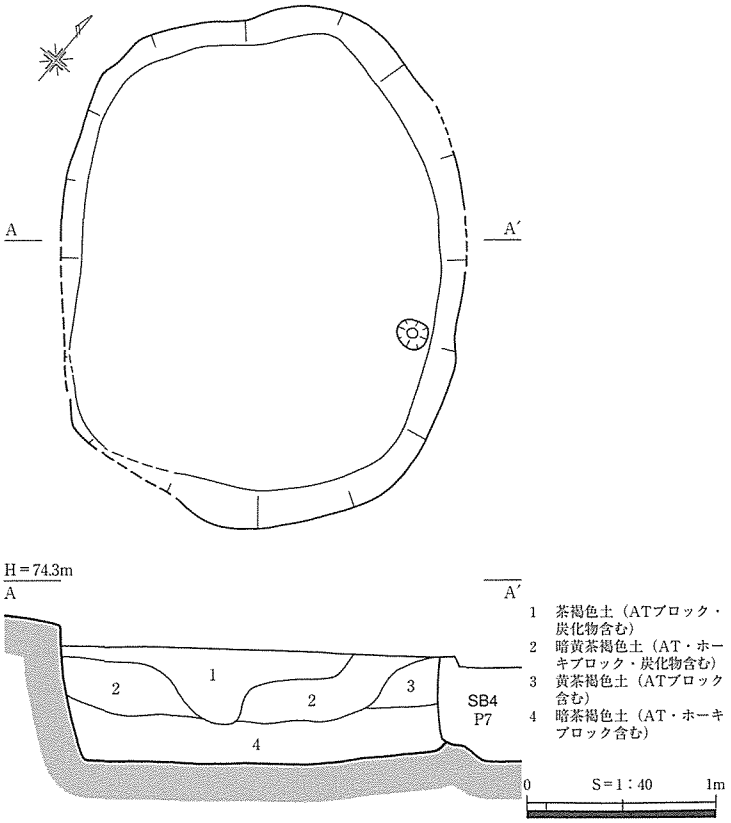
調査区南寄り、M13グリッドの標高74.1m付近のほぼ平坦面に位置する。SB4と重複関係にあるが、断面観察によりSB4に掘り込まれていると考える。後述するSK100・SK119などと同規模でほぼ等間隔に配置されている。

平面は南東側が広がる台形状を呈す。長軸2.67m、短軸2.12mを測る。深さは57cmである。底面東壁際で（16×15－13）cmを測るピットを検出した。用途は不明である。

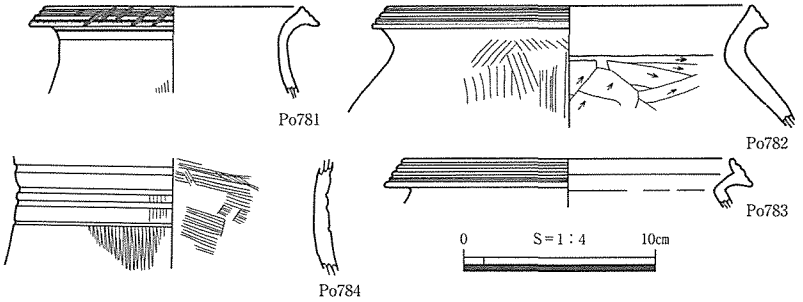
埋土は、自然堆積したと考えられるが、第２層を掘り込むように１層が入り込んでおり、後世にピット等が掘り込まれたものと考えられる。

埋土中から、弥生土器甕Po781～783、壺頸部Po784が出土している。

出土遺物から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろと思われ、性格については詳細は不明であるが、貯蔵穴の可能性があると思われる。（牧本）



第318図　笠見第３遺跡SK20遺構図

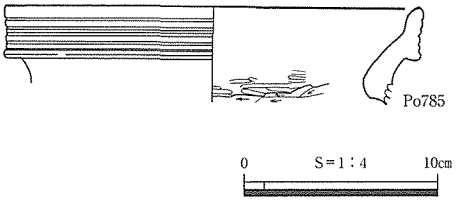


第319図　笠見第３遺跡SK20出土遺物実測図

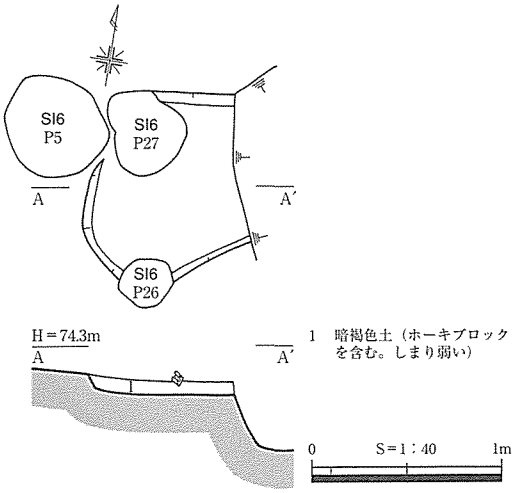
SK25（第320・321図、PL. 63・141）

調査区南寄り、N13グリッドの標高74.1m付近のほぼ平坦面に立地する。SI6と重複関係にあるが、切り合い関係は不明である。

東側を削られており、遺存状態は悪い。平面は不整方形を呈す。長軸0.95m、短軸0.8m以上を測る。深さは７cm程しかない。



第320図　笠見第３遺跡SK25出土遺物実測図



第321図　笠見第３遺跡SK25遺構図

埋土は、暗褐色土単層である。

埋土中から、弥生土器甕Po785が出土している。

出土遺物から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと思われ、性格は不明である。（牧本）

SK26（第322・323図、PL. 63・140）

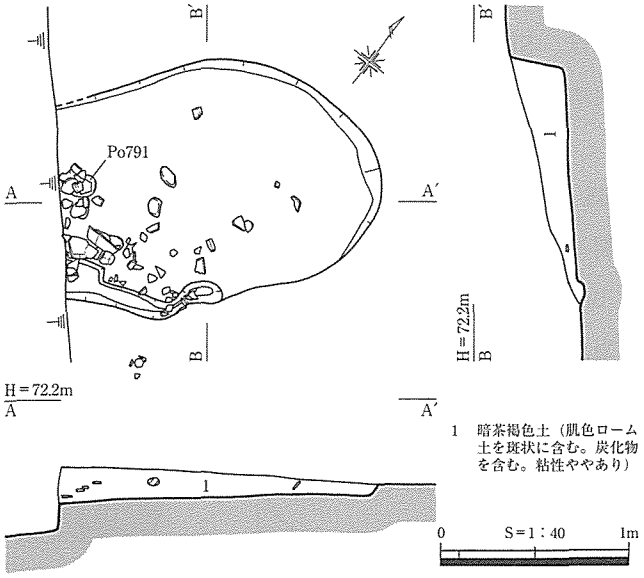
調査区南東、O9グリッドの標高70.4～71.0mの東側斜面部に立地する。

上部及び南西側は削平され、遺存状態は悪い。平面は不整楕円形を呈すと思われる。長軸1.7m以上、短軸1.2mを測る。深さは25cm程である。

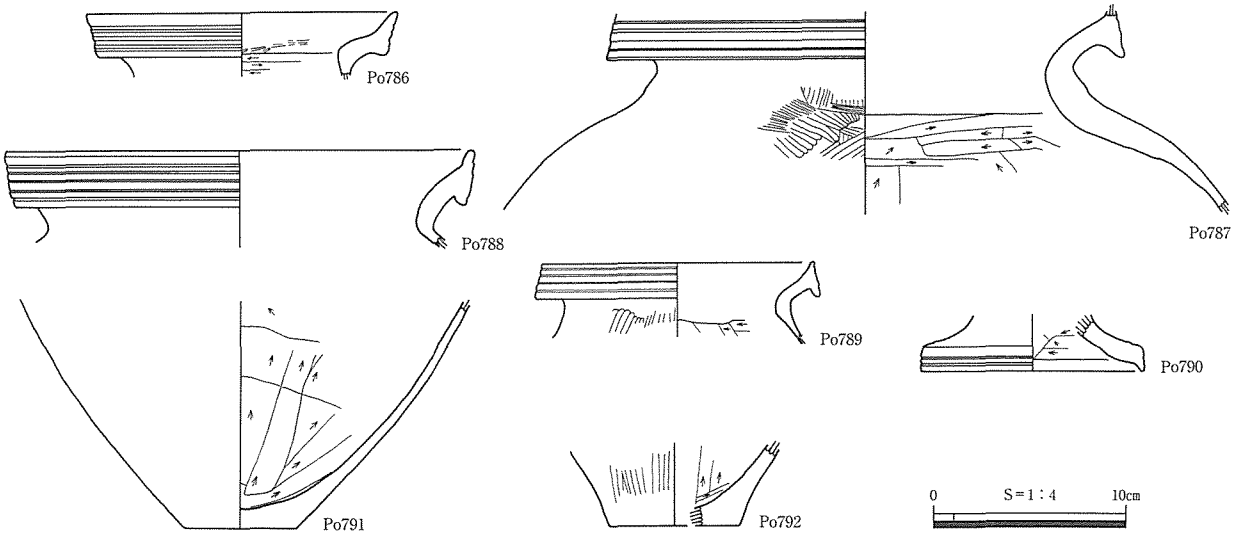
埋土は、炭化物を含む暗茶褐色土単層である。

埋土中から、弥生土器壺Po786、甕Po787～789、脚部Po790、底部Po791・792などが出土している。

出土遺物から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと思われ、性格は遺物出土状況等から、廃棄土坑と考えられる。（牧本）



第322図　笠見第３遺跡SK26遺構図



第323図　笠見第３遺跡SK26出土遺物実測図

SK37（第324・325図、PL. 63・139）

調査区中央やや北東寄り、F15グリッドの標高70.6m付近のほぼ平坦面に立地する。北西側約５mにSI74、南側にSI68が接するようにある。

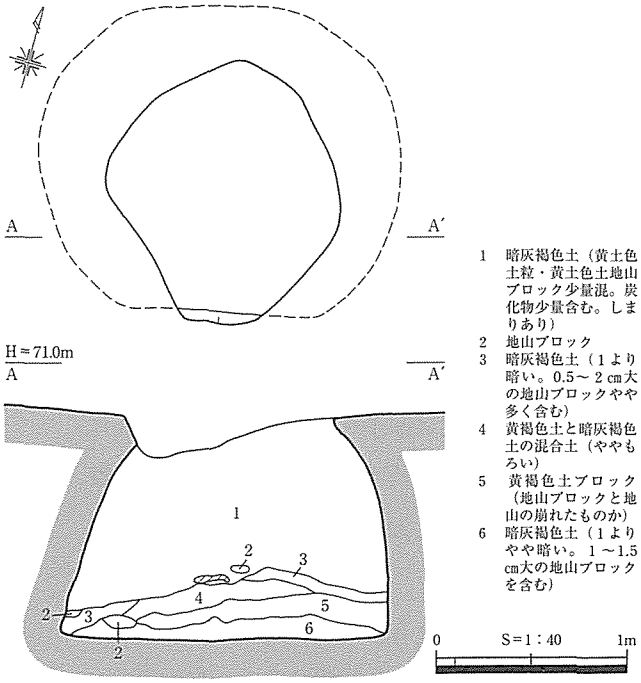
平面は、上縁部不整楕円形、底面楕円形を呈す。上縁部長軸1.4m、短軸1.25m、底面長軸1.93m、短軸1.62mを測る。深さは最大1.05mで、断面フラスコ状を呈す。

埋土は、下層は地山ブロックを含み、壁が崩落したような状況であるが、上層は、第１層が厚く堆

積し人為的に埋められた可能性がある。

埋土中から、弥生土器壺Po793、甕Po795～799などが出土している。

出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのもの貯蔵穴と思われる。なお、前述したように、当遺構の掘削土（約2.9㎥）は、SI74で処分されたものと考える。（牧本）

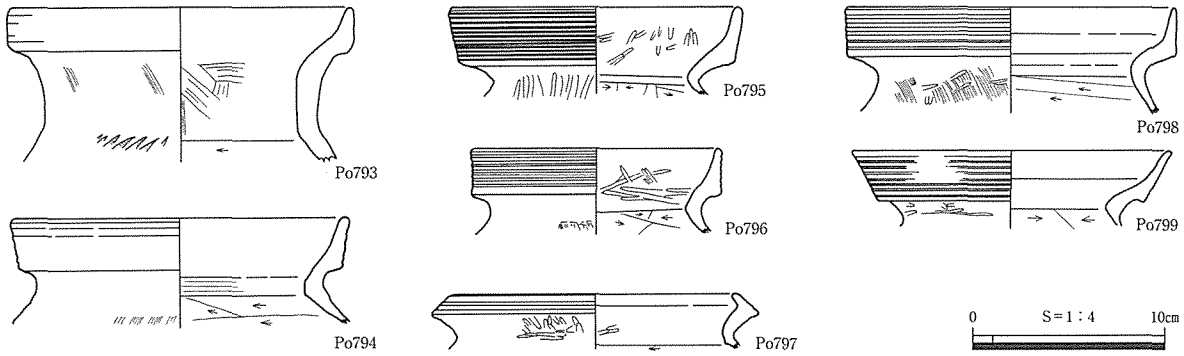


第324図　笠見第３遺跡SK37遺構図

SK55（第326・327図、PL. 63・140・176）

調査区南側M6グリッド内にあり、標高74.0mの平坦面に立地する。

南西側は攪乱によって壊されている。規模は長軸1.6m、短軸1.37m、深さ60cmを測る。平面は長方形を呈する。

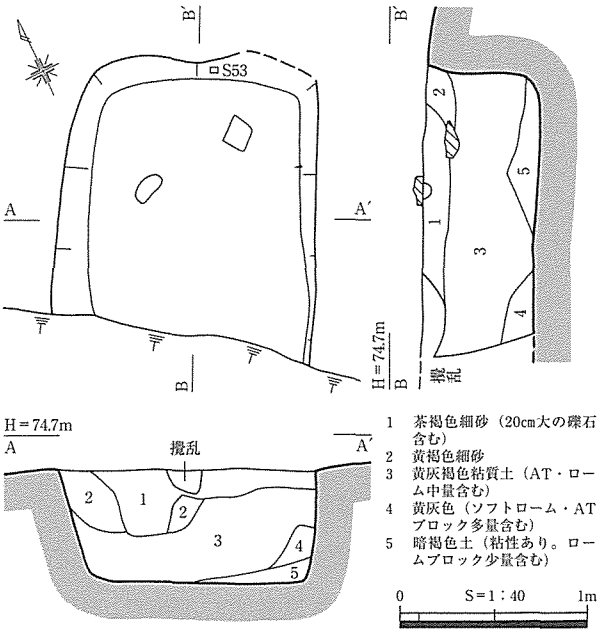


第325図　笠見第３遺跡SK37出土遺物実測図

土層は５層に分層できた。自然堆積と考えられる。断面の状況から、掘り返しがあったと考えられ、第１・２層が二次堆積と考えられる。

遺物は、検出面から埋土上層のみで出土しており、甕Po800、Po801、高杯脚部Po802、石剣S53などがある。

二次堆積における時期は清水Ｖ－１様式を下限とし、遺構はそれ以前のものと考えられる。性格は、屋外貯蔵穴の可能性がある。（岩井）

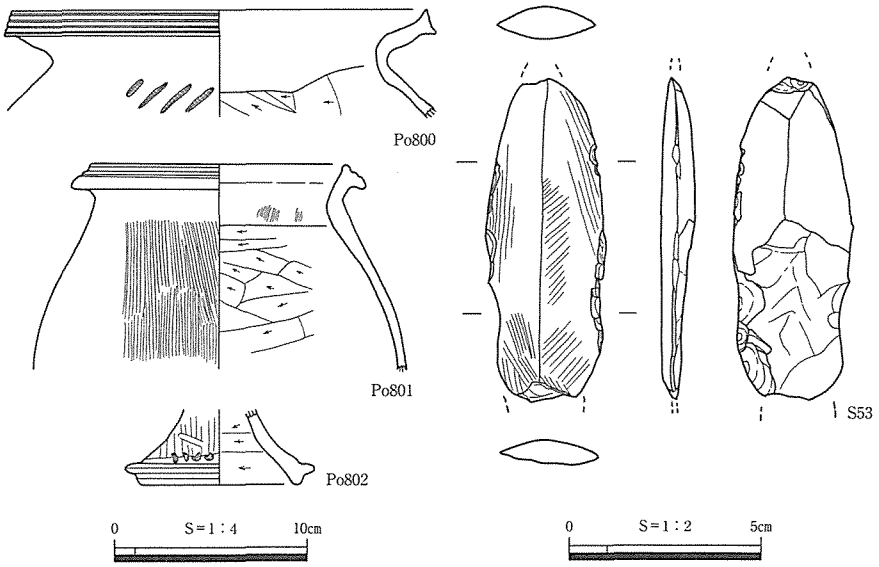


第326図　笠見第３遺跡SK55遺構図

SK56（第328・329図、PL. 63・140）

調査区南西、L18グリッドの標高73.9～74.0mの緩斜面に位置する。

平面楕円形を呈す柱穴と考えられるが、ここ



第327図　笠見第３遺跡SK55出土遺物実測図

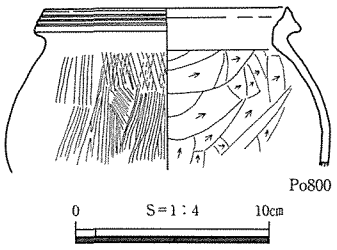
では土坑として記述することとする。長軸1.7m、短軸1.5m、深さ80cmの規模である。断面観察により、掘方の底面中央を20cm程掘りくぼめたところに直径20cm前後の柱をたて、大きく五回にわけて埋め立てた工程が復元できる。

埋土は地山を含む黄茶褐色系のものが主体をなす。遺跡内の掘立柱建物で使用される柱材と太さはあまり変わらないが、掘方はかなり大きい。

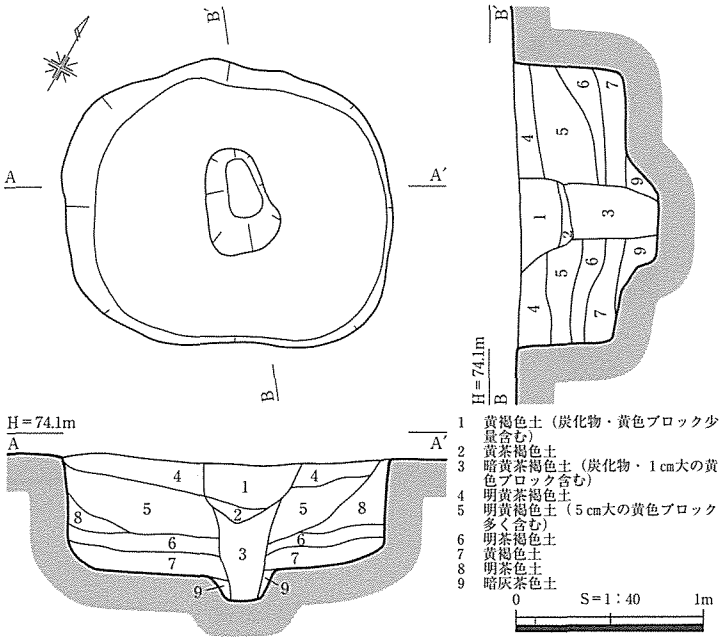
掘方埋土から、弥生土器甕Po803が出土している。

時期は、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられる。周辺でこれに対応するような同規模の柱穴が確認できなかったことから、建物とは異なった性格の構築物の可能性がある。

（西川）



第328図　笠見第３遺跡SK56出土遺物実測図



第329図　笠見第３遺跡SK56遺構図

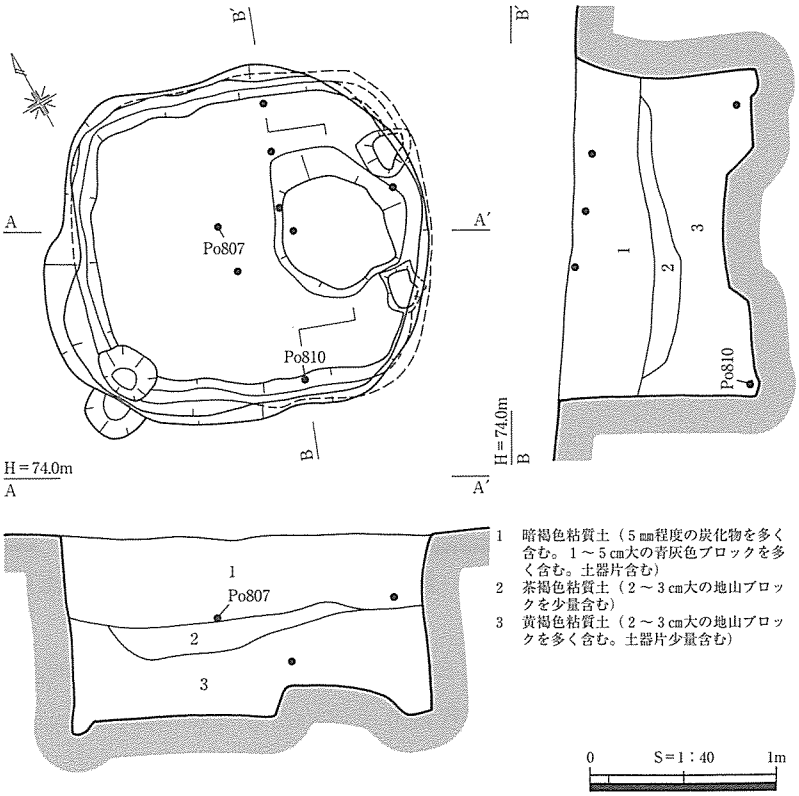
SK57（第330・332図、PL．63・140）

調査区南西側のK20グリッドにあり、標高73.7mの平坦面に立地する。

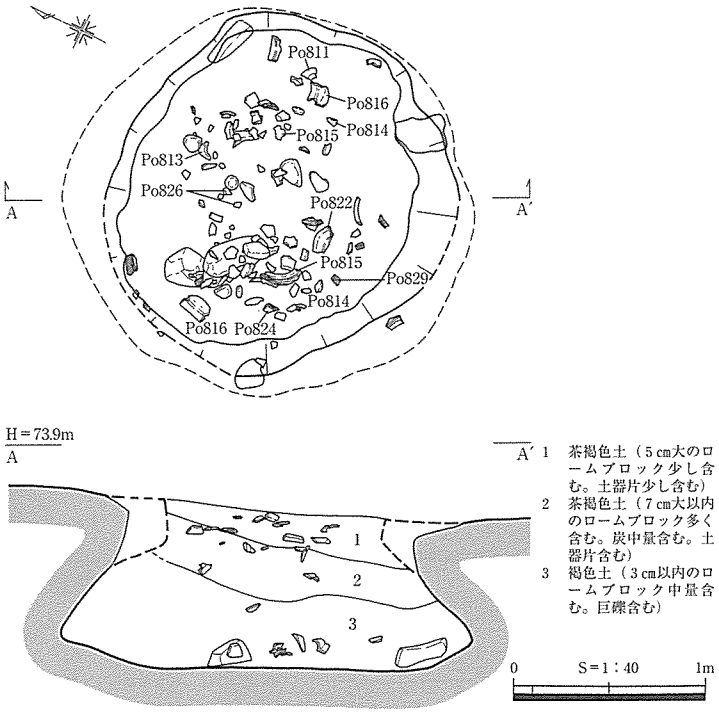
平面は隅丸方形を呈し、規模は上面で長軸2.1m、短軸1.7m、底面で長軸1.75m、短軸1.45mを測る。断面は垂直型を呈し、検出面下15cmの深さでやや内側にくびれる。深さ1.08mを測り、壁面に沿って幅10～19cm、深さ６cm前後の周溝がめぐる。

底面中央やや東南寄りに、３箇所の地山削り出し部を検出した。高さ15cmほどの円形を呈する部分（81cm×74cm）と、その北東側・南東側に位置する高さ６cmほどの楕円形を呈する部分（29cm×25cm、25cm×17cm）である。形態的特徴から階段状の施設である可能性が考えられるが用途は不明である。埋土は褐色系を主体とする３層にわかれ、自然堆積を示す。遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po805～807、壺Po804・810、底部Po808、器台脚部Po809、黒曜石剥片S54を図化した。

出土遺物から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろと思われ、底面周縁に溝を有することから、貯蔵穴と考えられる。（前島）



第330図　笠見第３遺跡SK57遺構図

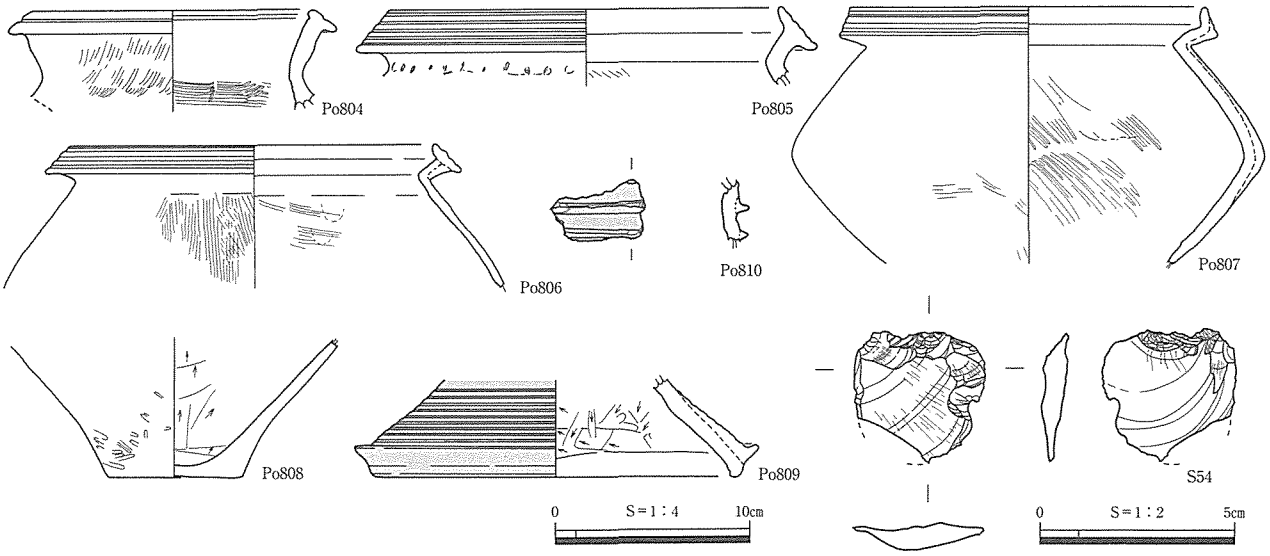


第331図　笠見第３遺跡SK58遺構図

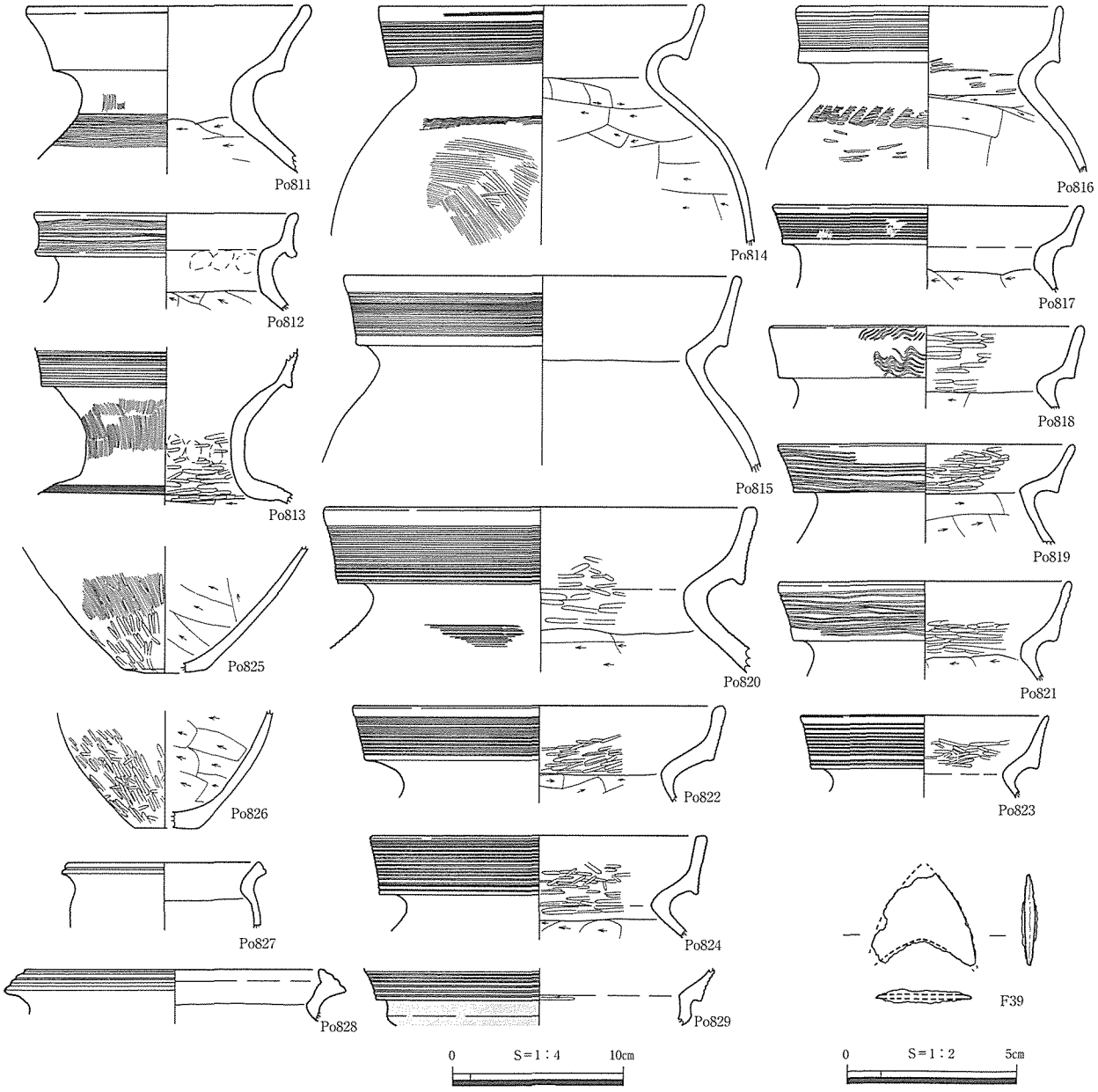
SK58（第331・333図、PL．64・107・141）

調査区南側L14グリッド内にあり、標高73.6mの平坦面に立地する。SI123を掘り込んでいる。

遺存状態はよい。検出面および床面の形態はほぼ円形を呈する。検出面での規模は、長軸1.9m（崩落により拡大・推定1.18m）、床面では2.14mで、深さは最大85cmを測る。断面はくびれが目立つ袋状を呈し、底面は平坦である。



第332図　笠見第３遺跡SK57出土遺物実測図



第333図　笠見第３遺跡SK58出土遺物実測図

土層は３層に分層でき、中層は炭化物を含む層で、上層から下層にかけて土器および小礫が含まれ、底面では人頭大の礫が数点出土した。

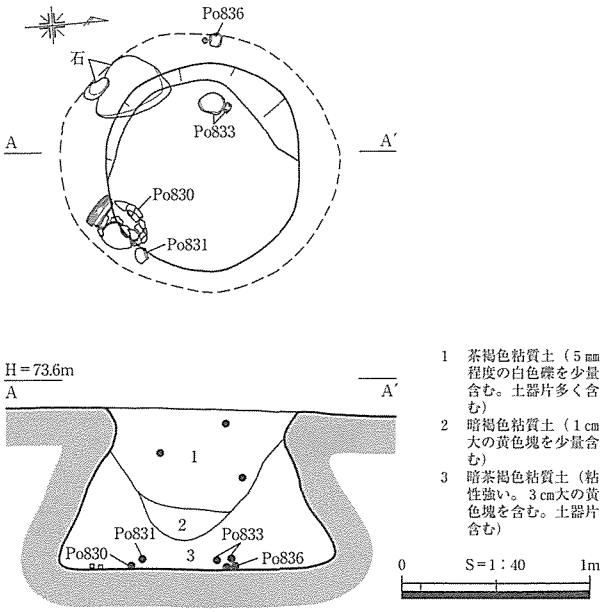
遺物は、埋土中上層から下層にかけて出土し、壺Po811～813、甕Po814～824、Po824～829、底部Po825、Po826、鉄鏃F39が出土した。完形になるものはない。流れ込みによるものと考えられる。

時期は清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの貯蔵穴と考えられる。（岩井）

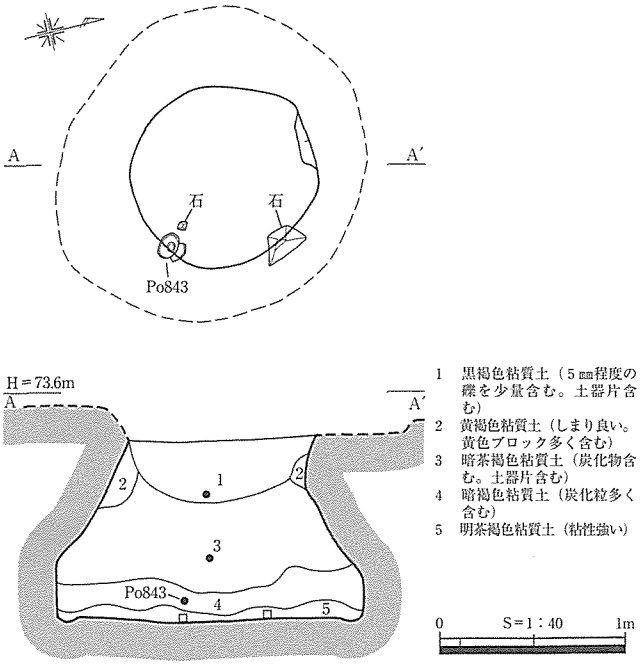
SK61（第334・336図、PL. 64・109・141）

調査区南西側J21グリッドにあり、標高73.5mの平坦面に立地する。南東側2.4mにSK62がある。

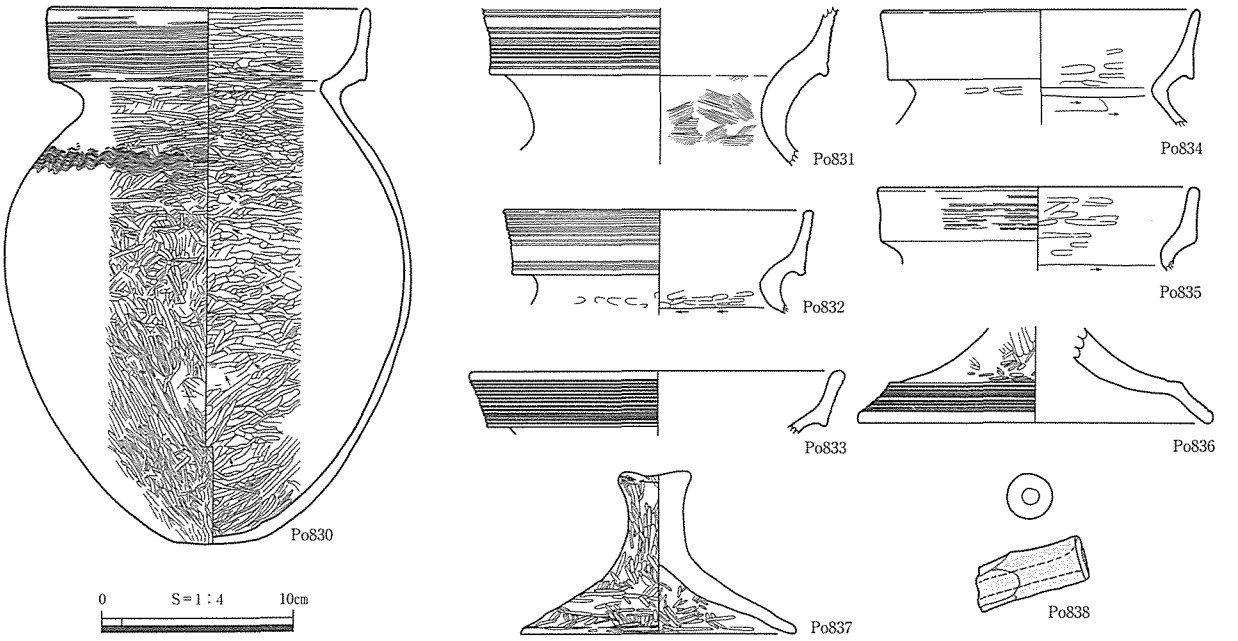
平面は円形を呈し、規模は上面で長軸1.10m、短軸1.02m、深さ85cm、底面で長軸1.47m、短軸1.02



第334図　笠見第３遺跡SK61遺構図



第335図　笠見第３遺跡SK62遺構図



第336図　笠見第３遺跡SK61出土遺物実測図

mを測る。断面は検出面からの深さ約15cmで内側にくびれたフラスコ型を呈す。底面は平坦である。

埋土は褐色系を主体とした3層に分かれ、自然に埋没した堆積を示す。1層目から多量の土器片が検出されたが、細片のため図化し得なかった。

土坑の北側約80cmと南側約50cmにピットが位置する。規模は、北側が径20cm、南側が径23cm、深さ23cm、柱穴間距離は2.3mを測る。これらは、上屋構造物に伴う柱穴である可能性が考えられる。

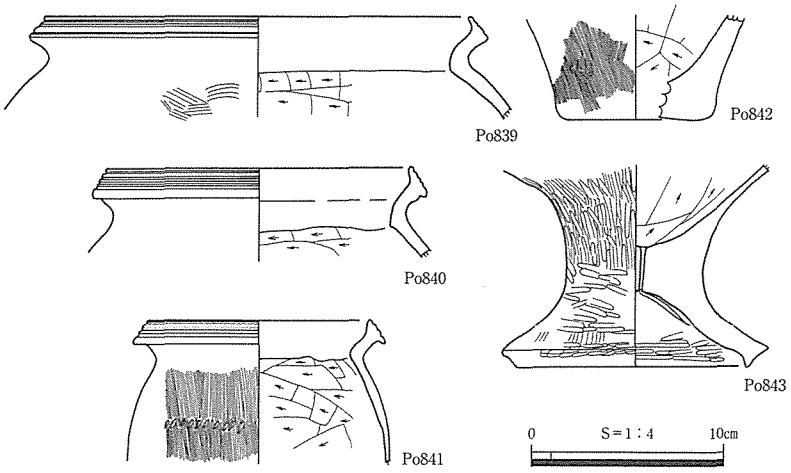
出土遺物は弥生土器の甕Po830、Po832～835、壺Po831、鼓形器台Po836、蓋Po837、注口土器Po838を図化した。Po830は床面直上からほぼ完形の状態で出土した。また、底面北西隅から、厚さ15cmほどの扁平な台石が据えられた状態で出土した。

出土遺物と形態的特徴から、清水V－3様式、弥生時代後期後葉の貯蔵穴と思われるが、使用された後に廃棄用土坑として再利用されたと考えられる。（前島）

SK62（第335・337図、PL. 64・109・142）

調査区南西側J21グリッドにあり、標高73.4mの平坦面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸1.01m、短軸0.94m、深さ95cm、底面で長軸1.75m、短軸1.53mを測る。断面は検出面下約25cmで内側にくびれるフラスコ型を呈する。底面は平坦で、壁面に沿って幅約12cm、深さ3cmの浅い周溝がめぐる。



第337図　笠見第3遺跡SK62出土遺物実測図

埋土は褐色系を主体とした5層に分かれ、自然に埋没した堆積状況を示す。

出土遺物は、弥生土器の甕Po839～841、底部Po842、脚杯甕脚部Po843を図化した。これらのうち、Po843は埋土下層から出土した。

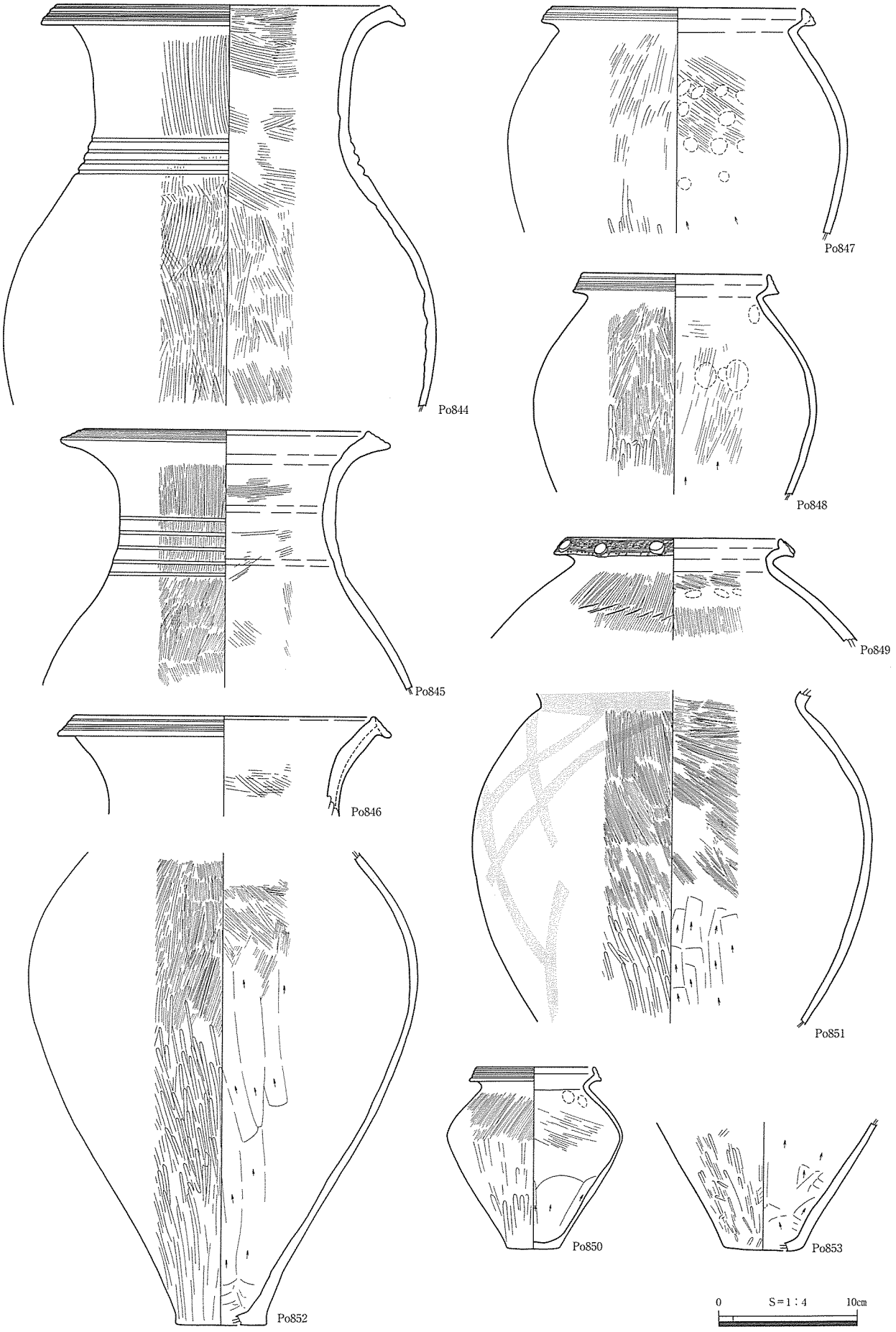
出土遺物から清水V－1様式、弥生時代後期前葉ごろと思われる。土坑の性格としては、形態的特徴から貯蔵穴としての機能をもつ遺構と考えられる。また、床面中央やや北東寄りから台石が出土しており、SK61と同様、貯蔵穴として使用された後に廃棄用の土坑として再利用されたと考えられる。（前島）

SK65（第338～340図、PL. 64・109・110・142）

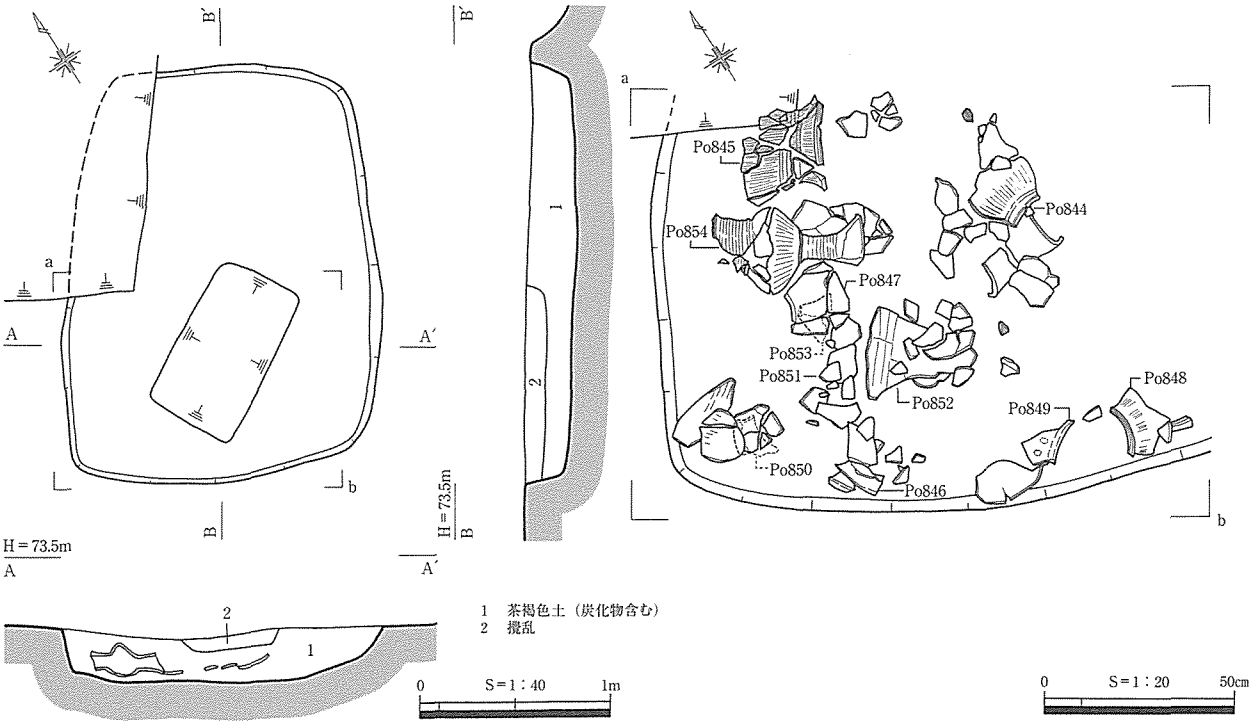
調査区南西側のJ17グリッド、標高73.3～73.4mのほぼ平坦面に立地する。

平面隅丸長方形で、長辺2.2m、短辺1.7m、深さ25cmを測り、断面台形状の浅い土坑である。底面でピット等は検出できなかった。

埋土は単層で、北西側と南半中央で攪乱を受けており、南半の埋土から床面にかけて集中して土器が出土した。図化したものは、弥生土器壺Po844～846、甕Po847～850、胴部から底部Po851～853、脚付壺Po854がある。Po854はほぼ完形で、横倒しの状態で出土した。Po851には外面に籠状の紐跡があ



第338図　笠見第３遺跡SK65出土遺物実測図(1)



第339図　笠見第3遺跡SK65遺構図

る。それ以外は、やや大きめの破片の状態で出土している。

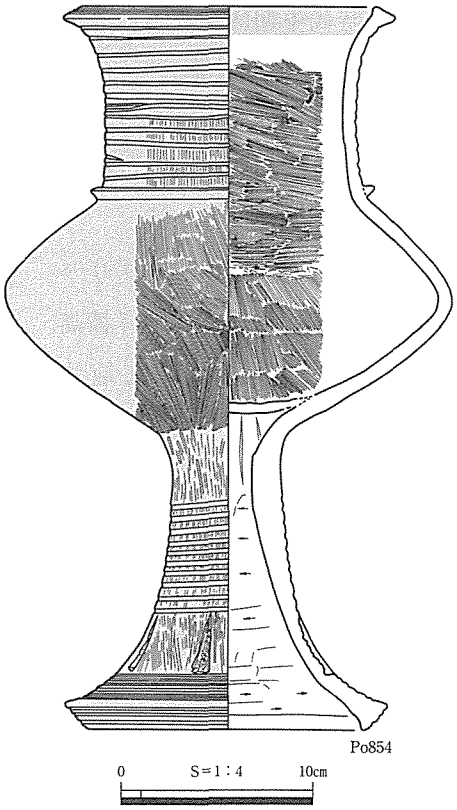
出土遺物及び遺物出土状況等から、清水Ⅳ－3様式、弥生時代中期後葉ごろの貯蔵穴と考えられる。（西川）

SK84（第341・342図、PL. 64・110）

調査区中央やや南西寄りのJ18・J19グリッドにあり、標高73.8mの平坦面に立地する。P952と重複関係にあるが、埋土の堆積状況からSK84が先行する。

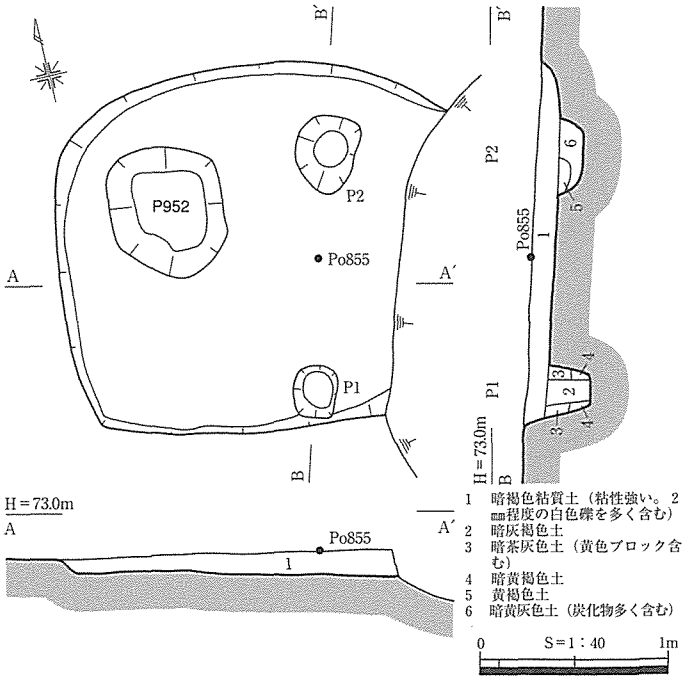
南東側から南側にかけて攪乱を受けており、平面を復元した場合、隅丸方形を呈すると思われる。規模は長軸1.93m、短軸1.82m、深さ17cm、底面で長軸1.82m、短軸1.77mを測る。断面は垂直に立ち上がる。褐色系の埋土を主体とした6層に分かれ、自然堆積の状況を示す。

底面中央やや東寄りに、南北に配置された2つのピットを検出した。P1（27×24－23）cm、P2（41×32－12）cmを測る。P1埋土より確認した柱痕跡から、その径は約11cmと推定される。P2に柱痕跡は認められないが、P1との位置関係や、埋土に多量の炭化物を含むことから柱穴であった可能性がある。これらは上屋構造物にともなう柱穴と考えられる。

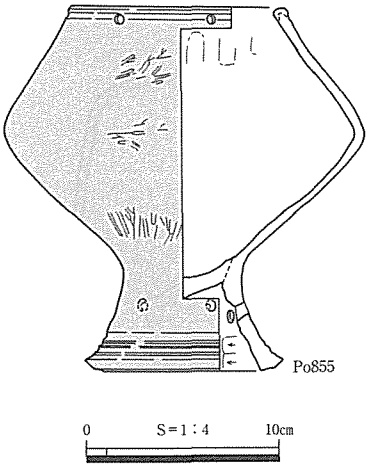


第340図　笠見第3遺跡SK65出土遺物実測図(2)

遺物は、埋土上層より出土したPo855を図化した。脚付無頸壺で、口縁部に1条の凹線を施し、2個の透かし穴を穿孔する。



第341図　笠見第３遺跡SK84遺構図

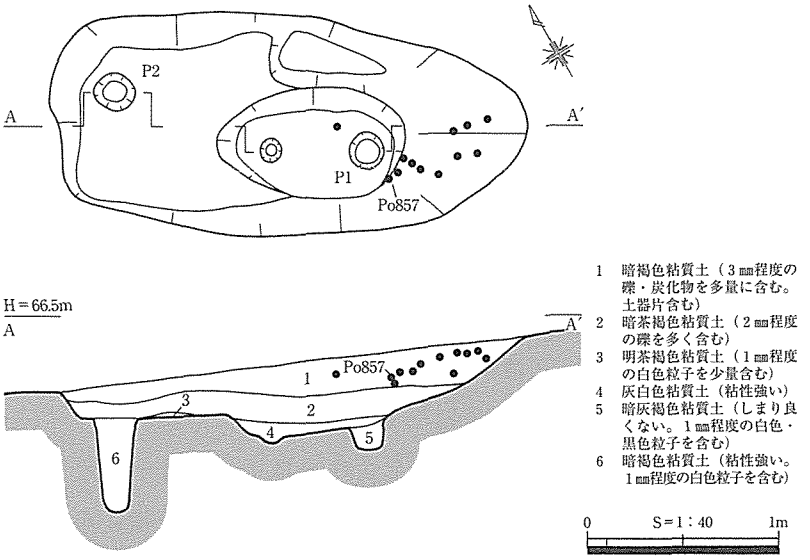


第342図　笠見第３遺跡SK84出土遺物実測図

出土遺物等から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろの貯蔵穴と考えられる。（前島）

SK88（第343・344図、PL. 65・142）

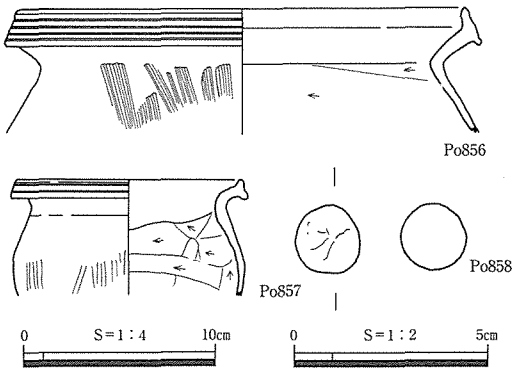
調査区北西側のD18・19グリッドにあり、西側谷部に向かう標高66.1～66.4mの傾斜面に立地する。



第343図　笠見第３遺跡SK88遺構図

平面はゆがんだ楕円形を呈し、規模は上面で長軸2.53m、短軸1.17m、深さ0.56m、底面で長軸1.66m、短軸0.87mを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面の南北両端にピットが彫りこまれている。P1（20×19－15）㎝、P2（23×20－50）㎝を測る。これらは、土坑を保護するための上屋構造物にともなう柱穴であると考えられる。

埋土は褐色系を主体とした６層にわかれ、自然に埋没した堆積状況を示すと思われる。１層目の暗褐色粘質土では炭化物とともに多量の土器片が含まれていたが、流れ込みよる可能性が高い。



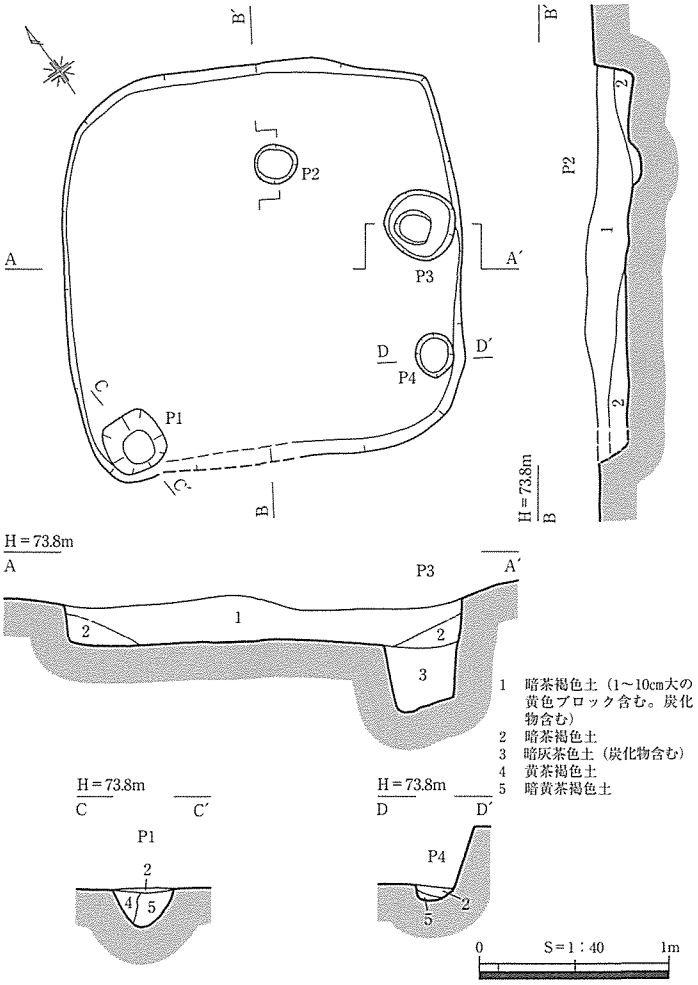
第344図　笠見第３遺跡SK88出土遺物実測図

遺物は、埋土中より出土した弥生土器の甕Po856・857、土玉Po858を図化した。

出土遺物から、清水Ⅴ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの遺構と思われる。性格は、底面両端にピットを有することから、上屋構造物を伴う貯蔵穴と考えられる。（前島）

SK100（第345・346図、PL. 65・143）

調査区中央南側のL13グリッドにあり、標高73.4～73.6mのほぼ平坦面に立地する。西側約２mには、SI122がある。SB16と重複関係にあるが、SB16が先行するものと考えられる。



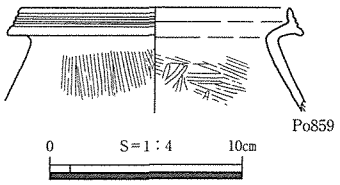
第345図　笠見第３遺跡SK100遺構図

平面隅丸方形を呈し、南北2.1m、東西2.1m、深さ25cm前後を測る。底面は平坦で、長軸2.0m、短軸1.95mを測る。南西隅には、SB16のP1が床面まで達している。土坑内には大小４基のピットを確認したが、いずれも整然と並ぶものではなく、性格不明である。

埋土は暗茶褐色土を主体とするもので、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po859を図化した。

出土遺物から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。同規模で、等間隔に並ぶSK20、SK119と同様、貯蔵穴と考えられる。（西川）



第346図　笠見第３遺跡SK100出土遺物実測図

SK106（第347図、PL. 65）

調査区中央やや東側のJ19グリッドにあり、北東方向に向かう標高70.8mの緩斜面に立地する。南側約２mにSK82がある。

平面は長方形を呈し、規模は上面で長軸1.44m、短軸1.09m、底面で長軸1.33m、短軸90cmを測る。断面は垂直に掘りこまれ、検出面からの深さ89cmを測る。底面は平坦である。

埋土は褐色系を主体とした６層に分かれ、自然堆積を示す。第１層の茶褐色粘質土から、多量の炭化物とともに土器片を検出した。

出土遺物は細片のため図化できなかったが、弥生時代の土坑と思われる。性格は不明であるが、当遺跡では深さがあり、平面方形ないし長方形を呈す貯蔵穴と考えられる土坑が認められ、当遺構に関しても、貯蔵穴の可能性がある。（前島・牧本）

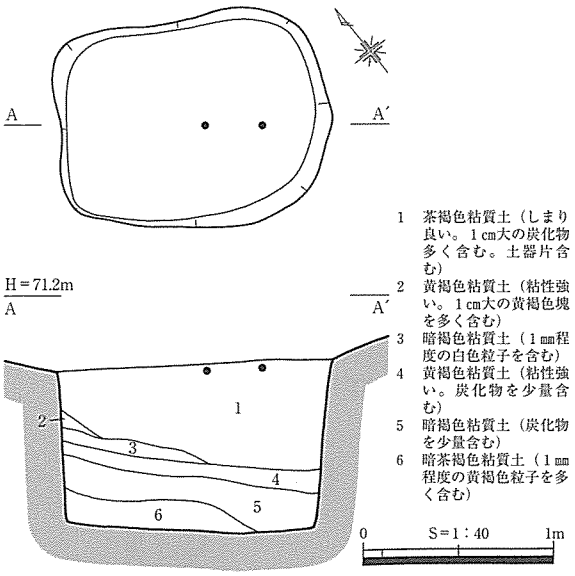
SK119（第348・349図、PL. 65・110・143）

調査区中央南側のL12グリッドにあり、標高73.1～73.3mの緩斜面に位置する。北側ではSK95が、南側ではSB15のP3がそれぞれ当遺構埋土を掘り込んでいる。

平面隅丸方形を呈し、長辺2.4m、短辺2.1m、深さ65cmの土坑である。ほぼ垂直に掘り込んでおり、底面は平坦である。

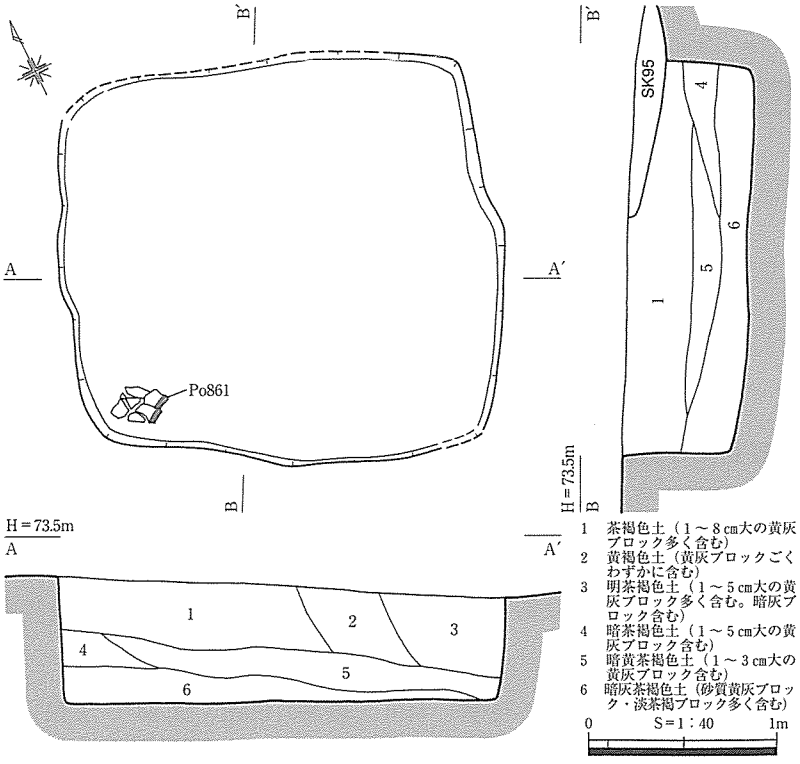
埋土は、地山ブロックを含んだ茶褐色を主体とした三層に大きく分けられる。皿状堆積を呈していることから、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、西南隅の下層上面付近からの弥生土器甕Po861、埋土中からのPo860を図化した。



第347図　笠見第３遺跡SK106遺構図

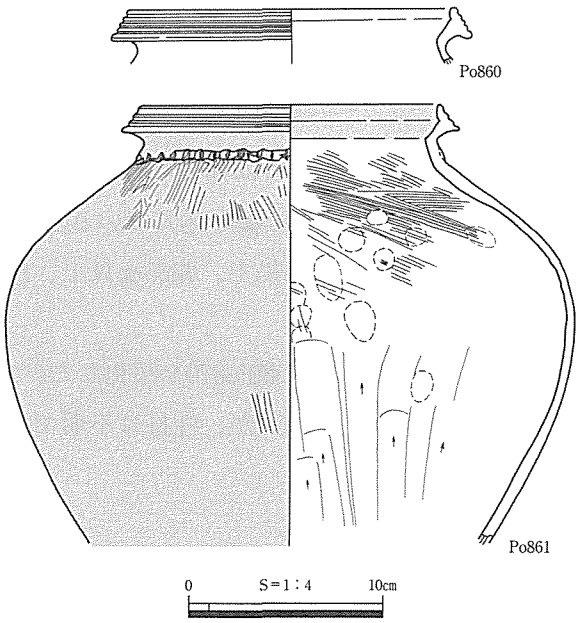
出土遺物から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。周辺には、平面方形で、同規模のSK20、SK100が等間隔に並んでいる。詳細な性格は不明であるが、貯蔵穴の可能性がある。（西川）



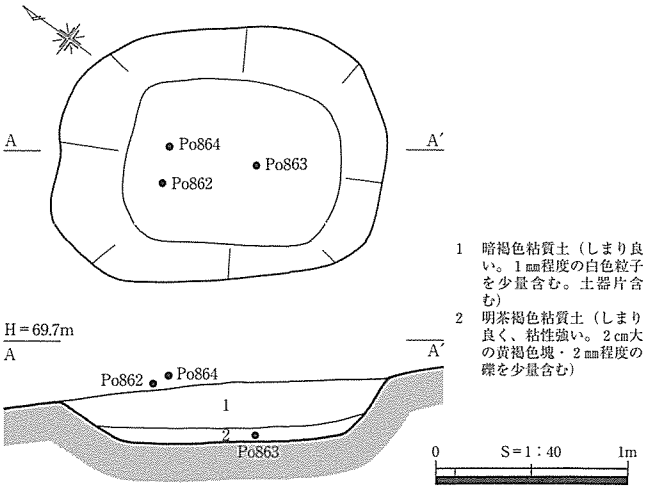
第348図　笠見第３遺跡SK119遺構図

SK128（第350・351図、PL. 65・110）

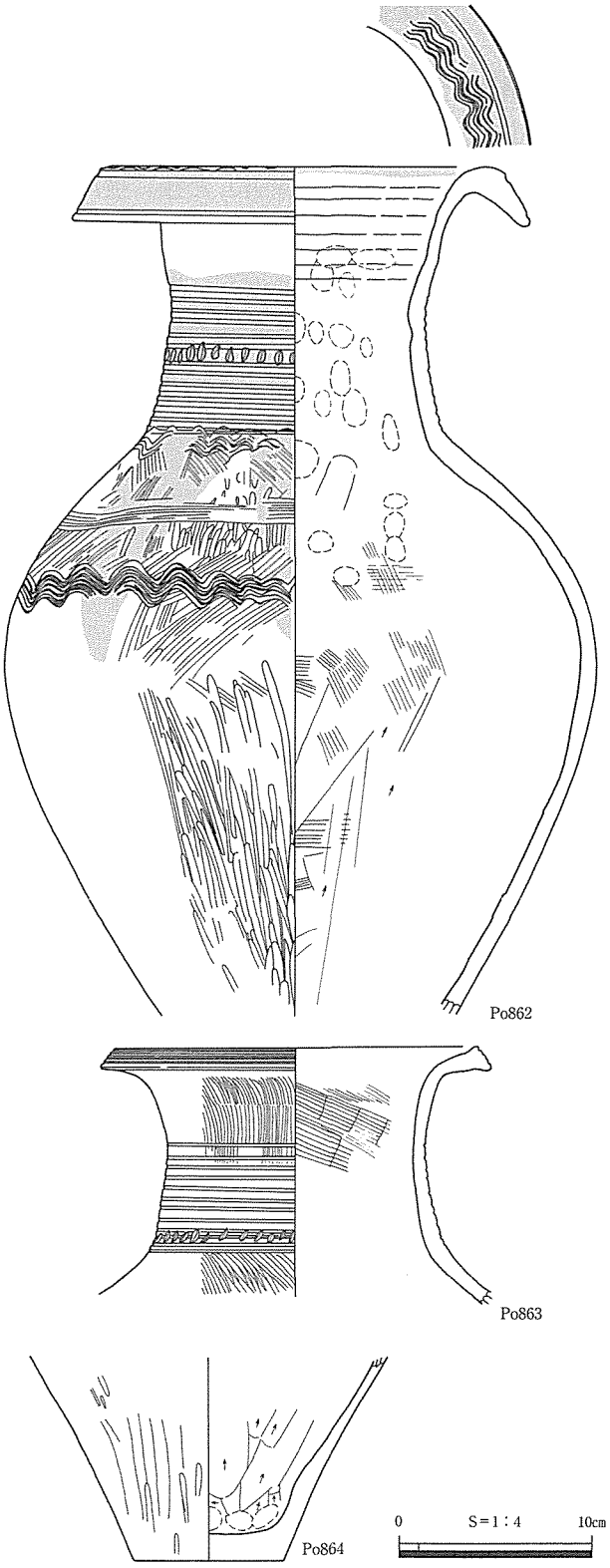
調査区中央やや北寄りのG11・12グリッド、標高69.4～69.5mの緩斜面に位置する。西側にはSI89が隣接する。



第349図　笠見第3遺跡SK119出土遺物実測図



第350図　笠見第3遺跡SK128遺構図



第351図　笠見第3遺跡SK128出土遺物実測図

平面楕円形の土坑で、規模は長軸1.7m、短軸1.3m、深さ34㎝を測る。SK128の上面は所々削平を受けている部分もある。壁面はなだらかな傾斜を持って掘り込まれる。底面は平坦で、長軸1.15m、短軸0.87mを測る。

土坑内からは、埋土上層から底面にかけてばらばらの状態でPo862～864が出土した。出土状況から、いずれも土坑内に捨てられたものと思われる。Po863は床面出土であるが、たまたま床面に接していたものと考える。Po862は上層からの出土で、接合可能な土器片が周囲に散乱していたが、ほぼ完形に復元できた。

出土遺物等から、清水Ⅳ-3様式、弥生時代中期後葉ごろものと考えられ、遺物出土状況から廃棄土坑としての性格が考えられる。（西川）

第５節　段状遺構

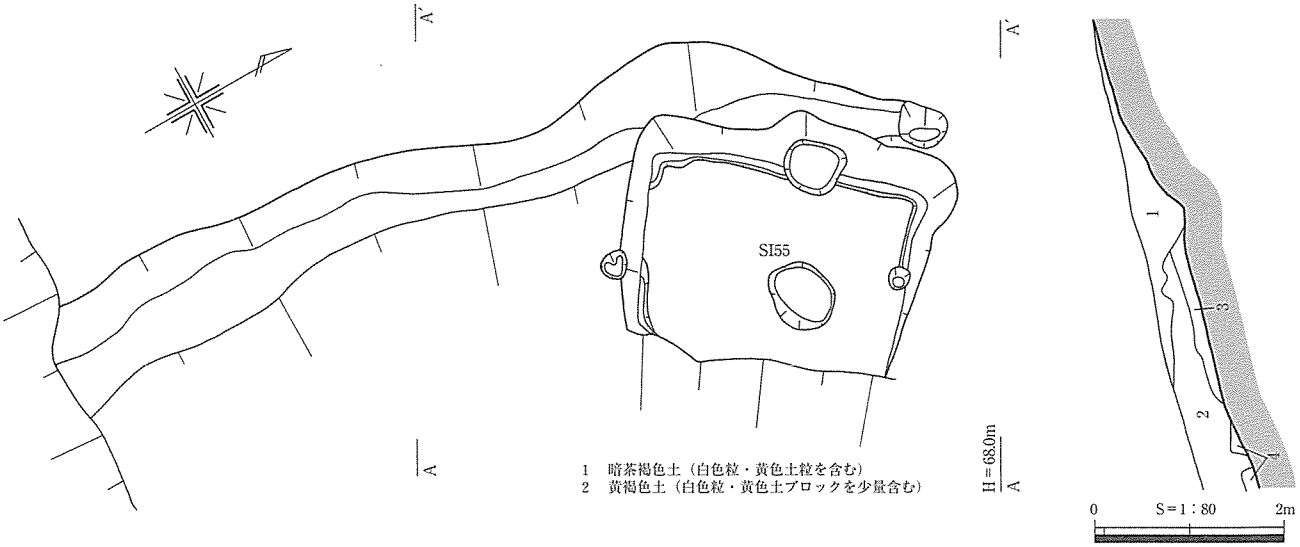
SS3（第352・353図、PL. 66・111・143）

調査区東側、I3・J3グリッドの標高65.8～66.3mの東斜面に立地する。検出面は弥生時代後期の包含層である暗茶褐色土を除去した後に検出した。SI55と重複するが、SI55埋土を掘り込んでいる。

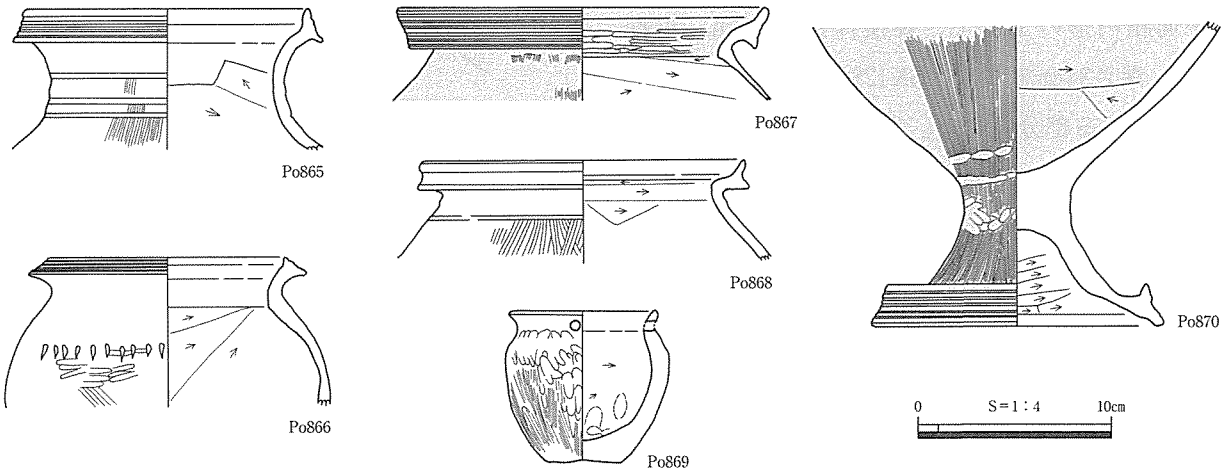
斜面側及び南側は流失しているため、遺存状態は良好ではない。長さ4.6m以上、幅65cm以上、深さ最大51cmの平坦面を削り出し、主軸は等高線に対し平行する。

遺物は、埋土中からの弥生土器壺Po865、甕Po866～868、小型壺Po869、脚付甕Po870を図化した。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（牧本）



第352図　笠見第３遺跡SS3遺構図



第353図　笠見第３遺跡SS3出土遺物実測図

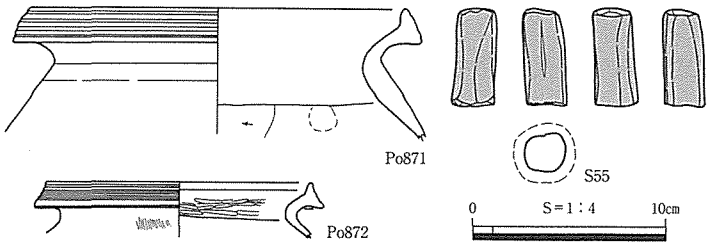
SS5（第354図、PL. 66・143・177）

調査区東際、J3グリッドの標高66.2～66.8mの東斜面に立地する。南西側約２mにSS1がある。

斜面側は流失しているため、遺存状態は良好ではない。長さ5.2m、幅１m以上、深さ最大52cmの平坦面を削り出し、主軸は等高線の向きに対し平行する。壁際には幅20cm前後、深さ５cm前後の溝、斜面側にも同規模の溝が掘られている。

出土遺物には、埋土中からの弥生土器甕Po871・872、棒状の砥石S55を図化した。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（牧本）



第354図　笠見第３遺跡SS5出土遺物実測図

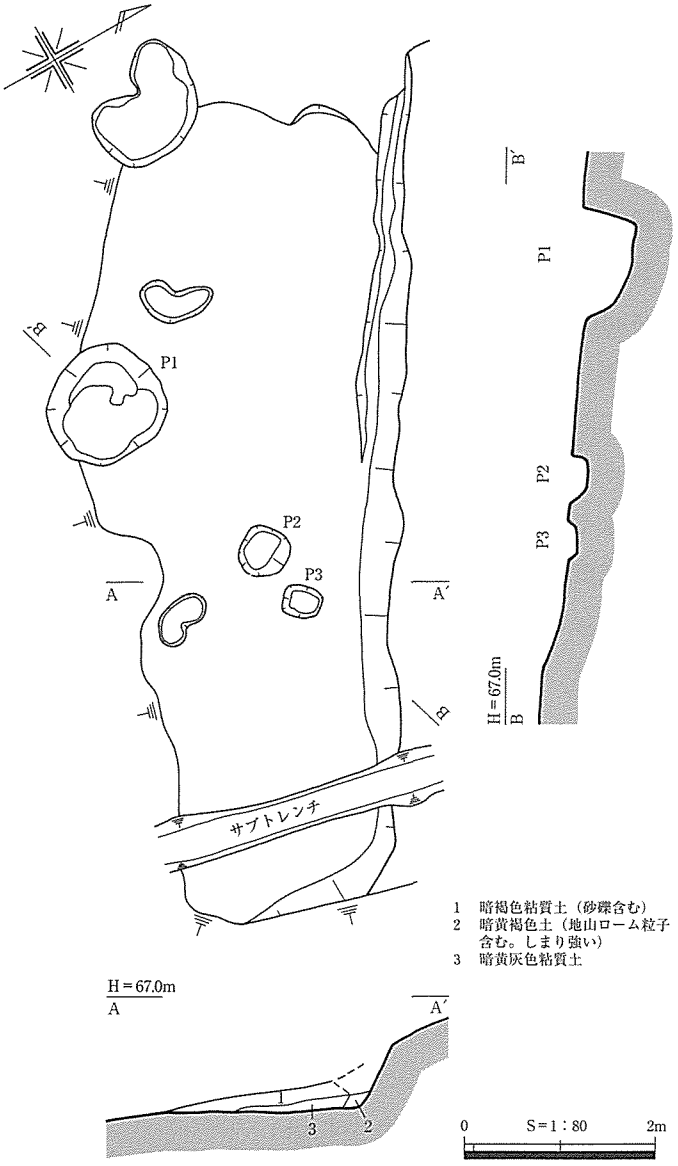
SS6（第355・356図、PL. 66・143）

調査区北部、C10グリッドの標高68～68.7mの斜面に立地する。東側約20mにSI95がある。

斜面側は流失し、西側は攪乱を受けているため、遺存状態は良好ではない。長さ8.8m以上、幅３m以上、深さ最大32cmの平坦面を削り出し、主軸は等高線の向きに対し平行する。平坦面でピットを３基検出したが、構造柱的なものではないと考えられる。壁際には幅20cm前後、深さ５cm前後の溝が掘られている。

埋土は、３層に分層できたが、自然堆積したものと考えられる。

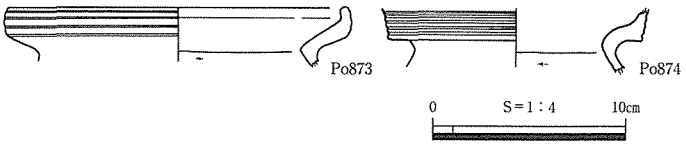
出土遺物には、埋土中からの弥生土器甕Po873・874を図化した。



第355図　笠見第３遺跡SS6遺構図

表107　笠見第３遺跡SS6ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	130×115－58	
P2	55×50－20	
P3	41×33－10	



第356図　笠見第３遺跡SS6出土遺物実測図

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（牧本）

SS7・８

（第357～359図、PL．67・143・175・178）

調査区北西部、C18・D18グリッドの標高68m付近の斜面に立地する。上段のものがSS7、下段のものがSS8である。

SS7は、長さ12m、幅2.2m、深さ44cm前後のテラス状の平坦面を作り出し、主軸は等高線の向きに対し平行する。平坦面でピットを２基検出したが、構造柱的なものではないと考えられる。壁際には幅16～20cm、深さ５cm前後の溝が掘られている。

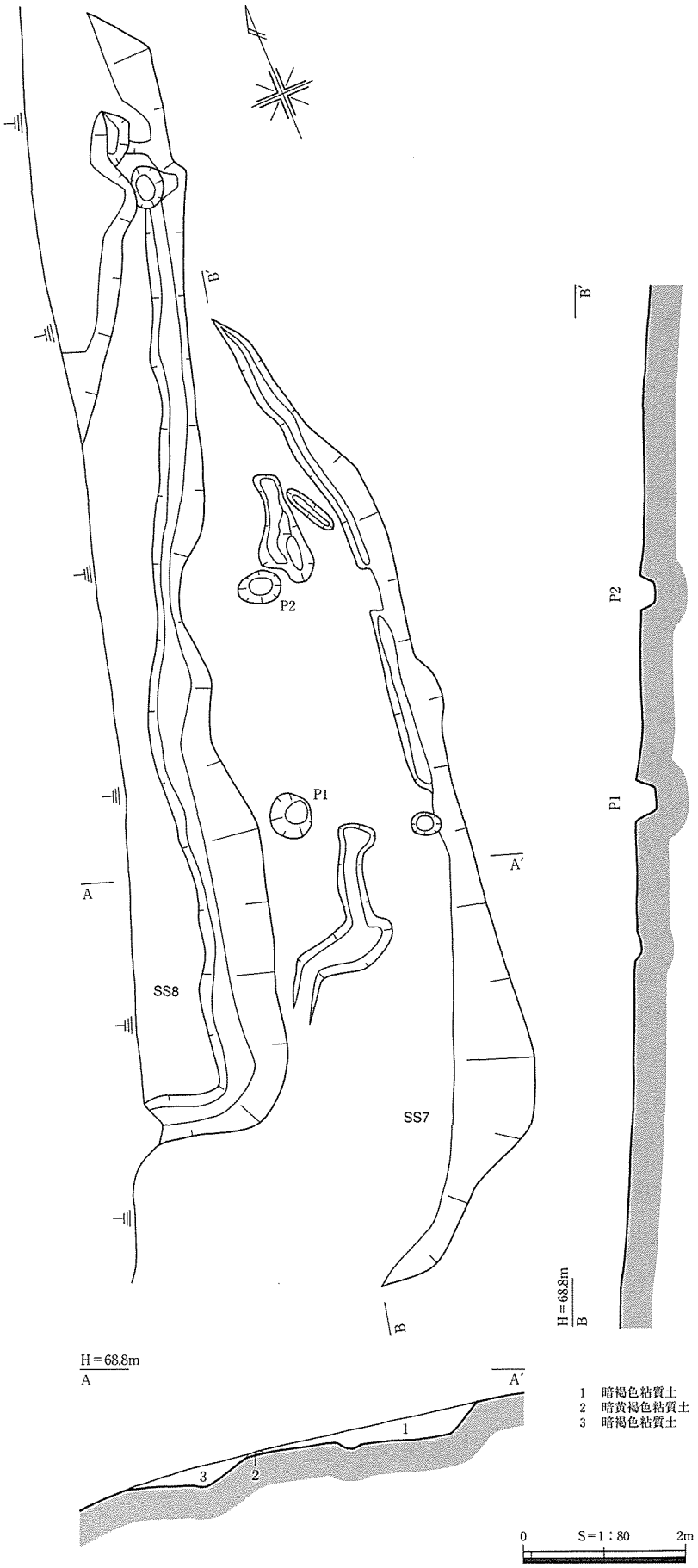
埋土は、暗褐色粘質土単層である。

出土遺物には、埋土中から弥生土器甕Po875、直口壺Po876、底部Po877・878、ガラス小玉J65、無斑晶安山岩製石鏃未成品と思われるS56がある。

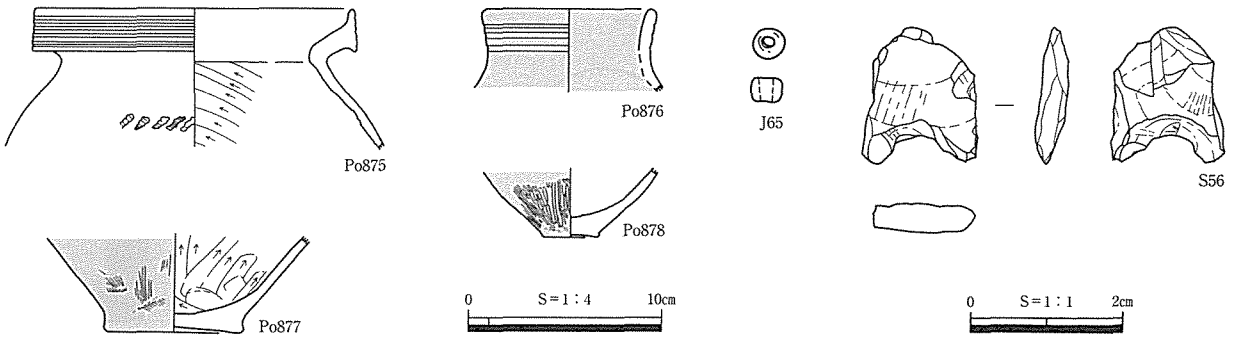
SS8は、斜面側は後世の攪乱によって削られているが、長さ13.8m、幅１m以上、深さ42cm前後の平坦面を作り出す。壁際には、幅20～50cm、深さ３cm前後の幅広の溝が掘られている。

埋土は、SS7同様暗褐色粘質土単層である。

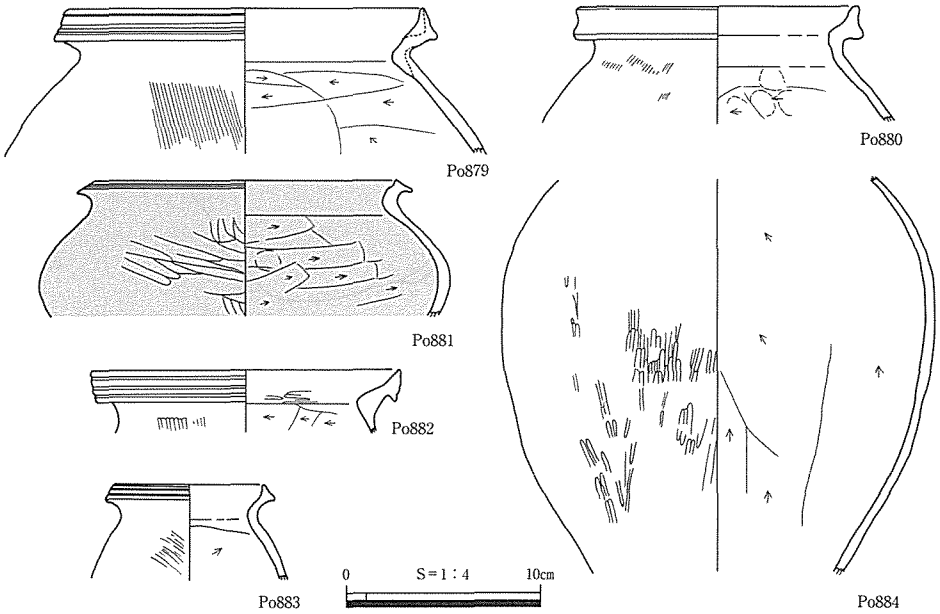
出土遺物には、埋土中から弥生土器甕Po879～883、胴部Po884がある。



第357図　笠見第３遺跡SS7・８遺構図



第358図　笠見第３遺跡SS7出土遺物実測図



第359図　笠見第３遺跡SS8出土遺物実測図

出土遺物等から、SS7は清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろ、SS8は清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられるが、いずれも性格は不明である。（牧本）

表108　笠見第３遺跡SS7ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	52×38－15	
P2	58×51－27	
P3	34×28－ 4	後世掘り込まれたもの

SS9（第360～362図、PL. 67・111・144）

調査区中央やや北寄り、F10グリッドの標高66.4～67.4mの北斜面に立地する。南側約２mにSI170がある。

斜面北側は流失しているため、遺存状態は良好ではない。斜面部を深さ最大46cm掘り込み、長さ6.8m以上、幅４m以上の平坦面を削り出している。主軸は等高線に対し平行する。

平坦面でピットを６基検出した。このうち、P2・３は深さがあり、構造柱的なものの可能性があるが、間隔は1.5mと他の建物の柱間に比べるとやや狭い。その他のピットは、用途不明である。

埋土は、暗灰褐色粘質土単層である。自然堆積したものと考えられる。

埋土中から多量の土器片が出土している。このうち図化できたものは、弥生土器壺Po885～893、甕Po894～900、小型甕Po901・902、底部Po903、直口壺Po904、鉢Po905、器台Po906・907、大型鉢Po908、胴部Po909を図化した。このうち、Po908は、Ｂ区包含層一括遺物のPo1614と同一個体の可能性

がある。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（牧本）

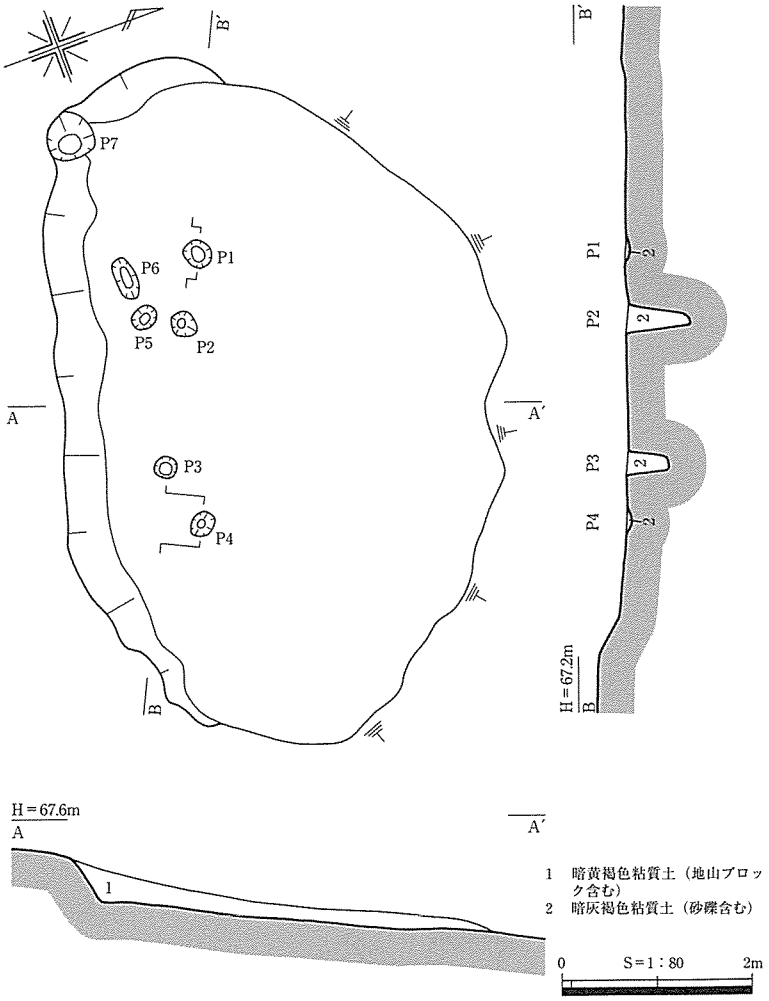
SS11（第202・363図、PL. 38・143）

調査区北西部、B17グリッドの標高68mの西側斜面に立地する。平坦部の中にSI103があるが、切り合い関係は不明である。

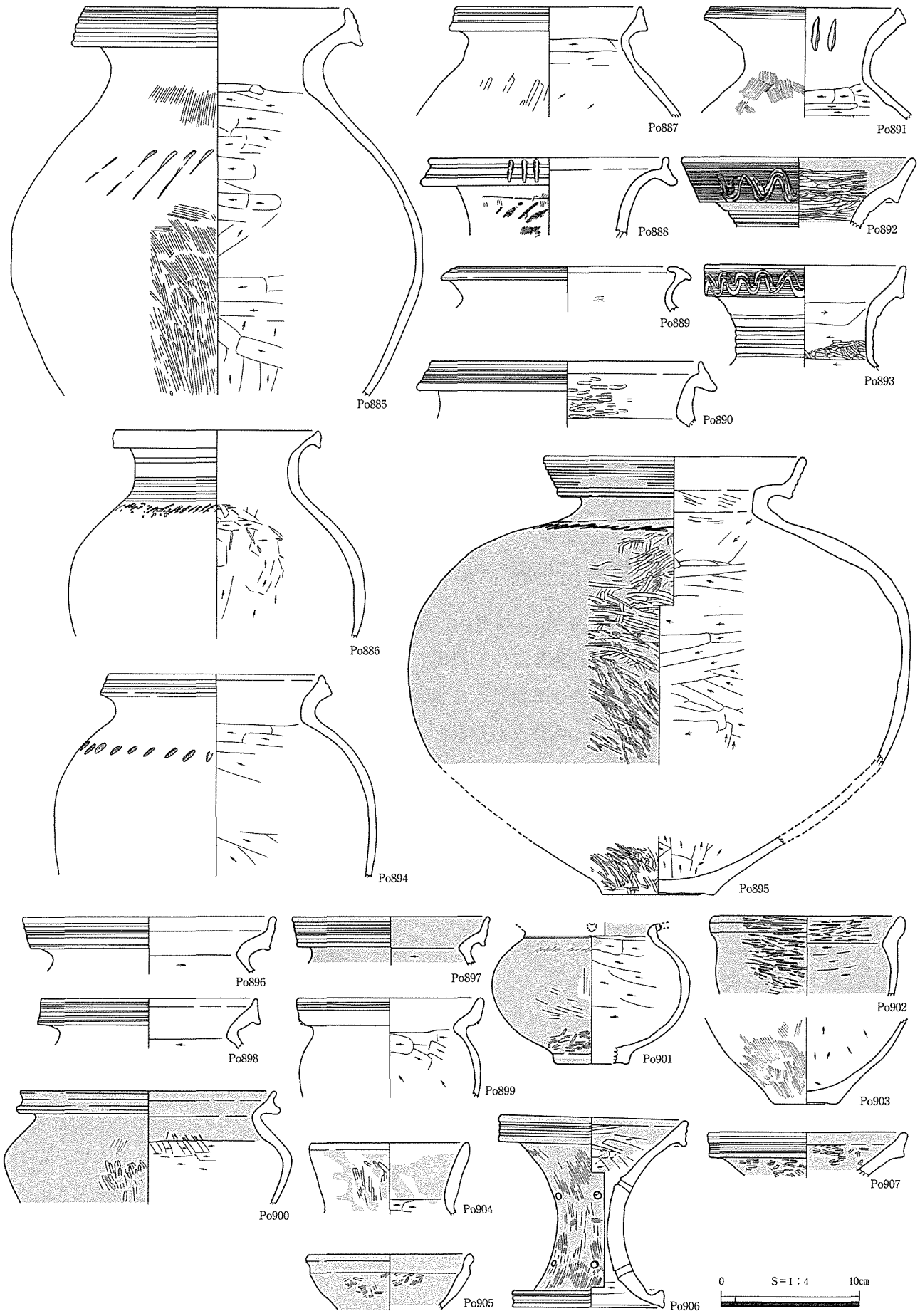
斜面部を深さ最大76cm掘り下げ、長さ5.6m、幅2.6m以上のテラス状の平坦面を作り出している。主軸は等高線の向きに対し平行する。平坦面からは、ピット列、溝等は検出されなかった。

出土遺物は、埋土中からの弥生土器Po910～911を図化した。

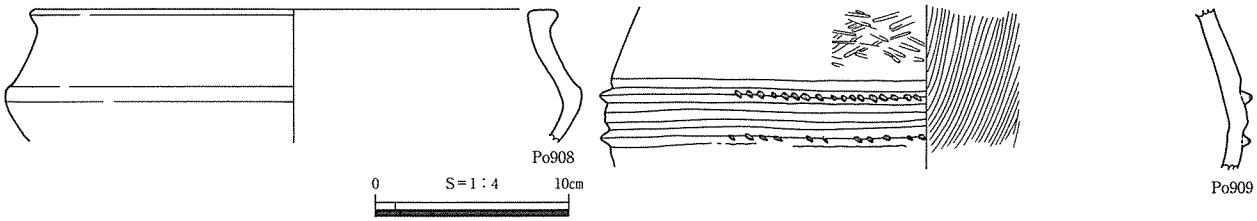
出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（小山）



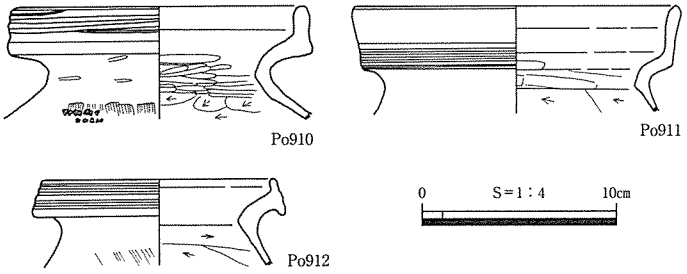
第360図　笠見第３遺跡SS9遺構図



第361図　笠見第３遺跡SS9出土遺物実測図(1)



第362図　笠見第３遺跡SS9出土遺物実測図(2)



第363図　笠見第３遺跡SS11出土遺物実測図

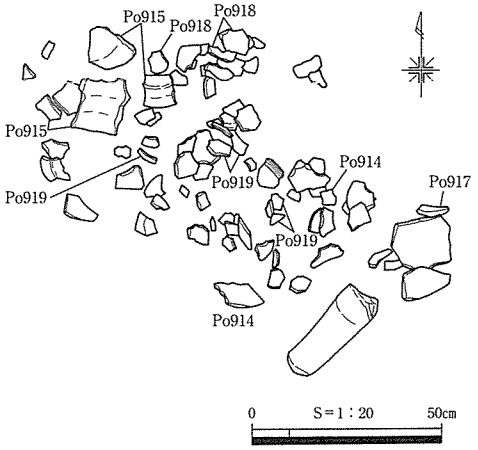
表109　笠見第３遺跡SS9ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P1	31×26－14	
P2	28×26－64	
P3	23×23－49	
P4	29×23－16	
P5	27×25－10	
P6	46×21－ 9	
P7	50×47－58	

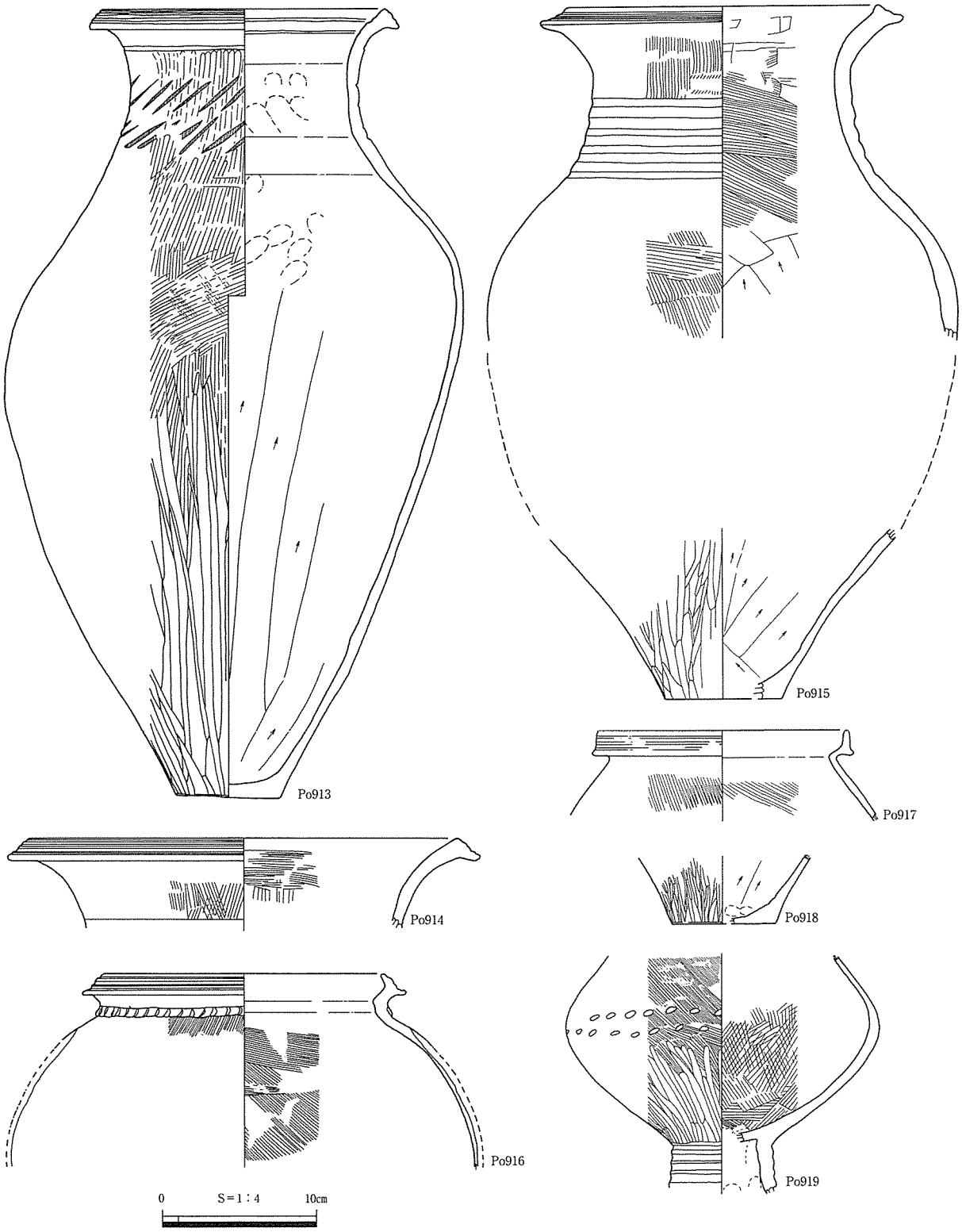
第６節　Ａ区土器溜り（第364・365図、PL. 67・112）

調査区南端L18グリッド内、標高74.2mの調査区内で最も標高の高い平坦面にある。当初、遺構として認識したが、平面の確認には至らなかった。出土状況は、土器片のレベル高低差が約10cm以内に収まり、破砕され散乱した状態で出土した。地形的に見て、流れこみなどによるものではなく何らかの遺構としての可能性が高いと考えられる。遺物は、長さ約25cmの台石状の石とともに出土し、大型の壺で完形のPo913、口縁部のみのPo914、一部胴部が欠けるPo915、甕Po916、917、底部Po918、脚付壺Po919がある。

出土遺物の時期は、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろに相当する。（岩井）



第364図　笠見第３遺跡Ａ区土器溜り遺物出土状況図



第365図　笠見第３遺跡Ａ区土器溜り出土遺物実測図

第７節　溝状遺構

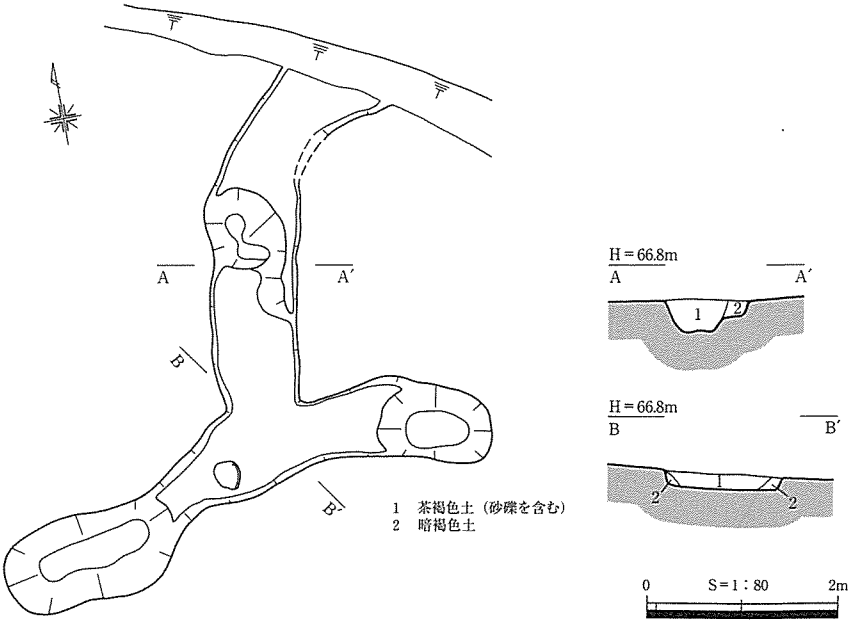
SD4（第366図、PL. 101）

調査区北際、D7・E7グリッドの標高69～69.2mの緩やかに南東側に傾斜する斜面に立地する。北西側約４mには、SI95がある。

Ｂ区遺物包含層を除去した後の、黒褐色土層上面で検出した。北側は調査区外へ延びている。平面はＴ字状を呈し、長さ6.4m以上、幅90cm前後、深さ８～23cmを測る

埋土は、２層に分層できた。出土遺物はない。

出土遺物はないが、弥生時代後期遺物の包含層除去後に検出したことから、同時期かやや遡るものと考えられる。性格は不明である。（牧本）



第366図　笠見第３遺跡SD4遺構図

第８節　ピット内遺物について

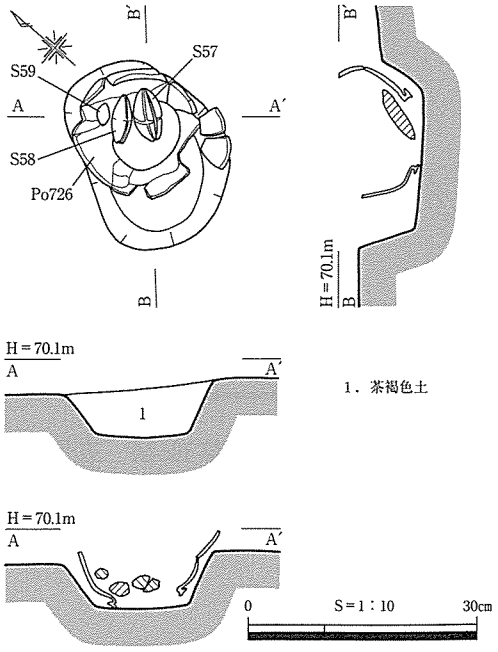
P726（第367・368図、PL. 61・112）

調査区北西部、E16グリッドの標高68mのほぼ平坦面に立地する。北側にはSI72が隣接する。周辺には、複数の住居には伴わないと考えられるピットが数基検出されているが、いずれも不規則な配置である。

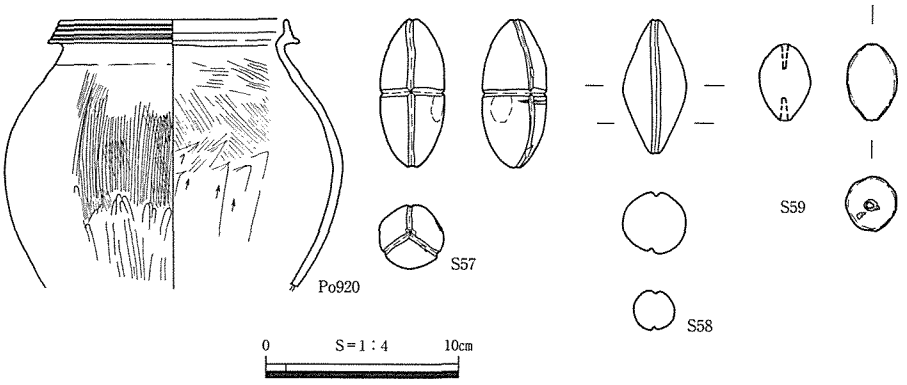
ピットの規模は、（25×19－10）cmを測る。

ピットの中から、弥生土器甕Po920が倒立した状態で出土し、内部に有溝石錘S57・58、穿孔された石錘S59及び図化できなかったが鉄片が出土している。石錘は大きさも異なり、形状も異なる。

Po920は、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。石錘は、いずれも北部九州型に分類されるもので、ピットは石錘を埋納す



第367図　笠見第３遺跡P726遺物出土状況図



第368図　笠見第３遺跡P726出土遺物実測図

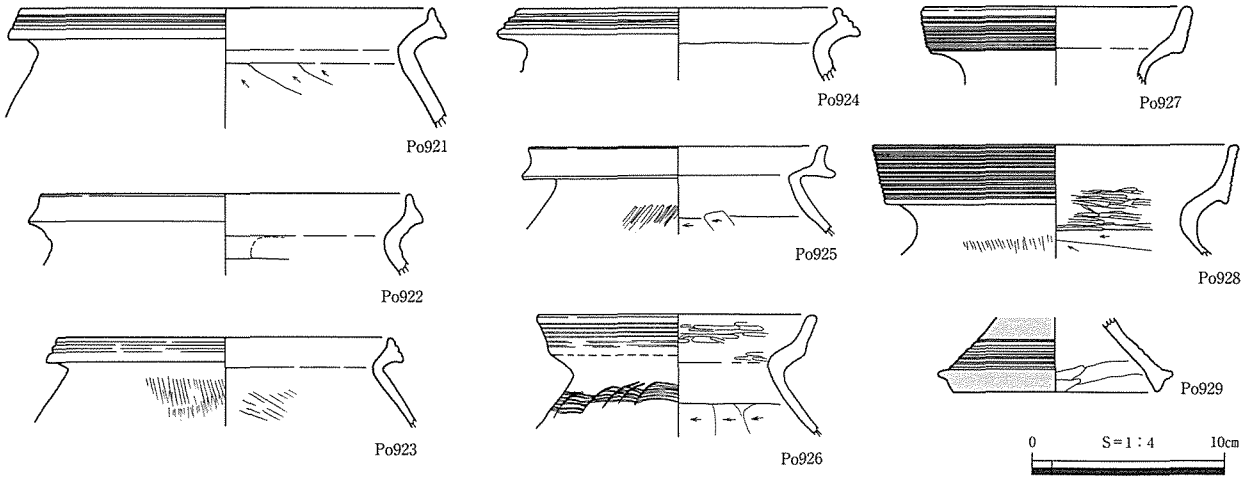
るためのものと考えられる。（牧本）

弥生時代ピット（第４・５・369図）

調査区内では1,400基弱のピットを検出しているが、このうちP726以外にも、弥生時代遺物が出土したピットが検出されている。

P74は、K9グリッドにあり（65×54－70）cmを測る。Po921が出土している。P190も、K9グリッドにあり（36×35－27）cmを測る。Po928が出土している。P281はI8グリッドにあり（70×48－68）cmを測る。Po924が出土している。P329はH5グリッドにあり規模は不明である。Po922が出土している。P379はL7グリッドにあり規模は不明である。Po927が出土している。P540はM13グリッドにあり（94×91－124）cmを測る。Po929が出土している。P545はE4グリッドにあり、（66×39－62）cmを測る。Po923が出土している。P710はF13グリッドにあり、（64×58－106）cmを測る。Po926が出土している。P720もF13グリッドにあり、（60×54－99）cmを測る。Po925が出土している。

Po923が清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろ、Po921・922・924・925が清水Ⅴ－１様式、弥生時代後期前葉ごろ、その他は清水Ⅴ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられ、弥生時代集落と同じ時期を示すものである。（牧本）



第369図　笠見第３遺跡弥生時代ピット内出土遺物実測図